

張我軍と日本語教育

—1930、1940年代の中国大陸における
「日本国籍」台湾人による日本語教育—

**Zhang Wojun and Japanese-education:
Japanese-education in Mainland China (1930s-1940s)
conducted by Taiwanese with “Japanese nationality”**

学籍番号：B6G23501

氏名：賈 鵬飛

文教大学大学院言語文化研究科
2019年度博士学位請求論文

氏名 賈 鵬飛
論文題名 張我軍と日本語教育—1930、1940年代の中国大陸
における「日本国籍」台湾人による日本語教育—
英文題名 Zhang Wojun and Japanese-education: Japanese-education in
Mainland China (1930s-1940s) conducted by Taiwanese with
“Japanese nationality”
主査教授 白井 啓介

要 旨

本研究は日本統治時期の台湾に生まれた張我軍の日本語教育の実態を解明する研究である。

現在、張我軍は1920年代の台湾新文学運動における先駆者として名の知れた人物である。従来、張我軍研究には、台湾新文学運動を背景とした論考が大半を占めている。しかし、台湾新文学運動への関与はわずか2年間ぐらいであるのに対し、日本語教育を専業としたのは16年間にわたっている。張は1930年代の北京を舞台とし、各大学の日本語教師、日本語学習塾の開設、日本語教育関係の著述の作成などに関わり、多方面にわたる日本語教育実践を行ない、日本語教育界の「著名人士」として評価されるに至った。戦時中に至って、最初の北京近代科学図書館の日本語講座の講師から、その後の偽北京大学の日本語教授、傀儡政権の教育総署編審会の特約編集審査員、華北日本語教育研究所の常任委員まで、華北淪陷区における日本語教育の各中心的な指導機関に関与していた。このように、張我軍は戦前と戦時中に跨った、1930、1940年代の重要な日本語教育者だと言える。だが、これまでの中国の日本語教育史研究には、張我軍の日本語教育の詳細にまで触れているものは皆無に等しい。

また、張我軍の日本語教育を支えた日本語能力は、日本支配下の台湾の公学校で「国語」（日本語）教育を受けて獲得したものであることは看過できない。支配側の日本側にとって、日本語・日本語教育は

植民地支配のための手段であるが、支配側と被支配側の意識は必ずしも一致しているとは言えない。被支配側としての張我軍にとって日本語・日本語教育は如何なる存在なのか。この疑問への回答は、張我軍の日本語能力がフルに生かされた日本語教育の中にあると考えられる。

そこで、本研究は従来 of 張我軍研究を踏まえ、①中国の日本語教育史における張我軍の業績と位置づけ、②張我軍が日本語教育の道を辿っていった要因、③日本語教育における張我軍の主体性、という3つの課題を設定した。また、公文書、新聞、雑誌、日本語教材などの一次資料や、張我軍の親族、友人、学生などの証言を分析することにより、この3つの課題をめぐり、以下のように考察した。

本研究では、張我軍の日本語教育実践を踏まえた上で、張我軍は日本語教育関係の著述と日本語教授理論の2方面において、1930年代の中国の日本語教育に大きく貢献し、当時の日本語教育界の名実相伴う「著名人士」であることを明らかにした。また、北京近代科学図書館の教科書作成過程への再検討により、張我軍の日本語教授観が戦時中の北京近代科学図書館の日本語教育活動に一定の影響を与えたことを究明した。

一方、「日本国籍」台湾人である張我軍にとって、日本語教育は単なる日本語という言葉を教えるものだけでなく、「反植民地統治、抗日」の手段でもあることを明らかにした。また、張我軍が日本語教育を「反植民地統治、抗日」の手段として行なった要因は、外的要因と内的要因の両方にあったことを解明した。外的要因としては、当時の言論統制と「日本語ブーム」である。内的要因としては、「日本語が反植民地統治の武器であると同時に、新思想・新知識の獲得手段でもある」という植民地経験から生まれた張我軍の日本語観である。

また、日本語教育における張我軍の主体性に関しては、戦前張我軍は自身の日本語学習経験を振り返り、日本語教育が同化教育を推進させる側面を持つことを強く警戒していたことを明らかにした。さらに、戦時中、張我軍は日本語や日本文学によって日本文化を学ぶと主張し、

表面的には日本側と同じように日本語や日本文化を推奨したが、日本側と対極の文化相対主義的な視点を以て日本の文化侵略に抵抗した面が窺える。

本研究の構成と各章の具体的な考察内容は以下のようである。

本研究は序章と終章を含めた 7 章からなっている。序章においては、まず研究背景と問題の所在を述べ、次に張我軍研究に関する現状と問題点を踏まえた上で、前述の 3 つの研究課題を設定した。また、研究方法、研究の構成、本研究の用語の定義について述べた。

第 1 章においては、張我軍の生涯を「北京定住前」「戦前の北京定住」「戦時中の北京定住」「台湾帰郷」の 4 つの時期に分け、各時期の活動における関連性を中心に考察した。また、反植民地統治が張我軍の一生を貫いた思想であることを明らかにした上で、張我軍の人生の選択に影響する要因が日本の植民地出身者としての日本語観であることを論証した。

第 2 章においては、中日甲午戦争（日清戦争）から 1930 年代までの中国の日本語教育史を振り返った上で、日本語教育関係の著述において張我軍の業績を考察した。また、張我軍の 11 種類 23 冊の日本語教材及び、全 24 号の日本語学習雑誌『日文與日語』の構成的特徴への考察により、多様な学習者と日本語教師のニーズに対応できたのは、張我軍の日本語教育関係の著述が持つ最大の特徴であることを明らかにした。さらに、これは張我軍の日本語教育関係の著述が当時の学習者や教師に好評を博した原因の一つであることを指摘した。

第 3 章においては、張我軍の日本語教授観とその影響を中心に考察した。まず教授方針や日本語教授法及び学生に対する評価を重視すべきという張我軍の日本語教授理念を明らかにした。また、張我軍が提唱した新たな教授法「文法＋読本」の特徴を究明した。次に、張我軍は自身の日本語教授観を日本語教材の作成によって実践に移行させたことを解明した。また、発音を教授する際に教学経験の蓄積に伴い、その教授方法を改善し、また、文法を教授する際には「文法＋読本」を徹底的に実行したことなど、張我軍の実際の教授面での特徴を検証

した。最後に、北京近代科学図書館の日本語教科書作成において、張我軍の日本語教授観が一定の影響を与えたことを究明した。

第4章においては、日本語教育に携わった動機と日本語教育の内容という2方面から、張我軍の日本語教育は従来の反植民地統治活動が継続されたものであることを明らかにした。その上で、「日本語が反植民地統治の武器であると同時に、新思想・新知識の獲得手段でもある」という植民地経験から生まれた日本語観は、張我軍が日本語教育の道を辿っていった内的要因であることを解明した。

第5章においては、まず張我軍の公学校での日本語学習内容には、忠君愛国や軍国主義などの「同化」と関連する内容があることを検証した。次に、日本の国語読本の文章に対する張我軍の取捨選択により、張は日本語教育が同化教育を推進させる側面を持つことを見抜いていたことを解明した。最後に、張我軍の日本語教育の内容や論述により、戦時中の張我軍は日本語教育において、日本側と対極の文化相対主義的な視点を以て、主体性を保っていたことを明らかにした。

終章においては、第1章から第5章までの各章の内容を総括した上で、序章で示した3つの課題をめぐってまとめ、今後の課題を提示した。

本研究と既出の研究成果との関係に関しては、第1章と第2章は、投稿論文「張我軍の日本語教育実践」(『文教大学大学院言語文化研究科紀要』第4号、2018年、pp.1-30)をもとに大幅加筆修正したものである。第3章は、投稿論文「『日文與日語』からみた張我軍の日本語教授観」(『文教大学大学院言語文化研究科紀要』第5号、2019年、pp.1-31)、口頭発表「『日文と日語』から見た張我軍の日本語教育観とその影響」(2017年度日本語教育学会春季大会、早稲田大学)、口頭発表「北京近代科学図書館編日本語教科書の作成過程の再検討」(2018年度日本語教育史研究会、東洋大学)をもとに大幅加筆修正したものである。第4章は、投稿論文「張我軍の日本語教育観と植民地経験との関連」(『新世紀人文学論究』特集号—日本語教育史から見た日中戦争、pp.175-190)をもとに大幅加筆修正したものである。

目 次

序章	1
1. 研究背景と問題の所在	2
2. 張我軍研究の現状と問題点	4
2.1 台湾新文学運動を背景とした張我軍研究	5
2.2 北京定住時期の張我軍の文学・教育・翻訳活動に関する研究	9
2.3 張我軍の生涯に関する研究	14
3. 研究課題と研究方法	15
4. 研究の構成	17
5. 用語の定義	18
第1章 張我軍の生涯（1902～1955）	21
1. はじめに	22
2. 北京定住前の時期（1902.10～1926.6）	22
2.1 公学校就学	22
2.2 新高銀行雇員と漢文学習	25
2.3 台湾民族運動への関与	27
2.4 張我軍と台湾新文学運動	31
3. 戦前の北京定住時期（1926.6～1937.7）	34
3.1 中国大陸留学と「祖国派」としての反植民地統治活動	34
3.2 雑誌『新野』創刊とプロレタリア文学への関心	38
3.3 日本語教育実践及び日本語翻訳活動	41
3.4 北京市社会局秘書就任と対日交渉	44
4. 戦時中の北京定住時期（1937.7～1945.8）	47
4.1 映画『東洋平和の道』への関与	47
4.2 戦時中の日本語教育実践	51
4.2.1 華北淪陥区の日本語教育概況	51
4.2.2 北京近代科学図書館の日本語講師	53
4.2.3 偽北京大学における日本語教学活動	57
4.2.4 教育総署直轄編審会の特約編集審査者	59
4.2.5 華北日本語教育研究所の常務委員	60
4.3 文学者としての張我軍	62

4.4 「文化漢奸」とされた張我軍	65
5. 台湾帰郷の時期（1945.8～1955.11）	68
6. 小括	71

第2章 中国の日本語教育史における張我軍の業績

—多種類の日本語教材と雑誌『日文與日語』—	73
1. はじめに	74
2. 中国人の日本語学習の歴史	75
2.1 中日甲午戦争から中華民国の成立まで	75
2.2 中華民国の成立から1920、1930年代の日本語教育	77
3. 日本語学習雑誌『日文與日語』	79
3.1 『日文與日語』の構成	81
3.1.1 『日文與日語』における日本語教育関係の論述	85
3.1.2 『日文與日語』における日本語講座	87
3.1.3 『日文與日語』における「答問欄」	89
3.2 『日文與日語』の構成的特徴—まとめとして—	90
4. 多種類の日本語教材	91
4.1 『日語基礎読本』—張我軍による最初の日本語教材—	92
4.1.1 『日語基礎読本』の作成	92
4.1.2 『日語基礎読本』（第4版）の構成的特徴	93
4.2 『日本語法十二講』—張我軍による最初の日本語文法書—	98
4.3 『現代日本語法大全』（分析篇）（運用篇）	100
4.4 『日語基礎読本自修教授参考書』	
—『日語基礎読本』の教師用、自修用指導書—	101
4.5 『標準日文自修講座』—張我軍による完全自修用の日本語教材—	104
4.6 『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』と『高級日文星期講座』	
—張我軍による中上級日本語読本—	106
4.7 『日語模範読本』—『日語基礎読本』の改訂—	107
4.8 『対訳詳註日本童話集』—童話を素材とした日本語教材—	108
4.9 張我軍作成教材における相互の関連性—まとめとして—	109
5. 小括	110

第3章 張我軍の日本語教授観とその影響	113
1. はじめに	114
2. 張我軍の論述からみた日本語教授観.....	115
2.1 大学の日本語教育に対する提言.....	115
2.1.1 張我軍による提言の背景.....	115
2.1.2 学校側に対する提言.....	117
2.1.3 教師側に対する提言.....	120
2.1.4 学生側に対する提言.....	121
2.2 日本語教授法・学習法に関する論述.....	123
2.2.1 既存の日本語教授法・学習法への検討.....	123
2.2.2 新たな日本語学習法の提案.....	126
3. 『日文與日語』の読本に表れた張我軍の日本語教授観.....	128
3.1 初級読本からみた張我軍の日本語教授観.....	129
3.2 中級読本からみた張我軍の日本語教授観.....	131
3.3 上級読本からみた張我軍の日本語教授観.....	134
4. 読本の「講解」「註解」からみた張我軍の教授面での特徴.....	135
4.1 発音に対する解説からみた教授面での特徴.....	135
4.2 文法に対する解説からみた教授面での特徴.....	137
5. 戦時中の日本語教育における張我軍の影響	
—北京近代科学図書館編日本語教科書作成を中心に—.....	141
5.1 北京近代科学図書館編日本語教科書について.....	142
5.2 日本語教科書の作成方針と張我軍との関連性.....	143
5.3 『初級日文』『高級日文』作成における張我軍の影響.....	145
5.3.1 教科書の構成からみた張我軍の影響.....	145
5.3.2 教科書の内容面からみた張我軍の影響.....	146
6. 小括.....	152
第4章 張我軍の日本語教育と反植民地統治活動との関連	154
1. はじめに	155
2. 張我軍の日本語教育に携わった動機—反植民地統治活動との接点.....	155
3. 張我軍の日本語教育の内容—反植民地統治活動との関連.....	159
3.1 初級段階の日本語教育の内容.....	159

3.2 中上級段階の日本語教育の内容	162
3.2.1 中上級日本語教材における論説文	163
3.2.2 中上級日本語教材における文学作品	165
3.2.3 中上級日本語教材における新聞記事	167
4. 張我軍の日本語教育に表れた日本語観—植民地経験との関連	171
4.1 反植民地統治の武器としての日本語	173
4.2 新思想・新知識の伝達手段としての日本語	177
5. 小括	179
第5章 日本語教育からみた張我軍の主体性	180
1. はじめに	181
2. 張我軍の公学校での日本語学習経験	182
3. 日本語教材の文章選択からみた張我軍の主体性	189
4. 戦時中の日本語教育における張我軍の主体性	196
5. 小括	203
終章 結論と今後の課題	204
1. 各章の内容の総括	205
2. 中国の日本語教育史における張我軍の業績と位置づけ	213
3. 張我軍が日本語教育の道を辿っていった要因	215
4. 日本語教育における張我軍の主体性	216
5. 本研究の不足点と今後の課題	217
参考文献	219
日本語参考文献	220
中国語参考文献	226
参照 URL	233
参考教材	233
付録	237
付録1 張我軍の著作	238
付録2 張我軍の翻訳作品	241
付録3 張我軍年表	244
謝辞	246

凡例

1. 年月日の表記は、年号を使わず、西暦を基本とした。
2. 文献や教材などの刊行年は奥付に表記された年号を西暦に換算して表記した。
3. 本研究では、現行の通用字体の使用を基本とした。資料の引用の際は、現行の通用字体に改め、仮名遣いや清濁音は原文のまま記した。ただし、教科書の内容は原文のまま記した。
4. 注は脚注を採用した。
5. 事件名などは中国での言い方を採用し、初出の際は括弧をつけ、括弧の中に日本での言い方を提示した。例えば、満州事変は中国では九・一八事変と言う。本研究で初出した際に、「九・一八事変（満州事変）」と表記した。

序 章

序章

1. 研究背景と問題の所在

張我軍は日本統治時代の台湾出身で、生まれた時点で「日本国籍」が付与されたが¹、青年時代に反植民地統治活動に関わり、日本の植民地統治の反抗者であった。また、台湾新文学運動の端緒となった台湾新旧文学論争を引き起こした人物でもある。そして、張我軍は 1926 年から中国大陸の北京に定住しはじめ、日本語の翻訳や日本語教育などに携わっていたが、戦時中に日本支配下の文化活動にも関わっていたことから、戦後「文化漢奸」²というレッテルが貼られ、「対日協力者」とされたこともある。

現在、張我軍は 1920 年代の台湾新文学運動における先駆者として名の知れた人物である。従来の張我軍研究には、台湾新文学運動を背景とした論考が大半を占めている。しかし、台湾新文学運動への関与はわずか 2 年間ぐらいであるのに対し、日本語教育を専業としたのは 16 年間にわたっている。そのため、張我軍の全体像を描き出すには、日本語教育の視点からの張我軍研究も必要である。特に、戦時中の真の張我軍像を知るには、彼の専業である日本語教育の実態を明らかにしなければならない。

また、張我軍の日本語教育を支えた日本語能力は、台湾の公学校での「国語」（日本語）教育を受けて獲得したもので、日本の植民地出身者のスティグマだと言える。そのため、なぜ日本の植民地統治の反抗者であった張我軍が、日本の植民地出身者のスティグマとされた日本語能力を生かして日本語教育の道を辿っていったのか。つまり、日本の植民地出身者としての張我軍の日本語・日本語教育観は如何なるものかという疑問が残されている。この問題の解明は、張我軍の全体

¹ 中日甲午戦争後に清朝と日本が締結した講和条約「下関条約」により、1897 年 5 月 8 日を過ぎても台湾、澎湖に留まった者は「日本国民」とみなされた。

² 「漢奸」は漢民族の裏切り者であると意味している。1945 年 8 月 23 日に、当時の中国共産党の機関紙『新華日報』に公表された「文化漢奸名録（二）」には、張我軍の名前が載っている。

像を明らかにする鍵になるだけでなく、日本の植民地出身者にとっての日本語教育の意義を知る糸口にもなる。

さらに、中国の日本語教育史を語る上で、張我軍は必要不可欠な人物である。張我軍が日本語教育の舞台に登壇し始めた頃は、折しも中国大陸で「日本語ブーム」が起こった 1930 年代であった。当時、九・一八事変（満州事変）や一・二八事変（第一次上海事変）が勃発し、日本の中国大陸侵攻が加速したことから、中国大陸で激しい排日運動が起こり、日本人経営の学校では多くの学生が退学し、留日学生の引き上げなども行なわれた。しかし、これを機に中国側による自主的な日本・日本語研究が一層促進された。当時、日本語を第二外国語として開設した大学や日本語学習者が増え、日本語教材が数多く発行された。このブームの中で、張我軍は北京の諸大学で日本語教師の職に就き、日本語教材の作成、日本語学習雑誌の創刊、日本語学習塾の開設などに関わり、学習者から信頼と好評を博し、日本語教育界の「著名人士」として評価された³。また、中国人の日本留学史研究で知られている実藤恵秀は、日本語学習関係の著述における張我軍の業績について、「このときの日本語書は、量において多いだけでなく、質においても明治時代よりはすぐれたのが多い。日本人の著述よりも、中国人の著述に見るべきものがあるのも特徴である。中国人の著述家の中で目立つのは、日本で活躍した王玉泉、中国で活躍した張我軍である」のように評価している⁴。

だが、これまでの中国日本語教育史研究において、張我軍の日本語教育を中心に考察したのは、王昇遠・周慶玲（2009）の 1 篇だけである。しかし、王昇遠・周慶玲（2009）は戦前の張我軍の日本語教育業績に対する概説にとどまり、その詳細については触れていない。そして、このような研究上の空白を早急に埋めるのも、本研究に至る動機

³ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B10070618200（第 11 画像）、三増英夫調中
華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況（附・日本近代科学図書館論/1937 年）（文化
_37）（外務省外交史料館）

⁴ 実藤恵秀「中国人の日本語研究」国語文化講座第 6 巻『国語進出篇』、朝日新聞
社、1942 年、282 頁。

の一つである。また、張我軍は戦前だけでなく、戦時中にも日本語教育界の著名人士とされ⁵、戦前と戦時中に跨った重要な日本語教育者だと考えられる。中国の日本語教育史における張我軍の業績や位置づけの解明は、戦前と戦時中の中国大陆での日本語教育の接点を探る上でも、大きな意義があると考えられる。

したがって、本研究は上記の背景を踏まえ、研究対象を日本統治時代の台湾出身の張我軍に着目し、張我軍の日本語教育実践を中心に考察する。その上で、中国の日本語教育史における張我軍の業績と位置づけを解明し、日本の植民地出身者としての張我軍の日本語・日本語教育観を明らかにしたいと考える。

2. 張我軍研究の現状と問題点

張我軍は文学、翻訳、日本語教育などにおいて数多くの業績を残したが、張我軍研究は彼が他界した 1955 年以降の約 20 年間はほとんど行なわれず、空白の状況だったと言える。その主な原因としては、張我軍の作品が散逸したからだと考えられる。1975 年に、張我軍の次男の張光直により編集された張我軍の作品集である『張我軍文集』（台北、純文学出版社、1975 年）が出版された。それに伴い、張我軍研究は本格的に行なわれるようになってきた。その後、張我軍の作品の蒐集や整理は引き続き行なわれ、張光正編『張我軍選集』（北京、時事出版社、1985 年）、張光直編『張我軍詩文集』（台北、純文学出版社、1989 年）、張恒豪編『楊雲萍、張我軍、蔡秋桐合集』（台北、前衛出版社、1991 年）、秦賢次編『張我軍評論集』（台北県文化中心、1993 年）、張光正編『張我軍全集』（北京、台海出版社、2000 年）、楊紅英編『張我軍譯文集（上、下）』（台北、海峡學術出版社、2011 年）などの作品集が相次いで出版された。また、台湾での初めての白話文詩集である張我軍の『乱都之恋』（1925 年初版発行）は、1987 年に遼寧大学出版社で再発行された。そのうち、張我軍の長男である張光正によ

⁵ 「北京の日語熱ますます旺ん」『朝日新聞』（北支版、1938 年 6 月 24 日）に「日本語教育界に著名な張我軍」という記述がある。

って編集された『張我軍全集』は、これまでの蒐集成果の集大成で、文学作品から評論文や日本語教育関係の論述まで全面的に収録されたものである。その後、『張我軍全集』の増補版として、2012年に『張我軍全集(上、下)』(北京、台海出版社)が出版された。そして、2016年に新しく発見された張我軍の著作を収録した『張我軍全集(補遺)』(北京、台海出版社)も出版された。これらの蒐集成果による出版に伴い、張我軍研究にいつそう拍車をかけ、台湾だけでなく、中国大陸と日本においても張我軍研究が推進され、数多くの研究成果が残されている。以下では、これまでの張我軍研究の成果を「台湾新文学運動を背景とした張我軍研究」、「北京定住時期の張我軍の文学・教育・翻訳活動に関する研究」「張我軍の生涯に関する研究」の3つに分類し概観した上で、その問題点を分析する。

2.1 台湾新文学運動を背景とした張我軍研究

張我軍は1924年からの約2年間、『台湾民報』に一連の評論文を発表し、漢詩漢文で創作した台湾旧文壇を批判し、台湾の新旧文学の論争を引き起こし、台湾新文学運動の幕が開いた。そして、小説や詩などの十数篇の新文学作品を残した。そのため、従来の張我軍研究では、台湾新文学運動を背景としたものが中心となり、最も多く発表されている。以下は、その中の代表的なものを取り上げる。

張光直編『張我軍文集』が出版された直後、台湾学者の林瑞明と陳少廷による論考が発表された。林は「撑起台湾新文学運動的大旗—張我軍和他的文集」(1976)において、台湾新文学運動における張我軍の業績を考察した上で、張我軍を「台湾新文学運動の先鋒、旗手」として位置づけている。陳は「台湾新文学運動的開始」(『台湾新文学運動簡史』の第3章、1977)において、張我軍が台湾新旧文学論争を巻き起こした過程と影響について検討し、「祖国の新文学を台湾に将来したことに於いて、一番貢献したのは北京大学で五四運動の影響を受

けた張我軍である」と指摘している⁶。それに続き、包恒新（1986）、葉寄民（1988）、胡俊媛（1993）、史揮戈（2006）なども、台湾新文学運動史における張我軍の功績を称えている。また、中国大陸、台湾及び日本で出版された多くの台湾新文学史関係の著書にも、台湾新文学運動における張我軍の貢献が高く評価されている。例えば、古継堂著『台湾新詩発展史』（北京、人民文学出版社、1989）には、張我軍は「台湾新文学運動の急先鋒」、「台湾新詩の創始者」のように位置づけられている。中島利郎・河原功・下村作次郎編『台湾近現代文学史』（研文出版、2014）には、張我軍は「台湾新文学運動の啓蒙家」と称されている。

しかし、張我軍の一部の文学作品や文学理論に対して異議を唱える者もいる。台湾学者の葉石濤は『台湾文学史綱』（台北、文学界雜誌社、1987）において、台湾新文学運動における張我軍の貢献を肯定し、張我軍を「台湾新文学運動の先駆開拓者」と称したが、「台湾新文学が中国大陸文学の一環であるとの張我軍の主張は、当時の台湾が日本統治下の植民地であるという政治的現実から言えば、多くの障碍を形成することになる」と指摘している⁷。また、「張我軍の台湾新文学運動時期の3篇の小説は、いずれも北平での生活において取材したもので、台湾の現実と関わっておらず、台湾新文学に与えた影響は大きくない」と述べている⁸。その後、前述の、張我軍を高く評価した林瑞明でも、1996年に発表した「張我軍的文学理論與小説創作」において、葉石濤と似たような見方を示している。ほかに、張我軍の新詩を再検討した呂興昌（1996）及び、張我軍を「旧文学批判の先鋒」と評価する陳芳明（2011）なども、同様なことを指摘している。

一方、このような見方に対し、反論を持つ者もいる。王晋民・呉海燕（1990）は、上述の葉石濤の見解は「本土化」と「自由化」に基づ

⁶ 陳少廷『台湾新文学運動簡史』聯經出版事業公司、1977年、20頁。

⁷ 葉石濤『台湾文学史綱』文学界雜誌社、1987、31頁。

⁸ 葉石濤『台湾文学史綱』文学界雜誌社、1987、42頁。

き、偏りすぎたものだと指摘している⁹。また、何標（1996）¹⁰は、林瑞明が同一研究対象に対し、前後して異なる結論を出したことを取り上げ、「この20年間、台湾の一部の学者は政治環境の影響を受け、民族観や文化観が巨大で急激に変化した」¹¹と指摘している。ほかに、劉海燕（2011）は、台湾での日本人警察官を主人公とした、張我軍の小説『八丁大人的手記』を取り上げ、張我軍の作品が台湾の現実と関わっていないと主張した葉石濤と林瑞明に反論した。総じて言えば、このように張我軍の一部の文学作品や文学理論に関しては、研究者間で意見が分かれているが、台湾新文学運動の推進役としての張我軍の功績は、ほぼ肯定されていると言える。

台湾新文学運動を背景とした張我軍研究は、上記のように台湾新文学における張我軍の位置づけに注目する以外に、次のような多面的な研究が行なわれてきた。趙天儀（1984）と莫渝（1999）は、同時期の詩人の作品との比較により張我軍の新詩の特徴を考察した。中島利郎（1992）は、魯迅の台湾での受容における張我軍の役割を具体的に検討した。彭小妍（1996）と陳明柔（1996）は、張我軍の文学評論により、張の民族意識や祖国意識などを探究した。豊田周子（2007）は、1920年代の台湾における張我軍の新文学作品の意義を検討した。黄乃江（2008）は、張我軍の厦門での旧文学創作活動及びそれと台湾新文学運動との関連を考察した。邱玲婉（2012）は、児童文学作品を『台湾民報』に転載した張我軍の動機を分析した。頼衍宏（2014）は、張我軍の新文学理論を再検討した上で、張我軍は中国大陸の新文学運動の影響を受けただけでなく、日本の和歌革新運動の形式と方法も援用したと指摘した。また、近年発表されたものには、張我軍が新文学理論を導入する際に採用した策略を考察した王国安（2017）、台湾新文学運動への関与とその後の文化活動を貫く張我軍の思想を描き出そ

⁹ 王晋民・呉海燕「評葉石濤的『台湾文学史綱』」『台湾研究集刊』（1）、1990年、83頁。

¹⁰ 何標は張我軍の長男の張光正の別名である。

¹¹ 何標「対厘清台湾新文学運動一些問題的思考」『文芸理論與批評』（03）、1996年、117頁。

うとした李偉・潘海鷗（2017）などが挙げられる。

学位論文においては、まず蘇世昌（1998）の修士論文『追尋與回帰—張我軍及其作品研究』が挙げられる。蘇は張我軍の生涯、早期の社会活動、生涯にわたる文学活動を考察した上で、特に張我軍の文学理論の形成、文学作品に表れた思想や芸術的風格に対し分析した。また、「張我軍の文学理論や文学作品が特に優れているわけではないが、台湾現代文学の端緒を開くことにおける張我軍の貢献は評価に値し、張我軍は台湾新文学史において最も力強い開拓者、指導者の1人である」¹²のように張我軍を評価している。ほかに、蔡佩臻（2008）の修士論文『張我軍文学與翻譯研究』がある。蔡は、台湾新文学運動への関与だけでなく、張我軍のその後の翻訳活動と戦後の文学活動も視野に入れ、文学史における張我軍の位置づけを改めようとした。蔡は、「張我軍は台湾新文学運動に貢献しただけでなく、その後も翻訳などの活動を通じて文学活動を続けた。ただ、役割としては急先鋒から陰としての文学建設者に変わっただけである」と指摘している¹³。これらの修士論文以外に、瀋芳序（2014）の博士論文『張我軍對胡適文学思想的傳播與接受：以『台湾民報』為分析場域（1923—1932）』が挙げられる。瀋は、『台湾民報』に掲載された張我軍の評論文章及び文学・翻訳作品の分析により、文学思想における胡適と張我軍の異同を考察した。瀋は、「張我軍は単に胡適の文学理論と文学作品を台湾に将来しただけでなく、胡適の文学思想を多方面から継承した上に、台湾の当時の現況に合致させるために自分の解釈を加えて発展させた」¹⁴と指摘している。

以上見てきたように、台湾新文学運動における張我軍の活動は、張我軍研究の最初から現在に至るまで、絶えず研究者に注目され、また多方面にわたり検討されてきた。しかし、張我軍の台湾新文学運動へ

¹² 蘇世昌『追尋與回帰—張我軍及其作品研究』国立中興大学中国文学系修士論文 1998年、140頁。

¹³ 蔡佩臻『張我軍文学與翻譯研究』私立東海大学中国文学系修士論文、2008年、98-99頁。

¹⁴ 瀋芳序『張我軍對胡適文学思想的傳播與接受：以『台湾民報』為分析場域（1923—1932）』国立成功大学台湾文学研究所博士論文、2014年、148頁。

の関与とその後の中国大陸での活動との関連については、李偉・潘海鷗（2017）以外にはあまり関心が払われていない。また、李偉・潘海鷗（2017）は張我軍の長年にわたる日本語教育活動の中身には触れずに、戦時中や戦後の活動にも論及しないまま、「張我軍の文学・文化活動は、終始民衆の考え方を一新し、民族文化を振興し、文化上の強国を建てるためのものだ」と帰結させたことは、説得力に欠けるであろう。さらに、張我軍が中国大陸に渡る動機、中国大陸での活動の中身を深く追究せず、新文学運動時期の張我軍の活動とその後の活動を切り離す研究者も少なくない。例えば、蘇世昌（1998）は「張我軍の文学成果がほぼ新文学運動時期に集中しているため、彼の目的は文学改良と社会改造だと理解できる。その後、彼の作品数が急激に減少したのは、その目的を達成したからだ」と述べている¹⁵。また、張我軍の中国大陸での翻訳活動を視野に入れた蔡佩臻（2008）でも、張我軍の翻訳活動を早期（1925-1926）と中後期（1929-1944）に分け、「前者は台湾文学を啓蒙するためのもので、後者は日本学術の精髓を中国国民に吸収させ、最終的に中日戦争での勝利を求めるためのものだ」¹⁶という見解を示している。

要するに、台湾新文学運動を背景とした張我軍研究は、数多くの成果を収めたが、台湾新文学運動の範疇に限られたものが多く、その後の中国大陸での活動、特に長年にわたった日本語教育活動との関連を視野に入れたものは皆無に等しい。このような視点の欠如は、張我軍の全体像を描き出す上で障碍となることは想像に難くない。

2.2 北京定住時期の張我軍の文学・教育・翻訳活動に関する研究

張我軍は北京に定住し始めた 1926 年から台湾に帰郷した 1945 年まで、約三分の一の人生を北京で過ごした。その期間、日本文学の翻訳や日本語教育などにおいて数多くの成果を残した。しかし、戦時中、

¹⁵ 蘇世昌『追尋與回帰—張我軍及其作品研究』国立中興大学中国文学系修士論文 1998 年、140 頁。

¹⁶ 蔡佩臻『張我軍文学與翻譯研究』私立東海大学中国文学系修士論文、2008 年、78 頁。

日本支配下の北京に残り、「大東亜文学者大会」などの日本帝国主義下の文化事業に携わった。また、前述のように、戦後「文化漢奸」というレッテルが貼られ、「対日協力者」とされたことがある。そのため、従来の研究者が如何に戦時中の張我軍を取り扱ったのか、注目に値するところである。

中国大陸に散逸された張我軍の作品の蒐集や整理及び、北京定住時期の張我軍に関する研究が始まったのは、比較的遅かった。最初、北京定住時期の張我軍の活動と作品を体系的に整理したのは、秦賢次（1989）の「台湾新文学運動的奠基者—張我軍」である。その中において、中国大陸での張我軍の活動及び作品などは時系列に整理されている。それに続き、長年中国大陸に定住している張我軍の長男の張光正は、張我軍の作品の蒐集に取り組む一方、北京定住時期の張我軍の活動に関して一連の論考を発表した。そのうち、戦時中の張我軍に関する論考には、まず張光正（1993）の「父親張我軍二三事」が挙げられる。その中で、張光正は張我軍が戦時中「大東亜文学者大会」¹⁷に参加したことについて弁明し、「張我軍は日本支配下でも日本統治者に反抗する気持ちを流露し、民族的自尊心を持ち、屈服しようとしなかった」¹⁸という見解を示している。次に、張光正（1996）の「張我軍與中日文化交流」において、張我軍の日本文化に関する論述及び翻訳作品、戦時中の張我軍と日本作家との交遊、戦前と戦時中の日本語教育活動などを取り上げ、「中日両国の言語に精通し、また文学的素養があるため、中日文化交流における民間の使者の役を担った」¹⁹と帰結した。つまり、張光正は「中日文化交流」の肯定的視点から戦時中の張我軍の文学・翻訳活動を扱った。

張光正と同じように「中日文化交流」の視点から戦時中の張我軍の文学・翻訳活動を論じたのは、張泉（2000）の「張我軍與淪陷時期的

¹⁷ 日本の侵略戦争に協力することを目的として、日本文学報国会などが中心となって1942年から1944年まで3度開催された文学者の交流大会。

¹⁸ 張光正「父親張我軍二三事」『新文学史料』1993年第1期、人民文学出版社、162頁。

¹⁹ 何標「張我軍與“新野社”」『台声』02、1994年、118頁。

中日文学関聯」と張泉（2005）の「張我軍：從日語專家再度轉歸文学」²⁰がある。張泉（2000）は戦時中の張我軍の文学・翻訳活動を考証した上で、「張我軍は戦時中の中日文化交流史における重要な人物である」²¹と指摘している。また、張泉（2005）は「中日が対等の立場で文化交流ができない戦時中でも、アイデンティティや生活による重荷を背負う張我軍は、中日文学交流において力の及び得る範囲で有益なことをやっていた」²²という意見を述べている。そのほか、「大東亜文学者大会」への張我軍の参加を取り上げた張欣（2000）が挙げられる。張欣は「中日戦争という不幸な時代の中で、彼は『大東亜文学者大会』という機会を精一杯に利用して文化交流をめぐる具体的な意見を出し、小は自己の日本語の翻訳や教授、大は中国における日本研究の一層の充実を図っていたのである」²³と述べ、張光正と張泉と同じように中日文化交流の視点から戦時中の張我軍の活動に理解を示している。

このような「中日文化交流」の視点以外に、政治と文化を分断して戦時中の張我軍の活動に対する理解を試みた鄒双双（2013）の「日本占領下の北京における張我軍の翻訳活動—島崎藤村、武者小路実篤と関連して」がある。鄒は、戦時中の張我軍の翻訳活動を考察した上で、「日本の台湾統治、北京占領に対し反感を持ちつつも、戦前、戦中を問わず日本文学の紹介、翻訳に取り組んだ張我軍には、政治上では日本を敵視しつつ、文化上では日本を認めるスタンスが窺える」²⁴という見解を示した。

しかし、政治と文化が切り離せるかどうかは別として、日本文化認識そのものは二面性を持つもので、日本文化を優位文化として認めるのか、すべての文化が対等なものであるという文化相対主義的な視点

²⁰ 張泉『抗戦時期的華北文学』（貴州教育出版社、2005年）の第7章第2節である。

²¹ 張泉「張我軍與淪陷時期的中日文学関聯」『中国現代文学研究叢刊』01、2000年、235頁。

²² 張泉『抗戦時期的華北文学』貴州教育出版社、2005年、276-277頁。

²³ 張欣「張我軍と『大東亜文学者大会』」『アジア遊学』（13）、勉誠出版、2000年、109頁。

²⁴ 鄒双双「日本占領下の北京における張我軍の翻訳活動—島崎藤村、武者小路実篤と関連して」増田周子編著『戦争の記録と表象：日本・アジア・ヨーロッパ』、2013年、179頁。

から日本文化を認識するのにかにより、その性格が違ふ。そのため、戦時中の張我軍の文学・教育・翻訳活動については、「中日文化交流のため」あるいは「文化上では日本を認める」などの一言で片づけられないであろう。

そのほか、戦時中の張我軍に関する論考には、王申（2010）の博士論文『淪陥時期旅平台籍文化人的文化活動與身分表述—以張深切、張我軍、洪炎秋、鍾理和爲考察中心』が挙げられる。王は、日本統治下の北京に在住した張深切、張我軍、洪炎秋、鍾理和という4人の台湾出身の作家による文化活動を取り上げ、それぞれの主体的な表現形式を考察した。そのうち、張我軍に関する部分は第2章である。その中で、王は、戦時中の張我軍は周作人、錢稻孫などの誘いや生計のため、大東亜文学者大会や華北作家協会や日本文学翻訳などの日本支配下の文化活動に不本意にも参加したが、日本側と同調しなかったと考えた。当然、戦時中の張我軍の活動は自身と家族を守るためのカムフラージュだった可能性は否定できない。しかし、仮に張我軍が支配者の政治に規定された文化活動の中で、主体性を持つことができたとしても、その裏にあるメカニズムを解明する必要がある。つまり、日本の植民地出身者の張我軍は如何に日本の支配下で主体性を保っていたのか。

この点については、近年発表された山口守（2017）の「北京時期的張我軍：被文化與政治夾擊的主体性」は、新たな示唆を与える論考である。山口は、日本文学翻訳、日本の国策映画『東洋平和の道』への関与、偽北京大学での教学活動、大東亜文学者大会への出席という4つの北京定住時期の張我軍の活動を取り上げ、日本の植民地出身者としての張我軍の主体性を考察した。山口は、北京定住時期の張我軍は中国人意識があるゆえに、終始異国異文化理解の回路から日中文化交流活動に携わっていたと指摘している²⁵。一方、張我軍の中国人としての立場を支えたのは植民地出身者のスティグマである日本語能力

²⁵ 山口守（2017）「北京時期的張我軍：被文化與政治夾擊的主体性」『台湾文学研究集刊』第20期、台湾大学台湾文学研究所、77頁。

であるため、「張我軍は終始日本語と日本文化の研究者という姿勢を以て主体性を維持させようとしたが、時代の流れで最終的に対日協力の体制に組み込まれた」²⁶と結論づけた。しかし、北京定住時期の張我軍の専業である日本語教育の内容について言及されておらず、張我軍が日本語教育に携わった動機が明らかにされていない。そのため、戦時中の張我軍の主体性については、さらに検証する必要がある。

上記の研究以外に、戦前の張我軍の日本語教育を対象に考察した王昇遠・周慶玲（2009）、復帰後の台湾での文化・教育建設に関する張我軍の主張を分析した楊紅英（2013）、翻訳論の視角から張我軍の訳著『文学論』（夏目漱石原著）を考察した王向遠（2015）、戦前張我軍が「新野社」という文学団体に参加したことを考察した何標（1994）などが挙げられる。ほかに、張我軍の翻訳活動を整理した上で、張我軍の翻訳観の形成における周作人の影響などを考察した鄧慧恩（2006）の修士論文『日據時期外来思潮的訳介研究：以頼和、楊達、張我軍為中心』²⁷がある。その中で、王昇遠・周慶玲（2009）の「中国日語教育史視閥中的張我軍論」は、初めて張我軍の日本語教育を中心に考察した研究論文である。王昇遠・周慶玲は、日本語学習雑誌の編集者、日本語教材の著者、日本語教授者という3つの方面から、中国の日本語教育史における張我軍の業績を概観した。しかし、張我軍の日本語教材の内容、張我軍の日本語教授観及びその影響などは具体的に言及されていない。また、戦時中の張我軍の日本語教育実践活動などについても触れていない。

以上見てきたように、これまでの研究では、北京定住時期の張我軍の文学・教育・翻訳活動が整理され、また植民地出身者としての張我軍の主体性についても検討したものは著わされた。しかし、北京での16年間にわたる張我軍の日本語教育の実態については、未解明の部

²⁶ 山口守（2017）「北京時期的張我軍：被文化與政治夾擊的主体性」『台湾文学研究集刊』第20期、台湾大学台湾文学研究所、90頁。

²⁷ この論文は2009年に『日治時期外来思潮的訳介研究：以頼和、楊達、張我軍為中心』（台南市立図書館）という著書として出版した。張我軍に関する部分は第5章の「三地橋梁：張我軍的翻訳事業」である。

分が多く、今後、なお検討の余地があると言わざるをえない。

2.3 張我軍の生涯に関する研究

上記の張我軍研究以外に、張我軍の生涯に関する研究も進んできた。張我軍の親友である洪炎秋²⁸は1976年に、張我軍に関する回想文「懷才不遇的張我軍兄」を発表した。それにより張我軍の経歴を大まかに知ることができる。その後、中島利郎（1989）、張恒豪（1991）、秦賢次（1993）、張光正（2000）、秦賢次（2002）などの研究により、張我軍の経歴はさらに明らかにされてきた。そのうち、秦賢次（2002）の「張我軍年表」（『台湾文化菁英表集』の張我軍部分）は、これまでの研究の集大成で、張我軍の著述まで含まれている、最も詳細なものである。また、張我軍の各時期の活動を記述し評価した『張我軍評伝』（田建民著、作家出版社）は、2006年に中国大陸で出版された。この著書は、張我軍の各時期の活動に対する記述や評価が基本的にこれまでの研究成果を踏襲し、各時期の活動に合わせた時代背景が詳細に紹介され、張我軍の生涯に関する研究にとって大きな成果だと言える。

これらの研究成果により、張我軍の経歴は明らかにされてきたが、欠落したところや間違ったところがある。特に戦時中の張我軍の日本語教育活動に関する記述が不足していることから、戦時中の張我軍を正確に評価できないこともある。例えば、張泉（2005）は戦時中の張我軍について、「日本語教育の専門家から転身し、再び文学家として活躍した」²⁹と結論づけた。しかし、筆者が発掘した資料により、張我軍は偽北京大学以外に、北京近代科学図書館、教育総署直轄編審会、華北日本語教育研究所などによる日本語教育活動にも深く関与し、戦時中の華北の日本語教育界における重要な存在であったと言える。したがって、張我軍の生涯に関するこれまでの研究に対し、修正し補足

²⁸ 洪炎秋（1899～1980）は日本統治時代の台湾出身で、張我軍の親友である。1930年代、北京で張我軍と一緒に人人書店を経営し、『英文法比較研究日本語法精解』という日本語教材を作成した。北京が淪陥した後、偽北京大学の農学院で日本語を教えていた。

²⁹ 張泉『抗戰時期的華北文学』貴州教育出版社、2005年、267頁。

する必要がある。

3. 研究課題と研究方法

上記の張我軍研究上の欠落や空白部分を確認した上で、本研究では前述の研究背景と問題の所在に基づき、これまであまり触れられていない張我軍の日本語教育の中身に注目し、次の 3 つの課題を設定する。

①張我軍の日本語教育実践活動を考察する上で、中国の日本語教育史における張我軍の業績や位置づけを明らかにする。

②張我軍の日本語教育の目的や内容を考察し、日本の植民地台湾出身者である張我軍が日本語教育の道を辿っていった要因を解明する。

③日本の植民地台湾出身者である張我軍が日本語教育に携わる際に主体性を保っていたのかを探究する。

これらの課題を解明するには、通時的に張我軍の各時期の活動を検証し、日本語教育活動と他の各活動間の関連を探る必要がある。そして、共時的視点からその時代背景の中で張我軍の各時期の活動が持つ意義を考察しなければならない。また、その過程の中で客観的な結論を出すには、一次資料の発掘や分析は欠かせない。そのため、本研究では、既存の研究成果を踏まえた上で、通時的視点と共時的視点を以て、主に以下の 4 種類の一次資料に対する調査と分析を通じて、張我軍の実像に迫っていききたい。

(1) 公文書に対する調査

張我軍は戦前日本語教師として北京の諸大学と関わり、秘書として北京市社会局の活動に参加したこともあり、戦時中にも偽北京大学、日本の外務省や興亜院などの公的機関と関わったこともある。そのため、張我軍の足跡をさらに正確に描き出すために、これらの機関が発行した公文書に対する調査が必要である。本研究の主な調査対象とな

るのは、国立北平大学や国立北平師範大学などの北京諸大学の要覧が収録された『民国史料叢刊』³⁰、アジア歴史資料センターから公開された外務省外交史料館や防衛省防衛研究所の資料、北京大学档案馆に所蔵された偽北京大学関係の資料、北京市档案馆に所蔵された北京市社会局関係の資料、外務省外交資料館に所蔵された旅券発給関係記録、台湾国史館で公開されている張我軍関係の「総統府人事調査表」などである。

(2) 戦前・戦時中の新聞や雑誌に対する調査

上述の公文書以外に、張我軍が関わった機関に発行された新聞や雑誌も本研究の調査対象である。主なものとしては、北京大学から発行された『北京大学日刊』、北京近代科学図書館から発行された『書滲』及び『北京近代科学図書館館刊』、華北日本語教育研究所で発行された『華北日本語』（復刻版、冬至書房、2009年）、華北作家協会が発行された『中国文学』及び『華北作家月報』、日本文学報国会の機関紙である『文学報国』などである。ほかに、戦時中の張我軍の活動が掲載された『朝日新聞（北支版）』（朝日新聞社）、『日本学芸新聞』（日本学芸新聞社）、『国際映画新聞』（国際映画通信社）、『日本映画』（大日本映画協会）などもある。

(3) 日本語教育関係の著述に対する調査

張我軍の日本語教育の中身を解明するには、張我軍の日本語教育関係の著述が最も重要な手がかりだと考えられる。そのため、戦前に発行された8種16冊の日本語教材と、全24期の日本語学習雑誌『日文與日語』、及び戦時中に発行された3種類7冊の日本語教材は、本研究の主な分析対象となる。また、中国の日本語教育史における張我軍の位置づけをさらに明らかにするため、葛祖蘭著『日語漢訳読本』、蔣君輝著『現代日語』、傅仲濤著『日文津梁』などのほぼ同時期に発行された主な日本語教材も比較考察対象にする。

³⁰ 張研・孫燕京によって編集され、2009年に大象出版社から発行された中華民国時代の政治、経済、社会、文教などの資料を復刻した叢書で、全1128冊。

(4) 張我軍の親族、友人、学生などによる証言に対する調査

張我軍の個人史や歴史背景を検証するには、傍証として張我軍と関連のある人物の証言も必要であることは、言うまでもない。筆者が張我軍の長男である張光正にインタビューし、貴重な証言を入手したが、ほかの関係者は現時点で逝去されたり高齢になられた人が多いため、直接インタビューするのは難しい。そのため、彼らに残された回想文や日記などの資料が本研究の調査対象となる。主な資料としては、張我軍の学生の証言を収録した『あのころの日本―若き日の留学を語る』（日本僑報社、2003年）、張我軍の友人である張深切の日記が収録された『張深切全集』（文経出版社、1998年）、張我軍と面識のある今井武夫の回想を記録した『日中平和工作―回想と証言 1937―1947』（みすず書房、2009年）、台湾日記知識庫に公開された張我軍の友人である林猷堂や楊基振などの日記、張我軍と交流があった竹内好の日記を収録した『竹内好全集』（筑摩書房、1981年）などがある。

4. 研究の構成

前述の研究課題を解明するために、本研究はこの序章以外に、6章を設ける。各章の内容を概括すると、以下のようである。

第1章では、既存の研究成果に対し修正・補足をした上で、張我軍の生涯を「北京定住前」、「戦前の北京定住」、「戦時中の北京定住」、「台湾帰郷」という4つの時期に分け考察する。また、時代の流れの中で各時期の活動間の関連を究明し、特に張我軍が日本語教育に携わる外的要因を明らかにする。その上で、張我軍の人生の選択に影響する要因は何かを提示する。

第2章と第3章は、中国日本語教育史における業績や位置づけを解明するために設定した章である。具体的には、第2章では、中国大陸の日本語教育史を振り返り、張我軍による日本語教育の時代背景を考察する。その上で、張我軍が編纂した11種類の日本語教材と1種類の日本語学習雑誌『日文與日語』を取り上げ、その構成的特徴と教材間の関連及びそこに表れた張我軍の作成理念を分析し、これらの著

述が当時の日本語教育界で好評を博していた要因を探り出す。

第3章では、『日文與日語』に掲載した日本語教育関係の論述により、張我軍の日本語教授観を考察する上で、『日文與日語』に掲載された日本語読本を取り上げ、張我軍が如何に自分の教授観を日本語教材の中に導入したのかを究明する。さらに、「註解」「講解」などの読本に対する張我軍の解説への考察により、実際の日本語教授実践に表れた張我軍の教授面での特徴は何かを分析する。最後に、北京近代科学図書館の日本語教科書の作成過程に対する再検討により、戦時中の日本語教育における張我軍の日本語教授観の具体的な影響を明らかにする。

第4章では、張我軍の日本語教育関係の論述や日本語教材に基づき、張我軍の日本語教育に携わった動機や日本語教育の内容を考察し、張我軍の日本語教育はかつての反植民地統治活動と具体的に如何なる関連があるのかを明らかにする。その上で、張我軍が日本語教育に携わった内的要因を探る。

第5章では、同化政策下の台湾の公学校での張我軍の日本語学習内容を考察する上で、張我軍が日本の国語読本から日本語教材の文章を選択する際のポイントを分析する。それにより、張我軍が自身の公学校での日本語学習経験を生かす際に、そこに潜む同化と関連する内容を避けたかどうかを考察する。さらに、戦時中の張我軍の論述や日本語教育の内容により、日本支配下の日本語教育で張我軍が主体性を保っていたのかを考察する。

終章では、各章の考察結果をまとめ、前述の3つの課題を解明した上で、日本の植民地出身者としての張我軍の日本語・日本語教育観は何かをまとめる。また、本研究の不足点を分析した上で、今後の課題を提示する。

5. 用語の定義

本研究を対象とした期間は半世紀に及び、その間政権交替や世界情勢の変化に伴い、地名や機関名などの用語が変化してきた。また、一

部の歴史研究の用語が中国と日本では統一されていない。そのため、読み手に混乱が起こらないように、いくつかの用語について次のように定義しておく。

(1) 占領地と淪陥区

日本では第二次世界大戦で日本軍に攻略された他国の国土を占領地と称するが、中国では攻略された中国の国土を淪陥区と称する。例えば、日本の研究者の多くは、盧溝橋事件勃発後、日本軍に攻略された北京を中心とした華北地方を「華北占領地」と称しているが、中国では「華北淪陥区」と称している。本研究では、「華北淪陥区」に統一する。

(2) 「満州国」と偽満州国

「満州国」は九・一八事変以降、日本軍を後ろ盾として中国の東北地方で設立された傀儡政権である。中国では「満州国」を歴史的な独立国として見なさない立場から「偽」をつけて偽満州国と称するが、本研究では記述の煩雑さを避けるために、「満州国」という表記を用いる。

(3) 中国大陸、台湾、「満州国」

中国大陸、台湾、「満州国」はいずれも中国の一部であるが、本研究では行文上の便宜を図るために、以下のように区別し定義する。

「満州国」: 1932年3月1日に日本軍を後ろ盾として中国の東北地方で設立された傀儡政権である。

中国大陸: 「満州国」設立以前、台湾以外の中国国土を指す。

「満州国」設立後から日本降伏の1945年8月15日まで、台湾と「満州国」以外の中国国土を指す。

台湾: 1895年4月17日から1945年10月25日までの日本統治下の台湾本島及び澎湖諸島など付属諸島嶼を指す。

(4) 北京大学と偽北京大学

中国では通常、日本軍を後ろ盾とした傀儡政権によって創立された北京大学（1939.1～1945.8）のことを偽北京大学と称する。盧溝橋事件以降、元々の北京大学は昆明に移転し、国立清華大学と私立南開大学と合併し「西南聯合大学」と改称した。本研究では、元々の北京大学と区別するために、通常の言い方を援用し、傀儡政権によって創立された北京大学のことを偽北京大学と称する。

(5) 北京と北平

現在の北京市の名前は、歴史上政権の交替が原因で何回も変更された。1928年6月に北京を統治下に置いた国民党政権が「北京」を「北平」に変更したが、1937年10月に日本支配下の傀儡政権により「北平」を「北京」に変更された。1945年8月に日本が降伏した後、再び元の名前の「北平」に変更されたが、共産党政権が北京を支配した後、1949年9月に再び「北京」に変更された。本研究では読み手に混乱が生じないように「北京」に統一した。したがって、当時の大学の名前に冠せられた「北平」を「北京」に統一した。例えば、本研究では「北平師範大学」を「北京師範大学」と称する。しかし、「北平大学」と「北京大学」は同じ学校ではなく、並立する時期もあったので、二つの学校を区別するために、特例として「北平大学」をそのまま使用する。

(6) 戦前、戦時中、戦後

単に「戦前」「戦時中」「戦後」といっても、どの戦争を基準にしたのか不明なので、本研究では記述上の便宜を図るために、以下のように定義する。

戦前：盧溝橋事件勃発（1937年7月7日）以前の時期。

戦時中：盧溝橋事件勃発から日本が敗戦した1945年8月15日までの時期。

戦後：日本が敗戦した1945年8月15日から現在までの時期。

第 1 章

張我軍の生涯（1902～1955）

第 1 章 張我軍の生涯（1902～1955）

1. はじめに

張我軍の足跡を辿ってみると、53年の人生には3つの大きな節目があることが分かる。一つ目は、1926年に台湾新文学運動の舞台から離れ中国大陸に赴き、またその後日本語教育に専念し始めたことである。二つ目は1937年の盧溝橋事件後、日本支配下で各種の文化活動に関与し始めたことである。三つ目は1945年、日本の敗戦後、台湾に戻り台湾での中国語教育に関心を寄せ始めたことである。このように文学者から日本語教育者へ、反植民地統治活動の道からいわゆる「対日協力」の道へ、日本語教育者から中国語教育者への転換の背後には、如何なる背景や動機があるのか。これは、張我軍の全体像を描き出す上でまず問いたださなければならない問題だと言える。

この問題をめぐり、本章では上述の3つの節目により張我軍の生涯を次の4つの時期に分け、これまでの張我軍の生涯に関する研究に対し修正補足した上で、時代の流れの中張我軍の各時期の活動間に如何なる関連があるのかを中心に考察し、張我軍の人生の選択に影響を与えた最大の要因は何かを探る。第1期は北京定住前の時期で、張我軍が生まれた1902年10月から北京に定住しはじめる1926年6月までである。第2期は戦前の北京定住時期で、1926年6月から盧溝橋事件が勃発した1937年7月までである。第3期は戦時中の北京定住時期で、1937年7月から日本が敗戦した1945年8月までである。第4期は台湾帰郷の時期で、1945年8月から張我軍が他界した1955年11月までである。

2. 北京定住前の時期（1902.10～1926.6）

2.1 公学校就学

張我軍は原名が張清榮で、ペンネームは一郎、憶郎、迷生、野馬、M. S.、劍華、廢兵、以齋、張四光、老童生などで、1902年10月に台北庁擺街堡枋橋街（現在の台湾新北市板橋区）で生まれた。1895年に

中日甲午戦争での清朝の敗戦で、台湾は日本に割譲され、日本の植民地になったことから、張我軍は生まれた時点ですでに「日本国籍」を付与されていた。そして、1909年4月に枋橋公学校³¹に入学し6年間在籍した。1915年3月、張我軍は公学校を卒業し、枋橋公学校の第11期の卒業生となった。こうした公学校での6年間の学習経験は張我軍に日本語の基礎をしっかりと身につけさせた。張我軍自身も「8歳から日本の学校で勉強したから、日本人と同じように日本語が話せる」と述べたことがある³²。その後の張我軍の日本文学翻訳や日本語教育などの活動を支えたのは、この公学校で習得した日本語である。そのため、張我軍が如何なる環境で日本語を習得したのかを考察する必要がある。以下では、日本統治時代の台湾での日本語教育の展開及び、その中における台湾の公学校の位置づけを見ておく。

1895年に日本は台湾を領有した後、台湾に台湾総督府を設置し、台湾での50年間にわたる植民地統治を始めた。異民族支配にあたり意思疎通と命令の伝達等の必要性から、台湾人に対する「国語」（日本語）教育が植民地統治の急務とされた。1895年6月17日に台湾総督府の始政式が挙行された翌日、学務局が開かれた。当時台湾での「国語」教育の方針を定めたのは、台湾総督府の初代学務局長の伊沢修二である。伊沢の考えとしては、台湾と日本が同文同種であるから、「新領土の民を我皇民の一部として、真に能く同化せしむる事」である³³。また、国府種武は1896年に台湾総督府の学務部に勤務した小川尚義が伊沢について、「先生は唯本島人に国語による知識の取得を漫然と期待されたのではなく、国語教授により台湾人を日本人にしてしまふといふ熱烈な意図を持つて居られた」³⁴と指摘している。台湾での植民地統治初期には、植民地統治方針が定まっていなかった面もあったが、日本語教育はこのように最初から「同化」を目指したものであった。

³¹ 枋橋公学校は1899年に設立され、1921年に校名を「板橋公学校」に、1941年に「板橋国民学校」に変更された。現在の新北市板橋国民小学校の前身である。

³² 張我軍『日本語法十二講』人文書店、1932年、序言頁。

³³ 伊沢修二「台湾の教育」『伊沢修二選集』、信濃教育会、1958年、587-588頁。

³⁴ 国府種武『台湾における国語教育の展開』、第一教育社、1931年、17頁。

具体的な展開としては、1895年7月に伊沢は3人（その後6人に増員）の日本語教師を率い、台北郊外の芝山巖に芝山巖学堂を設立し、台湾人に対する日本語教育を始めた。翌年の1896年、台湾人を対象にした日本語教育を中心とする教育機関である国語伝習所が14カ所設置され、日本本土よりも早く「国語」という言葉が学校教育で使われるようになった³⁵。その後、1898年7月、「公学校令」³⁶（勅令第178号）の公布に伴い、台湾人児童を対象とした初等教育機関である公学校は国語伝習所の代替として設置された。公学校の設立本旨については、「台湾公学校規則」³⁷（府令第78号）の第1章第1条に「公学校ハ本島人ノ子弟ニ徳教ヲ施シ實学ヲ授ケ以テ国民タルノ性格ヲ養成シ同時ニ国語ニ精通セシムルヲ以テ本旨トス」³⁸と規程されているように、「国語」（日本語）の精通と日本国民としての性格の養成は公学校の主な教育目標である。張我軍が就学した枋橋公学校はこうした背景の下、1899年に設立されたものである。その後、大正時期に入ってから、デモクラシーや民族自決主義の影響を受け、1918年に日本本土と同様の制度を植民地に適用するという「内地延長主義」が日本の植民地統治の方針となり、同化政策が正式に台湾での植民統治の原則となった。それに伴い、1919年1月に台湾教育令が公布され、それによって台湾の学校制度が整備された。そして、1922年2月に台湾教育令がさらに改訂され、台湾人は公学校に入り、日本人は小学校に入るというこれまでの差別教育の状況を改善するために、「内台共学」の方針が立てられた。しかし、「国語」を常用する台湾人児童だけは小学校への入学が許可されたが、多くの台湾人児童は相変わらず公学校に通うことになる。1930年代に入り、日本が戦時体制に移行し、台湾での植民地支配も強化されてきた。1936年9月、軍人出身の小林

³⁵ 陳蚊彪『日本統治下の教科書と台湾の子どもたち』風響社、2019年、6頁。

³⁶ 「公学校令」は1898年7月28日に公布され、同10月1日より施行された。公学校の設置、経費、教員、教科書などが規定されている。

³⁷ 「台湾公学校規則」は1898年8月16日に公布され、公学校の教授の要旨や教科の程度などの詳しい教授方針が規定されている。その後、「台湾公学校規則」が何回も改正されたが、「国語」（日本語）の精通と日本国民としての性格の養成という本旨には大きな変化はなかった。

³⁸ 『官報』第4552号、1898年8月31日、内閣官報局、303頁。

躋造が台湾総督に就任し、台湾での「皇民化運動」³⁹を推進しはじめた。それに伴い、日本語教育は「皇民化」の重要な手段として強化されてきた。日中戦争が勃発した1937年に、随意科目だった「漢文科」が廃止され、公的には一切の中国語の使用が禁止され、日本語を話す家庭を奨励するようになった。そして、1941年3月に「国民学校令」が公布され、それによって台湾での公学校と小学校は日本本土に合わせて「国民学校」に改名され、1945年の終戦まで続いた。

以上に見てきたように、張我軍が公学校に就学した頃は、「同化」という植民地統治の方針が正式に確立されていない時期であったが、台湾での日本語教育は最初から、台湾人を日本人に変えるという「同化」を目指したものである。そのため、張我軍が公学校で習得した日本語を生かして日本語教育に携わる際に、こうした同化政策下での日本語学習経験がどのような影響を与えたかは注目に値する。この問題の解明は、日本の植民地出身者としての張我軍の主体性を判断する鍵だと言える。このことは第5章で張我軍の公学校での学習内容を取り上げ詳述する。

2.2 新高銀行雇員と漢文学習

1915年に公学校卒業後、張我軍は進学するのではなく、見習いとして台北にある日本人経営の靴屋に入った。その後、1916年に公学校時代の先生にあたる林木土の紹介で、台北新高銀行の給仕に採用され、勤勉なところを認められて1年余りで雇員に昇進した。1918年に新高銀行桃園支店に派遣され、1920年に台北本店に戻った。この期間に、張我軍は勉強するのを諦めず、夜間の「成淵学校」で中学の内容を補習する以外に、余暇を利用して台北の「劍樓書塾」という書

³⁹ 1930年代から太平洋戦争にかけて、日本が植民地や占領地で行なった強制的な日本化政策である。現地の住民を日本の戦時動員体制に組み込み、「皇民の臣民」として日本の国家主義に服従させることが目的である。

房で清朝の秀才であった趙一山⁴⁰について漢文を学んだ。

漢文は中国の文語体の文章を指し、台湾語の読み書きの媒介として、台湾人にとって日常生活に必要な道具である。そのため、台湾が日本の植民地になってからも、台湾に従来ある民間の漢文教育機関である書房は、急激に廃止されたわけではなく、徐々に減少していき、書房を全廃するという方針が実施された1943年まで存続した。また、公学校には「漢文」⁴¹科目も設けられた。公学校卒業後の張我軍が書房に通って漢文を学んだのは、日本語教育に重心を置いた公学校では、手紙や簿記などの銀行の仕事に必要な高い漢文力を身につけられなかったからだと考えられる。

その後、1921年12月に張我軍は新高銀行の厦門支店に派遣され、最初の中国大陸行きとなった。厦門に滞在した際にも、余暇を利用して厦門の同文書院で勉強する以外に、当地の私塾で引き続き漢文を学んだ。「我軍」という名前は、その私塾の先生につけられたものだという⁴²。また、厦門滞在期間に張我軍は漢詩を2首創作し発表した⁴³。さらに、黄乃江の考証によれば、張我軍は厦門にいた際に、「菽庄吟社」という詩社による作品募集に応募し、「丙選第181名」に選ばれた⁴⁴。漢文学習経験は、張我軍が仕事に必要な漢文力を身につけただけでなく、彼の文学的素養を高めたと言える。

⁴⁰ 趙一山（1856～1927）は台北板橋出身で、1911年に「劍樓書塾」を創設し、台湾での日本の植民統治に反抗し、常に教え子に「汝らは日本人からの粟を一粒食べたのなら、我が弟子ではない」と訓戒している。（台湾国家図書館編『台湾歴史人物小伝：明清及日据時期』2003年、663－664頁）

⁴¹ 公学校の「漢文」科目は1903年から独立した科目として設立され、1922年から随意科目となり、1937年に廃止された。

⁴² 秦賢次「張我軍年表」『台湾文化菁英年表集』台北県政府文化局、2002年、159頁。

⁴³ 1首は「寄懷台湾議會請願諸公」で、雑誌『台湾』（第4年第4号、1923年4月）に掲載している。もう1首は「咏時事」で、雑誌『台湾』（第4年第6号、1923年6月）に掲載している。

⁴⁴ 黄乃江「張我軍の処女作及其在厦門之文学活動新考」『福州大学学报（哲学社会科学版）』（3）、2008年、11頁。

2.3 台湾民族運動への関与

厦門滞在期間に、張我軍は上述の漢文学習と文学活動以外に、初めて日本の植民地統治政策を批判する文章「南支那に於ける排日対策」⁴⁵を發表した。これは張我軍が執筆した最初の日本語文章でもある。張我軍はその中で、厦門で排日運動が起こった際に、台湾総督府が正式な職業を持たない台湾浪人を利用して中国の治安を乱し、中国大陸と台湾の間の関係を離間することを批判し、中国大陸で発生した排日運動の根本的な原因は「対華二十一カ条要求」⁴⁶などの日本の対華侵略政策であることを指摘した。

そのころ、張我軍がこのように日本の台湾での植民地統治に反抗する声を上げ始めたのは偶然ではない。張我軍が中国大陸に渡った1921年頃は、折しも台湾民族運動が勃興した時期であった。第一次世界大戦後、「民族自決主義」⁴⁷の潮流は全世界の半植民地国家や被植民地の間に広がっていた。朝鮮での独立運動「三一運動」（1919年3月）及び、「対華二十一カ条要求」の撤廃を求める中国大陸での反封建・反帝国主義運動「五四運動」（1919年5月）は、いずれもその時代の潮流によるものであった。また、日本国内でも大正デモクラシーの潮流があった。こうした時代の潮流の中で、日本支配下の台湾人も民族自決を求める道を辿ってきた。最初にそれに反応したのは、日本に学ぶ台湾人留学生であった。彼らは民族と風俗習慣が同じである中国人留学生や同じ境遇にあった朝鮮人留学生と接近することで、民族意識を喚起させ、中国語の研究を行ない、或いは年号に中国の年号を使用し、中国を祖国と呼び、排日的感情が高まってきた⁴⁸。こうした民族意識の覚醒は最終的に民族運動に発展した。1919年末に在日台湾人留学生を主体とした、百余人を集めた「啓発会」という団体が東

⁴⁵ 雑誌『台湾』（第4年第7号、1923年）に掲載。

⁴⁶ 「対華二十一カ条要求」は第一次世界大戦中、日本が中国に対し21カ条の要求を突き付け、中国の主権を一方的に無視した対中国侵略政策である。

⁴⁷ 「民族自決主義」は第1次世界大戦の際に、アメリカの大統領ウィルソンによって提唱されたもので、民族は自分の意志に基づき自己の政治的運命を決め、他民族の干渉を認めないとする主張である。

⁴⁸ 台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌』第二編中巻、1939年、24-25頁。

京で組織され、間もなく「新民会」に改称された。新民会の主な活動は主に次の3つである。一つ目は、「六三法」⁴⁹撤廃運動や台湾議会設置請願運動⁵⁰などの植民地統治政策の改革を求める政治運動に参加することである。二つ目は、台湾民衆を啓蒙し民族運動の隊列を拡大させるために、『台湾青年』⁵¹という機関誌を発行することである。三つ目は、中国大陸の同志と連絡を取り合うことである。新民会が成立して間もない時期に、会員の大多数である学生のみで、新民会を指導的地位に置いた「台湾青年会」が結成された。その後、各種運動はすべて台湾青年会の名を以て行なわれるようになった。

一方、台湾島内では、上述の在日台湾人留学生による啓蒙運動に呼応し、1921年10月に千余名の台湾知識人を集めた「台湾文化協会」が創立された。台湾文化協会は表面的には「台湾文化ノ発達ヲ助スルヲ以テ目的ト為ス」を会則として掲げたが、台湾民衆の民族意識の覚醒及び植民地統治からの台湾民衆の解放を目指した文化啓蒙団体である⁵²。その手段として、会報の発行、「読報社」という新聞雑誌閲覧所の設置、各種講習会及び講演会の開催などがあった。台湾文化協会の文化啓蒙運動は台湾民衆の民族意識の覚醒を促した。特に学生たちを中心とする多くの青年世代はその影響を受け、中国を祖国とし、台湾の日本統治離脱の望みを中国に託し、中国大陸に留学した。この点については、以下の『台湾総督府警察沿革誌』にある記録によって、その一端が窺えるであろう。

其の（筆者：中国大陸での台湾人留学生の急増）最大原因は文化協会の活動の結果たる民族的覚醒の影響と見るを得べし。即ち彼らが支那を民族的祖国として思慕し、支那四千年の文化の伝統を

⁴⁹ 「六三法」は1896年3月30日に公布された「法律第63号」のことで、台湾総督府に法律と同等の効力を持つ命令を発布する特権を与えた法律である。

⁵⁰ 台湾議会設置請願運動は、1921年1月から台湾人が日本帝国議会に対し台湾独自の議会の設置を請願した運動のことである。1934年3月まで全部で15回の請願活動が行われた。

⁵¹ 『台湾青年』は1920年7月に東京で創刊され、日本語と漢文が併用された雑誌である。

⁵² 台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌』第二編中巻、1939年、140頁。

誇り且つ之を憧憬し、文化協会、台湾議會設置請願運動の発展と成功を期待し、台湾の日本統治下より離脱する日は遠からずとするの見解が、汎く瀰漫せるは彼等の言動に徴し疑ふ能はざる処にして、斯かる気風の台頭が其の最も有力なる原因を為したる所なり。⁵³

日本植民地統治の反抗者には、台湾文化協会設立前にすでに「祖国派」または「大陸派」と呼ばれた者たちが存在していた。彼らは中国大陸の辛亥革命が成功した後、祖国である中国への希望に燃え、中国大陸に行き祖国を建設し強盛させることによって、最終的に台湾の日本統治離脱が実現できると主張した⁵⁴。こうした「祖国派」または「大陸派」の隊列は、前述の台湾青年会や台湾文化協会などによる啓蒙活動を経て拡大してきた。また、中国大陸の台湾人留学生は、新民会、台湾青年会、台湾文化協会等と連携し、「北京台湾人青年会」、「上海台湾人青年会」、「厦門台湾尚志社」「広東台湾革命青年団」などの、台湾の日本統治離脱を目指した団体を組織した。

張我軍の民族意識の覚醒及び日本の植民地統治に反抗する意識の形成は、上述の啓蒙運動と切り離せない関係にあったと言える。前述の、日本の植民地統治政策を批判する文章「南支那に於ける排日対策」の投稿先は、「新民会」の機関誌『台湾青年』の後継誌『台湾』であったことがその証であろう。また、このことはその後の張我軍の行動によっても裏付けられている。

1923年7月に台湾の商業界の不況により、新高銀行は他の銀行と合併し、厦門支店は解散となった。その後、張我軍は解散手当を持って上海に赴き、1924年1月に日本の植民地統治離脱を目指した団体「上海台湾青年会」⁵⁵で開催された「台湾人大会」に出席した。張我

⁵³ 台湾總督府警務局『台湾總督府警察沿革誌』第二編中巻、1939年、174頁。

⁵⁴ 蔡培火等著『台湾民族運動史』自立晚報社、1971年、76頁。蔡培火「灌園先生與我」『林獻堂先生記念集（年譜、遺著、追思録）』（近代中国史料叢刊統編第十輯、文海出版有限公司）、1974年、467-468頁。

⁵⁵ 1923年10月に蔡惠如、彭華英、許乃昌などが当時上海にいた十数人の台湾人留学生を集め、台湾を日本の植民統治から離脱させることを目標に創立した組織である。

軍は大会で演説を行い、台湾総督府が治安警察法違反で台湾議会設置請願運動に参加した多くの人々を検挙し逮捕したことに対し、台湾総督の暴政を厳しく批判した。また、この大会で張我軍とほかの3人が執行委員に選出され、「吾人は今般台湾当局の議会請願者六十名余りを拘留せるを不当と認む」という旨の決議文に趣意書を添付し、当時の日本の総理大臣である清浦奎吾などに送付した⁵⁶。

「台湾人大会」閉会后、張我軍は台湾に戻らず、民族意識が覚醒した台湾青年の多くと同じように、中国大陸の大学に留学することを決め、北京大学への進学を目的に北京に赴いた。しかし、当時、文学革命⁵⁷を経た中国大陸では、北京語を基礎とした中国語（白話文）が定着し、白話文の文学作品が主流となり、新聞や雑誌なども白話文を採用するようになった。日常生活で福建語を基礎とした台湾語を使用した張我軍にとって、北京語を基礎とした中国語は中国大陸で就学する際に最大の難関となった。そのため、張我軍は北京に到着してから、まず国立北京師範大学（以下、北師大）付属夜間部補習班に入り中国語を学習した。当時、張我軍と同じ補習班で中国語を学習した台湾人には、すでに北京の大学に入学した台湾出身の張鐘鈴と洪炎秋もいる⁵⁸。また、この補習班で張我軍はその後彼の妻となる羅文淑と出会っている。

1924年9月に、張我軍は北京大学の「普通聴講生」を受験した。筆記試験の科目は国文（中国語）、外国語、数学で、面接は志望した専門科目関係の内容である⁵⁹。しかし、不合格に終わり、同年10月にお金が底を突き台湾に戻った。今回の北京行きは進学の目的を達成させることができなかったが、その後の新文学創作、翻訳に必要な中国語学の基礎を築いたと言える。また、張我軍は北京で身をもって中国

⁵⁶ 台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌』第二編中巻、1939年、71頁。

⁵⁷ 中国大陸での文学革命は書き言葉を漢文から白話へ転換させる言文一致運動である。1917年1月に北京大学教授の胡適による「文学改良芻議」の発表が文学革命の発端となり、その後、全国を席卷した政治・文化・社会の革新運動「五四運動」（1919年5月4日に北京で勃発）の一環として推進された。

⁵⁸ 秦賢次「張我軍年表」『台湾文化菁英年表集』台北県政府文化局、2002年、161頁。

⁵⁹ 「註冊部布告（一）」『北京大学日刊』第1版、1924年9月19日。

大陸の文学革命の影響を感じ、北京滞在期間に自ら9首の白話文新詩を創作し発表した。さらに、中国大陸での文学革命を真似し、台湾新文学運動を推進させるために、「致台湾青年的一封信」⁶⁰（「台湾青年への手紙」）という評論文を発表し、台湾旧文壇への批判を開始した。

2.4 張我軍と台湾新文学運動

1924年末に、台湾に戻った張我軍は『台湾民報』の編集者に招聘された。『台湾民報』は1923年4月に前述の雑誌『台湾』の同人によって東京で創刊され、日本語と中国語を混用していた『台湾』と違い、当初全文中国語（白話文）により記述された⁶¹。1924年5月に、『台湾』の廃刊に伴い、『台湾民報』は台湾社会運動全般の推進機関となり、台湾人による唯一の言論機関と言われるようになった。張我軍は1924年末から『台湾民報』に一連の評論文章を発表して台湾新旧文学論争を巻き起こし、本格的な台湾新文学運動の幕が開いた。

台湾新文学運動の展開過程及び、台湾新文学運動における張我軍の位置づけについては、葉石濤（1987）、河原功（1997）、陳芳明（2011）、中島利郎・河原功・下村作次郎（2014）などの多くの台湾新文学史関係の著書に論及されているので、詳細はそれらに譲るが、台湾新文学運動における張我軍の主な活動と業績を概括すると、主に次の3点がある。一つ目は、漢詩漢文で創作した台湾旧文壇及び旧知識人を批判し、新文学の精神を伝えたことである。二つ目は、中国大陸の新文学理論及び新文学作品を台湾に将来し、台湾の新文学建設を指導したことである。三つ目は、自らも白話文の詩と小説を創作し、新文学作品を残したことである。以下ではこれらの活動の裏に如何なる張我軍の意図があるのかを中心に考察する。

まず、張我軍の批判対象となった漢詩漢文や旧知識人が如何なる存在であったかを見ておく。台湾が日本の支配下に置かれた後、台湾に

⁶⁰ 『台湾民報』（第2巻第7号、1924年）に掲載。

⁶¹ 1927年8月に『台湾民報』は日本語版発行という条件で台湾での発行が認められ、発行所を東京から台湾に移した。その後、1930年に『台湾新民報』に改称、1941年に『興南新聞』に改称し、1944年に停刊となった。

来た日本の官吏や幕僚には漢詩漢文を解するものが多かった。そこで、台湾人と日本人共通の文芸的基盤であった漢詩漢文の推奨は、日本側が旧士紳階級を懐柔する方法の一つとなった。当時、児玉源太郎、田健次郎、内田嘉吉、上山満之進などの台湾総督は、多くの台湾の詩人を集めて詩人大会を開催したことがある。このような懐柔政策の下、少数の詩人は民族意識を持ち柔軟な詩の精神を保っていたが、多くの旧士紳階級は日本統治から一定の利益を受けていたことから、彼らの作品の多くは日本の植民地統治と対立するものではなく、花鳥風月を咏む遊戯の作であった⁶²。張我軍はこうした台湾旧文壇の状況を見極め、旧文学に対し明確に宣戦する檄文「糟糕的台湾文学界」⁶³（「でたらめな台湾文学界」）において、数多くの旧詩人は真の文学精神を求めず、文学を遊びの道具として植民地統治者と唱和し媚を売っていることを指摘した。そのため、張我軍が台湾新旧文学論争を引き起こしたことは、新文学の障碍を一掃するためだけでなく、日本の植民地統治に甘んじている旧知識人たちの在り方を批判するためである。実際には、陳芳明（2015）が指摘したように、早期の台湾新文学運動は台湾新文化運動に内包され、政治運動に付随したものである⁶⁴。張我軍はその中で新文学運動の推進役だけでなく、台湾民衆の民族意識を覚醒させ、日本の植民地統治に対する反抗精神を広める啓蒙役も演じたと考えられる。この点については、同じ時期に張我軍が参加した他の活動によっても分かる。台湾新文学運動を推進する以外に、張我軍は「台北青年体育会」及び「台北青年読書会」の2団体の活動に積極的に参加した⁶⁵。この2団体はいずれも前述の台湾文化協会の連携の下に設立され、日本の植民地統治に反抗する啓蒙団体である。また、こ

⁶² 日本支配下の台湾の旧文壇の状況については、主に葉石濤著『台湾文学史』（2000年、研文出版）の第1章第3節を参照。

⁶³ 『台湾民報』（第2巻第24号、1924年11月21日）に掲載。

⁶⁴ 陳芳明著、下村作次郎等訳『台湾新文学史（上巻）』東方書店、2015年、10頁。

⁶⁵ 張我軍は「台北青年体育会」で開催された体育奨励大会での講演のために、「生命在、什麼事做不成？」という文章を作成し発表した。（『台湾民報』第3巻10号、1925年）また、1925年10月18日に「台北青年読書会」の活動に参加し、委員に選任された。（台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌』第二編中巻、1939年、883頁。）

の時期に張我軍は新文学運動関係の文章以外に、「駁稻江建醮與政府和三新聞的態度」⁶⁶（「稻江での建醮及び3つの新聞の態度に反駁」）、
「聘金廢止的根本解決法」⁶⁷（「結納金を廢止する根本的方法」）、
「至上最高道德一恋愛」⁶⁸（「最高の道德一恋愛」）などの文章を發表し、
台湾統治者と御用新聞が台湾人の迷信活動を煽り立てたことや、結納
金婚姻などの旧思想・旧文化を批判し、台湾統治者による愚民政策か
ら台湾人を守ろうとした。さらに、「田川先生與台湾議會」⁶⁹（「田川
先生と台湾議會」）、
「伊沢新總督的訓示」⁷⁰（「伊沢新總督の訓示」）、
「看了警察觀覽會之後」⁷¹（「警察觀覽會を見た後」）、
「危哉台湾的前途」⁷²（「台湾の前途が危険」）などの文章を發表し、同化政策をはじ
めとする日本の台湾統治政策を直接批判した。したがって、台湾新文
学運動の啓蒙家、旗手、先鋒などの従来 of 張我軍研究で出された呼称
よりも、新文学運動に関与した意図も反映できる「台湾民族運動家」
のほうが、この時期の張我軍の活動を総括することができる呼び方
であろう。

一方、台湾新文学建設においては、台湾語を基礎とした白話文にするか、
中国大陸と同じように北京語を基礎とした白話文にするかという
問題が存在している。これについては、張我軍は「台湾文学は中国
文学の一支流である。本流において何らかの影響、変遷が発生すれば、
支流もそれに伴い自然に影響、変遷することが必然の道理である」⁷³
と主張した。また、台湾語は方言で、文字で表せない下位の言語で、
文学的な価値はないと考え、「我々は中国の国語を利用して台湾の方

⁶⁶ 『台湾民報』（第2巻第25号、1924年12月1日）に掲載。

⁶⁷ 『台湾民報』（第3巻第4号、1925年2月1日）に掲載。

⁶⁸ 『台湾民報』（第75号、1925年10月18日）に掲載。

⁶⁹ 『台湾民報』（第3巻第3号、1925年1月21日）に掲載。

⁷⁰ 『台湾民報』（第3巻第5号、1925年2月11日）に掲載。

⁷¹ 『台湾民報』（第83号、1925年12月13日）に掲載。

⁷² 『台湾民報』（第86号、1926年1月1日）に掲載。

⁷³ 張我軍「請合力折下這座敗草叢中的破舊殿堂」『台湾民報』第3巻第1号、1925年1月1日。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「臺灣的文学乃中國文学的一支流。本流發生了什麼影響、變遷，則支流也自然而然的隨之而影響、變遷，這是必然的道理。」

言を改造する。つまり、我らは台湾人の言葉を中国語に統一する」⁷⁴と指摘した。こうした張我軍の主張は、陳芳明（2015）が指摘したように、発言権が日本人に完全に掌握された台湾では、無理があり適用することはできない可能性もあるが⁷⁵、民族意識が覚醒した多くの台湾青年が祖国である中国との連帯を求めるようになった当時の社会環境下で、自然に出てきたものだと言える。つまり、「台湾人の言葉を中国語に統一する」と張我軍が主張したのは、中国大陸との一体化を図り、日本の切り離し政策に抵抗しようとしたからである。

要するに張我軍は、青年時代に台湾青年会や台湾文化協会などによる啓蒙活動の影響を受け、民族意識が覚醒し日本の台湾での植民地統治に反抗する道を進んでいった。日本の植民地統治政策への批判、反植民地統治団体への参加、台湾新文学運動への関与などはいずれにせよ、日本の植民地統治に対する反抗の表出だと考えられる。

3. 戦前の北京定住時期（1926.6～1937.7）

3.1 中国大陸留学と「祖国派」としての反植民地統治活動

前述のように、辛亥革命後、台湾の日本植民地統治離脱の望みを祖国としての中国に託した「祖国派」が生まれた。その後、台湾青年会や台湾文化協会による啓蒙活動の影響下、多くの台湾青年は民族意識が覚醒し中国大陸に留学し、「祖国派」の隊列を拡大させた。張我軍もその中の1人として、北京大学の入学に挑戦したが、不合格に終わり台湾に戻った。しかし、張我軍は中国大陸に留学するのを諦めず、1926年6月に『台湾民報』の編集職を辞し北京に赴き、3回目⁷⁶の北京行きとなった。外務省外交史料館所蔵の当時の旅券資料⁷⁷には、張我軍

⁷⁴ 張我軍「新文学運動的意義」『台湾民報』第67号、1925年8月26日。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我們欲依傍中國的國語來改造臺灣的土語。換句話說，我們欲把臺灣人的話統一於中國語。」

⁷⁵ 陳芳明著・下村作次郎等訳『台湾新文学史（上巻）』東方書店、2015年、62-63頁。

⁷⁶ 1925年に張我軍は当時恋人だった北京在住の羅心郷を連れて台湾に出奔するために一度北京に戻ってきた。3回目の今回は妻となった羅心郷と一緒に北京に戻った。

⁷⁷ 外務省外交史料館所蔵資料「海外旅券下付（附与）返納表進達一件（附与明細表）」（3門8類5項）

の今回の北京行きの目的が「大学」と明記されている。張我軍は北京に到着してから、7月に『台湾民報』の駐北京通信員となり、同年9月に中国大学の国学学部に進学し、1年後転学して北師大の国文学部の3年次に編入した。

ここで注目に値するのは、張我軍の今回の中国大陸行きのタイミングである。当時、中国国民党と中国共産党との提携を基盤とした、反帝国主義・反軍閥の国民革命が高まっていた。1925年7月に国民政府と国民革命軍が広州で正式に成立し、北洋軍閥打倒と祖国統一を目指した北伐戦争が計画された。実際には、張我軍が北京に到着した翌月、すなわち1926年7月に北伐戦争が開始となった。こうした背景下、「祖国派」台湾青年は意識が昂揚し、台湾の実情を中国大陸の同胞にアピールし、ほぼ国民革命の勝利により中国の対日力関係が変化し、最終的に台湾の日本植民地統治離脱の可能性が増大するといった論理を持ち、中国大陸の国民革命に強い期待を寄せた⁷⁸。張我軍がこのタイミングで中国大陸に赴いたのは、他の「祖国派」台湾青年と同じく中国の国民革命に大きな期待を寄せていたからだと考えられる。このことは、中国大陸に到着した後の張我軍の主な活動によっても裏付けられる。

張我軍は北京に到着した直後の1926年8月に、魯迅を訪ねた⁷⁹。その際に、彼は自身の訳文「弱少民族的悲哀」（「弱小民族の悲哀」）が掲載された4期の『台湾民報』（第113～116号）を魯迅に贈った。「弱少民族的悲哀」の原文は、日本の社会主義者の山川均によって執筆され、1926年に雑誌『改造』に発表された文章である。この文章は詳細なデータを利用して、台湾に対する日本の経済的搾取や日台人間の進学や雇用の機会の不平等などの植民地統治下の台湾実情を暴露したものである。この文章の訳文を掲載した『台湾民報』を魯迅に贈った張我軍の意図については、次の魯迅の話によって分かるであろう。魯

⁷⁸ 若林正文『台湾抗日運動史研究（増補版）』研文出版、2010年、263頁。

⁷⁹ 魯迅の日記（1926年8月11日）には、張我軍が来訪し、台湾民報を贈ってくれたことを記述している。（『魯迅全集』第15巻、人民文学出版社、2005年、633頁。）

迅は1927年4月に、『国際労働問題』という本のために序文を書いた際に、張我軍との面会の様子を以下のように回想している。

去年の夏、北京にいた時に張我権君（ママ）と会ったことを覚えている。彼から「中国人は台湾のことを忘れたようで、誰一人として取り上げていない」という意味の話を聞いている。彼は台湾青年である。それを聞くと、私は当時傷ついたようで、苦しみを感したが、「いや、そこまでは至らない。ただ本国は非常にぼろぼろで、さまざまな内憂外患を抱えており、自分のことに対しても構う暇がないので、ひとまずこれらの台湾のことを放置するしかない。……」と告げた。しかし、困苦にあえぐ台湾の青年は中国のことをいっときも放置することはない。彼らはまだ学生であるが、常に中国革命の成功を期待し、中国の改革を援助し、中国の現在と将来に役立てるために自分の力を尽くそうとする。⁸⁰

つまり、張我軍は中国大陸の人が台湾に対する関心が薄いことを魯迅に訴えた。これは日本植民地統治下の台湾への魯迅の関心を喚起するというより、むしろ、中国大陸で影響力を持った魯迅を通して、多くの中国民衆の台湾への関心を喚起しようとした。このように影響力を持つ中国大陸の人士と連絡し、台湾の実情を伝え、彼らに台湾のことを認識させるのは、当時の「祖国派」台湾人留学生団体による抗日の主な手段の一つだと考えられる⁸¹。また、「まだ学生であるが、常に中国革命の成功を期待し、中国の改革を援助し、中国の現在と将来に役立てるために自分の力を尽くそうとする」との魯迅の話からも、張我軍を含めた当時の多くの「祖国派」台湾人留学生は、国民革命の勝

⁸⁰ 魯迅「写在『労働問題』之前」『魯迅全集』第3巻、人民文学出版社、2005年、444頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「还记得去年夏天住在北京的时候，遇见张我权君，听到他说过这样意思的话：“中国人似乎都忘记了台湾了，谁也不大提起。”他是一个台湾青年。我当时就像受了创痛似的，有点苦楚；但口上却道：“不。那倒不至于的。只因为本国太破烂，内忧外患，非常之多，自顾不暇了，所以只能将台湾这些事情暂且放下。……”但正在困苦中的台湾的青年，却并不将中国的事情暂且放下。他们常希望中国革命的成功，赞助中国的改革，总想尽些力，于中国的现在和将来有所裨益，即使是自己还在做学生。」

⁸¹ 蔡培火等著『台湾民族運動史』自立晚報社、1971年、101頁。

利に強い期待を寄せ、中国の建設に取り組んでいたことが分かる。

実際には、張我軍は中国大陸に到着してから、中国の国民革命の進捗状況に注目していた。国民革命軍が段階的な勝利を収めた後、張我軍は、魯迅を訪ねた後の1926年12月に、すぐ「中原的戦局」⁸²（「中原の戦局」）と題とした文章を3回に分け『台湾民報』に投稿し、国民革命軍の勝利を台湾島内に伝えた。また、その中において、張我軍は、国民革命軍の勝利の原因を「兵士は死を恐れず、規律が厳正である」、「将軍は策がある」、「軍事装備は優れ、足りている」、「国民の支持を得ている」の4つにまとめ、国民革命の勝利に強い期待を示した。

その後、1927年1月に張我軍は北京にいる他の台湾留学生と一緒に新たな「北京台湾青年会」を成立させ、成立大会の主席を担当した。また、同年3月に編集長として雑誌『少年台湾』を創刊した。張我軍は『少年台湾』の創刊号において以下のように発刊趣旨を述べた。

おおざっぱに言うと、本誌の目的は我々台湾人のために思想と知識の交流機関を作ることである。（中略）また本誌は北京で発行するため、島内の刊行物がやっている仕事以外に、もう一つのことをやらなければならない。それは紹介である。本誌は祖国で毎日発生していることを島内の同胞に紹介して、みなの見識を広くし、祖国との間に隔たりが起こらないようにする。また、台湾で毎日発生したことを祖国の人に紹介して、彼らに台湾のことを知らせており、台湾に対する誤解が生じないようにする。（中略）とにかく、本誌には二つの目的がある。一つ目は台湾人のために思想と知識の交流機関を作ることである。二つ目は台湾と祖国の間に交流の架け橋となることである。⁸³

⁸² 『台湾民報』（第134、135、137号、1926年）に掲載。

⁸³ 「発刊詞」『少年台湾』少年台湾社、1927年、1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「攏統說來，本誌的目的，就是要為我們臺灣人添一個思想知識的交換機關。（中略）又本誌是在北京發行的，所以牠在於要做島內的刊物所做的工作以外，還有一件事要做：這件事就是介紹。牠要把祖國時時所發生的情狀，介紹給島內的同胞，使大家得點眼光，不致與祖國起隔膜；牠又要把島內時時所發生的事變，介紹給祖國的人士，使他們得些了解，不致對臺灣生誤會。（中略）總而言之，本誌有兩個目的：第一是要為臺灣人添一個思想知識的交換機關；第二是要為臺灣與祖國間添一個交涉的橋梁。」

上記のことから、張我軍が『少年台湾』を創刊したのは、台湾人に新思想や新知識を伝える一方、魯迅を訪ねた目的と同じように、中国大陸の人々の台湾への関心を喚起するためだと言える。さらに、「祖国との間に隔たりが起こらないようにする」及び、「台湾に対する誤解が生じないようにする」などの話は、「我らは台湾人の言葉を中国語に統一しようとする」などの台湾新文学建設に関する張我軍の主張と同じようで、中国大陸との一体化を図り、日本の切り離し政策に抵抗しようとした張我軍の感情の表出だと言える。

要するに、魯迅訪問や『少年台湾』創刊などの北京に到着した後の活動は、これまでの反植民地統治活動に続いたものである。また、これらの活動により、「祖国派」としての張我軍が台湾の日本統治離脱を中国大陸に託し、中国の国民革命に多大な期待を寄せていたことが見られる。

3.2 雑誌『新野』創刊とプロレタリア文学への関心

前述のように、台湾の日本統治離脱を目指す張我軍は、反帝国主義・反軍閥の国民革命に多大な期待を寄せていた。しかし、その先に待っていたのは、国民革命の頓挫である。1927年4月に、蔣介石は上海でクーデターを起こし、多くの国民党左派や共産党人士を逮捕し殺害し、労働運動や学生運動に対する弾圧を行なった。こうして、国民党と共産党との提携という国民革命の基礎が破壊され、国民革命も一時停滞していた。さらに、左派の色彩が濃厚の多くの「祖国派」台湾留学生も追放されるようになった。例えば、国民党の庇護下で設立された「広東台湾革命青年団」も、1927年6月に左傾団体と見なされ、リーダーが検挙され、団体解散の命令を受けたため、会員が四散した⁸⁴。このことは国民党と国民革命に強い期待を寄せた張我軍を失望させた。張我軍の息子の張光正によれば、張我軍は国民革命時期に、孫文が創立した国民党に入党したが、その後、この党に失望を感じたため、

⁸⁴ 台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌』第二編中巻、1939年、122-123頁。

脱党した⁸⁵という。また、蔣介石によるクーデターとほぼ同じ時期に、張我軍が創刊に携わった雑誌の発行も妨害された。『少年台湾』は第2期（1927年4月15日出版）の491冊が軍閥政府統治下の警察庁にすべて没収されたため、停刊となった。雑誌の発行を警察庁に報告して記録にとどめていないという理由であったが⁸⁶、その裏に軍閥政府と結託した日本官憲の企みもあった可能性は否定できない。この時期の張我軍の活動は、軍閥政府と国民党政府の両方から挟み打ちの状態に置かれていたと言える。

こうした状況の中で、張我軍はその後、プロレタリア文学に視線を向けた。1927年10月、張我軍は北師大の国文学部の3年次に編入した。彼は北師大に入ってから、12人の同窓と一緒に「星星社」という文学団体を創立し、1929年に「新野社」と改名した。「新野社」は左派の色彩を帯びた団体で、当時「新野社」に参加した葉蒼苓によれば、会員らは常に国民党の対日政策を批判したが、会員の中には2人の中国共産党員がいたという⁸⁷。また、1930年9月に、張我軍は編集長として「新野社」の機関誌『新野』を創刊した。彼は創刊号において「从革命文学論到無産階級文学」（「革命文学論からプロレタリア文学へ」）を發表し、「現在、プロレタリア文学がふさわしい時期に出現した。これは進歩的なことであると考える」⁸⁸と述べ、プロレタリア文学を推奨した。さらに、日本のプロレタリア作家の葉山嘉樹の作品を翻訳し始め、葉山嘉樹に対し「正直言って、従来 of 文学作品の中で、葉山氏の作品のように鑑賞の快意を感じさせてくれるものはなかった」のように高い評価を与えた⁸⁹。

国民革命が頓挫した後、張我軍がこのようにプロレタリア文学に関心

⁸⁵ 張光正「悲、歎、離、聚話我家——一個台湾人家庭的故事」張光正編『近觀張我軍』、2002年、72頁。

⁸⁶ 北京市档案馆「京師警察庁中一区分区表送宋飛沫持有少年台湾印刷物未經呈報擅自發一案卷」档案号:J181-019-56677

⁸⁷ 葉蒼苓「悼摯友張我軍」張光正編『近觀張我軍』、2002年、35頁。

⁸⁸ 張我軍「从革命文学論到無産階級文学」『新野』新野社、1930年、13頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「現在、無産階級文學又應時出現了，而且我認為這是一種進歩。」

⁸⁹ 「葉山嘉樹小傳」張我軍訳『淫売婦』北新書局、1930年、1頁。

を寄せた理由については、雑誌『新野』に掲載した張我軍の文章によって窺える。張我軍は雑誌『新野』の巻頭言において、以下のように創刊の背景を述べている。

全国の版図は大半が戦争地域にされ、その一方で、土匪、誘拐犯、帝国主義匪賊が横行している。我々の生命は保障されているのか。『革命』は軍閥、土匪、反動分子、虚業家に独占され、虚偽が社会で蔓延している。我々はどこに向かったら、真の革命と信義を探せるのか。⁹⁰（下線は筆者）

つまり、中国の国民革命が頓挫した後、張我軍は中国革命の現状に対し失望を感じ、自ら「真の革命と信義」を探そうとした。雑誌『新野』で推奨されたプロレタリア文学は、張我軍にとって「真の革命と信義」を探せる場所だと考えられた。また、張我軍は『新野』の「編集後記」において、「現代の中国文学作品で、最も人気があるのが弱小民族の悲哀、民衆の苦痛、帝国主義や軍閥及び官僚の打倒を表現したものだと考える」⁹¹と主張している。つまり、張我軍にとって、プロレタリア文学とそこに内包された社会主義思想の宣伝は、中国の社会改造、帝国主義や軍閥打倒を実現するのに最もふさわしい方法であった。

しかし、こうした考え方はスムーズに実行されるに至らなかった。張我軍が創刊した雑誌『新野』は1期だけの発行で終わった。その理由については、「1930年の中国人は思想の自由や行動の自由が完全に奪われている。言論の自由や信仰の自由が完全に奪われている」⁹²と雑誌『新野』の巻頭言にあるように、国民党の言論統制下ではプロレタリア文学とそこに内包された社会主義思想などを伝える刊行物が認

⁹⁰ 張我軍「巻頭語」『新野』新野社、1930年、1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「全國的版圖，大半劃入戰區，一方面，土匪，票匪，帝國主義匪在橫行。我們的生命，還有保障沒有？『革命』，被軍閥，土匪，反動分子，投機家獨佔了虛偽橫行天下：我們到哪裡去找真正的革命和信義？」

⁹¹ 張我軍「編後」『新野』新野社、1930年、66頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我們以為現代中國文學最好的主顧，就是表現弱小民族的悲哀、民衆的痛苦和所謂打到帝國主義、軍閥、官僚。」

⁹² 張我軍「巻頭語」『新野』新野社、1930年、1頁。原文は中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「1930年的中國人乎！！思想的自由，行動的自由，完全被剝奪了；言論的自由，信仰的自由，完全被剝奪了；」

められなかったからだと考えられる。その後、張我軍が『少年台湾』や『新野』などのような文学雑誌などを刊行せず、全力を注ぎ日本語教育及び日本語翻訳に身を投じたこともその証であろう。

3.3 日本語教育実践及び日本語翻訳活動

1929年6月に張我軍は北師大卒業後、日本語に精通していることが認められたことから、同年9月に北師大の外国文学系講師として招聘され、初めて日本語教育の舞台に登場した。北師大の日本語科目は第2外国語で、2学年以降に開設された「自由選択科目」である⁹³。外務省情報部の調査によれば、張我軍は北師大の唯一の日本語教師として、2つのクラスに分けられた130人ぐらいの学習者を対象に、日本語を週に3時間乃至6時間教授した⁹⁴。その後、1932年9月から北平大学法学院の日本語教師⁹⁵を担当し、第2外国語としての日本語を教授し、さらに、中国大学と華北学院の日本語教師も担当した。これらの大学で教職に就く以外にも、張我軍は自宅に日本語学習塾⁹⁶を開設した。当時、張我軍の日本語学習塾で勉強した人には、学生だけでなく、成舎我⁹⁷、雷嗣尚⁹⁸などのような、当時の名士として知られている者もいた。また、外務省文化事業部の調査によれば、毎年6月24日から9月7日まで学校の夏休みの期間に、張我軍は「暑期日文速修講会」という短期日本語学習機関を開設したことがある。「暑期日文速修講会」は「基礎班」（学費10元、教材不支給）、「高級班A」（学費8元、教材支給）、「高級班B」（学費8元、教材支給）「高級班A、B合

⁹³ 『国立北平師範大学一覽』1934年、130頁。

⁹⁴ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02130928600、第4画像目、（薄冊）支那人ノ日本語及日本事情研究狀況（情_87）（外務省外交史料館）

⁹⁵ 1934年7月に北平大学法学院は商学院と合併し、北平大学法商学院に改組されたが、張我軍は北平大学法商学院の講師として引き続き日本語を教授した。

⁹⁶ 張我軍の日本語学習塾で勉強した甄華は、1931年前後この塾で勉強していたと回想していることから、日本語学習塾の開設時間は遅くとも1931年だと考えられる。（甄華「甄華復何標函」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、42頁を参照）

⁹⁷ 成舎我（1898～1991）は原名が成勛、当時ジャーナリストで、1933年に「北京新聞専科学校」を創設した。

⁹⁸ 雷嗣尚（1906～1946）は1935年11月から1937年7月まで北平市社会局の局長を担当した。

班」(学費 11 元、教材支給)などの 4 つのクラスから構成されている⁹⁹。

そのほか、張我軍は 1931 年から日本語教材を編集し始め、盧溝橋事件までの 6 年間に 8 種類 16 冊の日本語教材を作成した。さらに、1934 年から編集長として日本語学習雑誌『日文與日語』(月刊誌)を全 24 号編集した。張我軍はほぼ 1 人でこの雑誌を支え、多大な心血を注いだと考えられる。張我軍の息子の張光正によれば、1934 年から 1935 年までの 2 年間、張我軍はこれまで経営していた日本語学習塾を閉鎖し、『日文與日語』の編集に専念したという¹⁰⁰。この雑誌はこれまでの張我軍の日本語教育経験の集大成と言え、発刊後、每期 3000 冊ほど販売され¹⁰¹、読者は中国各省だけでなく、日本やタイなどの海外にもいた¹⁰²。当時の日本語教育に大きな影響を与えたと考えられる。

これらの業績により、張我軍は当時の日本語教育界では、名もなき一兵卒から一躍「著名人士」となった。当時の中国大陸の日本語教育に関する外務省文化事業部の調査報告書の中には、「暑期日文速修講会」及び経営者としての張我軍について、以下のように評価している。

本講会ハ毎年夏季六月二十四日開講、九月七日終了ス。中国人経営ノ日本語学習機関中最モ中国学生ノ信賴ヲ博シ繁盛ヲ来シツツアルモノ。経営者張我軍(台北師範出身¹⁰³)ハ各大学ニ日語教師ヲ兼ネ、尚嘗テ日語雑誌ノ経営ニ当リ又現ニ日語書店経営者ノ一人トシテ積極的活躍ヲ行ヒツツアル日語界ノ著名人士ナリ。¹⁰⁴

⁹⁹ JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B10070618200、第 11 画像目、三増英夫調 中華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況 (附. 日本近代科学図書館論/1937 年) (文化 _37) (外務省外交史料館)

¹⁰⁰ 2018 年 6 月 26 日に筆者が張光正にインタビューした際、張光正が自ら語ったことである。

¹⁰¹ 張我軍「別矣読者」『日文與日語』(第 3 巻第 6 号)、人人書店、1935 年、2 頁。

¹⁰² 「人人書店緊要啓示」『日文與日語』(第 3 巻第 6 号)、人人書店、1935 年、4 頁。

¹⁰³ 「台北師範出身」は間違いであるが、原文のまま示してある。

¹⁰⁴ JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B10070618200、第 11 画像目、三増英夫調 中華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況 (附. 日本近代科学図書館論/1937 年) (文化 _37) (外務省外交史料館)。張我軍の出身についての記述は間違っている。

また、中国の著名な民族学者である黄現璠¹⁰⁵は北師大で張我軍について日本語を勉強した。黄現璠の学生である陳吉生によれば、黄は自分の学生に対し、「私が日本に留学したあと、和田清と加藤繁という2人の指導教官は、私が陳援庵の学生で、また日本語専門家の張我軍の学生でもあり、さらに5冊の史学関係の著書を出版したことを知ってから、刮目して見るようになった」と述べた¹⁰⁶。つまり、張我軍は当時日本語教育家としてかなり名が通っていた。当時の日本語教育界で、張我軍がこれほど学習者に人気を博したのは、彼の日本語教材や教授観などと切り離せない関係にあったと考えられる。それについては、第2章、第3章で詳細に考察する。上記のように日本語教育を専業とした以外に、張我軍は1929年から日本語の翻訳活動も再開し、1937の盧溝橋事件まで訳文15篇及び訳書14冊を残した。

雑誌『新野』が停刊された後、張我軍が全力で日本語教育及び日本語翻訳に身を投じた理由は何か、このことはそれ以前の活動と如何なる関連があるのか。この問題を解明するには、まず当時の中国大陸での日本語学習の背景を見ておく必要がある。

張我軍が日本語教育に携わり始めた頃は、折しも中国大陸の「日本語ブーム」が勃興した時期であった。当時、九・一八事変（1931年）や一・二八事変（1932年）など日本の対華侵略事件の発生に伴い、激しい排日運動が起こり、日本人経営の学校では多くの学生が退学し、留日学生の引き上げなども行われた。しかし、これを機に中国側による自主的な日本研究が一層促進され、中国人による日本語教育関係の著述が数多く発行され、「日本語ブーム」となった¹⁰⁷。当時、このブームを利用して左翼思想を伝えることがあった。北京档案館に所蔵さ

¹⁰⁵ 黄現璠（1899～1982）は1926年から1935年まで北京師範大学に在籍し、1935年に日本に渡り東京大学の東洋史学研究所に留学した。

¹⁰⁶ 陳吉生「為学貴自辟一憶桂海学术泰斗黄現璠」『桂林文史資料第五十二輯：肝胆相照』2007年、236頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「留学日本后、和田清、加藤繁两位导师得知我是陈援庵的弟子，又是日语专家张我军教授的門生，还已有五本史学专著出版，甚为刮目相看。」

¹⁰⁷ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B10070618200（第3画像目から第4画像目まで）、三増英夫調中華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況（附．日本近代科学図書館論/1937年）（文化_37）（外務省外交史料館）

れた資料によれば、当時、国民党当局に販売が禁止された『少共国際綱領』や『中国大革命史』などの共産党の刊行物は、表紙を張我軍が編集した『日文與日語』のデザインに装って販売されたことがある¹⁰⁸。つまり、言論統制が厳しかった当時では、自分の思想や理念を伝える際に、直接文章を発表するより、日本語教育や日本語翻訳を通じた方がより容易に実現できると考えたのではないだろうか。この点について、張我軍自身も日本語教科書に「社會主義の學説を教へることを得る。然し實行するを得ない。宣傳もすることをえませんさうだ」¹⁰⁹という一文を残している。つまり、雑誌『新野』の発行が頓挫した後、張我軍は当時の「日本語ブーム」の機に乗じ、直接文章で伝える代わりに日本語教育や日本語翻訳により社会主義思想などを伝える手段にしたと考えられる。また、張我軍の学生であった甄華は「彼（筆者：張我軍）の授業の内容の一部がマルクス・レーニン主義哲学なので、マルクス・レーニン主義哲学を学ぶ積極性を高めた」¹¹⁰と回想しており、この点を裏付けている。

要するに、張我軍の日本語教育実践は、それまでの雑誌創刊などの文学活動と分離したものではなく、台湾の日本統治離脱という最終目標を実現するための新たな手段である。これは言論統制や「日本語ブーム」などの外的要因による結果であるが、張我軍の日本語・日本語教育観などの内的要因とも関連している。そのことは、第4章で詳述する。

3.4 北京市社会局秘書就任と対日交渉

前述のように、張我軍は国民革命や雑誌創刊などの頓挫に遭ったが、北師大卒業後台湾に戻らず、北京に残ると決めた。これは、彼の持つ祖国への期待が後退せず、引き続き祖国の建設に参加しようとした意

¹⁰⁸ 北京市档案馆「北平市警察局查禁『少共産国際綱領』『中国大革命史』等刊行物的密令」档案号：J181-017-01176

¹⁰⁹ 張我軍編著『日語基礎讀本』（4版）、人人書店、1936年、55頁。

¹¹⁰ 張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、40頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「他的教課内容，有一部分是讲马列主义哲学，他促进了我学习马列主义哲学的积极性。」

識の表れだと言える。また、日本の植民地統治の反抗者としての張我軍は、日本支配下の台湾で生活したくなかったからだと考えられる。張は、1回目の大陸行きの後、「海の感化と暗示を得た後、もう瓢箪の底にあるような故郷に戻りたくない」¹¹¹のように、台湾に戻ろうとしない意思を表したことがある。しかし、九・一八事変が勃発した後、東北地方を占拠した日本軍は華北地方に侵攻し、張我軍がいた北京も台湾と同じように日本の支配下に置かれる恐れがあった。日本の植民地統治から脱却した張我軍は、再び日本の統治下で生活するのをどうしても避けたいという意識は想像に難くない。張光正によれば、九・一八事変後、張我軍は一家を連れて上海と杭州あたりに一時避難したとある¹¹²。

その後、日本軍による侵攻が一時収まり、張我軍は北京に戻ったが、日本側は華北地方を国民政府の管轄から分離させ、支配下に置くために侵攻を続けていた。1935年6月に日本軍は、河北省から国民党の勢力を駆逐するために、「何梅協定」¹¹³や「秦土協定」¹¹⁴などを国民政府に強要した。同年11月に、日本軍を後ろ盾として傀儡政権の「冀東防共自治委員会」を設立させ、中国北部の20余りの県を国民政府から分離させた。日本軍によるこれらの華北分離活動に対し、国民政府は1935年12月に妥協案を出し、華北にあった中日間の緩衝政権としての「冀察政務委員会」を設置し、北京、天津、河北省、察哈爾省を統治させた。また、宋哲元を「冀察政務委員会」の委員長に任命し、日本側との交渉を担当させた。

¹¹¹ 張我軍「南游印象記」(二)『台湾民報』第92号、1926年2月14日。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「自從領略了海的感化和暗示之後，我就不想回到如在葫蘆底的故鄉了。」

¹¹² 張光正「略論父親的郷土性格和開放性格」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、218頁。

¹¹³ 日本では「梅津・何応欽協定」と言う。当時の中国国民政府軍事委員会北平分会代理委員長の何応欽と日本華北駐屯軍司令官の梅津美治郎の間の協定である。河北省内の中国軍の撤退、国民党機関の閉鎖、排日活動の禁止などが押しつけられた。

¹¹⁴ 日本では「土肥原・秦徳純協定」と言う。当時の察哈爾省主席代理の秦徳純と奉天特務機関長の土肥原賢二の間の協定である。国民党諸機関の察哈爾省からの撤退、長城付近からの宋哲元軍の撤退、日本人顧問の招聘などを押しつけられた。

こうした状況の中で、張我軍は 1935 年 12 月に、前述の自分の学生であった北京市社会局局长雷嗣尚の要請に応じ、北京市社会局秘書及び冀察政務委員会秘書に就任し、日本側との交渉を担当した。北京市档案馆に所蔵された「冀察政務委員会各機関人事調査表」によれば、当時の北京市社会局には 3 人の秘書がいたが、張我軍の「職務」欄に「專管外交事務」（外交事務の専門担当者）と書いてあり、「月薪」欄に「不支」と記述されている¹¹⁵。つまり、張我軍は無報酬で日本側との交渉を担当したのである。また、北京市社会局秘書及び冀察政務委員会秘書に就任すると同時に、張我軍は『日文與日語』を停刊させ、最終号に読者に対し「教育文化事業に従事する者の立場から言うと、なんとしても両国の戦争をなくさなければならない」¹¹⁶と述べている。当時、二度と日本の支配下で生活したくなかった張我軍にとって、日本の華北侵攻を止めるのは、一刻の猶予も許されないことであろう。

現時点で手に入った資料の限りでは、張我軍が北京市社会局の秘書として行なった活動は以下である。1936 年 12 月 5 日に、張我軍は北京市長秦徳純と北京市社会局局长雷嗣尚を代表して北京近代科学図書館¹¹⁷の開館式典に参加した。その祝辞として「このような文化交流の開拓は永久的であり、将来これが融けあい合流していけば、自然に親善になっていく。これは戦争よりさらに偉大な効果を収めることができる」¹¹⁸と述べた。そして、1937 年 4 月に日本側は「冀察側中堅幹部ヲシテ帝国の実情を視察セシメ以テ対日認識ノ正当ナル把握ト日支提携促進ノ一助タラシメントス」を目的として、冀察政務委員会の幹部たちを日本に招待し、1 カ月視察させた¹¹⁹。張我軍はこの視察に

¹¹⁵ 北京市档案馆「冀察政務委員会各機関人事調査表及北平市政府各機関人事登記表」档案号:J002-001-00179

¹¹⁶ 張我軍「別矣読者」『日文與日語』第 3 卷第 6 号、人人書店、1935 年、3 頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「在從事于教育文化事業的人的立場上說，無論如何非設法消除兩國的兵禍不可」

¹¹⁷ 北京近代科学図書館は日本による東方文化事業の一環として設置された。

¹¹⁸ 『北京近代科学図書館一週年報告』1937 年、12 頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「並且這種文化上的開拓是永久的，將來融會貫通，不期然而然的就日益親善了，比戰爭的收效更形偉大可以斷言」

¹¹⁹ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015792200（第 14 画像目）、満支人本邦視察旅行関係雑件/便宜供与関係第九卷（外務省外交史料館）

参加したが、同年4月30日の視察終了後、下関で一行と分れ、言語と文字教育などの調査を理由に、3週間にわたり東京と京都に滞在した¹²⁰。

その後、中日間の全面戦争が一触即発の情勢となった。1937年6月29日に日本軍の盧溝橋実弾射撃事件が発生したため、当時の河北省主席の馮治安は7月3日から7月4日まで、保定で当時の駐華武官の今井武夫を招待し、事件について話し合った。張我軍はその時の通訳を担当した¹²¹。そして、1937年7月7日に盧溝橋事件が勃発し、同7月28日の夜中国軍の主力第二十九軍が北京から撤退し、北京が淪陥した。淪陥直前の7月26日に、中国軍が北京の広安門に入ろうとした日本軍と衝突した「広安門事件」が起こり、その直前に日本軍は、北京市市長秦徳純の秘書も担当していた張我軍と連絡を取り合った¹²²。

最終的に日本の華北侵攻と北京淪陥を阻止できなかったが、張我軍は北京淪陥直前まで日本側との交渉に取り組んでいたことが分かる。張の親友である洪炎秋は「当時、日本軍人は気炎当たるべからず、全く理不尽で手に負えないが、我軍兄はこのような苦境の中で命令を受け、常に頭脳明晰で流暢な日本語によって、困難を解決し、任務を達成させた」¹²³と回想している。

4. 戦時中の北京定住時期（1937.7～1945.8）

4.1 映画『東洋平和の道』への関与

前述のように北京淪陥直前まで、張我軍は北京社会局の秘書として日本側と交渉を続けていたが、中国軍及び北京市政府の職員と共に撤

¹²⁰ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015792200（第29画像目）、満支人本邦視察旅行関係雑件/便宜供与関係第九卷（外務省外交史料館）

¹²¹ 今井武夫『日中平和工作:回想と証言 1937-1947』2009年、みすず書房、7頁。

¹²² JACAR（アジア歴史資料センターRef. C11111700400）、雑綴昭和20年12月（防衛省防衛研究所）

¹²³ 洪炎秋「懷才不遇的張我軍兄」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、21頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「当时日本军人气焰嚣张，蛮不讲理，十分难缠，我军兄受命于艰危之际，每能运用他明晰的理智和流畅的日语，解决困难，达成任务」

退せず、そのまま日本占領下の北京に残った。その理由について、洪炎秋は当時台湾人が信用されていないため、張我軍は撤退の通知を受け取れなかったと述べているが¹²⁴、当時張我軍の妻が妊娠して臨月に近づいており、撤退の通知を受け取っても移動することが困難であったと考えられる。再び日本の支配下に身を置いた張我軍は、最初は華北大学の教授として引き続き日本語教育に携わっていたが、北京淪陥後まもなくして、日本側に協力したと見なされる活動に関与しはじめた。最初に関与したのは、日本の国策映画『東洋平和の道』の製作である。

『東洋平和の道』は1937年9月から「東和商事」によって製作され、1938年3月に公開された日本語字幕付きの中国語映画である。この映画は中国やほかの国の人に対して盧溝橋事件及び華北への日本軍の占領を正当化させる一方、日本人に中国の自然、人情、風俗を理解させるという意図で作られたものである¹²⁵。映画のあらすじは2人の中国人夫婦が山西省から戦火を逃れるために、北京を目指して移動し、途中で中国敗残兵などに襲われ、日本軍に助けられたという日本側の都合の良い話になっている。

1937年10月に、鈴木重吉¹²⁶は東和商事から『東洋平和の道』の監督を依頼され、同年11月に北京に着いた。映画は主役やキャストが中国人であるという方針を採用したため、中国人協力者が必要となった。鈴木重吉は、北京に到着してからすぐに、村上知行¹²⁷を通じて張我軍を見つけた。鈴木重吉は協力者である張我軍のことが非常に気に入り、「私は『東洋平和の道』映画の計画を語り、同君と腹藏ない意見を交換した。翌日私と張君は旧知の友の様になれた。私は完全に北

¹²⁴ 洪炎秋「懷才不遇的張我軍兄」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、21頁。

¹²⁵ 「東洋平和の道のメモ」『国際映画新聞』第218号。

¹²⁶ 鈴木重吉（1900～1976）は日本の映画監督・脚本家であり、戦前に『土に輝く』や『何が彼女をさうさせたか』などの映画作品の監督を務めた。

¹²⁷ 村上知行（1899～1976）は日本の中国研究者であり、1930年から北京に在住し、『読売新聞』の特派員を務めたが、盧溝橋事件後に辞職した。1946年に日本に帰国した。

京で協力者を得ることが出来た」¹²⁸と述べた。

当時、反植民地統治の立場に立った張我軍は、どのような経緯で日本の国策映画への協力を受け入れたのかを示す資料が現時点で見つからないが、張はこの映画の製作に深く関与したと考えられる。当時の雑誌に出された映画製作のスタッフリストによれば、張我軍は監督の鈴木重吉の次に並んでおり、「補導」「構成・脚色」の役とされている¹²⁹。また、鈴木重吉は「張氏は傍らにあつてその構成を中国的なエキゾチズムに改めてくれたのである」¹³⁰と回想している。ほかに、俳優選考の際には、張我軍は発音や日常会話への考査役も担当した。つまり、脚本の作成、俳優の選択などの実務面においても、張我軍の意見が参考にされた。

中国大陸で予定された撮影が完了した後、1938年2月に張我軍は俳優たちと一緒に東京に赴き、最終段階のセット撮影及び録音を行なってから、その年の3月末に中国に戻った。この1カ月半の東京滞在期間に、一つの特筆すべきことがあった。それは東京に住んでいた林献堂¹³¹を訪ねたことである。林献堂は前述の新民会の会長、台湾文化協会の創始者の一人で、台湾議会設置請願運動の指導者であり、台湾民族運動史における重要な人物であった。張我軍は『台湾民報』の編集者を担当した際に林献堂と知り合い、北京に定住してからは1度も会っていない。林献堂の日記によると、今回の東京滞在期間に、張我軍は3回林献堂宅を訪ねた。その面会時の様子が以下のように記録されている。

十時頃、張我軍と徐牧生が来訪した。(中略) 快く会談して十五分もたたないうちに、伊藤竹次郎が来たため、彼ら二人は別室に

¹²⁸ 鈴木重吉「『東洋平和の道』の手帖より」『映画と技術』1938年3月号、日本映画技術協会、161頁。

¹²⁹ 鈴木重吉「『東洋平和の道』の手帖より」『映画と技術』1938年3月号、日本映画技術協会、164頁。

¹³⁰ 鈴木重吉「『東洋平和の道』の手帖より」『映画と技術』1938年3月号、日本映画技術協会、161頁。

¹³¹ 林献堂(1881～1956)は台湾の民族運動家であり、台湾議会設置請願運動や台湾文化協会などの台湾民族運動の指導者であった。また、1923年に『台湾民報』の社長を担当した。

入った。(中略)(筆者:伊藤竹次郎は)約 30 分ほど話して帰った。張、徐はまた部屋に戻って、昼食の後午後 1 時まで話して帰った。¹³²

この日記の内容だけでは、張我軍と林獻堂が如何なる話をしたかはわからないが、この面会は他人に知られないように、慎重に行われた様子が窺える。また、この日記の内容にある徐牧生は、張我軍と同じく台湾人で、1936 年に早稲田大学を卒業した後、北京に来て張我軍の家に一時身を寄せたことがある。張光正によれば、徐牧生は自分の家に身を寄せた時、常にソビエト連邦の社会主義について話したという。また、淪陷区の大学で教えた際に、公に講義の中でマルクスとエンゲルスの論述を多く引用した¹³³。これらの台湾民族運動家や左派台湾青年との接触を続けていたことから、戦時中の張我軍は日本の文化侵略に協力したのか疑問を抱かせる節もある。

また、張我軍は『東洋平和の道』の製作に参加した際に、「我軍」という本名を使用せず「迷生」というペンネームを使っていた。それが原因であろうか、「日支親善の映画として多大な好評を博した『東洋平和の道』の舞台監督の一人として、隠れたる力を添えた事はあまり知られていない」¹³⁴と張我軍の友人の陳逢源が回想しているように、当時でも張我軍がこの映画に関与したことはあまり知られていなかったと考えられる。張我軍が本名を使わなかった意図はわからないが、張我軍の慎重さが窺える。

このほかに、映画『東洋平和の道』の製作で、張我軍と接触したことがある日本人作家の丹羽文雄と飯島正は、張我軍について以下のよう述べている。

¹³² 林獻堂『灌園先生日記』台湾日記知識庫<<http://taco.ith.sinica.edu.tw/tdk>> 1938 年 2 月 15 日 (最終閲覧日:2019 年 5 月 20 日)。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「十時餘張我軍、徐牧生來訪。(中略)暢談未及十五分間而伊藤竹次郎來、他兩人遂過別室。(中略)約談三十分間乃去。張、徐再來、談至午餐後一時餘方去。」

¹³³ 張光正「悲、歎、離、聚話我家——一個台湾人家庭的故事」張光正編『近觀張我軍』、2002 年、69 頁。

¹³⁴ 陳逢源『新支那素描』台湾新民報社、1939 年、100 頁。

それに主演が正真正銘の支那人（この名称に構成脚色の張迷生はどこかでこの支那といふ文字が侮辱であると憤慨し、是非中国人と呼んでほしいと言つてゐた）であるから、いつそう遅々とした撮影ぶりも愛嬌であらう。¹³⁵（下線は筆者）

また監督者の鈴木重吉を助けて、補導兼通訳の任に当つた張迷生先生とも話をした。（中略）なかなか気骨のある人で、恐らく映画製作に当つて、中国人としてのダメをだいぶ出されたであらうと思ふ。¹³⁶（下線は筆者）

これらの記述によっても、張我軍は表面的には日本の国策映画に協力したが、中国人としての気骨と立場を堅持しようとしたことが窺える。

4.2 戦時中の日本語教育実践

4.2.1 華北淪陥区の日本語教育概況

『東洋平和の道』の製作が終わった後、張我軍は日本語教育に戻り、さまざまな日本語教育活動を行なった。しかし、戦時中の日本語教育の背景は戦前と大きく異なり、中国人による自発的なものではなく、武力を背景とした日本側主導の強制的な性格を有しているものとなつていった。そのため、戦時中の張我軍の日本語教育活動を考察する前に、北京淪陥後の華北地方の日本語教育の概況を見ておく必要がある。

中国側では図 1-1（華北淪陥区における日本語教育の中心的指導機関）で示したように、北京淪陥後、1937年7月30日に日本軍を後ろ盾とした傀儡政権「北京市地方維持会」（以下、維持会）が設立された。維持会は教育指導機関としての「文化組」を設置し、北京市の日本語教育などを推進させた。「文化組」の指導下、日本語が必須科

¹³⁵ 丹羽文雄「『東洋平和の道』を覗く記」『新女苑』2-4、実業之日本社、1938年、345頁。

¹³⁶ 飯島正『東洋の旗』河出書房、1938年、153頁。

目として小学1年より週6時間課された。また、一般市民向けの「日本語講習所」の開設、「日本語検定委員会」の設置、日本語教師の選考、日本語教授法研究会の開催などの活動も行なわれた。

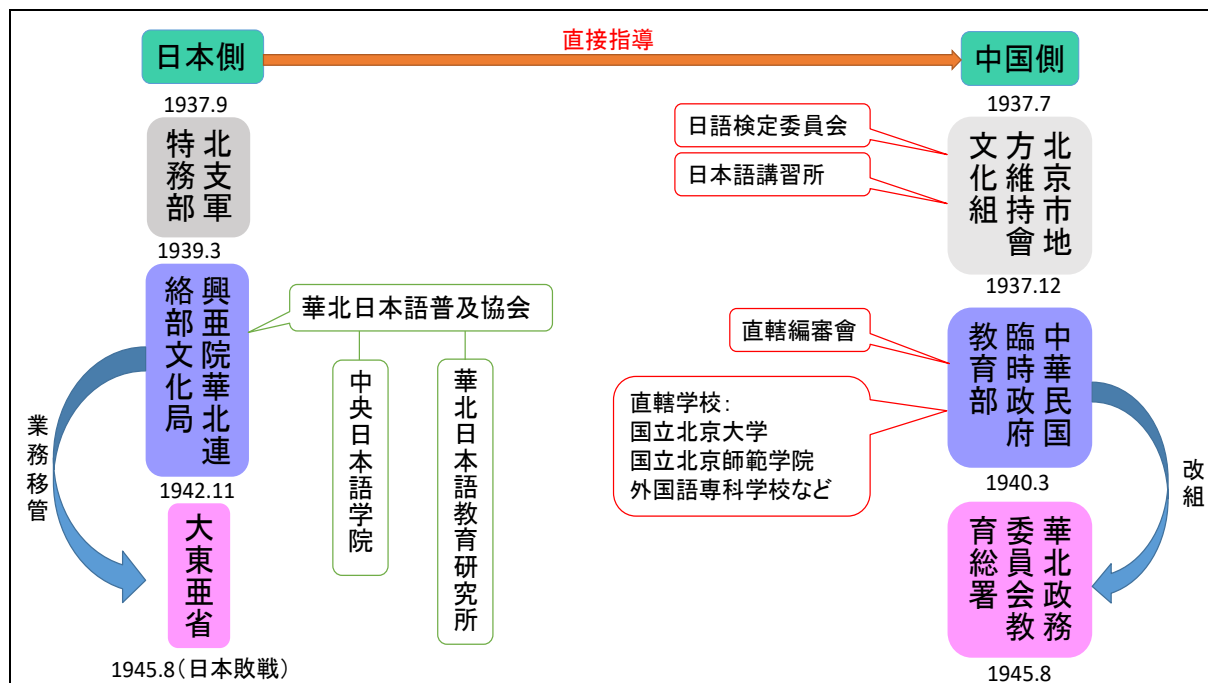


図 1-1 華北淪陷区における日本語教育の中心的指導機関¹³⁷

(興亜院華北連絡部 (1941) より筆者作成)

その後、日本軍に占領された地域の拡大に伴い、1937年12月に傀儡政権「中華民国臨時政府」(以下、臨時政府)が成立し、維持会が解散された。臨時政府は華北淪陷区の教育に対する統括指導機関として教育部を設置した。教育部の主な活動としては、「教育部直轄編審会」を設置し華北淪陷区の教科書の編集審査を行ない、また、偽国立北京大学、偽国立北京師範大学、外国語専科学校などの大学を開設し直轄管理している。そのうちの外国語専科学校は、日本語及び日本事情に通曉した人材を養成するために設立された高等教育機関である。

1940年3月に新中央政府として国民政府¹³⁸が南京に設立されたことから、臨時政府は改組され「華北政務委員会」となった。それに伴

¹³⁷ 図 1-1 にある国立北京大学と国立北京師範大学は 1937 年以降に傀儡政権に設立された偽北京大学と偽北京師範大学を指している。

¹³⁸ 日本軍を後ろ盾とした傀儡政権である。元々の国民政府は重慶に移転した。

い、臨時政府教育部は「華北政務委員会教育総署」に改名された。しかし、臨時政府の公務員は従来のまま任用され、文教方針もほぼ踏襲された。

一方、日本側は日本軍が北京と天津を占領した後、1937年9月に天津に「北支軍特務部」を設立し、華北淪陷区の政治、経済、文化などに対し指導監督を行なった。その後、占領地域の拡大に伴い、1938年12月に占領地域の政治、経済、文化などの業務を統括管理する興亜院¹³⁹が設置され、従来の軍特務部が解消された。興亜院は北京、上海などの中国各地に4つの連絡部を置いていた。そのうち北京にある華北連絡部は1939年3月に設けられた最大の組織である。その下にある「文化局」は華北の宗教、教育、学芸などを管理し、華北における日本語普及の中心的指導機関として、華北日本語普及協会を設置した。該会は中央日本語学院を経営し、華北日本語教育研究所を付設して中国人日本語教員の養成並びに一般市民に対する日本語教育を行なった。その後、1942年11月に大東亜省が設置され、これまでの興亜院の業務が移管統括された。

以上見てきたように、華北淪陷区における日本語教育の中心的指導機関は中日双方に存在していたが、中日の両者の関係は、日本側が中国側に対して直接指導していたことである¹⁴⁰。

4.2.2 北京近代科学図書館の日本語講師

このように日本側が主導した華北淪陷区の日本語教育において、張我軍が最初に深く関与したのは、北京近代科学図書館（以下、科学図書館）の日本語講座である。

科学図書館は「中国近代文化の発達に資すると共に両国文化の溝通

¹³⁹ 興亜院は1938年12月16日に内閣直属機関として設立され、日本軍に占領された中国大陸の地域に対し、政治、経済、文化など業務を統括し管理した。首相が興亜院の総裁を兼任した。現地の連絡機関として華北、蒙疆、華中、廈門の4か所に連絡部が設けられた。1942年11月に他部局と統合されて大東亜省となった。

¹⁴⁰ 興亜院華北連絡部『北支に於ける文教の現状』、1941年、37頁。

を計る一つの機関」¹⁴¹の宗旨を掲げ、外務省文化事業部の助成と指導を受け、対支文化事業の一環として1936年12月5日に北京で開館された。北京淪陥後、1937年9月から北京放送局が毎週日本語講座の放送を開始し、科学図書館はこれを機に本館に受信機を置いて一般希望者に聴取させ、同年10月18日から毎週1回、放送終了後、本館の日本人職員が講師として30分乃至40分の音読復習及び補講を行なった。その後、「東城日本語学校」、「北城日本語学校」、「西城日本語学校」の3つの日本語学校を設立し、講師を招聘し、每期3カ月ぐらいの本格的な日本語講座を開始した。1937年11月11日に開講した第1期から1941年に終了する第11期までほぼ4年間続いた。また、中等日本語教員の養成のために、1938年9月に修業年限6カ月の師範科を開設した。

表 1-1 日本側の日本語教育機関（1938年6月時点、北京）

学校名	教員数	学生数	学校名	教員数	学生数
崇貞女学校	4	160	今川日本語学校	3	61
北京同学会語学校 日本語班	3	35	自由学園 北京生活学校	8	20
佐藤日本語研究所	3	41	本願寺日本語学校	1	80
久松日文学校	1	100	北京外国語学校	1	52
黎明語学会	12	280	北京近代科学図書館 東城日本語学校	36	96
黎明語学会分校	4	90	北京近代科学図書館 北城日本語学校		143
高野山日華語学校	8	120	北京近代科学図書館 西城日本語学校		54
北京東光日本語学院	1	92			
新冀日本語専門学校	4	32			

（JACAR、Ref. B10070616400（第6、7画像目）より筆者作成）

科学図書館の日本語学校は興亜院華北連絡部が設立されるまで、華北淪陥区における日本政府が関与した唯一の日本語教育機関である。外務省文化事業部による1938年6月時点の調査（表1-1）によれば、日本側で設置された北京における14カ所の日本語教育機関の中では、科学図書館の日本語学校は規模が大きく、教員数が一番多く36人に

¹⁴¹ 北京近代科学図書館編『北京近代科学図書館一週年報告』、1937年、1頁。

達し、学生数は 293 人を有していた。また、科学図書館で編纂された『初級日文模範教科書』(巻 1) は北京淪陥後、最初に北京市地方維持会文化組の審査を通ったものである。さらに、科学図書館編纂の日本語教科書は華北淪陥区の多くの中学や大学だけでなく、軍宣撫部北京班や北京警察局特務科などの多くの公務機関でも使われており¹⁴²、華北淪陥区初期の日本語教育に大きな影響を与えたと考えられる。

1938 年 6 月に、張我軍は科学図書館の日本語講座の講師として招聘された。このことは、当時の『朝日新聞』(北支版)に取り上げられ以下のように報道された。

日支親善は言葉からをモットーに中国人に対する日本語教授に努力してゐる北京近代科学図書館の日本語学校では去る七日第二期生二百二十余名の卒業生を送つたが更に第三期生として初級班五十名、中級八十七名、専修科十三名、その他合計二百六十九名の入学を許可し十八日北京王府井大街の本校及び分校において入学式を挙行した。(中略) 開講は廿日から、講師は錢稻孫氏ほか六名で今回新たに日本語教育界に著名な張我軍氏を迎へ充実した内容で真に日支文化提携の第一線に立ち得る人材を養成することとなった。¹⁴³ (下線は筆者)

つまり、張我軍は日本語教育界の著名人士として、日本政府が関与する教育機関に入ったことが、当時注目されていたのである。張我軍が科学図書館の日本語講座に関与した経緯を示す資料は、発見されていないが、戦前から日本側はすでに張我軍を利用する意図を示している。戦前、外務省文化事業部は「日本語に通シ従来トモ我方ト密接ナル連絡ヲ保チ将来ノ利用上ニモ此ノ際補助ヲ興フルコト適当ト認メラレル」¹⁴⁴を理由に、社会局秘書として日本視察終了後、引き続き日

¹⁴² JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B05016010200 (第 3 画像目から第 5 画像目まで) 北平近代科学図書館関係雑件第四巻 (H-6-2-0-24_004) (外務省外交史料館)

¹⁴³ 「北京の日語熱ますます旺ん」『朝日新聞』(北支版、1938 年 6 月 24 日)

¹⁴⁴ JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B05015792200 (第 29 画像目)、満支人本邦視察旅行関係雑件/便宜供与関係第九巻 (外務省外交史料館)

本に滞在して言語及び文字教育などを調査しようとした張我軍に対し滞在を認めたことから窺える。また、館長の山室三良¹⁴⁵は戦前から張我軍に接触し、良好な個人的関係を保っている¹⁴⁶。一方、張我軍が科学図書館にかかわる前に、張我軍の友人である錢稻孫、洪炎秋、柯政和などはすでに日本語講師として招聘されていた。このことから張我軍が彼等の誘いに応じて科学図書館の講師陣に加わった可能性は否定できない。

張我軍が科学図書館の日本語講座で担当した科目は、表 1-2 で示したように、中上級クラスの「翻訳法」「講読」「文法」以外に、師範科の「日語教授法」も担当した。また、張我軍は日本人教師を含めた多くの講師陣の中でも唯一日本語教授法を教えた人物であり、彼の日本語教授観も科学図書館の日本語教育活動にも大きな影響を与えたと考えられる。

表 1-2 科学図書館日本語講座における張我軍の担当科目

	講座期間	クラス	科目名	授業時間(週)
第三期	1938.6.20～1938.9.10	高級班	翻訳法	2
	1938.6.20～1938.9.17	中級2班	講読	4
	1938.6.20～1938.9.17	専修科3班	文法	2
	1938.9.12～1939.2.17	師範科	文法演習	2
			日本語教授法	1
第四期	1938.9.26～1938.12.21	高級班	講読	4
第五期	1939.1.5～1939.3.30	高級班	講読	4
第六期	1939.4.8～1939.7.21	高級1班	講読	4
		高級2班	講読	4

(『北京近代科学図書館館刊』(第1号～第6号)より筆者作成)

¹⁴⁵ 山室三良(1905～1997)は1933年に九州帝国大学法文学部選科を卒業し、1934年に外務省文化事業部派遣第三種補給生として北京に留学し、1936年に外務大臣の委嘱により、北京近代科学図書館を創立し、館長としてその経営にあたる。

¹⁴⁶ 阿部洋『山室三良インタビュー記録』教育社、1980年、21-22頁。

張我軍が科学図書館の日本語講師として活動したのは1年間ぐらいであろう。1939年7月に第6期日本語講座終了後、日本語講座に関する資料には、張我軍の名前は講師として出ていない。その理由については、2つあると考えられる。一つは、1939年に偽北京大学が成立した後、張我軍は偽北京大学の日本語教師となり、そちらを中心に活動したからである。もう一つは、館長の山室三良の回想によれば、興亜院華北連絡部が成立した後、主な経費は華北日本語教育研究所や中央日本語学院に使われたことが原因で、科学図書館の経費が少しづつ削られ、日本語講座の状況も悪化の一途をたどったからである¹⁴⁷。

4.2.3 偽北京大学における日本語教学活動

張我軍が科学図書館の日本語講師を担当していた期間に、偽北京大学が傀儡政権によって設立された。1938年5月に農学院が設立された後、医学院、工学院、理学院が同年に設立され、翌年の1月に開学式典が行なわれた。当時、日本語が各学部の必須科目に課されており、日本語教師の募集は各学院が成立した後の一大急務であった。前述のように、当時の科学図書館の日本語学校は規模が大きく、多くの中日両国の日本語教育人材を擁していたことから、偽北京大学の人材確保の主な募集先となった。工学院が成立されてからまもなくして、張我軍は工学院の日本語主任講師として招聘され、その後、教授に昇任した。また、張我軍は同じく近代科学図書館で講師を担当していた竹内好¹⁴⁸に対し、「工学院の日本語をまかされたれば一緒にやらんか」と誘ったが、竹内好は最終的に工学院ではなく、山室三良の依頼を受け、理学院の日本語講師に就任した¹⁴⁹。

¹⁴⁷ 阿部洋『山室三良インタビュー記録』教育社、1980年、36頁。

¹⁴⁸ 竹内好（1910～1977）は日本の中国文学者であり、魯迅作品の研究や翻訳をした。1934年に東京帝国大学文学部を卒業し、1937年から2年間北京に留学した。

¹⁴⁹ 竹内好『竹内好全集：日記（上）』筑摩書房、1981年、230頁。

1939年4月に周作人¹⁵⁰が文学院の院長に招聘され、同年8月に文学院が開学した。張我軍は文学院の講師を兼任し、まもなく教授に招聘され、工学院と文学院という二つの学院の教授となった。北京大学档案馆に所蔵された当時の給与関係の資料によれば、1940年8月時点で、文学院日本文学系の中国籍教授は張我軍、錢稻孫、尤炳圻の3人のみで、また、張我軍の給与は600元(200元の手当てを含む)で、日本文学系の主任を兼任した錢稻孫の440元よりずっと高い¹⁵¹。張我軍は日本文学系において重要な位置を占めていたと考えられる。また、日本文学系の必須科目においては、ほとんどの科目の授業時間は週に2時間で、週に4時間を設置した科目は基幹的な科目であり、それほど多くない。表1-3に示したように、張我軍は主に「日文講読」「日本現代文学選読」「日本現代文学演習」などのような、4時間が設置された基幹的な科目を担当していた。

表1-3 偽北京大学日本文学系における張我軍の担当科目¹⁵²

	学年	担当科目	毎週授業時間数
1941 年度	第1学年	日文講読	4
	第2学年	日本現代文学選読(二)	4
	第3学年	日本現代文学研究	2
1943 年度	第1学年	日本現代文学選読	4
	第2学年	日本現代文学演習	4

戦時中、張我軍は他の日本語教育関係の活動や文学活動に参加した時にも、主に「北京大学文学院教授」または「北京大学工学院教授」という身分で関与していた。偽北京大学での日本語教授は戦時中の張我軍の専業と言えるであろう。

¹⁵⁰ 周作人(1885~1967)は中国の散文作家、翻訳家で、日本に留学したことがある。1920年代以降、国立北京大学で日本語と日本文学などの科目を担当していた。戦時中、傀儡政権の教育部の「督弁」に就任していた。戦後、「文化漢奸」とされていた。

¹⁵¹ 北京大学档案馆蔵『北京大学文学院教務股日志』、档案号:WBD0000014。

¹⁵² 1941年度の内容は北京大学档案馆蔵『国立北京大学文学院三十年度各学系一・二・三年級課程一覽』(WBD0000022)によって作成したもので、1943年度の内容は中国国家図書館蔵『国立北京大学文学院三十二年度各学系一覽』によって作成したものである。

4.2.4 教育総署直轄編審会の特約編集審査者

その後、張我軍は1941年前後に華北政務委員会教育総署直轄編審会(以下、編審会)の特約編集審査者にも招聘された。前述のように、編審会は1937年12月に傀儡政権の臨時政府の教育部に設置され、主に華北淪陷区の教科書の編集や審査を行なった機関である。日本語教科書においては、編審会は『小学日本語読本』(全4巻)や『初中日本語』(全3冊)などを編集した¹⁵³。これらの教科書は華北淪陷区の小中学校の主な日本語教科書として使用された。張我軍はどれほどこれらの教科書編集に関与したのかは現時点で不明であるが、表1-4で示した当時の12名の特約編集審査者には張我軍以外に日本語教科書の作成経験があったと思われる人物は見当たらない。

表1-4 教育総署直轄編審会の特約編集審査者¹⁵⁴

氏名	原籍	職位や学歴
汪 怡	浙江杭県	教育部国語推行委員会の常務委員
范慶涵	湖北鄂城	日本東京高等工業学校機械科卒業
王同烜	安徽当塗	清朝両江優級師範学校卒業
鮑鑑清	浙 江	北京医学専門学校卒業
武田熙	日 本	興亜院調査官
趙蔭堂	河南巩県	北京大学研究所国学科卒業
盧斯伯	湖南宝慶	北寧路警察訓練所所長、北戴河海浜警察所所長
張我軍	福建南靖	北京大学文學院日本文学系教授
徐小舟	江蘇呉県	奉天協和印刷会社図書主任
宝芥青	河北新海	北京大学教育学部卒業、中国大学講師
楊 謙	北 京	燕京大学歴史学部卒業
笹野堅	日 本	早稲田大学文学部国文科卒業

(『教育総署直轄編審会職員録』1941年版より筆者作成)

¹⁵³ 『小学日本語読本』は巻1と巻2が1939年9月、巻3が1939年11月、巻4が1940年8月に初版発行された。『初中日本語』は第1冊が1940年9月、第2冊が1941年6月、第3冊が1942年11月に初版が発行された。

¹⁵⁴ 職位や学歴の部分は王士花著『日偽統治時期的華北農村』(社会科学文献出版社、2008年、213-215頁)を参照。

張我軍が編審会に関与したのは、周作人と密接な関係があったからだと考えられる。周作人は日本文学者や翻訳家として戦前からすでに著名であり、1925年に国立北京大学の「東方文学系」を創立し、日本文学コースを設置した人物である。北京淪陥前に、北京大学は昆明に移転したが、北京に残されたキャンパスなどの資産を守るために、4名の教授を残した。周作人はその中の一人である。しかし、その後、文化侵略と見なされた多くの活動に関与したということから、戦後、対日協力者と見なされ漢奸裁判にかけられた。張我軍は戦前から周作人を先生と見なして行き来し、雑誌『日文與日語』を編集した際に、周作人を編集顧問に招聘していた。したがって、張我軍の戦時中の多くの活動が周作人と関係があったと推測できる。1941年1月に周作人が華北政務委員会の常務委員と教育総署の督弁に就任した後、張我軍は教育総署直轄編審会の特約編集審査者となった。また、前述の偽北京大学文學院の教授に招聘されたことも、当時の文學院院長の周作人の誘いだと考えられる。

4.2.5 華北日本語教育研究所の常務委員

教育総署に奉職する以外に、張我軍は華北日本語教育研究所(以下、研究所)の活動にも関与した。研究所は日本語教育の中心的指導機関である華北日本語普及協会の附設機関として、1940年9月に北京で設立され、日本語教育関係の講習会、研究会の開催や機関誌『華北日本語』及び『華北日本語教育研究所叢書』の発行などの活動を行なった。1943年9月に研究所は改組を行ない、華北4省3特別市¹⁵⁵に支部を設置し、華北に在住する日本語教員をすべて所員として組織することを方針とした。また、研究所の1年間の活動に関する企画立案審議の最高機関として、常任委員会を新設した¹⁵⁶。表1-5で示したように、張我軍は当時日本側の著名な日本語教育家であった山口喜一郎や

¹⁵⁵ 河北、山東、山西、河南の4省と、北京、天津、青島の3つの特別市である。

¹⁵⁶ 華北日本語教育研究所『華北日本語』第3巻第6号、新民印書館、1944年、23頁。(吉岡英幸監修・解説、復刻版、冬至書房、2009年、149頁)

国府種武などと並び、該委員会の常任委員に招聘された。彼の日本語教授能力は日本側においても認められていたと考えられる。

表 1-5 華北日本語教育研究所の常任委員会

職名	氏名
所長	王玉泉
常任委員長	藤村作
常任委員	佐藤幹二、古田拙、片岡良一、国府種武 張我軍、陳松齡、山口喜一郎、各省市代表 6 名

(『華北日本語』第 3 卷第 6 号、23 頁より筆者作成)

張我軍は常任委員として毎月の例会に参加する以外に、1944 年 4 月に行なわれた華北日本語教育研究所第 1 回総会にも参加した。この総会は 5 日間にわたり、華北各省市の支部所員（ほぼ日本人）を合計 150 名以上集めた会である。張我軍は該総会の相談役として参加し、2 日目に 3 時間の講演を行なった。講演を行なった者は張我軍と常任委員長の藤村作だけであることから、当時の日本語教育界で張我軍は重要な位置にあったと言える。この総会は「日本語教育ノ振興ニ全力ヲ致シ以テ日華両国民ノ精神的結合ヲ強固ニシ進ンデ大東亜十億民族ノ結集ヲ計リ誓ッテ大東亜戦争ノ完勝ニ礎石タランコトヲ期ス右宣誓ス」¹⁵⁷と挙げられたように、侵略戦争のための日本精神の宣揚という基調で行なわれた。しかし、張我軍はそれへの同調を避けようとしたのであろうか、講習講演において「中国の立場より見たる日本語教育の諸問題」と題し、中国における日本語教育の意義、日本文化の吸収と日本語、日本語教材論教授法論の各問題について、日本人の独善的な欠点に陥り易いところを指摘した¹⁵⁸。

¹⁵⁷ 華北日本語教育研究所『華北日本語』第 3 卷第 7 号、新民印書館、1944 年、4 頁。(吉岡英幸監修・解説、復刻版、冬至書房、2009 年、154 頁)

¹⁵⁸ 華北日本語教育研究所『華北日本語』第 3 卷第 7 号、新民印書館、1944 年、4 頁。(吉岡英幸監修・解説、復刻版、冬至書房、2009 年、158 頁)

4.3 文学者としての張我軍

戦時中、張我軍は専業が日本語教師であったが、華北淪陷区のいくつかの文学活動にも参加した。そのうち特筆に値する活動の一つが、雑誌『中国文芸』に関わったことである。1939年9月に、張我軍の親友であった張深切が編集長として『中国文芸』を創刊した。その後、張我軍はこの雑誌に「秋在古都」「京戲偶談」などの散文や随筆を投稿した。また、1939年11月に張深切が所用で台湾に一時戻ったため、張我軍は張深切に代わって第1巻第3期の『中国文芸』を編集した。しかし、その後1940年8月に、日本側が『中国文芸』の編集長を更迭した後、張我軍はこの雑誌に投稿しなくなった。張深切は張我軍と同じように、台湾出身で、1920年代に台湾の日本植民地統治離脱を目指す団体「広東革命青年団」に参加し抗日活動を行っていた。盧溝橋事件後、北京に来て上述の『中国文芸』の創刊以外に、華北淪陷区の官吏養成機関である新民学院で日本語を教えていた。その後、日本語の授業で三民主義や抗日思想を伝えていたことから、日本人教師に告発されたため、日本の敗戦直前に日本軍特務に一時逮捕された¹⁵⁹。張我軍は戦時中日本に協力したと見なされる活動に多く関与したが、このように抗日の立場に立った張深切と深く関わっていたことも注目に値する。

もう一つ特筆すべきことは、「大東亜文学者大会」に2回参加したことである。「大東亜文学者大会」は日本の侵略戦争に加担することを目的として、日本文学報国会などが中心となって1942年から1944年まで3度開催された文学者の交流大会である。1942年11月に張我軍は錢稻孫、沈啓無、尤炳圻と一緒に華北地区の代表として、東京に赴いて第1回の「大東亜文学者大会」に参加した。張我軍はこの機会を利用して久しく慕っていた日本作家の島崎藤村と武者小路実篤に面会した。また、作家北原白秋の追悼会にも参加した。翌年の1943年8月に、張我軍は東京で開催された第2回の「大東亜文学者大会」

¹⁵⁹ 張深切著『張深切全集』巻2、文経出版社、1998年、85頁。

にも参加した。張我軍がこのように2回も「大東亜文学者大会」に参加した動機については、張我軍の親友であった洪炎秋は以下のように説明している。

彼がこの会に参加した原因としては、一つは周作人、銭稻孫などの先輩からの誘いがあったからである。もう一つは、彼はずっと日本語を教えており、当時著名であったが、日本に行ったことがなく、講解においては難しく感じていたので、今回の招待の機会を借りて、日本の名所旧跡を見学し、教学の助けにしようとした。動機は非常に単純であった。¹⁶⁰

実際には、「大東亜文学者大会」の前に張我軍は日本に行ったことがあり、洪炎秋のこの説明は必ずしも事実ではない。しかし、第1回に参加した際の華北代表の4人は、すべて偽北京大学文學院の教授であることから、張我軍は周作人と銭稻孫などの誘いに応じて参加した可能性は否定できない。そのほか、張我軍の東京での活動から見れば、この機会を借りて島崎藤村や武者小路実篤などの作家に会うという可能性もある。

一方、第2回の「大東亜文学者大会」に参加した期間に、張我軍は「英米撃滅の文学」「日本の少女よ手をつながう」のような、日本側に迎合する文章を発表している。張我軍は「英米撃滅の文学」において、「文学者は国民精神の具現者であり、思想戦における勇士であるべきはづだ。この文学者が東亜各国から一堂に会して米英撃滅戦における自分らの職場をはつきりと定めて勇猛邁進し、決心を新たにせんとする」¹⁶¹と述べた。また、「日本の少女よ手をつながう」において、「男も女も、大人も子供も挙つて敵米英と戦はなければなりませんことは勿論です」¹⁶²と語った。しかし、言論統制が厳しい戦時下で、張

¹⁶⁰ 洪炎秋「懷才不遇的張我軍兄」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、15頁。「他所以出席这个会的原因，一半由于周作人、钱稻孙等先辈的邀约，一半由于他一直以教授日文，名重一时，而平生不曾到过日本，在讲解上难免常感困难，所以他借这次的招待，到日本各名胜去游览一番，以帮助教学，动机十分单纯。」

¹⁶¹ 張我軍「英米撃滅の文学」『緑旗』緑旗連盟、1943年、68頁。

¹⁶² 張我軍「日本の少女よ手をつながう」『少女の友』36(10)、実業之日本社、1943年、80頁。

我軍は身を守るために、ただ表向きは統治側の政策に迎合するように見せかけていた可能性もある。この点については、同じく第2回の「大東亜文学者大会」に参加した日本文芸評論家の巖谷大四の記述によって、その一端が窺える。1943年11月2日に、大会に参加した海外の代表は一緒に明治神宮や靖国神社に参拝に行ったが、当時の張我軍の態度について、巖谷大四は以下のように述べている。

一行の中で、張我軍という人だけが、そっぽを向いてお辞儀しなかったのが印象的だった。この人は日本語が上手で通訳もやったが、なかなかのくせものようであった。¹⁶³（下線は筆者）

つまり、張我軍は表向きは「大東亜文学者大会」に参加したが、明治神宮と靖国神社などで参拝することを拒否し、日本帝国主義に強い抵抗意識を示していた。また、彼の友人である前述の張深切は、張我軍の「大東亜文学者大会」参加について以下のように述べた。

我々二人が知り合ってから以来、二人の意見に齟齬をきたすことはなかった。ただ、私は一回だけ彼に不満を表したことがある。それは彼が大東亜文学者大会の代表に選ばれた時であったが、彼の解釈を聞いてから、私は反対しないようにした。このことで、彼は多大な打撃を受けた。これは我軍が生涯で犯した一番大きな過ちだと考えた者もいた。表面から見れば、このような考えを生じた根拠は確かにあるかもしれないが、裏面から見れば、必ずしも事実ではない。これに対して、私はさらに弁護する気はないが、彼は純粋な台湾人であると理解している。台湾の立場から見れば、彼の言動には強く批判すべきところはない。¹⁶⁴（下線は筆者）

¹⁶³ 巖谷大四『非常時日本文壇史』中央公論社、1958年、32頁。

¹⁶⁴ 張深切「悼張我軍」張光正編『近觀張我軍』、2002年、台海出版社、5-6頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「所以我们自相处迄今，从未发生过齟齬。只有一次，他被推举为大东亚文学者大会代表的时候，我才对他表示不满，但经过他一番解释之后，我就不再反对了。为了这件事，他受了莫大的打击，甚至有人认为这是我军一生犯了最大的错误。从表面看，也许这是出于言出有因，然从里面看，却未必属实。对此我无意多加辩护。不过，我理解他是一位纯粹的台湾人，站在台湾的立场说，他的言动并无可厚非的地方。」

この話により、張深切は最初に張我軍の「大東亜文学者大会」参加に対し不満を表しているが、張我軍のことを「純粋な台湾人」であると述べ、「台湾の立場」から張我軍の行為に対し理解を示したことが分かる。この「純粋な台湾人」と「台湾の立場」はいったい何を指しているかについては、張深切は具体的に述べていないが、戦前の張我軍の立場を考えると、反植民地統治の立場を崩していないということを指すと考えられる。

4.4 「文化漢奸」とされた張我軍

以上見てきたように、張我軍は戦時中、日本側主導下の日本語教育活動、日本の国策映画『東洋平和の道』の製作、「大東亜文学者大会」などの侵略戦争に加担したと見なされる文化活動に深く関与したが、張深切や洪炎秋などの友人らは、彼の活動に理解を示した。また、他の同時代の人たちの記録により、張我軍は台湾出身の中国人としての立場を堅持し、日本に対する抵抗意識は少なからず持っていた側面も見られる。しかし、日本帝国主義下の文化事業に関与した事実が存在したことから、戦後、漢民族の裏切者を意味する「漢奸」のレッテルが貼られる運命から逃れられなかった。1945年8月23日に、当時の中国共産党の機関紙『新華日報』は「文化漢奸名録（二）」を公表した。張我軍についての部分は以下である。

張我軍、福建人。日本早稲田大学卒業。かつては北京師範大学の教授をやっていた。翻訳した日本語書籍がかなり多い。錢稻孫と同じように□□□□□□□□文化漢奸である。1942年に反逆者錢などと一緒に東京に赴き、所謂「大東亜文学者大会」に参加した。¹⁶⁵

「文化漢奸」については具体的な定義が出されていないが、当時で

¹⁶⁵ 「文化漢奸名録（二）」『新華日報』（1945年8月23日）、原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「張我軍 福建人。日本早稲田大學畢業，過去做過北平師大教授，翻譯日文書甚多。與錢稻孫同為□□□□□□□□文化漢奸。一九四二年曾于錢逆等同到東京參加所謂『東亞文學家大會』。」（□は判読できない文字である。）

は一般的に文化界における「漢奸」を指している。1945年11月23日に、国民政府は「処理漢奸案件条例」を公表し、その中の1箇条は「傀儡政権所属の専科以上の学校で校長或いは重要な職務を担当した者」は、漢奸として検挙すべきだとしている¹⁶⁶。張我軍が重要な職務を担当した者とされたかどうかは不明であるが、華北淪陷区で活動した台湾人は検挙されたものが少なくない。張我軍の親友の楊基振はその中の一人であった。楊基振は1931年に早稲田大学政治経済学部を卒業し、1933年に東京で設立された左翼団体「台湾芸術研究会」に参加したことがあり、抗日思想を持っていた。1934年に南満州鉄道株式会社に就職し、盧溝橋事件後、華北淪陷区に派遣された。その後、日本の国策会社の華北交通株式会社に転勤し、1945年3月に華北交通株式会社を辞し、5月に唐山の啓新セメント会社に赴任し、副工場長兼業務部長となった。前述の「処理漢奸案件条例」が公表された後、楊基振は「漢奸」として検挙された。このことを最初に楊基振に知らせたのは張我軍と呉三連である。楊基振は当時のことや自分の気持ちを以下のように、日本語で日記の中に記録している。

12月23日自分の不在中警察と憲兵は自分を漢奸として逮捕すべく唐山の住宅を襲ふた。何といふ皮肉な運命でありませう。生まれて物識る時から祖国を思ひ今日迄そして今後も反日に終始する自分が今日親日分子として睨まれて漢奸として検挙されるとは天ならで誰が知り得よう。此の事実を北平で知ったのは12月25日深夜11時頃である。尤も天津から我軍、三連両兄が呉姐夫宅に此の事実を知らせて来たのは午後3時頃であったが当時自分は高熱の中に衰弱著しかつた為姉さん達で何とかして妥当なる対策を協議したが適当なる対策なき為漸く11時頃自分に知らせたのである。¹⁶⁷（下線は筆者）

¹⁶⁶ 中国法規刊行社編審委員会編『六法全書』、春明書店、1948年、235頁。

¹⁶⁷ 楊基振『楊基振日記』台湾日記知識庫<<http://taco.ith.sinica.edu.tw/tdk>>（最終閲覧日：2019年5月20日）、1945年12月16日-1946年1月31日。

その後、「漢奸」として検挙された台湾人は「日本国籍」であったため、ほとんどが「漢奸裁判」にされることを免れたが、張我軍は「文化漢奸」のレッテルを貼られた際に、おそらく楊基振と同じように「反日に終始する自分が今日親日分子として睨まれて」という気持ちがあったと思われる。張我軍の息子の張光正によれば、張我軍は戦時中、一部の傀儡政権の漢奸と行き来し、表向きでは彼らと友好的に交流していたが、裏では彼をかなり見下げたという¹⁶⁸。また、1940年代初頭に、傀儡政権の情報局局長の管翼賢は張我軍と連絡し、傀儡政権の教育局長に就任するように説得したが、張我軍は拒否をした¹⁶⁹。張我軍がこのように傀儡政権の官吏に就任するのを拒否したことは、以下の蘇子蘅の話によっても裏付けられる。蘇子蘅は日本統治下の台湾出身者であり、戦時中北京に赴き張我軍の隣に住んでいた。

張先生と行き来していた同郷や友達には、「道尹」「局長」「県長」などの傀儡政府の高官がいたため、もし張先生が傀儡政権のために仕事をしたいなら、彼も高官になって厚禄がもらえる。しかし、彼は教職と創作だけに従事し、官職に就くことをしなかった。彼のこのような民族の気骨は誠に見上げたものである。¹⁷⁰

張我軍が戦時中に教職と創作だけに従事していたという話は、事実ではないが、傀儡政権の官職に就かなかったのは確かなことだと言える。これについて、張我軍自身も明確に自分の意志を表したことがある。1941年頃に、張我軍は淪陷区の物価が上がったため、給与だけでは生活に支障が出たことから、周作人に頼んだことがある。その結果、周作人は島崎藤村の『夜明け前』の翻訳の機会を張我軍に提供した。

¹⁶⁸ 2018年6月26日に筆者が張光正にインタビューした際、張光正が自ら語ったことである。

¹⁶⁹ 張光正「悲、歎、離、聚話我家——一個台湾人家庭的故事」張光正編『近觀張我軍』、2002年、72頁。

¹⁷⁰ 蘇子蘅「懷念老友張我軍先生」張光正編『近觀張我軍』、2002年、台海出版社、32頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「在张先生来往的同乡、朋友中，有一些人是伪政府的高官，如“道尹”、“局长”、“县长”等，如果张先生愿意为日伪政权服务，他也是能当“高官”、享受厚禄的。但他只是从事教书和写作，不去“当官”，他的这种有民族气节的精神是很可贵的。」

当時の様子については、張我軍は文章の中で以下のように述べている。

当時、老人（筆者：周作人）はすでに督弁となった。しかし、私が頼んだのは周先生であり、周督弁ではない。私は土台官職に就く柄でもないと早くから自知しているからだ。老人も、私が官職に就くために彼を頼んだわけではないことを知りぬいていたようで、日本名著の漢訳を唯一の解決方法として指示してくれた。¹⁷¹
（下線は筆者）

この話により、戦時中、張我軍は先生としての周作人と引き続き行き来していたが、傀儡政権の「督弁」としての周作人と一線を画していることが分かる。つまり、張我軍自身にとって、日本語を媒介とする文化・教育活動に関与するのは、傀儡政権の官職に就くことと違い、対日協力の行為ではないということである。張我軍は何らかの立場や視点を以て支配者の政治に規定された文化・教育活動の中で主体性を保っていたのではないかと考えられる。そのことは第 5 章で詳述する。

5. 台湾帰郷の時期（1945. 8～1955. 11）

1945 年 8 月に、日本の敗戦に伴い、張我軍の偽北京大学での教学活動が終了した。1945 年 9 月に、北京に滞在していた台湾人は「台湾省旅平同郷会」を組織した。該会の主な任務は、北京に滞在している台湾人を救済し、彼らの台湾帰郷を助けることである。張我軍、洪炎秋などの 7 人が執行委員に選ばれ、そのうち洪炎秋は「主任委員」であり、張我軍は「文書委員」を担当した。そして、1946 年の春頃に張我軍は上海を経て台湾に戻った。

日本の敗戦から台湾に戻るまでの半年間で、注目に値するのは、張

¹⁷¹ 以齋「黎明尚在黎明之前」『芸文雑誌』第 1 卷第 3 期、芸文社、1943 年、28 頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「當時老人已是督辦，然而我所求的是周老師，並不是周督辦，因為我早已自知不是做官的料。而老人也似乎深知我不是找他耍官做的，所以他指示給我的唯一的途徑，是日本名著的漢譯。」（以齋は張我軍のペンネームである。）

我軍は『華北新報』に一連の文章¹⁷²を5篇発表し、中国に復帰した後の台湾での教育問題に大きく関心を寄せたことである。また、1945年10月に張我軍は発行人の代表として、「台湾光復後、複雑に絡み合い解決しにくい各種の問題があり、そのうち尤も複雑なのは教育であるため、政府に協力して台湾省の教育を改進したい」を理由に、「台湾省教育改進黨」成立大会の開会許可を北京市警察局に申し込んだ¹⁷³。しかし、最終的に北京市警察局に拒否された。

その後、台北に戻った張我軍は引き続き台湾の教育問題に関心を寄せた。1946年7月に、友人の游彌堅¹⁷⁴の誘いに応じ、成立したばかりの「台湾省教育会」の編纂組主任に就任したが、まもなくして「台湾省教育会」から離れた。同年11月に、台中の洪炎秋などは祖国文化の紹介や台湾省青年の勉学の助けを目的に「聯合出版社」を設立し、雑誌『聯合月刊』の発刊準備にあたった。張我軍はその編集長として招聘されたが、最終的にこの雑誌の発行は見送られた。その代わりに、中国語自修読本の編纂に携わることになった。1947年6月に、張我軍が編纂した『国文自修講座』巻一が聯合出版社によって発行された。同年8月に張我軍は社長として台中で「六合書店」を設立した。その後、『国文自修講座』巻三以降の各冊は「六合書店」によって発行されるようになった。張我軍の作成計画によれば、『国文自修講座』は全12巻で、その中の前6巻は国民学校4、5、6年生の程度であり、後6巻は中学校1、2、3年生の程度である。ほかに、『国語国文虚字用法詳解』と『中日対訳詳注現代中国文学選集叢書』（全12巻）などの中国語学習に役立つ教材の編纂計画もあった。これらの中国語教材が持つ最大の特徴は、日本語を利用したことである。例えば、『国文自修講座』は主に「本文」「字音」「通解」「詳解」「余講」によって構

¹⁷² 「台湾人的国家観念」（「台湾人の国家観念」）、「台湾的宣撫工作」（「台湾の宣撫工作」）、「新台湾的教育問題」（「新台湾の教育問題」）、「台湾省国語国文普及管見」（「台湾省の国語国文の普及に関する管見」）、「関與台湾省中小学教科書」（「台湾省の小中学校教科書に関して」）である。

¹⁷³ 北京市档案馆「有关取締北平台湾革新同志会教育改進黨开会活動的文件」、档案号：J181-014-00543

¹⁷⁴ 游彌堅は当時、台北市長を務め、「台湾省教育会」の理事長を兼任。

成され、「通解」が中国語本文の日本語訳で、「詳解」が中国語の文法などに関する日本語解説で、「余講」は本文の作者や文法の難点などに関する日本語解説である。

しかし、「六合書店」は経営が思わしくなく損失が大きかったため、1948年3月に『国文自修講座』巻五を発行してから倒産した。そして、「六合書店」が倒産する直前の1948年2月に、張我軍は友人の陳清汾が理事長を担当していた「台湾茶葉商業同業公会」に入り、該会の幹事となり、また、編集長として雑誌『台湾茶業』の編集を担当した。『台湾茶業』は1948年6月の創刊から、1949年5月の停刊まで全4期である。張我軍は『台湾茶業』に台湾の茶葉業界に関する散文を十数篇発表した。1949年8月に、張我軍は「台湾省合作金庫」理事長の謝東閔の誘いに応じて転職し、「台湾省合作金庫」の「業務部専員」に就任し、その後「研究室専員」に昇任した。そして、1950年4月に「台湾省合作金庫」は、雑誌『合作界』を創刊し張我軍は該誌の編集長となった。同年7月には「研究室主任」に昇任し、野球部の部長を兼任した。その後、『合作界』の編集と野球チームを中心に活動を続けていた。このように、自営の書店が倒産した後、張我軍はあまり教育関係の活動に関与しなくなったが、台湾での中国語普及への助力を惜しまなかった。彼は余暇を利用して『日華辞典』を編集し、10万字ぐらい書き終わったが、最終的に病魔に取りつかれたことで、未完成に終わり、1955年11月に他界した。

台湾が中国に復帰した後、日本語教育家であった張我軍が台湾での教育問題として、特に中国語教育に関心を寄せた理由は何か、それについては、以下の張我軍の話によって分かるであろう。

台湾の教育は、消極的に言えば現在の程度を維持する必要があるが、積極的に言えば根本的に大きな改造をしなければならない。しかし、日本人は50年をかけて、やっとのことで8、9割の中国語を消滅させ、やっとのことで6割の台湾人に日本語を習得させた。現在、我々はそれを取り戻そうとしたら、50年もかかること

はないが、短時間でできるものでもない。我々は全力を尽くし幾年かをかける覚悟を持ってこそ、我々の目的を実現することができる。¹⁷⁵（下線は筆者）

つまり、張我軍は50年間にわたった台湾での日本の同化教育の影響を取り除き、台湾同胞の中国人としての共通認識を取り戻そうと考えていた。これは戦後張我軍が中国大陸に残らず、台湾に戻った原因であろう。

6. 小括

張我軍の生涯を振り返ってみると、「反植民地統治」が彼の一生を貫くキーワードだと言える。彼は日本支配下の台湾で生まれ、幼い頃に公学校での同化教育を受けたが、1920年代初頭に台湾民族運動の影響下、民族意識が覚醒し、台湾の日本植民地統治離脱の願いを祖国の中国の強盛に託し、日本の植民地統治に反抗する道を進んできた。抗日団体への参加、中国大陸への留学、台湾新文学運動への関与などは、いずれもその反抗の表出である。その後、中国の国民革命の昂揚に伴い、祖国への期待が高まり、北京に渡り中国大陸に定住し始めた。最初は、中国大陸との一体化を図り、台湾への中国民衆の関心を喚起させるために、魯迅を訪ね、『少年台湾』を創刊するなどの活動を行なった。しかし、国民革命が頓挫した後、張我軍は中国の革命の現状に失望を感じ、「真の革命と信義」を探するためにプロレタリア文学に視線を向けた。彼は『新野』を創刊してプロレタリア文学とそれに内包された社会主義思想を伝えることにより、自ら中国の社会改造を推進しようとした。しかし、言論統制が厳しかった当時では、こうした考え方も順調に実行されるに至らなかった。その後、張我軍は中国大

¹⁷⁵ 張我軍「新台湾的教育問題—台湾光復後の問題三」張光正編『張我軍全集（上集）』、台海出版社、2012年、193頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「台湾的教育，消极方面须维持现在的程度，积极方面非加以一番根本的大改造不可。但是日本人下了五十年的苦功夫，好容易才把汉文消灭了八九成，好容易使将近六成的台湾人懂得日文日语。现在我们要将他挽回来，虽然用不了五十年，却也不是短期间所能做到的，我们必须有倾注一切苦干若干年的觉悟，才能达到我们的目的。」

陸の「日本語ブーム」に乗じ、日本語教育や日本語翻訳に全力で身を投じ、それを新たな手段として自分の思想や理念を伝えようとした。また、1935年末に張我軍は北京市社会局及び冀察政務委員会の秘書に就任し、日本の華北侵攻と北京淪陥を阻止するために、対日交渉に取り組んでいった。

戦時中、再び日本の支配下に身を置いた張我軍は、日本語教育をはじめとする日本帝国主義下の文化活動に深く関与したが、張我軍の友人や同時代の人に残された記録により、彼は戦時中においても台湾出身の中国人としての立場や気骨を堅持しようとした面が窺える。また、傀儡政権の「督弁」としての周作人と一線を画し、傀儡政権の官吏に就くことを拒絶し、自分の活動を文化・教育活動の範囲内に限定していた。戦時中、張我軍は何らかの立場や視点を以て支配者の政治に規定された文化・教育活動で主体性を保っていたのではないかと考えられる。そして、日本が敗戦した後、張我軍は台湾に戻り、台湾での日本による同化教育の影響を取り除き、台湾同胞の中国人としての意識を取り戻すために、台湾での中国語教育に強く関心を寄せた。

一方、張我軍の各時期の人生の選択に影響を与えた要因を追究していくと、政治状況などの社会環境の変化以外に、彼の日本語能力が大きな役割を果たしたと考えられる。戦前の日本語教育活動にも、戦時中の日本語を媒介とする文化・教育活動にも、戦後の中国語教育活動にも、張我軍は自分の日本語能力を最大限生かしたと言える。しかし、このことは台湾の公学校での「国語」（日本語）教育を受けて獲得したもので、日本の植民地出身者のスティグマだと言える。なぜ日本の植民地統治の反抗者であった張我軍は、日本の植民地出身者のスティグマとされる日本語能力を生かした道を辿っていったのか。この問題を解明するには、日本の植民地出身者としての張我軍の日本語・日本語教育観を問わなければならない。そのため、次章から張我軍が長く携わり、日本語能力がフルに生かされた日本語教育を手がかりに、彼の实像に迫っていく。

第 2 章

中国の日本語教育史における張我軍の業績
—多種類の日本語教材と雑誌『日文與日語』—

第2章 中国の日本語教育史における張我軍の業績 —多種類の日本語教材と雑誌『日文與日語』—

1. はじめに

前章で述べたように、張我軍は1929年に北師大卒業後、日本語教育に携わり、当時の日本語教育界では名もなき一兵卒から一躍「著名人士」となった。その主な理由としては、彼が日本語教育関係の著述において多くの業績を残したからだと考えられる。序章で述べたように、中国人日本留学史研究で知られている実藤恵秀も、1930年代に発行された多くの日本語教育関係の著述にも張我軍のものが際立っていると高い評価を与えている。また、1930年代の中国の日本語教材に関する研究は、ほぼ張我軍のことに言及している¹⁷⁶。王昇遠(2009)は「(筆者：中国の日本語教育では)日本語学習の提唱と言え、清末の洋務派が一番早い。実践躬行し著書して日本語学習を積極的に提唱したのは、梁任公¹⁷⁷で他と肩を並べる者はいない。日本語教育関係の著述の影響から言えば、張我軍に匹敵するものはいない」¹⁷⁸のように、張我軍による日本語教育関係の著述に対し高い評価を与えた。

しかし、これまでの研究はほとんどが張我軍の日本語教育関係の著述の題名、出版情報だけを挙げるにとどまり、その具体的な構成や内容に触れていない。張我軍の日本語教育関係の著述の実像は未解明の状況だと言える。こうした状況に鑑み、本章ではまず既存の研究成果を踏まえ、中日甲午戦争から1930年代までの中国人の日本語学習の歴史¹⁷⁹を概観し、張我軍の日本語教育実践の歴史的背景を述べる。次

¹⁷⁶ 徐一平(1997)、馬可英(2010)、伏泉(2013)、張金龍・李友敏(2016)、朱桂榮(2016)などには、張我軍が作成した日本語教材や日本語学習雑誌について言及されている。

¹⁷⁷ 梁任公(1873～1929)は梁啓超であり、清末の政治家で、日本の明治維新に範を取って改革により清朝を強国にする戊戌の変法という政治運動に参加した。変法が失敗した後、日本に亡命した。

¹⁷⁸ 王昇遠「从本体趣味到習得訓誡：周作人之日語觀試論」『魯迅研究月刊』2009(7)、61頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「论日语学习倡导之早，难以企及晚清洋务派；论身体力行、著书倡导之勤，无法比肩梁任公；论日语教育论著受众之广、影响之大，又无以媲美张我军。」

¹⁷⁹ 台湾、満鉄付属地、「満州国」などの日本に支配された地域での日本語学習の歴史は含まない。

に、筆者が渉猟した張我軍の日本語教育関係の著述をもとに、その構成的特徴を解明する上で、張我軍の日本語教育関係の著述が当時の日本語教育界で際立っていた要因を探究する。

2. 中国人の日本語学習の歴史

2.1 中日甲午戦争から中華民国の成立まで

1895年に、中日甲午戦争の敗戦により、清朝政府は明治維新を経て富国強兵を実現した日本に関心を持ち始めた。その翌年には、14名¹⁸⁰の留学生を日本に送った。当時、高等師範学校の校長嘉納治五郎はこれらの留学生を受け入れ、留学生に対する日本語教育を行なうようになった。その後、官費留学生だけでなく、私費の留学生を含めて多くの中国人が日本に留学してきた。上記の留学生の14名の中の唐宝鏢と戢翼翬は、多くの留学生のニーズに応じて、中国人向けの日本語学習書『東語正規』（1900年）を作成した。この学習書は文法、単語、問答、文章の4つの部分からなっている。文法の部分では、日本文字の起源を述べ、平仮名と片仮名の両方を提示し、仮名の発音には漢字とローマ字を併用している。また、アクセントの区別についても述べ、動詞の活用や助詞などを詳しく説明している。単語と問答の部分においては、中国語による音写という従来の提示方法と違い、日本語と中国語訳を提示している。この日本語学習書は従来のものよりはるかに進んでいると言える。その後、日本人が作成したものと、日中両国人の共著のものを含めた日本語学習書が次々と増えていき、留学生数が最も多い1906年には20種に達している。そのうち弘文学院（その後、宏文学院に変更）の教授であった松本亀次郎の『漢訳日本文典』や『日本語教科書』などは留学生の間で愛用された¹⁸¹。

一方、1897年に清朝政府は中国大陸の「京師同文館」と「広州同文

¹⁸⁰ さねとうけいしゅうなどの研究では13名だが、最新の研究では13名（留学生）+1名（補欠留学生）の14名だということが分かる。（酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触』ひつじ書房、2010年、35頁。）

¹⁸¹ 実藤恵秀「中国人の日本語研究」国語文化講座第6巻『国語進出篇』、朝日新聞社、1942年、278-279頁。

館」において「東文館」を増設し、中国での本格的な日本語教育を始めた。その後、日本の明治維新を模倣した「戊戌の変法」の機運に乗り、各地に「東文学堂」という日本語学校が次々と設立された。そして、「日本教習」と呼ばれる日本人教師を日本から招聘し、日本語教育が盛んに行われ、中国大陸の最初の「日本語ブーム」が起きた。西洋の言語より日本語の方が早めに習得しやすく、欧米の学術書籍がほとんど日本語に翻訳されていたため、日本語を通して社会変革に必要な欧米の学術文化を学ぶのが近道であるというのが当時の中国に変革を求めた多くの中国知識人の共通認識だと言える。清末の政治家である張之洞¹⁸²は、著書『勸学篇』で「距離が近く、費用が節約でき、日本語が習得しやすく、西洋の学問は日本人に習得された」などの要因を挙げ、日本に留学して西洋の学問を摂取すべきことを主張している¹⁸³。また、清末維新派の代表的な人物である梁啓超は、明治維新後30年以來、有用な訳書や著書は数千種以上になり、その中でも特に政治学、経済学、哲学、社会学などが詳しいと述べた上で、西洋諸言語を学ぶには5、6年もかかるが、日本語は「数日にして小成になり、数カ月にして大成になる」と指摘した¹⁸⁴。さらに、著名な教育家の蔡元培¹⁸⁵は、西洋の書籍は価格が高く、その中の重要なものがほとんど日本語に翻訳されていることから、日本語が通じれば西洋の書籍が読めると述べ、西洋言語は3、5年かけないと習得できないが、日本語は半年だけで習得でき、極めて簡単だという考えを示した¹⁸⁶。

¹⁸² 張之洞（1837～1909）は清末の政治家で、湖広総督・軍機大臣などを歴任し、清末の近代化運動である洋務運動を積極的に推進し、軍備拡張、教育改革、留学生派遣による人材育成、実学振興などに努めた。

¹⁸³ 張之洞『勸学篇』（下）、田中文求堂、1898年、6頁。

¹⁸⁴ 梁啓超「論学日本文之益」『清議報全編』第4巻、新民社、1901年、73頁。

¹⁸⁵ 蔡元培（1868～1940）は清末民初の政治家、教育家で、中華民国初代教育総長、国立北京大学の学長（1916～1927）などを務めた。

¹⁸⁶ 『蔡元培文集』巻13、日記（上）、錦繡出版事業股份有限公司、1995年、94頁。

2.2 中華民国の成立から 1920、1930 年代の日本語教育

清末の「日本語ブーム」はそれほど長く続かなかった。1912年1月に、清朝が倒れ、中華民国が成立した。その後、中国はしばらく軍閥が割拠する混乱状況に陥り、日本語教育は下降の一途を辿った。特に、第一次世界大戦後、日本の「対華二十一カ条要求」(1915年)により、激しい排日運動が起き、中国人日本留学生の激減や日本人経営の日本語学校の学生が減少し、中国大陸の日本語教育は一時停滞した。この時期には新たに発行された日本語学習書は少なかったが、葛祖蘭の『日語漢訳読本』(1919年)が優れたものだと思われる¹⁸⁷。『日語漢訳読本』は各課の原文に「漢訳」「註解」「備考」の3つのコーナーを設け、原文の中国語訳や文法項目に対する中国語説明が付いている。

1928年に国民党政権が成立した後、「日本語ブーム」が再び起きた。1928年5月に、南京で開催された「第一次全国教育会議」¹⁸⁸において、中等師範学校及び中等職業学校の外国語科目を日本語にすべきという提案が可決された。また、各大学には日本語を第二外国語として開設した所も少なくない。1930年代に入り、九・一八事変や一・二八事変が発生した後、中国大陸で激しい排日運動が起こり、日本人経営の学校では多くの学生が退学し、留日学生の引き上げなども行なわれた。これを機に中国側による自主的な研究が一層促進されたことから、「日本語ブーム」は、1937年の盧溝橋事件まで続いた¹⁸⁹。この時期には、日本語学習書も数多く発行され、1936年には33種類に達しており、質においても前の時期よりは優れたものが多い¹⁹⁰。また、1936年時点の調査に基づいた外務省情報部の報告書には、「北支各大学及民

¹⁸⁷ 実藤恵秀「中国人の日本語研究」国語文化講座第6巻『国語進出篇』、朝日新聞社、1942年、281頁。実藤恵秀の原文には『日本漢訳読本』と書かれているが、実際の書名は『日語漢訳読本』であるため、本稿ではそれを訂正した。

¹⁸⁸ 1928年5月15日から2週間にわたり、南京で開催された全国規模の教育会議をさす。主催者は当時の中国のトップの教育機関の「中華民国大学院」である。当時の教育専門家及び教育関係者など78人が参加した。

¹⁸⁹ JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B10070618200 (第3画像目から第4画像目まで)、三増英夫調中華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況 (附. 日本近代科学図書館論/1937年) (文化_37) (外務省外交史料館)

¹⁹⁰ 実藤恵秀「中国人の日本語研究」国語文化講座第6巻『国語進出篇』、朝日新聞社、1942年、281-282頁。

間日語学校ニ於テ使用セラレツツアル日語教科書乃至自習書ノ類ハ日語熟ノ普及ニ伴ヒ現在数十種ノ多数ニ上ルヘク」のように、多くの日本語教材が発行された状況が記述されている。さらに、「日本人ノ著述ニ係ルモノノ減少スルニ反シ、他方中国人ニ依ル著書ノ激増シツツアルコトニシテ」のように、中国人が作成したものが多いのが特徴的であることが指摘されている¹⁹¹。

張我軍が日本語教材や日本語学習雑誌を作成したのは、折しも日本語教材が多く発行されたこの1930年代であった。表2-1で示したように、1931年から盧溝橋事件までの6年間で、張我軍は8種類16冊の日本語教材を作成し、戦時中にも3種類7冊の日本語教材を作成した。さらに、1934年から1935年までの2年間、編集長として全24号の日本語学習雑誌『日文與日語』（月刊誌）を編集した。さねとうけいしゅう（1981）や馬可英（2017）などがまとめた当時の日本語教材や代表的な作成者から見ると¹⁹²、当時の日本語教育者には張我軍のように一人の力でこれほど多くの日本語教材を作成した者はいない。張我軍の日本語教材作成活動は、日本語教材が大量に発行された1930年代においても際立った存在だったと言える。以下は、これらの教材の構成的特徴を考察する。

¹⁹¹ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B10070618200（第18画像目）、三増英夫調 中華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況（附・日本近代科学図書館論/1937年）（文化_37）（外務省外交史料館）

¹⁹² さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版、1981年、134-135頁。馬可英「1912-1937年中国人編写日語教材之探析」『内蒙古師範大学学報（教育科学版）』、2017年、105頁。

表 2-1 張我軍の日本語教育関係の著述¹⁹³

書名	出版社	初版発行年
『日語基礎読本』	人人書店 ¹⁹⁴	1931.6
『日本語法十二講』	人文書店	1932.9
『日文與日語』(月刊誌、全24号)	人人書店	1934~1935
『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』 (全3種)	人人書店	第1種:1934.3 第2種:1934.9
『現代日本語法大全:分析篇』	人人書店	1934.8
『日語基礎読本自修教授参考書』	同上	1935.1
『現代日本語法大全:運用篇』	同上	1935.3
『高級日文星期講座』(全3冊)	同上	1935.3
『標準日文自修講座』(全5冊)	同上	前期第1冊:1936.6 前期第2冊:1936.7 前期第3冊:1936.8 前期第4冊:1936.9 後期第1冊:1937.6
『最新日語基礎読本』	世界図書公司	1938.1
『日語模範読本』(全3巻)	日文與日語社	巻1:1939.2
『対訳詳注日本童話集』 (全2巻)	新民印書館	上巻:1942.10 下巻:1943.5

3. 日本語学習雑誌『日文與日語』

『日文與日語』は1934年1月の創刊から、1935年12月の停刊まで3巻全24号、毎月の1日に北京の人人書店によって発行された月刊誌である。当該誌は日本語学習関係の内容を中心としたものであり、張我軍が「編輯主任」(編集長)を担当し、当時の代表的な日本文学者である周作人と銭稻孫が編集顧問である。表紙の題字「日文與日語」(写真2-1)は周作人が揮毫したものである。しかし、周作人と銭稻孫は数篇の文章や訳文以外、雑誌の

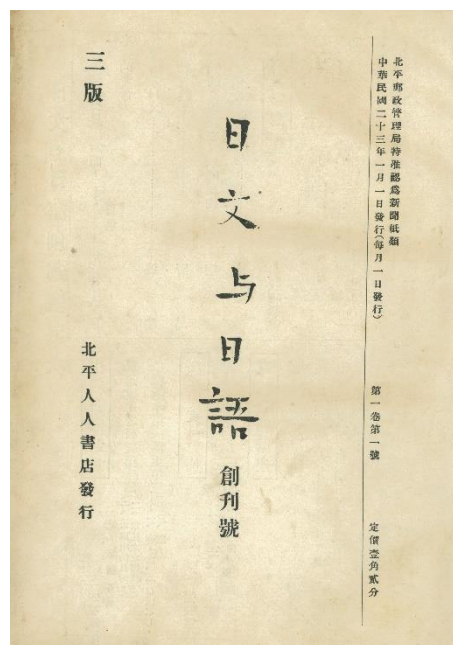


写真 2-1『日文與日語』(創刊号・表紙)

¹⁹³ 『高級日文星期講座』(全3冊)、『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』(全3冊)の3冊目、『日語模範読本』(巻2、巻3)は筆者未見。

¹⁹⁴ 『日語基礎読本』の1~3版は人文書店によって発行され、4版以降は人人書店によって発行された。

編集や運営などにはあまり関与しなかった。雑誌の根幹的な内容となった日本語講座や論述は、主に編集長の張我軍によって執筆された。

『日文與日語』の発行所である人人書店は、張我軍の親友で、張と同じように台湾出身の洪炎秋が経営していた。『日文與日語』以外にも、張我軍の日本語教材のほとんどは人人書店で発行されていた。外務省文化事業部の調査によれば、人人書店は「北平各大学ニ日語講師タル張我軍ヲ初メ四名ノ日語教育関係者ノ出資」により設立されたものである¹⁹⁵。張我軍自身も書店の創立や運営などに大きく関与したと考えられる。

当時、「日本語ブーム」という背景の下、日本語や日本研究関係の雑誌が数多く発行されるようになった。日本の対華侵略が進んできた1930年から1937年までは、林昶（2011）によれば、国家の滅亡を救い民族の生存を図るために、創刊された日本語や日本研究関係の雑誌は15種あった¹⁹⁶。しかし、日本語学習を中心にしたものは少なく、『日文與日語』よりも早く創刊された日本語学習雑誌は『日語研究』¹⁹⁷だけである。また、『日文與日語』に出された宣伝文によれば、当時の日本語や日本研究関係の雑誌には半年未満で停刊したものが多く、『日文與日語』のように長く続けられたものは少ない¹⁹⁸。このことは以下の実藤恵秀（1942）の文章によっても裏付けられている。

日本語研究雑誌は、昭和九年から十二年までに、北平・上海・東京から八種類出てゐるが、そのうちで周作人・錢稻孫を顧問にいただき張我軍編輯、北平人人書店発行の『日文與日語』が創刊（民国二十四年一月）もはやく、内容も充実し、生命も永かった。¹⁹⁹

「内容も充実し、生命も永かった」ということは、『日文與日語』

¹⁹⁵ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B10070618200（第16画像目）、三増英夫調 華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況（附・日本近代科学図書館論/1937年）（文化_37）（外務省外交史料館）

¹⁹⁶ 林昶『中国的日本研究雑誌史』（世界知識出版社、2001年、69頁）を参照。

¹⁹⁷ 1932年9月に北京同学会学校日語研究室によって創刊された隔月刊雑誌である。

¹⁹⁸ 「日文與日語社特別啓示」『日文與日語』（第2巻第4号）、人人書店、1935年。

¹⁹⁹ 実藤恵秀「中国人の日本語研究」国語文化講座第6巻『国語進出篇』、朝日新聞社、1942年、282頁。

の発行部数や日本語教育関係者への影響力及び頁数などからも分かる。『日文與日語』は創刊後、毎号 3000 冊ほど販売され²⁰⁰、読者は中国各省だけでなく、日本やタイなどの海外にも存在し²⁰¹、頁数が最初の 32 頁から漸次 90 頁ぐらいまで増加した。また、1936 年に発行した『総合日語学教程』²⁰²の序言には、『日文與日語』を参考にして作成したことが記述されていることから、『日文與日語』は、当時の他の日本語教育者の参考にもなったと考えられる。『日文與日語』は当時の日本語教育界に一定の影響力を持ったと考えられるが、以下ではこうした影響力を与えた原因を探り出すために、『日文與日語』の構成を見ていく。

3.1 『日文與日語』の構成

『日文與日語』の全 24 号は 3 巻に分かれており、1934 年に発行された 12 号までが第 1 巻で、1935 年 1 月から 6 月までの 6 号分が第 2 巻であり、1935 年 7 月から 1935 年 12 月までの 6 号分が第 3 巻である。第 1 巻の 12 号分はサイズが B5 判であったが、携帯に便利であるように巻 2 以降の各号のサイズは A5 判に変更された。参考として『日文與日語』の目次を表 2-2 に掲げておく。

表 2-2 『日文與日語』の各巻の目次

創刊号	第 1 卷第 2 号
本誌的使命	怎麼樣學習日文 迷生
爲什麼要研究日文 迷生	介紹幾部字典 廢兵
雜談 野馬	初級日語講座 張我軍講述
自批判的立場觀察日本国民性 廢兵 訳	口語法第二講
中国人不認得中国字 洪炎秋	初級読本第五課至第八課
初級日語講座 張我軍講述	翻譯雜談 野馬
口語法第一講	中級日語講座 張我軍講述
初級読本第一課至第四課	單語運用之研究第二講
中級日語講座 張我軍講述	中級読本第四課至第六課
單語運用之研究第一講	文語文講座 張我軍講述
中級読本第一課至第三課	文語文法第二講
文語文講座 張我軍講述	高級日語講座
文語文法第一講	句之組織的研究第二講 張我軍講述
高級日語講座	試題解答 錢稻孫
句之組織的研究第一講 張我軍講述	セメント樽の中の手紙 葉山嘉樹原著 廢兵 訳注
狂言記(正岡子規) 錢稻孫 訳	現代政治思想の主潮とその破綻 大山郁夫原著 張我軍 訳注
現代政治思想之主潮與其缺憾 大山郁夫原著 張我軍 訳注	

²⁰⁰ 張我軍「別矣読者」『日文與日語』(第 3 卷第 6 号)、人人書店、1935 年、2 頁。

²⁰¹ 「人人書店緊要啓示」『日文與日語』(第 3 卷第 6 号)、人人書店、1935 年、4 頁。

²⁰² 工藤文雄・王白淵・蘇光耀・梁耀南『総合日語学教程』南華書店、1936 年。

第 1 卷第 3 号	第 1 卷第 4 号
<p>怎麼樣學習日文（二） 迷生 文法雜談 新聞標題五則 初級日語講座 張我軍講述 口語法第三講 初級讀本第九課至十二課 中級日語講座 張我軍講述 單語運用之研究第三講 中級文範—正直であれ 吉田絃二郎著 文語文講座 張我軍講述 文語文法第三講 高級日語講座 侏儒の言葉 芥川龍之介原著 張我軍訳注 現代政治思想の主潮とその破綻 大山郁夫原著 張我軍訳注 答問欄 記者</p>	<p>日文漢字的幾種詠法 洪炎秋 文化雜談 野馬 新聞標題四則 記者 日文発音の研究 遊培林 基礎日語講座 張我軍講述 口語法第四講 初級讀本第十三課至十八課 文法研究講座 張我軍講述 單語運用之研究第四講 文語文法第四講 句之組織的研究第三講 中級文範 正直であれ 吉田絃二郎著 糜兵訳注 名著訳注 静夜日記 生田春月原著 迷生訳注 現代政治思想の主潮とその破綻 大山郁夫原著 張我軍訳注 答問欄 記者</p>
第 1 卷第 5 号	第 1 卷第 6 号
<p>爲日文課程事告学校当局 迷生 日文発音の研究 遊培林 “Yes” “No” 和『ハイ』『イエ』的比較 洪炎秋 基礎日語講座 張我軍 口語法第五講 基礎讀本第十九課至二十二課 翻譯雜談 野馬 文法研究講座 張我軍 單語運用之研究第五講 文語文法第五講 句之組織的研究第四講 中級文範 論理学の性質 速水滉著 張我軍講解 名著訳注 雷雨の夜 二葉亭四迷 糜兵訳注 現代政治思想の主潮とその破綻 大山郁夫原著 張我軍訳注 答問欄 記者</p>	<p>關於日文課程的另一忠告 迷生 日文発音の研究 遊培林 会話講座 洪炎秋 訳注常用日語会話（第一、二課） 基礎日語講座 初級口語法第六講 張我軍 基礎讀本第二十三課至二十六課 張我軍 日語作文的基礎 弥堅 中級文範 論理学の性質（下） 速水滉著 張我軍講解 晩秋の日 小川未明著 糜兵訳注 文法研究講座 張我軍 單語運用之研究第六講 文語文法第六講 句之組織的研究第五講 名著訳注 低能児 加藤武雄著 迷生訳注 現代政治思想の主潮とその破綻 大山郁夫原著 張我軍訳注 時文選訳 記者 答問欄 記者</p>
第 1 卷第 7 号	第 1 卷第 8 号
<p>同字異讀的漢字 洪熈 日文発音的研究 遊培林 基礎日語講座 初級口語法第七講 張我軍 基礎讀本第二十三課至二十六課 張我軍 日語作文的基礎 弥堅 中級文範 思想 金子馬治著 迷生訳解 風文語文 徳富蘆花作 野馬訳解 会話講座 炎秋 訳注常用日語会話（第三、四課） 文法研究講座 張我軍 單語運用之研究第七講 句之組織的研究第六講 名著訳注 武器（侏儒の言葉） 芥川龍之介作 糜兵訳注 現代政治思想の主潮とその破綻 大山郁夫原著 張我軍訳注 時文選訳 答問欄 記者</p>	<p>詭讀慣的常用漢字 洪熈 日文発音的研究 遊培林 基礎日語講座 初級口語法第八講 張我軍 基礎讀本第三十二課至三十二課 張我軍 日語作文的基礎 弥堅 中級文範 社会思想の部類 高島素之著 糜兵訳解 要談と閑話（文語） 徳富蘇峰作 糜兵訳解 会話講座 炎秋 訳注常用日語会話（第五課） 文法研究講座 張我軍 單語運用之研究第八講 句之組織的研究第七講 書簡文講座 炎秋 名著訳注 現代政治思想の主潮とその破綻 大山郁夫原著 張我軍訳注 官僚フアツシヨ（懸賞訳題） 時文選訳 答問欄 記者</p>

第1卷第9号		第1卷第10号	
日文発音の研究 遊培林		名作名訳対読講義 錢稻孫	
基礎日語講座		日文発音の研究 遊培林	
初級口語法第九講 張我軍		基礎日語講座	
基礎読本第三十六課至三十七課 張我軍		日語之敬語法 張我軍	
日語作文の基礎 弥堅		基礎読本第三十八課至四十一課 張我軍	
中級文範		日語作文の基礎 弥堅	
母と蘆 西條八十作 廢兵訳解		中級文範	
浪漫的結婚と論理的結婚 米田莊太郎著 廢兵訳解		科学の特質 石原純 廢兵訳解	
うれしさ(文語) 幸田露伴著 野馬訳解		會話講座	
會話講座		第七課 炎秋	
第六課		文法研究講座	
文法研究講座		單語運用之研究第十講 張我軍	
單語運用之研究第九講		句之組織的研究第九講	
句之組織的研究第八講		書翰文講座	
書翰文講座		候文の文法概要 炎秋	
候文の文法概要		名著訳注	
名著訳注		批評と門志 片上伸 迷生訳注	
批評と門志(論文) 片上伸著 迷生訳注		転生 志賀直哉 張我軍訳注	
転生(小説) 志賀直哉 張我軍訳注		対訳加注時文選載	
対訳加注時文選載		懸賞翻訳	
懸賞翻訳		答問欄	
答問欄			
第1卷第11号		第1卷第12号	
名作名訳対読講義 錢稻孫		名作名訳対読講義 錢稻孫	
日文発音の研究 遊培林		日文発音の研究 遊培林	
基礎日語講座		基礎日語講座	
前提句法・不完全の副詞 張我軍		基礎語法 張我軍	
基礎読本第四十二課至四十六課 張我軍		基礎読本第四十七課至五十一課 張我軍	
日語作文の基礎 弥堅		日語作文の基礎 弥堅	
中級文範		中級文範	
社会思想史序説 波多野鼎著 廢兵訳解		不潔を厭はぬ人々 田上三郎 廢兵訳解	
芥川龍之介君よ(文語) 菊池寛作 迷生訳解		會話講座	
會話講座		第九課 炎秋	
第八課		文法研究講座	
文法研究講座		單語運用之研究第十二講 張我軍	
單語運用之研究第十一講		句之組織的研究第十一講	
句之組織的研究第十講		書簡文講座	
書簡文講座		少年の悲哀 炎秋	
名著訳注		名著訳注	
少年の悲哀 国木田独歩 張我軍訳注		少年の悲哀 国木田独歩作 張我軍訳注	
対訳加注時文選載		対訳加注時文選載	
懸賞翻訳欄		答問欄	
答問欄			
第2卷第1号		第2卷第2号	
卷頭語		日本の新聞與雜誌 張我軍	
關於日本語 知堂		中級日語講座	
名作名訳対読講義 錢稻孫		中級文範	
中級日語講座		作文初歩 廢兵 迷生講解	
中級文範 廢兵 迷生講解		日文漢訳乱談 張我軍講述	
作文初歩 張我軍講述		會話講座	
日文漢訳乱談 野馬		書簡文講座	
會話講座		文法研究	
書簡文講座		否定的動詞 炎秋	
文法研究		高級日語講座	
新動詞 弥堅		高級文範 菖蒲の節供 張我軍講解	
高級日語講座		名著訳注 空想的社会主义 張我軍訳注	
高級文範 雨の趣味 黒田鵬心作 張我軍講解		時文訳注 迷生訳注	
名著訳注 空想的社会主义 堺利彦 張我軍訳注		讀者論壇	
時文訳注 迷生、記者訳注		日語難解句 趙耀宗	
作文乙改続録 錢稻孫		答問欄	
答問欄			

<p>第2卷第3号</p> <p>名作名訳対読講義(続) 錢稻孫 人名地名辞典紹介 記者 中級日語講座 中級文範 糜兵 迷生講解 作文初歩 張我軍講述 日文漢訳乱談 野馬 會話講座 炎秋 書簡文講座 炎秋 漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注 高級日語講座 高級文範 吾輩は猫である 夏目漱石作 張我軍講解 名著訳注 空想的社會主義 堺利彦 張我軍訳注 時文訳注 糜兵 迷生訳注 読者論壇 日語難解句 趙耀宗 答問欄</p>	<p>第2卷第4号</p> <p>「ツ」在什麼時候読促音 日文與日語社特別啓事 日文漢訳課題 中級日語講座 中級文範 糜兵 迷生講解 作文初歩 張我軍講述 日文漢訳乱談 野馬 漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注 會話講座 炎秋 書簡文講座 炎秋 高級日語講座 勝負事 菊池寛作 張我軍訳注 空想的社會主義 堺利彦 張我軍訳注 アメリカの發明界展望 矢部利茂 M. S. 訳注 時文訳注 張我軍 迷生訳注 答問欄</p>
<p>第2卷第5号</p> <p>日文叢談 知堂 中日対訳課題 中級日語講座 中級文範 糜兵 講解 日文漢訳乱談 野馬 漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注 會話講座 炎秋 書簡文講座 炎秋 高級日語講座 勝負事 菊池寛作 張我軍訳注 空想的社會主義 堺利彦 張我軍訳注 時文訳注 糜兵 迷生訳注 日文漢訳課題解答 答問欄</p>	<p>第2卷第6号</p> <p>日文叢談 知堂 錢周二顧問致編者信 中日対訳課題 中級日語講座 中級文範 迷生 糜兵 講解 日文漢訳乱談 野馬 漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注 會話講座 炎秋 書簡文講座 炎秋 高級日語講座 勝負事 菊池寛作 張我軍訳注 空想的社會主義 堺利彦 張我軍訳注 答問欄</p>
<p>第3卷第1号</p> <p>日文叢談 知堂 日本羅馬字的問題 張我軍 中日対訳課題 中級日語講座 中級文範 糜兵 講解 日文漢訳乱談 野馬 漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注 會話講座 炎秋 書簡文講座 炎秋 高級日語講座 空襲と民心の統制 保科貞次著 張我軍訳注 絵のない絵本 林房雄 張我軍訳注 時文訳注 芸芸訳注 日本研究講座 迷生 糜兵述 答問欄</p>	<p>第3卷第2号</p> <p>日文叢談 知堂 中日対訳課題 日語成語小辞林 編輯部輯解 中級日語講座 中級文範 糜兵 講解 日文漢訳乱談 野馬 漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注 會話講座 炎秋 書簡文講座 炎秋 高級日語講座 空襲と民心の統制 保科貞次著 張我軍訳注 絵のない絵本 林房雄 張我軍訳注 時文訳注 記者訳注 日本研究講座 迷生 糜兵述 答問欄</p>
<p>第3卷第3号</p> <p>日文叢談 知堂 中日対訳課題 日語基礎文選講義 日語成語小辞林 編輯部輯解 中級日語講座 中級文範 糜兵 講解 日文漢訳乱談 野馬 「振り仮名」與「送り仮名」 張我軍 漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注 高級日語講座 現代世界外交思潮及びその動向 芦田均 張我軍訳注 絵のない絵本 林房雄 張我軍訳注 時文訳注 記者訳注 日本研究講座 迷生 糜兵述 答問欄</p>	<p>第3卷第4号</p> <p>日文叢談 知堂 日語基礎文選講義 日語成語小辞林 編輯部輯解 中級日語講座 中級文範 糜兵 講解 日文漢訳乱談 野馬 日語動詞的自他性 張我軍 漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注 會話講座 炎秋 書簡文講座 炎秋 高級日語講座 現代世界外交思潮及びその動向 芦田均 張我軍訳注 悪魔 谷崎潤一郎作 張我軍訳注 時文訳注 記者訳注 日本研究講座 迷生 糜兵述 答問欄</p>

第3巻第5号	第3巻第6号
日語基礎文選講義	別矣読者 張我軍
日語成語小辞林 編集部輯解	人人書店緊要啓事
中級日語講座	二十五年以後の工作 張我軍
中級文範 廃兵講解	日本の文章記録法與標點符号 張我軍
日文漢訳乱談 野馬	日語成語小辞林 編集部輯解
漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注	中級日語講座
会話講座 炎秋	中級文範 廃兵講解
書簡文講座 炎秋	日文漢訳乱談 野馬
高級日語講座	漫画ぼつちゃん 夏目漱石原著 近藤浩一路画 野馬訳注
現代世界外交思潮及びその動向 芦田均 張我軍訳注	会話講座 炎秋
悪魔 谷崎潤一郎作 張我軍訳注	書簡文講座 炎秋
答問欄	高級日語講座
	現代世界外交思潮及びその動向 芦田均 張我軍訳注
	悪魔 谷崎潤一郎作 張我軍訳注
	答問欄

(『日文與日語』第1、2、3巻の目次より筆者作成²⁰³)

表2-2で示したように、各号に設けられたコーナーは完全に同じわけではないが、『日文與日語』の内容は主に「日本語教育関係の論述」、「日本語講座」、「答問欄」(問答コーナー)の3つの部分に分けることができる。以下では、各部分の具体的な構成的特徴を見ておく。

3.1.1 『日文與日語』における日本語教育関係の論述

日本語教育関係の論述は主に『日文與日語』の各号の巻首に置かれ、合計29篇ある。この29篇の論述は内容により「言語知識の学習に関する論述」と「執筆者の日本語教育観を表す論述」の2種に大別することができる。各論述の題名、内容概要、執筆者、掲載巻・号を表2-3、2-4にまとめた。それによると、張我軍が執筆した論述が最も多く21篇に達している。ほかに、周作人、錢稻孫、洪炎秋、游培林などの執筆者による数篇の論述が見られる。

「言語知識の学習に関する論述」(表2-3)は16篇であり、主に日本語学習における疑問や難点を解くためのものである。特に、「ハ」と「ガ」の区別や日本語のテンスなどの、現在の日本語教育学上でも常に問われる問題に対する回答も含まれ、学習者にとっての日本語の難点に十分配慮して執筆されたものだと考えられる。これも張我軍が

²⁰³ 第3巻第6号に掲載された「別矣読者」という張我軍の文章によれば、「迷生」「廃兵」「野馬」などのペンネームを署名した文章及び、署名していない文章は、すべて張我軍によって執筆された。

積み重ねた日本語教育実践経験によるものだと言える。

「執筆者の日本語教育観を表す論述」(表 2-4)は 13 篇あり、日本語教育の現状、日本語学習方法、日本語学習の必要性などに関する執筆者の見解である。これらの論述は周作人による 2 篇以外は、すべて張我軍が執筆したものであることから、『日文與日語』は張我軍が日本語教育理念を発信する場所でもあると分かる。これらの論述の詳細については次章で述べるが、「為什麼要研究日文」(「なぜ日本語を研究するのか」、創刊号)及び、「怎麼樣學習日文」(「どのように日本語を勉強するのか」、1 卷 2 号)の 2 篇の論述は、葛祖蘭、蔣君輝などの当時の名の知れた日本語教育者による論述とともに、日本語教育研究書『怎樣研究日語』²⁰⁴に転載されたことから、当時の日本語教育界に一定の影響を与えたと考えられる。

表 2-3 言語知識の学習に関する論述 (『日文與日語』)

題名	内容概要	執筆者	巻・号
雑談	日本語の挨拶文について	張我軍	創刊号
文法雑談	「ハ」と「ガ」の区別について	張我軍	1-3
文法雑談	「である」の品詞について	張我軍	1-4
日文漢字的幾種讀法	日本語の漢字の音読及び訓読	洪炎秋	1-4
日文発音の研究	日本語の発音に関する研究	游培林	1-4~12
“Yes” “No” 和『ハイ』『イイエ』的比較	英語の「Yes」「No」と日本語の「ハイ」「イイエ」との比較	洪炎秋	1-5
文法雑談	日本語のテンスについて	張我軍	1-5
同字異読的漢字	複数の読み方を持つ漢字	洪炎秋	1-7
訛読慣的常用漢字	誤って伝えられている発音を持つ漢字	洪炎秋	1-8
新動詞	「浅草る」「デコる」などの新動詞	張我軍	2-1
否定的動詞	「いけない」「かまはない」などの用法	張我軍	2-2
「ツ」在什麼時候讀促音	「ツ」を促音で読む場合について	張我軍	2-4
日本羅馬字的問題	日本語のローマ表記について	張我軍	3-1
「振り仮名」與「送り仮名」	日本語の振り仮名や送り仮名の用法などについて	張我軍	3-3
日語動詞的自他性	日本語の自他動詞について	張我軍	3-4
日本の文章記錄法與標點符号	日本語の表記方法と句読点の用法	張我軍	3-6

(『日文與日語』より筆者作成)

²⁰⁴ 『怎樣研究日語』は 1934 年 5 月に初版が「日語読書会」によって編集され、上海の開華書局によって発行された日本語教育研究書である。

表 2-4 執筆者の日本語教育観を表す論述 (『日文與日語』)

題名	内容概要	作成者	巻・号
本誌的使命	『日文與日語』の創刊動機	張我軍	創刊号
爲什麼要研究日文	日本語学習の必要性	張我軍	創刊号
怎麼樣學習日文	日本語學習の方法	張我軍	1-2
介紹幾部字典	日本語辭書の使い方	張我軍	1-2
翻譯雜談	日本語翻譯の現状と問題	張我軍	1-2
怎麼樣學習日文 (2)	日本語學習の方法	張我軍	1-3
爲日文課程事告学校当局	学校の日本語教育に対する提言	張我軍	1-5
關於日文課程的另一忠告	学校の日本語教育に対する提言	張我軍	1-6
關於日本語	日本語學習の必要性	周作人	2-1
日本的新聞與雜誌	日本の新聞や雜誌を読む方法	張我軍	2-2
日文叢談	日本語翻譯や日本語學習の方法	周作人	2-5~3-4
別矣讀者	停刊原因や日本語學習の必要性	張我軍	3-6
二十五年以後的工作	停刊後の日本語教材作成計画	張我軍	3-6

(『日文與日語』より筆者作成)

3.1.2 『日文與日語』における日本語講座

日本語講座は『日文與日語』の中で最も多くの紙面を占め、主に張我軍によって執筆され、当該誌の根幹的な部分だと言える。前掲した『日文與日語』の目次(表 2-2)で示したように、創刊号の日本語講座は「初級日語講座」、「中級日語講座」、「文語文講座」、「高級日語講座」という4つの講座から構成されている。その後、講座名が変更されたり、講座が合併されたりしたが、各号の内容はほぼ前号の内容に続くものである。ほかに、第1巻第6号から増設された「会話講座」及び、第1巻第8号から増設された「書簡文講座」などのような、会話能力や実用文作成能力の習得を目指す講座も含まれている。「会話講座」と「書簡文講座」の執筆者は洪炎秋である。

「会話講座」と「書簡文講座」以外の講座は、内容の難易度により、「初級講座」と「中上級講座」の2種に大別することができる。「初級講座」は第1巻のみで、「中上級講座」は全24号にわたって掲載された。「初級講座」にしても、「中上級講座」にしても、主に「文法説明」と「読本」の2つの部分により構成されている²⁰⁵。

²⁰⁵ 「文法説明」と「読本」以外に、作文の書き方や翻訳方法に関する解説もある。

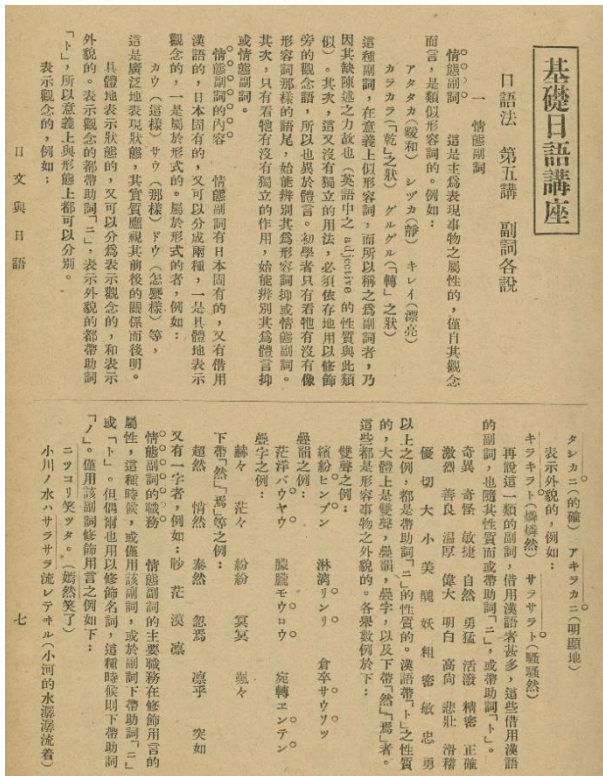


写真 2-2 『日文與日語』(1-5・p7)
(初級講座・文法説明)

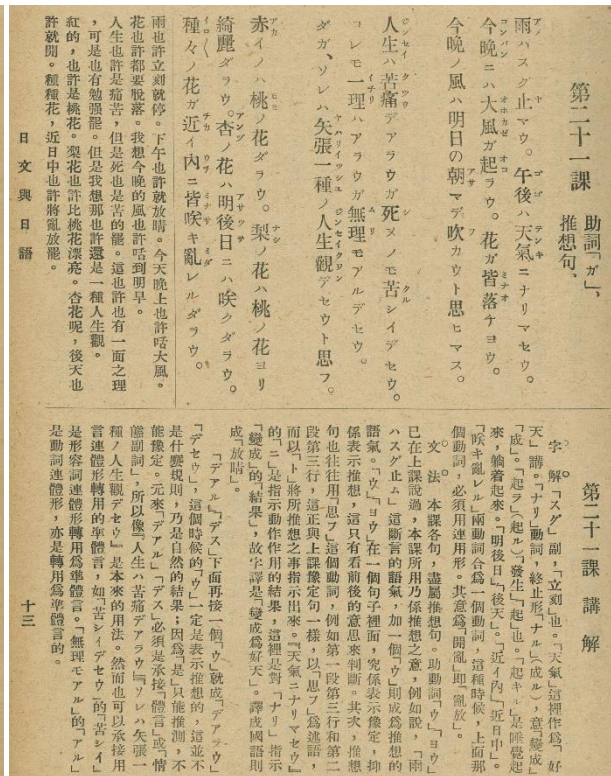


写真 2-3 『日文與日語』(1-5・p13)
(初級講座・読本)

文法説明（写真 2-2）は日本語の文法体系に関する解説である。張我軍は日本語の文法体系を説明する際に、山田孝雄の『日本文法講義』と『日本口語法講義』を参考にし、語論と句論に分け、語論をさらに語の性質と語の用い方に分けている。また、それを易から難への原則に従い、「初級講座」では、口語文法の語の性質を中心に説明し、「中上級講座」では、口語文法の語の用い方と句論を中心とし、文語文法を兼ねたものである。

読本（写真 2-3）は各講座の中心的な教授内容で、本文、「講解」（または「註解」）、「訳文」（中国語訳）²⁰⁶からなっている。「初級講座」では、読本は 51 課で構成され、1～6 課は発音の部分であり、7～51 課の本文は張我軍の執筆した日本語文章で、歴史的仮名遣いが採用されている。発音の部分では、平仮名と片仮名がほぼ同時に導入されているが、第 7 課からの文章では、振り仮名が付いた漢字片仮名交じり文がまず導入され、第 27 課以降は振り仮名が付いた漢字平仮名交じり

²⁰⁶ 「初級講座」の読本の第 1～7 課は発音部分で、「訳文」が付いていない。

文になっている。発音部分以外の各課の文章は、ほとんどが3段落により構成されている。「中上級講座」では、読本の本文は張我軍が執筆したものではなく、他から採録した日本語の文章(57篇)である。また、日本の新聞から採録した記事は、「時文選訳」というコーナーに収録され、中上級日本語学習の素材とされた。

3.1.3 『日文與日語』における「答問欄」

上述の日本語教育関係の論述及び日本語講座以外に、巻末に設けられた「答問欄」(写真2-4)という問答コーナーも『日文與日語』の重要な一部である。「答問欄」は第1巻第3号から設けられ、読者からの質問及びそれに対する張我軍の回答を掲載しているコーナーである。

「答問欄」に投稿することができる質問の種類は2種類に規定されている。一つは読者が日本語の書籍や雑誌などを読む際に、意義や文法が理解できないところに関する質問である。もう一つは、日本語研究及び各科目に必要な日本語参考書の選択に関する質問である。投稿方法は郵便はがきを使用しなければならず、投稿資格は1年以上の予約購読者で1カ月に1回のみに限られている²⁰⁷。このような投稿資格を設定した「答問欄」は、長期購読者を拡大させるために設けられたコーナーだと思われる。「答問欄」が最初の半頁から徐々に5、6頁まで増えてきたことから、多くの人が『日文與日語』を長期購読し質問

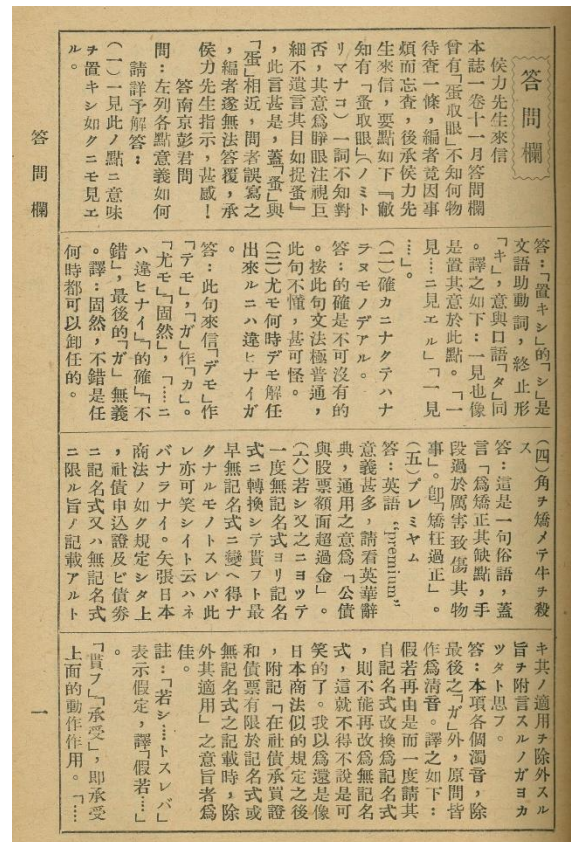


写真 2-4 『日文與日語』(2-1・答問欄)

²⁰⁷ 「優待長期読者」『日文與日語』第2巻第1号、1935年、80頁。

してきたことが窺える。

一方、教室では目の前に教師がいるので、疑問点がある場合、回答が得られる。それに対し、自修の場合は疑問点があっても回答が得られない。「答問欄」は自修学習者にとって疑問の解決の場所になると考えられる。また、「答問欄」以外に、『日文與日語』には第1巻第7号から設けられた「懸賞翻訳」というコーナーもある。「懸賞翻訳」は読者からの翻訳文を募集し掲載しているコーナーである。具体的な方法としては、まず原文が日本語である文章（難解な単語や表現に関する説明付き）を掲載して読者に翻訳文を募集する。その後、応募した翻訳文の中の優れたものに対し講評した上で、翻訳文の質によって順位を定め、3位以内に入った読者に1冊の日本語著書を賞品として贈り、1位の翻訳文を『日文與日語』に掲載する。「懸賞翻訳」のほかに、読者に日本語学習における心得などを発表させるために、第2巻第2号から「読者論壇」というコーナーが増設された。これらのコーナーは「答問欄」ほど長く続かなかったが、その設置意図から自修学習者の立場に配慮し学習者との交流を図る編集長の張我軍の姿勢が見られる。

3.2 『日文與日語』の構成的特徴—まとめとして—

以上述べた『日文與日語』の構成から見れば、様々な日本語学習者のニーズに対応できたことが『日文與日語』が持つ顕著な特徴だと言える。具体的には、『日文與日語』は口語文法だけでなく、文語文法も扱っていることから、文語文で書かれた法律書や医学書及び、日本の古文書を研究する学習者のニーズにも対応できる。また、「会話講座」と「書簡文講座」が設けられたことで、将来日本留学を目指した学習者のニーズにも対応できる。ほかに、「答問欄」の設置及び、日本語学習における疑問や難点を解くための論述は、自修学習者からの疑問に回答する場となり、彼らのニーズに応えることができたと考えられる。

さらに、『日文與日語』の日本語講座は、初級、中級、上級の3つ

の段階に分かれ、各レベルの日本語学習者が利用できる。また、これらの日本語講座は、ほぼ張我軍 1 人で執筆されており、各号の内容は前号から続くことから、学習者は各号の内容に沿って易から難へ一歩ずつ学習することができる。したがって、『日文與日語』は雑誌であるが、その性格は日本語教材に近いものと言える。これも当時の他の日本語学習雑誌と大きく違うところである。『日文研究』²⁰⁸、『中華日語月刊』²⁰⁹、『日語月刊』²¹⁰などの、『日文與日語』とほぼ同時期に発行された日本語学習雑誌の内容は、ほぼ寄稿によって構成されている。『日文與日語』とともに、当時の優れた日本語学習雑誌と思われる『日文研究』を例とすれば、第 2 号には「基礎読本」が 2 種類あり、執筆者がそれぞれ違い、燕訊と冀林という 2 人であるが、第 3 号には「基礎読本」が 1 種類となり、執筆者が松本亀次郎となった。この構成だけから見ても、各号の内容間のつながりはかなり弱いと言える。これらの雑誌と比べると、各号の内容が続く『日文與日語』は、当時では特別な存在だと考えられる。これも当時の日本語学習雑誌に比べ『日文與日語』が長く続いた原因の一つであろう。

4. 多種類の日本語教材

前述のように、雑誌『日文與日語』の編集以外に、張我軍は 11 種類 23 冊の日本語教材を作成した。これほど多くの日本語教材がそれぞれ関連性を持ち、様々なニーズに対応できるものなのか、それとも、各教材が関連性を持たずバラバラに存在していただけなのか。この問題の解明は、張我軍の日本語教材を位置付ける際の重要なポイントだと言える。以下ではこの問題をめぐり、これらの教材の作成目的と構成を見ておく。

²⁰⁸ 『日文研究』は 1935 年 7 月に東京で創刊され、東京日文研究社によって発行された雑誌で、第 6 号（1936 年 3 月）まで発行された。

²⁰⁹ 『中華日語月刊』は 1937 年 1 月に上海で創刊され、中華日語月刊社によって発行された雑誌（全 3 期）である。

²¹⁰ 『日語月刊』は 1935 年 7 月に上海で創刊され、東方日文補習学校に編集され発行された雑誌（全 6 期）である。

4.1 『日語基礎読本』 張我軍による最初の日本語教材

4.1.1 『日語基礎読本』の作成

『日語基礎読本』は張我軍の作成した初めての日本語教材であり、初版発行が1931年6月である。その後、1937年6月までに10版を重ね、第4版以前は北京の人文書店によって発行され、第4版以降は人人書店の発行に移った。この教材については、使用先や発行部数などの詳細なデータが見つからないが、盧溝橋事件まで10版ほど重ねて発行されたことから、学習者に好評を博していたと考えられる。秦賢次(1989)によれば、この教材は10数か所の大学で教科書として採用され、張我軍の日本語教材の中では

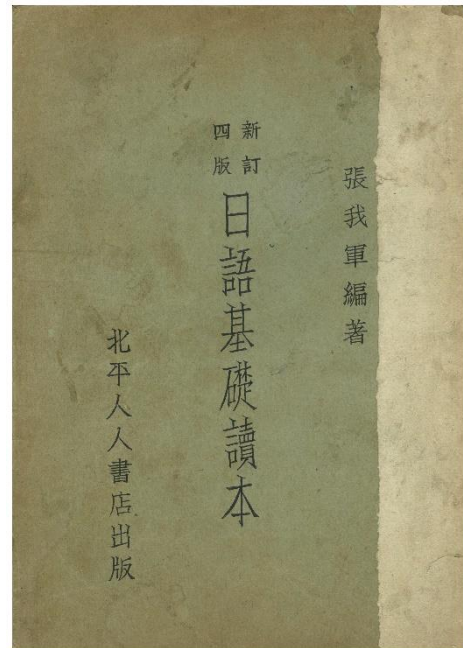


写真 2-5 『日語基礎読本』
(第4版・表紙)

一番売れたものである²¹¹。また、『日文與日語』に掲載された広告の内容によれば、この教材は1000人以上の学習者に日本語の読解力を習得させ、最も優れた日本語入門書だと当時の日本語教師たちに認められ、第4版が発行されてから半年間で3000冊ほど販売された²¹²。さらに、この教材が張我軍の開設した日本語学習塾で使われ、当時の学生はこの教材について「彼が開設した初級日文班を修了した後、卒業証明書などはもらえないが、使われた教材『日語基礎読本』とその『練習帳』は大切にする価値がある」のように高い評価を与えた²¹³。

『日語基礎読本』は初版発行の後、数回の改訂が行なわれてきた。初版より第3版までは数か所改訂されたが、第4版(1934年7月発行、写真2-5)は大きく改訂され、第4版以降はあまり改訂されてい

²¹¹ 秦賢次「台湾新文学運動的奠基者—張我軍」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、343頁。

²¹² 『日文與日語』第2巻第4号、人人書店、1935、広告頁。

²¹³ 「兩個日文教授之評價」『大学新聞(北平)』1934年8月25日。

ない²¹⁴。盧溝橋事件以降の 1938 年 1 月に発行された『最新日語基礎読本』は「最新」が付けられたが、北京淪陥前に発行された『日語基礎読本』（4 版以降の各版）の内容とほぼ同じである。『最新日語基礎読本』の発行所の世界図書会社が天津のフランス租界にある出版社であるため、この教材は戦時中においても租界などのような限定された地域で一時的に使用された可能性が高い。

第 4 版以前の各版の教科書は現時点では手に入っていないが、第 4 版の序言によれば、第 3 版と違っている点は以下の 5 点である。

- ① 基礎課は 15 課増え、55 課となった。
- ② 口語文章は減少し、文語文章が増加した。
- ③ 本文の内容が増え、内容の出現順序が改められた。
- ④ 各課に付けられた簡単な文法解説は削除され、その代わりに副教材として『現代日本語法大全：分析篇』と『現代日本語法大全：運用篇』という詳細な文法解説書が編集された。
- ⑤ 練習問題は 500 ぐらいまで増加している。

この改訂の内容には、文体、内容の難易度、練習問題などへの張我軍の配慮が見られる。また、簡単な文法解説の代わりに、副教材としての文法書の発行が提示されている。第 4 版の序言によれば、こうした改訂は実際の使用経験に基づいたものである。つまり、張我軍の教材の作成理念及び教授理念は、実際の教学経験の蓄積に伴い、成熟していったものである。以下では、第 4 版の『日語基礎読本』の構成を分析した上で、上記のように改訂した理由を考察する。

4.1.2 『日語基礎読本』（第 4 版）の構成的特徴

第 4 版の『日語基礎読本』は、1934 年 7 月に発行され、サイズは A5 判、頁数は 152 頁で、表紙、序言、目次、「文字與発音」「基礎語法」「模範文選」の順に構成されている。そのうち、「文字與発音」は 10 課で、14 頁を占め、「五十音」と「いろは」が提示され、仮名の読

²¹⁴ 張我軍「新訂版序」『日語基礎読本』（4 版）、1934 年、序言頁。

み書きを主な内容とし、片仮名と平仮名が同時に導入されている。

「基礎語法」は45課で、74頁を占め、主に張我軍が執筆した日本語の文章からなっている。写真2-6で示したように、文章に含まれた主な文法項目が各課の題名としてそのまま掲載され、日本語の基礎文法の学習が中心的内容とされている。各課の文章は歴史的仮名遣いを採り、第30課までは漢字片仮名交じり文で、第30課以降は漢字平仮名交じり文になり、漢字に振り仮名が付いている。さらに、本文の上部にはこの頁で扱う文法・句型項目が提示されている。ほかに、18頁には、「代名詞一覧表」及び助詞の分類に関する簡単な説明が付いている。また、25頁から28頁まで動詞及び形容詞の活用表が付いている。

「模範文選」は22課で構成され、59頁を占め、他から採録した日本語文章からなり、第77課以外はすべて漢字平仮名交じり文で、振り仮名が付いている。また、教材の最後には「口語助動詞表」「文語形容詞表」「『なり』『たり』的活用」「文語助動詞表」という4つの表が付いている。

こうした構成から見れば、第4版の『日語基礎読本』は、当時、主流であった日本語教材の編纂方法と違い、特徴的なことは「註解」という詳細な文法説明の部分と中国語訳文が付けられていないことである。前述の第4版の改訂内容により、第3版までの『日語基礎読本』もほかの多くの日本語教材と同じように、「註解」という部分が付いているが、第4版ではその部分が削除され、副教材として発行されるようになった。こうした改訂は、教室での使用に十分配慮された結果だと言える。つまり、自修する場合は、「註解」と中国語訳文が

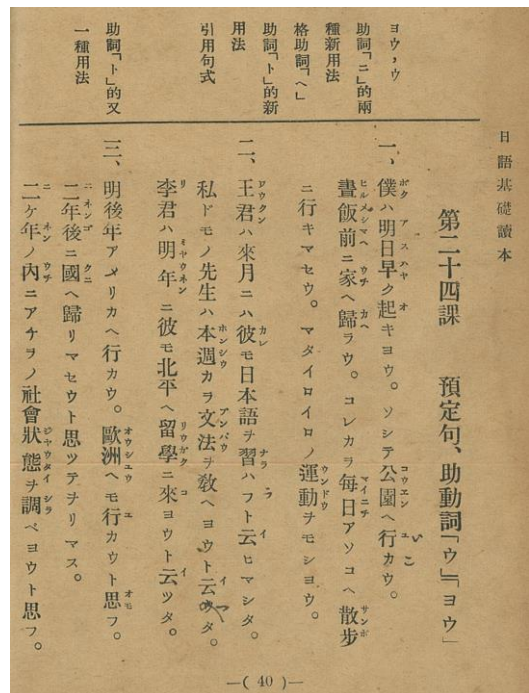


写真 2-6 『日語基礎読本』(4版)
 (「基礎語法」・p40)

付いた教材は役立つが、教室でそれを使用する場合は、教師が文法説明や翻訳を行なう際に、もともと教材に付けられた文法説明や中国語訳文による制約を受け、実際の教学の進度状況により柔軟に対応しにくい。それに対し、第4版の『日語基礎読本』のように文法説明の部分を副教材にした場合は、教師が副教材を参考にした上で、クラス状況に合わせ適切に対応できるようになる。こうした改訂は当時の日本語教師のニーズにうまく応えたものだと考えられる。

そのほか、練習問題が多く設けられていることが『日語基礎読本』のもう一つの特徴である。「基礎語法」の部分には、課ごとに「課題」という6、7問の練習問題が付いている。また、第20課と第21課の間に、第30課と第31課の間及び、第40課と第41課の間に、それまで学んだ文法知識に対する「総練習」という形で10数問の練習問題が設けられている。『日語基礎読本』の練習問題は合わせて500問に達している。また、前述の改訂内容により、練習問題の増加が改訂された第4版の主な特徴の一つであることが分かる。

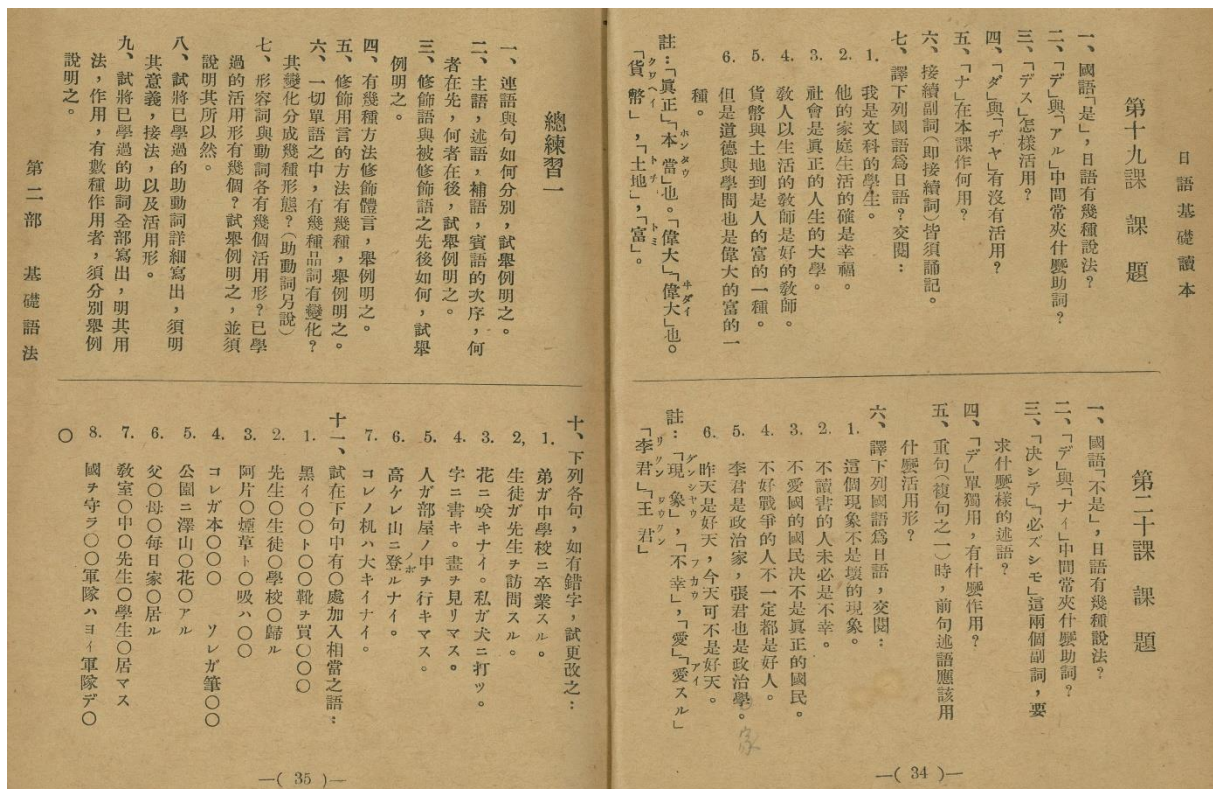


写真 2-7 『日語基礎読本』(第4版・第19、20課の練習問題及び総練習一・p34、35)

以下では、写真 2-7 で示した第 19 課の「課題」と「総練習一」の一部を日本語に翻訳し、具体的な練習問題の形式を見ておく。

第 19 課 課題（『日語基礎読本』第 4 版、p34）

- 一、中国語の「是」、日本語には幾種類の言い方があるか。
- 二、「デ」と「アル」の間には常にどの助詞が入るか。
- 三、「デス」はどのように活用するか。
- 四、(略) 五、(略) 六、(略)
- 七、以下の中国語を日本語に翻訳して提出しなさい。

1. 我是文科的學生。
2. 他的家庭生活的確是幸福。
3. 社會是真正的人生的大學。
4. (略) 5. (略) 6. (略)

注：「真正」「本當」也。「偉大」「偉大」也。「貨幣」「土地」「富」

総練習一（『日語基礎読本』第 4 版、p35）

- 一、連語と句はどのように区別するか。例を挙げて説明しなさい。
- 二、(略) 三、(略) 四、(略) 五、(略) 六、(略)、七、(略)
- 八、(略)

- 九、すでに学んだ助詞及びその用法と意味を書きなさい。

複数の意味を持つ助詞の場合、それぞれ例を挙げて説明しなさい。

- 十、以下の文に間違いがあれば、修正しなさい。

1. 弟ガ中学校ニ卒業スル。
2. 生徒ガ先生ヲ訪問スル。
3. 花ニ咲キナイ。私ガ犬ニ打ツ。
4. 字ニ書キ。畫ヲ見リマス。
5. 人ガ部屋ノ中ヲ行キマス。
6. (略) 7. (略)

- 十一、以下の○のところに適当な語を入れなさい。

1. 黒イ○○ト○○靴ヲ買○○○
2. 先生○生徒○学校○帰ル
3. 阿片○煙草ト○吸ハ○○
4. コレが本○○○
5. (略) 6. (略) 7. (略) 8. (略)

第 19 課の「課題」を例にすると、一から六までの各問は、主に読本の文章に含まれた文法知識を学習者に説明させるものであり、第七問は学習者の読解力の養成を目指す翻訳練習である。「総練習」の場合は、「総練習一」(写真 2-7)を例にとると、一から九までの各問は、同じく文法知識を学習者に説明させるものであるが、これまで学んだ文法知識を学習者に系統的にまとめさせるものである。また、「誤り訂正問題」(第十問)や「穴埋め問題」(第十一問)などのような、現在でもよく使われる問題形式が入っている。これらの練習問題は形式的に練習という性格が薄い部分があるが、各課の学習要点がほぼ含まれているため、学習者が学習効果を確認する手がかりとして重要な役割を果たすことができる。また、練習問題の答えが掲載されていないことから、第 4 版の『日語基礎読本』は教室での使用を想定した教材だと考えられる。さらに、『日語基礎読本』の序言には「本書を教材として使用する時には、各課の練習問題をやり終え先生に訂正してもらわなければならない。これをやらなかったり何課分が後でまとめてやるのはだめである。やらないと、学習効果は大幅に低下する」²¹⁵のように、練習問題の役割が強調されると同時に、やり終えた練習問題は先生にチェックしてもらう必要があることが提示されている。

一方、内容的には第 4 版の『日語基礎読本』は、雑誌『日文與日語』と重なっている部分がある。そのうち、「文字與発音」「基礎語法」の本文部分は『日文與日語』の「初級講座」の読本の本文とほぼ同じである。「模範文選」の全 22 課はほぼ『日文與日語』の「中上級講座」の読本に入っている。しかし、『日文與日語』の日本語講座にある原文には詳細な文法説明と中国語訳文が付いているが、練習問題は付いていない。こうした違いの原因としては、『日文與日語』の日本語講座は自修学習者向けのものであるのに対し、『日語基礎読本』は教室での使用を想定した教材であるからだと考えられる。つまり、張我軍

²¹⁵ 張我軍『日語基礎読本』(第 4 版)、人人書店、1935 年、序言頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「以本書為課本時，須逐課將應交教師批閱的課題做好，隨時交老師批閱；不可不做，亦不可積存數課，一次做交。不做課題，是要大減效果的。」

は自修学習者と学校での学習者向けに日本語教材を作成する際に、同じ素材を利用したが、学習環境の違いによりそれぞれのニーズに応えられるように異なる作成方法を採用した。

したがって、第4版の『日語基礎読本』は教室での使用を想定した教材だと言える。また、文法説明の部分を削除して副教材として発行し、練習問題を増加するなどの改訂内容から、張我軍は教室でこの教材を使用する教師と学生のニーズに応えられるように工夫したことが分かる。

4.2 『日本語法十二講』—張我軍による最初の日本語文法書

『日本語法十二講』（以下『十二講』）は張我軍が作成した最初の日本語文法書で、1932年9月に北京の人文書店で初版が2000冊発行された。『十二講』

（写真2-8）はサイズがA5判で、頁数は281頁あり、体言、用言、副詞、助詞、単語の運用という順に、「12講」に分けて日本語の口語文法の説明を中心に、文語文法を各章の付録として示している。『十二講』の序言によれば、『十二講』は山田孝雄の『日本文法講義』と『日本口語法講義』、及び小林好日の『国語法精義』などの既存の研究成果

を参考にしたものであるが、その中の文法項目の配列順、定義及び一部の例文を援用しただけで、文法の説明方法においては、中国の大学生にとっての難点に配慮した張我軍独自の説明方法を採用した。

この『十二講』は前述の『日語基礎読本』の副教材として指定されていないが、その序言には『日語基礎読本』と一緒に使うことが勧められている。『十二講』の作成動機については、張我軍は以下のように述べている。

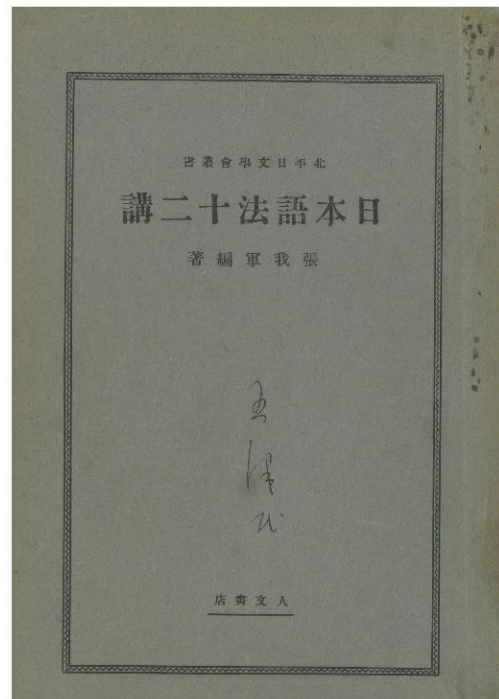


写真2-8 『日本語法十二講』(表紙)

私自身が日本語を勉強した時、文法にあまり気をかけなかった。自然に話せ、読め、書けるようになった。しかし、本国、大学の大学生は短時間で読む力を身につけようとしており、特に文法を重視している。そのため、質問されたことはほとんど私が気づかなかった文法上の難点である。²¹⁶（下線は筆者）

当時、日本語を通じて世界の先進的な学術文化を学ぶという日本語学習の社会背景下、多くの日本語学習者は日本語の読解力の養成を目指し、日本語文法の学習に力を入れていた。『十二講』はこうした学習者のニーズに応えるために作成された教材である。『十二講』が発行される前にも、すでに多くの日本語文法書は存在していたが、張我軍は「日本人が作成したものは中国の大学生に適切ではなく、中国人が作成したものは誤りが多く、系統的なものではなく、程度が低い」のように²¹⁷、既存の文法書では学生のニーズに応じられないと考えていた。また、張我軍は『十二講』の序言において「三須」（3つの必須）という中国の大学生向けの日本語文法書の作成基準を提案した²¹⁸。「三須」の要点は以下のようである。

- ① 中国の学生にとっての難点に配慮し、詳細に解説しなければならない。
- ② 従来の文法書はほとんど日本の中学生レベルの文法であるが、学生に読解力を養成させるなら、それだけでは足りない。そのため、学生に必要な文法のレベルに配慮しなければならない。
- ③ 現在、日本の書籍や新聞はほとんどが口語文で書かれているため、口語文法の学習を中心にしなければならない。しかし、本が読めるように必要な文語文法を補足として入れなければならない。

²¹⁶ 張我軍「序」『日本語法十二講』人文書店、1932年、1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我自己學日文的時候，並沒有注意什麼文法，自然而然就會說，會看，會寫了；然而本國大學的學生，是希望在短期間學“看”的，所以特別注重文法。於是乎所問的，盡是我未曾注意的文法上的難題。」

²¹⁷ 張我軍「序」『日本語法十二講』人文書店、1932年、2-3頁。

²¹⁸ 張我軍「序」『日本語法十二講』人文書店、1932年、4頁。

この提案は日本語の読解力の養成という当時の多くの学習者のニーズに十分配慮し、文法書が取り扱うべき文法の範囲やレベルなどを提示したものである。それにより、学習者のニーズへの対応は張我軍が持つ中心的な教材作成理念だと分かる。このことは、『十二講』の具体的な作成過程にも見られる。『十二講』の序言によれば、『十二講』は4回の修正や増補を経てから発行されたものである。1回目、2回目の修正版は北師大でプリントとして使用され、3回目の修正版は華北学院でプリントとして使用されていた。こうした実際の教学経験に基づいた改訂や増補を経て作成された『十二講』は、学習者のニーズによりよく対応できたと考えられる。

4.3 『現代日本語法大全』（分析篇）（運用篇）

前述のように、第4版の『日語基礎読本』の序言には、従来あった「註解」という文法説明の部分が削除され、その代わりに副教材としての詳細な文法説明書が発行されることが説明されている。その予告どおり、副教材として『現代日本語法大全：分析篇』（以下、『分析篇』）（写真2-9）は、第4版の『日語基礎読本』が発行された直後の1934年8月に人人書店で発行された。その後、1935年3月にその姉妹篇である『現代日本語法大全：運用篇』（以下、『運用篇』）も人人書店で発行された。

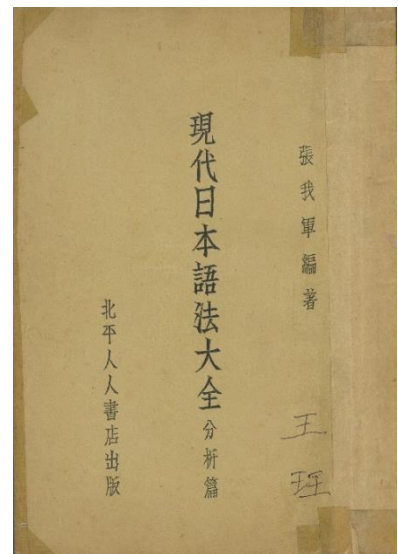


写真2-9 『現代日本語法大全』
（分析篇・表紙）

『分析篇』はサイズがA5判で、頁数は300頁あり、「総論」、「体言」、「用言総説」、「形容詞與動詞」、「助動詞」、「副詞」、「助詞総説」、「副助詞」「接続助詞」、「強勢助詞」（係助詞）、「終助詞與感動助詞」の12課から構成され、主に語の性質を中心に説明されている。『運用篇』はサイズがA5判で、頁数は248頁あり、「語之転成」、「合成語」、「単語與單語的關係（上）」、「単語與單語的關係（下）」、「単語用法総結」、「句論概説」、「句論各説」、「句之複雜的組織」、「句中各語之位置

與相關」、「単句與付屬句」、「複句」、「語句之省略」の12の部分から構成され、語の用い方と句論に対する説明を主な内容としている。

こうした『分析篇』『運用篇』と前述の『十二講』との違いは、『十二講』は語の性質や語の用い方などの語論を中心に説明しているのに対し、『分析篇』『運用篇』は語論をさらに詳しく説明する上で、句論も詳述している。また、『分析篇』『運用篇』は『十二講』より例文が増え、例文の漢字に振り仮名が付いている。『分析篇』『運用篇』は『十二講』の改訂版だと言える。さらに、『分析篇』の序言に「(筆者:『十二講』が発行されてから)2年間で蓄積した経験が非常に多いので、説明方法を更新しなければならない」²¹⁹と張我軍が述べたように、教学経験に基づき『十二講』に対し修正を行なうのも、『分析篇』『運用篇』を作成した動機の一つである。

4.4 『日語基礎読本自修教授参考書』

一 『日語基礎読本』の教師用、自修用指導書

『日語基礎読本自修教授参考書』(以下『教授参考書』)は、1935年1月に人人書店で発行された。『教授参考書』の序言によれば、張我軍がこの教材を編纂した目的は二つある。一つは、『日語基礎読本』には副教材としての『分析篇』『運用篇』が付いているが、優れた指導者がいないと役に立たないことから、教授者と学習者のために、前述の主教材と副教材との関連及び使用方法などを説明するものを作成する必要があることである。もう一つは、地理的な条件や時間などの関係で、学校や学習塾などで日本

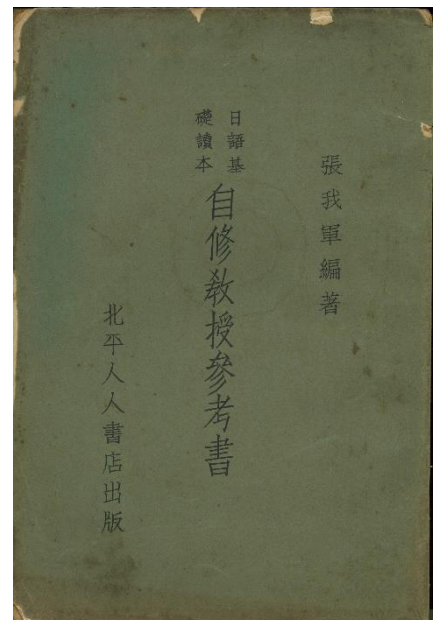


写真 2-10 『日語基礎読本自修教授参考書』(表紙)

²¹⁹ 張我軍「序」『現代日本語法大全:分析篇』人人書店、1934年、序言頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「因著者在此兩年所得之經驗甚多，故説明方法自然要进步。」

語が学べず、自修しかできない人が少なくないため、彼らのために詳細な解説書を作る必要があったことである。つまり、『教授参考書』は『日語基礎読本』の教師用指導書であると同時に、自修用指導書の性格も持っている。

『教授参考書』はサイズが A5 判で、頁数は 176 頁あり、『日語基礎読本』の構成と対応し、「文字與発音」「基礎語法」「模範文選」の 3 つの部分からなっている。写真 2-11 で示したように、各部分の最初に、この部分の教授目的、教授時間、教授範囲、必要な参考書などを明示している。また、学習時間については、自修用と教授用という 2 つの用途に分け、それぞれの必要な学習時間が提示されている。「文字與発音」の部分を日本語に翻訳すると、その内容は以下のようである。

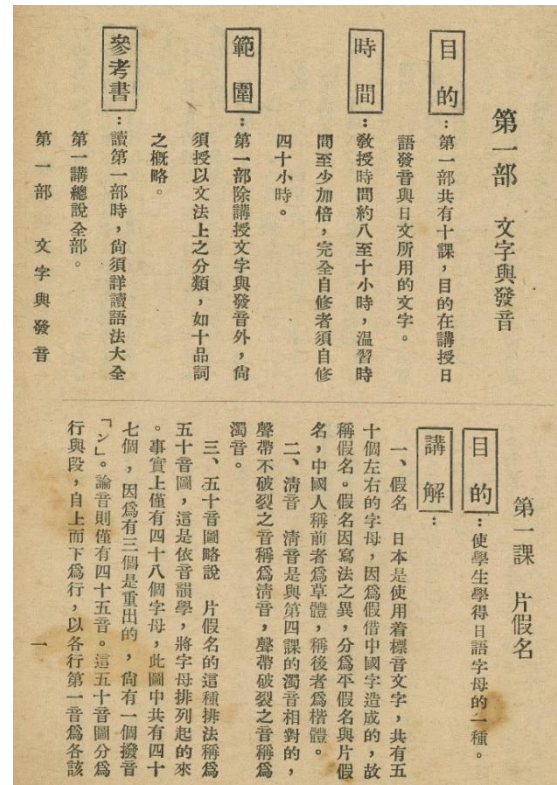


写真 2-11 『日語基礎讀本自修教授參考書』
（「文字與發音」・p1）

目的：第 1 部は全部で 10 課で構成され、目的は日本語の発音と日本語の文字を教授することである。

時間：教授時間はおよそ 8 時間から 10 時間である。復習時間は少なくともその倍の時間にすべきである。完全自修の場合は 40 時間が必要である。

範囲：第 1 部においては、文字と発音を教授する以外に、十品詞の概説を教える必要がある。

参考書：第 1 部を学習する際に、『現代日本語法大全』の第一講をすべて読んでおく必要がある。

このように当該部分の自修または教授上の必要事項を提示してから、各課の具体的な解説に入る。「文字與発音」（全 10 課）の各課に

は、「目的」「講解」という2つの部分を設け、各課の学習目的を簡単に提示してから、文法項目の解説に入っている。

「基礎語法」(全45課)の各課には、写真2-12で示したように「訳文」「本課要点」「應該熟記的事項」、「語法大全読法」、「補講」という5つの部分を設けている。「訳文」は各課の中国語訳である。「本課要点」は各課の文章に含まれた文法・文型項目が提示されている。「應該熟記的事項」は、各課の難点や間違えやすい点が示してある。「語法大全読法」は、各課の文章に出てきた文法・文型項目に『分析篇』『運用篇』で取り上げた頁数が提示してある。「補講」は各課の文法・文型項目に対する詳細な解説である。

「模範文選」(全22課)の各課は、「訳文」「講解」「参考」という3つの部分からなっている。「訳文」は中国語訳のことで、「講解」は各課の文法・文型項目に対する詳細な解説である。「参考」は各課の文章に出てきた文法・文型項目に『分析篇』『運用篇』で取り上げた頁数が提示してある。

こうした構成から見れば、『教授参考書』は『日語基礎読本』の内容に対する解説だけでなく、学習時間や学習目的及び副教材の使用法まで提示されており、現在の教師用指導書に近いものとも言える。一方、もともと教室での使用を想定した『日語基礎読本』は、詳細な要点提示と文法解説を取り入れた『教授参考書』の発行に伴い、自修学習者のニーズにも対応できるようになり、学習形態に合わせた自修教授両用教科書となった。張我軍自身も『日語基礎読本』、『現代日本語法大全』、『教授参考書』を合わせて使うと、生半可な日本語教師に

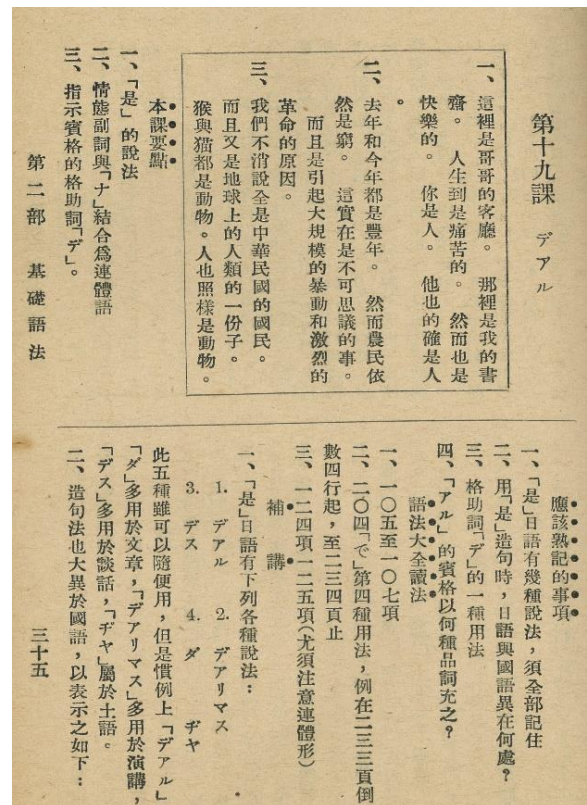


写真 2-12 『日語基礎讀本自修教授參考書』
 (「基礎語法」・p35)

ついて勉強するより効果を収め、また自身が開設した「基礎日文班」で授業を受けたのと同様の効果を収めることができると述べている²²⁰。

4.5 『標準日文自修講座』—張我軍による完全自修用の日本語教材

張我軍は当時学校に通えず自修しかできない学習者が多い状況に鑑み、完全自修用の日本語教材を作成しようとしていたが、上述の『教授参考書』の作成により、『日語基礎読本』を自修学習者のニーズにも対応できるようにさせた²²¹。

『日文與日語』が停刊した後、完全自修用の日本語教材の計画が実現するに至った。1936年6月に、『標準日文自修講座』（前期第1冊）（以下、『自修講座』、写真2-13）が人人書店で発行された。その後、前期第2冊（1936年7月）、前期第3冊（1936年8月）、前期第4冊（1936

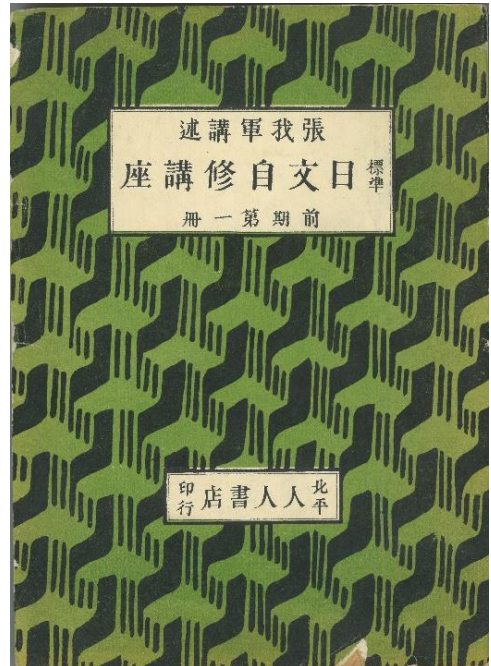


写真 2-13 『標準日文自修講座』
（前期第1冊・表紙）

年9月）、後期第1冊（1937年6月）が次々と発行された。張我軍の最初の作成計画によると、前期4冊の内容は基礎口語文法であり、後期4冊の内容は文語文、複雑な句論、上級の文範などである。また、『自修講座』を終えた学習者のために、読本（全24巻）の『日本近代名著選集』を編集する計画であった。しかし、1937年6月に後期第1冊が発行されてから発刊停止になった。その理由としては、1937年7月に勃発した盧溝橋事件があったためだと考えられる。

『自修講座』（全5冊）は各冊の課数が同じで「25講」である。また、各冊の頁数がほぼ同じで300頁前後である。そのうち、前期第1冊は298頁、前期第2冊は302頁、前期第3冊は314頁、前期第4冊

²²⁰ 『日語基礎読本自修教授参考書』序言頁、張我軍「編者的話」（『日文與日語』第2巻第1号、人人書店、1935年）を参照。

²²¹ 張我軍「序」『標準日文自修講座』（前期第1冊）、人人書店、1936年、1頁。

は 334 頁、後期第 1 冊は 302 頁である。こうした構成は、張我軍が自修者の学習進度に配慮した結果である。張我軍は学習者に 1 か月に 1 冊学習させるために、1 日に 1 講という学習の進度を勧め、毎月の休日にも配慮し、各冊を 25 講に設定している。

具体的には、前期第 1 冊の 12 講までは、文字と発音に関する解説で、それ以降は文法に関する解説が入っている。また、張我軍は学んだ文法知識を運用させ、読解や翻訳の訓練を行なうために、他から採用した口語文章を導入した。そのうち、前期第 3 冊には 4 篇、前期第 4 冊には 16 篇、後期第 1 冊には 11 篇掲載されている。これらの日本語文章はすべて中国語訳と文法説明が付いている。そのほか、各課には練習問題が付いており、練習問題の形式は前述の『日語基礎読本』とほぼ同じである。前期第 4 冊には前期各冊の練習の答えが掲載されている。

全体的な構成から見れば、『自修講座』は文法・句型項目の説明を中心に、文法書の色彩が強いが、文法項目の設定方法は『分析篇』『運用篇』などの文法書とは異なっている。助詞の解説を例にすると、『分析篇』においては、第 7 講から第 12 講までにすべての助詞に関する説明を終わらせている。当時の中国における一般的な文法書もこのように、ある項目についてまとめて説明している。しかし、張我軍はこうした説明方法を使うと面白みがなく、行き届かないところもあると考え²²²、『自修講座』においては助詞に対する解説を主に「概説→略説→詳説」という 3 段階に分けて行なった。具体的には、前期第 1 冊の第 25 講において助詞の性質、分類、用法などに関して概説した後、前期第 2 冊の第 2、3 講において、「ヲ」「ノ」「ニ」「ガ」「ト」などの常用の助詞を取り上げ略説している。そして、すべての助詞を種類により分けて詳説する。例えば、前期第 2 冊において格助詞について詳説し、前期第 3 冊において接続助詞、副助詞などについて詳説し、前期 4 期において終助詞などについて詳説している。また、文法解説の

²²² 張我軍「告本講座読者」『標準日文自修講座』（前期第 1 冊）、人人書店、1936 年、2 頁。

際には中国語訳と振り仮名が付いた例文を多く提示している。こうした詳細な説明方法は、常時教師からの指導を受けられない完全自修者のことを配慮したものだと考えられる。

このほか、写真 2-14 で示したように、発音の説明においては、完全自修者でも正確な発音が習得できるように、発音する際の正確な口の形を示した写真を取り入れ、いろいろ工夫をしている。



写真 2-14 『標準日文自修講座』
(前期第1冊・発音・p17)

4.6 『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』と『高級日文星期講座』

一張我軍による中上級日本語読本

盧溝橋事件以前に、上記の日本語教材以外に、張我軍は初級段階の学習を終えた学習者のために『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』(以下、『高級自修』)と『高級日文星期講座』(以下、『星期講座』)の2種類の中上級日本語読本を作成した。

『高級自修』は全3種である。第1種(写真 2-15)は1934年3月に人人書店で発行され、サイズはB6判で、頁数は162頁である。その中には他から採用した3篇の日本語文章が収録され、各文章には中国語訳と「註解」が付いている。

第2種は1934年9月に人人書店で発行され、サイズはB6判で、頁数は172頁である。構成は第1種と同じように、3篇の日本語文章及び、それに付けられた中国語訳と「註解」

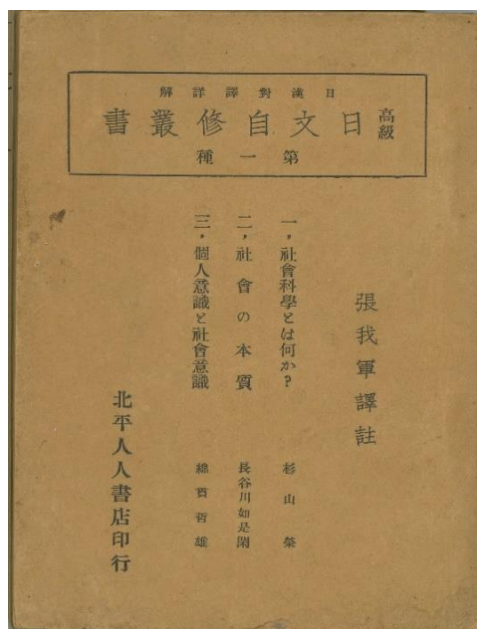


写真 2-15 『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』(第1種・表紙)

からなっている。筆者は第3種については未見である。『星期講座』（全3冊）についても筆者は未見であるが、当時人人書店から出された広告²²³によると、構造上は『高級自修』とほぼ同じであり、第1冊と第2冊に9篇の文章が収録されている。

4.7 『日語模範読本』—『日語基礎読本』の改訂

張我軍は『日文與日語』の最終号（第3巻第6号）において、「二十五年以後的工作」を發表し、その後の教材作成計画を述べている。その中には、『日語基礎読本』の改訂についても言及している。彼は「旧来の『日語基礎読本』は短期間にすべての文法項目を習得することができるが、進度が速すぎるのが最大の欠点である」と述べ、その欠点を補うために『新編日語基礎読本』（上下2巻）（以下、『新編』）を作成しようとした²²⁴。張我軍の作成計画によれば、『新編』は『日語基礎読本』の編集方針と同じであるが、例文が倍に増え、文語文の文章を5篇から15篇まで増やす。また、学習時間は100時間から150時間まで増やす計画であった。その後の張我軍の日本語教材には、『新編』と同じ名前のものが出てこないが、戦時中発行された『日語模範読本』が、最も『新編』の編纂計画に合致したものだと考えられる。

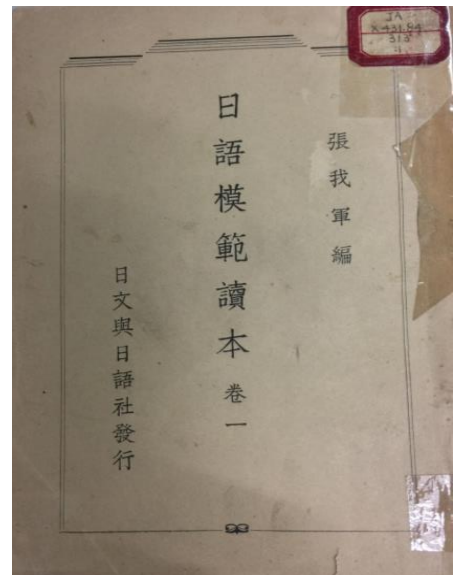


写真 2-16 『日語模範讀本』(卷1・表紙)
(北京師範大学図書館蔵)

『日語模範讀本』（卷1）（写真2-16）は戦時中の1939年2月に、日文與日語社（人人書店の支社）で発行された。卷1の「例言」によれば、この教材は全3巻で、教授参考書が付いており²²⁵、初級中学校向けの教授用の日本語教科書を目指して作成されたが、日本語入門書

²²³ 『日文與日語』第3巻第5号、人人書店、1935年、広告頁。

²²⁴ 張我軍「二十五年以後的工作」『日文與日語』第3巻第6号、人人書店、1935年、5頁。

²²⁵ 卷2、卷3及び教授参考書については、筆者は未見である。

として高級中学校、専科学校、大学などの各種の学校でも使用できるとある。また、各巻 60 課で構成され、1 課分の所要時間が 1 時間に設定されているため、合わせて 180 時間になる。これは前述の『新編』の作成計画（150 時間）に近づいたものである。さらに、『日語模範読本』（巻 1）の内容から見れば、『日語基礎読本』より、発音部分が 10 課から 16 課まで増え、巻 1 は片仮名だけ導入している。このように進度を遅らせることも、前述の『新編』の作成計画と一致している。

しかし、現時点で見つかった資料や先行研究の限りでは、『日語模範読本』の使用情報は見当たらない。その理由としては、戦時中の中等教育においては、北京近代科学図書館などの日本側の機関が編集した教科書や、傀儡政権の編集した教科書もあるため、『日語模範読本』はそれほど使用されなかったからだと考えられる。

4.8 『対訳詳註日本童話集』一童話を素材とした日本語教材

『対訳詳註日本童話集』（以下、『日本童話集』、写真 2-17）は全 2 巻である。上巻は 1942 年 10 月に新民印書館で発行され、サイズが B6 判で、頁数は 163 頁である。下巻は 1943 年 5 月に新民印書館で発行され、サイズが B6 判で、頁数は 163 頁である。上巻と下巻の構成はほぼ同じであり、それぞれ 5 篇の日本童話からなっており、作品ごとに中国語訳文と文法解説及びイラストが付いている。上巻は「桃太郎」「花咲爺」「猿蟹」「舌切雀」「カチカチ山」の 5 篇である。下巻は「瘤取り」「鼠ノ嫁入り」「海月ノお使」「猫ノ草紙」「文福茶釜」の同じく 5 篇である。



写真 2-17 『対訳詳註日本童話集』
（下巻・表紙）

『日本童話集』の「訳注例言」によると、この教材は日本語学習のために編集されたものであり、一定の日本語能力を持つ学習者の自修

用書にも使え、大学、中学校、高級小学校の副教材としても使える²²⁶とある。また、『日本童話集』は戦時中に発行されたものであるが、戦前からその作成計画が立てられていた。前述のように、張我軍は『日文與日語』の最終号（第3巻第6号）において、1936年以降の日本語教材作成計画を発表している。その中には『対訳詳解日本童話選集』（上下2巻）の作成計画がある²²⁷。日本の童話を日本語教材の素材にする理由について、張我軍は「童話の文字は平易であるし、純粋な標準語で書かれた口語文なので、言語文字の学習から言えば、日本語の初学者のためになる」²²⁸、「童話によってその国の国民性を知ることができ、その国民の性格からその国の風俗習慣が読み取れる」²²⁹と述べている。

4.9 張我軍作成教材における相互の関連性—まとめとして—

以上見てきたように、張我軍の日本語教材は、バラバラに存在していたのではなく、お互いに関連性を持っている。図2-1で示したように、これらの教材は使用対象により、「自修教授両用」と「完全自修用」の2種類に大別することができる。

自修教授両用教材においては、『日語基礎読本』は張我軍の作成した初めての日本語教材であり、『日本文法十二講』はその次に作成された副教材としての日本語文法書である。このように、張我軍は最初から主教材と副教材の組み合わせという作成理念を持っていると考えられる。その後、『日語基礎読本』は教室での使用によりよく対応できるように、第4版より文法説明の部分が削除された。その代わりに、日本語文法書の『現代日本語法大全』が副教材として作成された。

²²⁶ 張我軍「訳注例言」『対訳詳注日本童話集』（上巻）、新民印書館、1942年、2頁。

²²⁷ 『日文與日語』第3巻第6号、人人書店、1935年、6頁。

²²⁸ 張我軍「二十五年以後的工作」『日文與日語』第3巻第6号、人人書店、1935年、6頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「因為童話的文字淺顯，而且是用純粹的標準語寫的話體文，故自語言文字的學習上說，于初學日文不久的人必有很大的益處。」

²²⁹ 張我軍「訳注例言」『対訳詳注日本童話集』（上巻）、新民印書館、1942年、「訳注例言」の第1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「因為一國民的童話，最能看出那個國民的性格，而由國民的性格可以瞭解那個國民的人情風俗習慣。」

『現代日本語法大全』は『日本文法十二講』の増補改訂版だと言える。『日語基礎読本』の副教材には、『日語基礎読本自修教授参考書』という参考書がある。この参考書は、主教材の各課の教授要点、学習時間、学習目的だけでなく、中国語訳や詳細な文法解説及び副教材の使用方法まで提示されており、教師用指導書として使えると同時に、完全自修者のニーズにも対応できると言える。この参考書の発行により、『日語基礎読本』は自修教授両用の教材となった。

完全自修用教材においては、初級段階用の基礎文法の解説を中心とした『標準日文自修講座』だけでなく、中上級段階用の読本である『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』、『高級日文星期講座』、『対訳詳注日本童話集』が含まれている。つまり、張我軍は初級段階から中上級段階までの各段階の学習者のニーズに配慮して、日本語教材作成を行なった。また、前述のように、『標準日文自修講座』は完全自修者のニーズに十分配慮し、「1日に1課」という学習進度まで設計して作成された教材である。

要するに、張我軍の日本語教材は、自修者と学校の学生のニーズが異なることや、学習段階による学習内容の違いに配慮して系統的に作成されたものである。

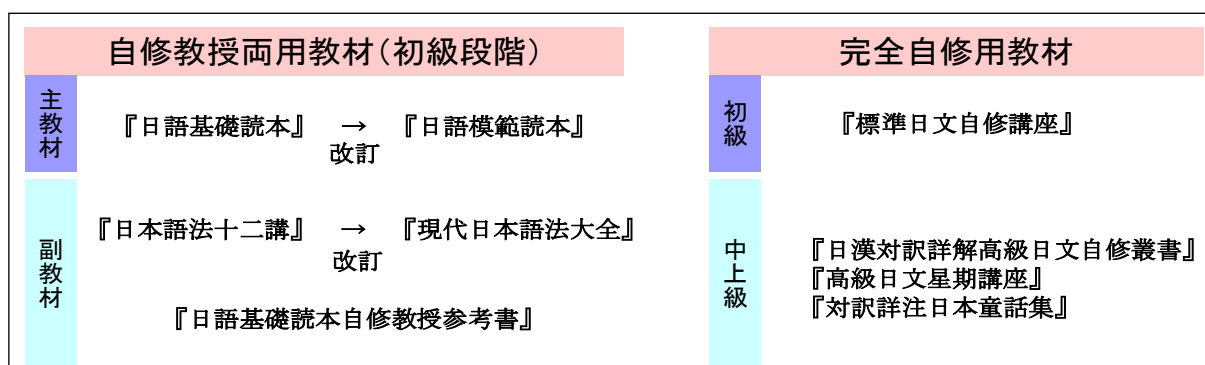


図 2-1 張我軍作成教材における相互の関連性

5. 小括

1930年代は、中国人による自主的日本語研究が一層促進され、中国の日本語教育が活発に行なわれた時期である。当時、日本語教材や

日本語学習雑誌が多く発行され、量においても質においても前の時期を超えており、特に中国人編纂のものが目立つ。張我軍は折しもこの時期に日本語教育の舞台に登壇し始め、合わせて 11 種類 23 冊の日本語教材を作成し、編集長として全 24 号の日本語学習雑誌『日文與日語』を編集した。ほぼ 1 人の力でこれほど多くの著述を作成した張我軍は、日本語教材や日本語学習雑誌が多く発行された 1930 年代においても際立った存在だったと言える。そして、張我軍が作成した教科書の最大の特徴は、多様な学習者と日本語教師のニーズに対応できたことである。これも張我軍による日本語教育関係の著述が当時際立っていた重要な要因であろう。

新内康子 (1997) は、1950 年代ごろまでに日本や「満州国」及び台湾で作成された歴史に残る日本語教科書を取り上げ、それらの教科書がその時代の「定番」の教科書になり得た要因を次の 6 つに分類している。(a) 言語政策的要因、(b) 学習者のニーズへの対応、(c) 多様な教師への対応、(d) 新しい教授法理論の導入、(e) 関連諸科学の応用、(f) 教科書作成者の日本語教育観といったものである。そのうち、「(b) 学習者のニーズへの対応」及び「(c) 多様な教師への対応」については、以下のように解釈されている²³⁰。

(b) 学習者のニーズへの対応: 松本亀次郎の教科書や満州の中等教育・成人教育用教科書は、時代の風潮に惑わされずに学習者の学習方法・学習目的を優先して作成された。学習者のニーズといっても、学習者自身がその本質を捉えることに限界があるのもまた事実である。そこには、学習者任せではない教師の的確な判断が求められる。

(c) 多様な教師への対応: 満州の初等教育用教材や日本語教育振興会の教科書には、急増した新人教師のために、教師用指導書が備えられている。青年文化協会・国際文化振興会の教科書は、教

²³⁰ 新内康子「歴史に残る教科書、残らない教科書」関正昭・平高史也編『日本語教育史』、アルク、1997年、108-109頁。

師用参考書としての性格を持っている。完成度の高い教師用指導書の付いている教科書は、その教科書の信頼度を図るバロメーターでもある。

これに照らしてみれば、張我軍による日本語教育関係の著述も、この2つの要因に当たっている。学習者のニーズへの対応においては、『日文與日語』は、他者からの寄稿を主な内容としていたほかの日本語学習雑誌と違い、各レベルの日本語学習者のニーズに応えるために、各号の内容が続く日本語講座を主な内容とした。また、「自修教授両用」と「完全自修用」の2種類の教材は、学習方法において通学者と自修者の違いに配慮し、それぞれのニーズに対応できるものである。さらに、張我軍は『標準日文自修講座』を作成する際に、「日本語能力は速成できないもので、すでに存在した多くの『一月通』『百日通』などと名乗った速成日本語教材は役立たない」と判断し²³¹、自分の教授経験に基づき完全自修者のために、学習時間と学習進度などを考慮した学習計画まで設計した。レベル差のある教師への対応においては、『日語基礎読本自修教授参考書』に主教材の各課の教授目的、教授範囲、教授時間、副教材の使用方法などが提示され、各課の文法・句型項目が詳しく解説されており、完成度の高い教師用指導書だと言える。こうした教師用指導書が備えられた日本語教材は、当時の中国人作成の日本語教材にはほとんど見られない。上記のことから、張我軍の日本語教育関係の著述は歴史に残るものとなったと考える。

一方、「私の日本語教授法はすでに『日語基礎読本』に反映されている」と張我軍自身が述べたように²³²、張我軍の日本語教材には、彼の日本語教授観などが貫かれていると考えられる。そのことは次章で詳述するが、新しい教授法理論の導入は、張我軍の日本語教材が当時際立っていた原因の一つであろう。

²³¹ 張我軍「序」『標準日文自修講座』（前期第1冊）、人人書店、1936年、1頁。

²³² 張我軍「序」『日本語法十二講』人文書店、1932年、1頁。

第 3 章

張我軍の日本語教授観とその影響

第3章 張我軍の日本語教授観とその影響

1. はじめに

1930年代の中国大陸の「日本語ブーム」の中で、張我軍は北京の諸大学の講師、日本語学習塾の開催、多種類の日本語教材作成、日本語学習雑誌創刊などの日本語教育実践に携わり、当時の日本語教育界では高い評価を受け、「著名人士」とされていた。その理由については、日本語教育関係の著述を数多く残しただけでなく、張我軍の日本語教授法なども学習者のニーズに合致していたからではないかと考えられる。

また、戦時中、張我軍は科学図書館の日本語講師、偽北京大学の教授、教育総署直轄編審会の特約編集者、華北日本語教育研究所の常任委員などを担当し、華北淪陷区の日本語教育における指導的立場に立っていた。特に、科学図書館の日本語講座では、張我軍は日本人教師を含めた多くの講師陣の中でも唯一日本語教授法を教えた人物である。張我軍の日本語教授理念は、戦時中の日本語教育でも一定の影響力を持っていたと言える。そのため、その影響は具体的に何かを解明する必要がある。

本章では、まず『日文與日語』に掲載された張我軍の論述を切り口として、張我軍が如何なる日本語教授観を持っていたのかを考察する。その上で、張我軍の日本語教育経験の集大成である『日文與日語』に掲載された日本語読本を取り上げ、張我軍が如何に自分の教授観を日本語教材の中に導入したのかを究明する。さらに、「註解」「講解」などの読本に対する張我軍の解説への考察により、実際の日本語教授実践に表れた張我軍の教授面での特徴は何かを分析する。最後に、科学図書館の日本語教育活動を取り上げ、特に日本語教科書作成において、張我軍の日本語教授観は如何なる影響を与えたのかを探究する。

2. 張我軍の論述からみた日本語教授観

『日文與日語』に収録された張我軍の論述には、彼の日本語教授観が窺えるのは、1巻2号の「怎麼樣學習日文」（どのように日本語を学習するのか）、1巻5号の「爲日文課程事告学校当局」（日本語課程について学校当局に訴える）、1巻6号の「關於日文課程的另一忠告」（日本語課程についてのもう一つ忠告）の3篇である。この3篇の論述は内容により、「大学の日本語教育に対する提言」及び「日本語教授法・学習法に関する検討」の2種類に分けることができる。以下ではこの2種類の内容に分け、論述の具体的な内容を踏まえた上で、張我軍の日本語教授観を考察する。

2.1 大学の日本語教育に対する提言

2.1.1 張我軍による提言の背景

前章で述べたように、清末、中日甲午戦争を機に、中国大陸で本格的な日本語教育が行われてきた。当時、中国人の日本語学習の主な目的は、日本語に翻訳された欧米の学術書籍を読むことであった。こうした日本語学習の目的は、1920、1930年代に至ってもあまり変わっていない。1928年に開催された「第一次全国教育会議」において、「中等師範学校及び中等職業学校の外国語科目は原則として日本語にすべきである」という教育専門家の范寿康²³³の提案が可決された。范寿康はこの提案をした際に、以下の3つの理由を挙げた。

(1) (前略) (筆者:英語より) 日本語は平易なので、これらの学校(筆者:中等師範学校及び中等職業学校)で数年勉強したら、学生は必ず日本語書籍を読む能力が取得できる。卒業後、社会に奉仕すると同時に、日本語書籍を読むことによって自分の知識を増やすことができる。(2) ここ数年日本で出版された書籍は、広い分野にわたり、多くの欧米の新刊書の訳本もあり、これらの学

²³³ 范寿康(1896~1983)は東京帝国大学文学部を卒業し、国立中山大学の教授及び秘書長、白馬湖春暉中学校の校長などを務めた。

校の卒業生の参考になる。(3) 日本語書籍は英語書籍より値段が安く、入手しやすい。²³⁴

つまり、日本語書籍を読む能力を習得し、日本語の書籍を通して欧米の学術文化を摂取することが日本語学習の主な目的とされている。この提案が全国レベルの会議で可決されたことから、こうした考えは当時の多くの教育者が持つ共通認識でもあったことが分かる。このような背景下、中国大陸では国民党政権が成立した 1928 年から 1930 年代にかけて、日本語教育が盛んに行われ、最終的にその時代に大きなブームとなった。張我軍が在住していた北京を例にとれば、外務省情報部の 1930 年 4 月時点の調査では、民間日本語教授機関は 5 つあり、日本語を正科または第二外国語としている大学や専門学校は 10 数カ所存在し、日本語学習者は全体として 7000 人を超えていた²³⁵。

しかし、折しもこの時期に日本語教育の舞台に登壇した張我軍は、1934 年に「爲日文課程事告学校当局」(『日文與日語』1-5) を発表し、以下のように当時の大学の日本語教育は完全に失敗したと明言した。

言うのも憚られることだが、北平市の学生には、毎年、日本語の書籍を読む能力を習得した人は 10 人以内だといわれ、当然実際にはこの数にとどまらない。しかし、学生がこの能力を習得したのは、学校に通った結果ではなく、お金を払って校外の塾に通った結果である。言い換えれば、学校当局が設けた日本語課程は、

²³⁴ 中華民国大学院編纂『全国教育會議報告』(復刻版、張研・孫燕京『民国史料叢刊』1043 分冊、2009 年、411 頁)。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「(1) (前略) 因其較為簡易，則在此種學校學習數載，其畢業生必能具備閱讀日文書籍之能力，庶幾出校以後，一面服務社會，一面又能攻讀日籍，以增長自己之知識。(2) 日本出版書籍，年來既甚宏富，歐美新書亦多譯本，足供此類畢業生之參考。(3) 日文書籍，較英文書籍，價格既廉，且易於購得。」

²³⁵ JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B02130928600 (第 1 画像目から第 9 画像目まで)、(薄冊) 支那人ノ日本語及日本事情研究狀況 (情_87) (外務省外交史料館)

まったく無駄なものである。²³⁶

つまり、張我軍は、当時の大学での日本語課程では学生に日本語の書籍を読む能力を習得させることができないと考えていた。張我軍による日本語学習塾の開設は、こうした大学の日本語教育の欠点に配慮したものであろう。しかし、張我軍はそこにとどまらず、大学の日本語教育に対し、学校側、教師側、学生側の3つの方面からその原因を分析した上で改善策を提言した。以下では、この3つの方面に分け、その提言内容を見ておく。

2.1.2 学校側に対する提言

張我軍はまず「爲日文課程事告学校当局」(『日文與日語』1-5)において、大学の日本語教育が失敗した主な原因は、教育部の命令をおざなりにし、第二外国語を飾り物、生計の手段として設置する学校側に存在したと指摘した²³⁷。また、彼は学校側に存在した原因を3つに分けて述べた。

まず挙げられることは、大学の日本語課程が一定の教授方針がないことである。張我軍は、当時3人の教員に3つの学年の6時間の授業を担当させる学校もあり、2人の教員に1学年の4時間の授業を担当させる学校もあると述べた上で、多くの大学は教授内容のつながりや教授時間の配分などをまったく考慮していないと指摘した²³⁸。張我軍が勤めた北平大学の当時の日本語課程を取り上げれば、この指摘が実情を踏まえていることが分かる。表3-1で示したように、同じ北平大学においても、法学部の日本語授業は1年しかなく、週に4時間であるが、女子師範学部は第1、2、3学年にわたり、週に2時間である。

²³⁶ 張我軍「爲日文課程事告学校当局」『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我不敢說，北平一市的學生，每年只能有十個以內的人能學成日文的看書能力，事實上也不只此數。然而他們之所以有此成績，並不是學校當局賜給他們的，乃是他們自己掏腰包到校外補習得來的。換言之，學校當局所設的日文課程，簡直就等於白設！」

²³⁷ 張我軍「爲日文課程事告学校当局」『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、1頁。

²³⁸ 張我軍「爲日文課程事告学校当局」『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、2頁。

つまり、同じ大学でも学部により教授方針が違っていた。

表 3-1 国立北平大学の日本語教授状況（1930年頃）

学部名	学科名 (開設学年)	授業時間 (週)	講師名
法学部	政治学科 (第1学年)	4	方政英 張某 黄某
	経済学科 (第1学年、選択科目)	4	
女子師範学部	教育学科 (第1、2、3学年)	2	艾華 方政英 姚琴
	国文学科 (第1、2、3学年)	2	
	外国語文学科 (第1、2、3学年)	2	
	史地学科 (第1、2、3学年)	2	

(JACAR、Ref. B02130928600 (第3画像目) より筆者作成)

こうした状況に対し、張我軍は具体的な教授方針を以下のように提案した。

課程には一定の教授方針が必要で、1年目は毎週6時間精力を傾注して自分で参考書が読めるまで学生に勉強させる。2年目は毎週2時間、本を読む方法を指導してもよいが、この2時間がなくてもよい。もし、1年目に毎週6時間設置するのが困難である場合は、4時間の設置でもよく、学生が自分で辞書を引いて、わずかでも参考書が読めるまで、文法の基礎知識を教授する。この場合は、2年目に毎週2時間設置したほうがよい。²³⁹

(下線は筆者)

この教授方針には、日本語の読解力の養成という学習目標が明確に示され、各学年の授業時間や授業内容が明らかに規定されている。現在の教授方針の基準においては、この教授方針はおおざっぱなものであるが、一定の教授方針がない当時の状況では、指導的な役割を果た

²³⁹ 張我軍「爲日文課程事告学校当局」『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「課程必須有一定的標準，第一年每週六小時，僅一年之間使學生集中精力，學到能自閱參考書爲止。第二年每週再授二小時，指導其看書方法也可以，但是這倆小時不要也可以。若每週六小時辦不到，也可以減爲四小時，授以語法基礎，至自己能查字典，且略能閱讀參考書爲止，第二年再授二小時方爲妥當。」

すことができたのだと言える。

一定の教授方針がないこと以外に、学校側に存在するもう一つの原因は、教師募集が慎重でないことだと指摘している。張我軍は、学校側が日本に留学した人ならだれでも日本語教師になれると考え、日本語教師を募集する際に主に情実によって行なっていると指摘した。また、これを解決するために、以下のように提言した。

教師募集においては、確実な日本語教授能力を持って、短期間で学生に本を読む力を身につけさせる能力を持っている者を選ぶべきである。情実関係によって人をポストにつけることは絶対やってはいけない。²⁴⁰（下線は筆者）

つまり、学校側が日本語教師募集を行なう際には、日本語教授能力を主な募集基準にすべきだという意見である。特に、日本語の読解力を学生に身につけさせる能力が強調されている。

そのほか、学校側に存在していた原因には、学生に対して厳格でないことを張我軍は挙げる。彼は、第二外国語が大学生にとっても初学であるから、そもそも小学生を管理するように厳格主義を採るべきだが、学校側は放任主義を採っていると述べ、学校側の第二外国語履修学生に対する管理の仕方を批判した²⁴¹。その上で、以下のような対策を提言した。

期末試験だけを以て点数を付けるべきでなく、教師に授業時の学生の学習状況と課題の完成度などを常時点検させ、日常評価の点数をつけなければならない。ほかに、学生が学んだ知識を随時発揮して応用することができるように、日本語の書籍、

²⁴⁰ 張我軍「爲日文課程事告学校当局」『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「教師須選擇確能教授日文，使學生于短期間習得閱書能力者，萬不可顧慮情面，取安插主義。」

²⁴¹ 張我軍「爲日文課程事告学校当局」『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、2頁。

新聞、雑誌などを多めに置く必要がある。²⁴²（下線は筆者）

この中には、日常評価を点数化という学生の学習効果を見る評価方法も提案され、さらに、学んだ知識を応用するための設備整備も強調されている。要するに、張我軍は教授方針から教師募集や学生管理まで、系統的に学校側に対し提言した。この提言には、教授方針、教師の日本語教授能力、学習効果に対する評価などを重視する張我軍の日本語教授理念が見られる。

2.1.3 教師側に対する提言

張我軍は上記のように、大学の日本語教育が失敗した原因は学校側に存在したと指摘した後、「關於日文課程的另一忠告」(『日文與日語』1-6)において、教師側にも存在した原因を分析した。

当時の北京の諸大学の日本語教師は、日本留学出身者が大半を占めている。張我軍はまずこうした状況に対し、現在の各大学の日本語教師は語学専門家ではなく、日本留学経験だけに頼って日本語教師を担当する者が多いと指摘した。また、日本語が通じれば、だれでも教えられるなら、流暢な日本語が話せる日本の車引きでも教えられると述べ²⁴³、日本語留学出身者が必ずしも日本語教師に適任ではないという考えを示した。しかし、張我軍が言いたいことはそれだけではない。さらに、張我軍は、日本の文学博士でも必ずしも中国人向けの日本語課程を担当できるとは限らないことを挙げ、語学専門者であっても必ずしも日本語教師に適しているわけではないと指摘した²⁴⁴。その理由については以下のようなものである。

²⁴² 張我軍「爲日文課程事告学校当局」『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「對學生之上課情形須隨時查考，請教師隨時查考學生的習作，取而為平時成績，絕不可僅以學年考試為分數的標準。此外尚須多多豫備日文書報雜誌使學生隨時有發揮應用其所學的智識。」

²⁴³ 張我軍「關於日文課程的另一忠告」『日文與日語』第1巻第6号、人人書店、1934年、1頁。

²⁴⁴ 張我軍「關於日文課程的另一忠告」『日文與日語』第1巻第6号、人人書店、1934年、1頁。

日本語を教える際には、学習者によって異なる教授法を採用しなければならない。例えば、日本人に教える場合と、英国人に教える場合と、中国人に教える場合とでは、異なった教授法を使わなければならない。そのため、日本語教師になれる第一の前提は日本語の言語文字に対して相当の研究を積んでいることである。その上で、第二の前提として中国人に日本語を教えるにはどのような方法を用いるべきかを知らなければならない。²⁴⁵（下線は筆者）

つまり、中国の大学で日本語教師を担当するには、日本語の言語知識だけでなく、中国人向けの日本語教授法も必要であるということが張我軍の考えである。こうした考えを示した後、張我軍は「私は諸大学の日本語教員の各自の専門には感服しているが、彼らの日本語教授法には感服することができない」のように、当時の多くの日本語教師による日本語教授法に否定の意を示した²⁴⁶。日本語教授法に関する張我軍の具体的な意見については、後で詳述するが、教師側に対する上記の張我軍の論述から、日本語教授法を重視しているという張我軍の教授理念の一端が窺える。

2.1.4 学生側に対する提言

張我軍は「關於日文課程的另一忠告」（『日文與日語』1-6）において、教師側に存在する問題点を分析した後、学生自身にも次の二つの問題点が存在していると指摘した。一つは、学習目標が明確ではないことである。もう一つは、学習態度にあせりがあることである。また、これらの問題点に対し、張我軍は「日本語を学習する際に、あくまでやり抜く熱意を持たなければならない」と学生たちに助言した上で、日本語の読解力を習得するために日ごろやるべきことを以下のように

²⁴⁵ 張我軍「關於日文課程的另一忠告」『日文與日語』第1巻第6号、人人書店、1934年、1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「因为同是教授日文，須隨其學者而異其方法，例如教日人以日文，和教英人以日文，以及教中國人以日文，都必須異其教授法。所以有了第一個前提，即對於日本語言文字已有相當的研究，認識，還須有第二個前提，即必須明白教中國人以日文，應該用什麼方法。」

²⁴⁶ 張我軍「關於日文課程的另一忠告」『日文與日語』第1巻第6号、人人書店、1934年、2頁。

に提言した。

諸君が日本語を学習する目的は本を読めることである。そのため、第一に、日本語の文法を徹底的に知らなければならない。次に、文法だけでは解決できないところもあるため、多めに本を読まなければならない。また、会話能力の習得が目的ではないが、少なくとも数百個の単語を暗唱しなければならない。²⁴⁷(下線は筆者)

この提言は、日本語の読解力の養成という目標に密接に結びついたものだと言える。そこでは、文法知識の学習が中心とされたが、閲読や単語の暗記なども強調された。後で詳述するが、文法知識の習得、閲読及び単語の暗記などは、張我軍が新たな日本語教授法を考案する際の重要なポイントでもある。

以上見てきたように、張我軍は学校側、教師側、学生側にあった問題点を分析した上で、学校の教育制度から教師の資格、さらに学習者の取るべき態度、練習方法まで、当時の大学の日本語教育に対し全面的に提言した。これはすでに一日本語教師の立場を超え、当時の日本語教育の指導者の立場に立つものだと言える。これらの提言には、日本語教授方針を制定し、日本語の言語知識や日本語教授法に対する研究を行い、学生の学習効果に対し評価するなどの張我軍の日本語教授理念が窺える。特に、中国人向けの日本語教授法を重視している張我軍の姿勢が見られる。以下では、日本語教授法に関する張我軍の具体的な論述を見ておく。

²⁴⁷ 張我軍「關於日文課程的另一忠告」『日文與日語』第1卷第6号、人人書店、1934年、2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「諸君學習日文的目的是在讀書，所以第一步須徹底瞭解日文語法；其次，須多看多讀，因為有些地方是不能純粹依靠語法來解決的；再次，雖然目的不在說話，至少也要誦記幾百個單語之類。」

2.2 日本語教授法・学習法に関する論述

2.2.1 既存の日本語教授法・学習法への検討

上述のように、張我軍は中国人向けの日本語教授法を重視していたが、当時の多くの日本語教師による日本語教授法には賛同していない。張は大学の日本語教育に対し提言する前に、すでに『日文與日語』の1巻2号に「怎麼樣學習日文」において、既存の日本語教授法・学習法に関する検討を行なった。その中で、既存の日本語教授法・学習法は「囫圇吞棗式」（ナツメ丸飲み式）、「由話入文式」（会話から文に入る方式）、「会話與文法併学」（会話と文法を同時学習）、「死記公式」（文型丸暗記）の4種類に分け、それぞれの特徴と欠点を検討した。

「囫圇吞棗式」については、張我軍はいくつかの否定助動詞の意味を覚えてから、中国語の語順に合わせるために、日本語文の漢字と他の要素を前後置き換えて読む方法だと説明している。この説明によれば、「囫圇吞棗式」という日本語学習法は清末の代表的な日本語教授法・学習法である「和文漢読法」だと分かる。「和文漢読法」は文語文を読むための速成式の日本語学習法で、その代表的な人物が前述の梁啓超と羅普²⁴⁸である。梁と羅はこの学習法を理論化して『和文漢読法』（1900年）という日本語学習書を作成した。この学習法は簡単に言えば、「いくつかの通例を設け、初学者は中国語の文法を利用して、日本語を前後置き換えて読めば、十中八九までできる」²⁴⁹と羅普が述べたように、中日両国語の共通の要素である漢字を利用し、仮名で書かれた「てにをは」の意味だけを覚え、日本語を返り読みすることである。具体的な方法は「まずはじめに主語をとらえ、つぎに目を sentence の最後（。の前）にはせて、動詞をとらえ、さいごにあともどりして客語を読む」²⁵⁰ことである。この学習法は、日本を経由して

²⁴⁸ 羅普（1876～1949）は22歳で日本に留学した。梁啓超と一緒に日本で『清議報』『新民叢報』などを編集した。

²⁴⁹ 丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、1983年、175頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「訂有若干通例，使初習日文徑以中国文法颠倒读之，十可通其八九」

²⁵⁰ さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』（増補版第2刷）、くろしお出版、1981年、338頁。

いち早く西洋文明を摂取しようとした清末の中国人の日本語学習に大きな影響を与えた。しかし、張我軍はこの学習法を認めず、「この学習法を使用すれば 3 週間で成功できると言われたが、否定助動詞『ズ』と『ナイ』の意味だけを覚えているため、『必ず』を『不必』に、『少ない』を『不少』にするように、日本語の意味を逆にした」と指摘している²⁵¹。

「由話入文式」については、張我軍は日本語の会話を学び、会話ができれば、自然に書籍が読めるようになるという方法で、中国にいる日本人教師に多用された教授法でもあると説明している。この学習法は実際に「直接法」と呼ばれ、学習者の母語を用いずに、日本語だけを用いて説明することで、台湾や朝鮮などの日本の植民地で多用された方法である。しかし、張我軍は「この学習法を使用すれば最終的に日本語の読解力を習得できるが、週に 6 時間教えても 5、6 年かかる」のように、読解力の養成まで相当時間がかかることを理由に勧めていない²⁵²。

「會話與文法併學」は形式が会話文である「会話式読本」を日本語教材にして学ぶと同時に、文法知識を学ぶ方法だと張我軍は説明している。この学習法は、主に日本留学を目指した学生のための方法だと考えられる。外務省の 1930 年の調査によれば、当時の北京で多用された「会話式読本」は、飯河道雄の『中日対訳日語会話宝典』、堀越喜博・浅井周治の『日華対訳現代日本語会話文法』、方政英の『日本会話』などであり、ほぼ日本人によって作成されたものである。しかし、日本語の読解力の習得を目標とした張我軍は、この学習法を認めず、「会話式読本を通じて学んだ文法知識を実証することができず、会話式読本には本を読むことに応用できない会話文が多く、学生たちはそれを丸暗記する余裕がない。また、名詞、代名詞、動詞などのような品詞順に文法知識を丸暗記するのは、難しく面白味がない」と指

²⁵¹ 張我軍「怎麼樣學習日文」『日文與日語』第 1 卷第 2 号、人人書店、1934 年、1 頁。

²⁵² 張我軍「怎麼樣學習日文」『日文與日語』第 1 卷第 2 号、人人書店、1934 年、1 頁。

摘している²⁵³。

「死記公式」については、張我軍の説明によれば、前述の3種類の学習法が実用的でないことを意識して作られた新たな方法であり、この方法で学んだ文型の実例が日本語の書籍に出てくることから、当時では学生に非常に人気があった。実際に、この学習法は当時の多くの日本語教育者にも採用された方法である。1930年代に北京で日本語を教授した汪大捷²⁵⁴は、この学習法に対応した日本語教材『日華対照日文翻訳着眼点』(100の文型を収録)を作成した。汪は教材の序言において、「読者はその文型を真似して、自分で文の作成練習を行なうことができる。翻訳する際にも、これらの基本的な文型を利用して文の構成を分析すれば、その文の意味は自然に分かる」²⁵⁵のように、この学習法の利点を説明している。この学習法は当時の中国人留学生たちに多用された方法だと考えられる。東京で活躍していた日本語教育者の王玉泉も、この学習法に対応した『日語華訳公式』²⁵⁶を作成した。張我軍もこの学習法を完全に否定はせず、「死記公式」はこの4種類の学習法の中では日本語の読解力の習得に最も有効な方法だと述べた。しかし、それと同時に彼は、「文型だけによって変化に富んだ思想を表すのは困難である。また、この学習法は文法上の分析や語形の変化を軽視していることから、高いレベルの日本語能力が習得できない。また、丸暗記は機械的で、学習者に興味をもたせることができず、覚えても活用しにくい」のように、「死記公式」学習法の欠陥も指摘している²⁵⁷。

²⁵³ 張我軍「怎麼樣學習日文」『日文與日語』第1卷第2号、人人書店、1934年、2頁。

²⁵⁴ 汪大捷(1906~2000)は中国の日本語教育家で、1930年代に、北京で日本語を教えていた。中華人民共和国が成立した後、北京對外貿易學院(現在の對外經濟貿易大學)の教授を務めた。1930年代、100の文型を取めた『日華対照日文翻訳着眼点』という日本語教材を作成した。

²⁵⁵ 汪大捷「告読者」『日華対照日文翻訳着眼点』(三版)北平午未日文研究社出版、1936年、1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「讀者可仿其規模，自己練習(作文)造句。遇翻譯時，更可應用此種基本形式，解剖其句之成分，則意義自易明瞭。」

²⁵⁶ 初版は1935年に東京の岡崎屋書店によって発行された。

²⁵⁷ 張我軍「怎麼樣學習日文」『日文與日語』第1卷第2号、人人書店、1934年、2頁。

上記のことから、張我軍が考えた理想的な日本語教授法・学習法は、日本語の読解力の養成という目標を実現させると同時に、効率性や知的興味にも配慮しなければならないものだと分かる。したがって、既存の日本語教授法・学習法は、張我軍にとって理想的なものではなかったと言える。

2.2.2 新たな日本語学習法の提案

張我軍は上記のように既存の日本語教授法・学習法に対する検討にとどまらず、それを踏まえた上で、以下のように新たな日本語学習法を提案した。

我が国の学生は日本語を学習する際に、文法より着手すべきである。(中略)各種の文法規則を読本の中に融合させるべきである。読本を通じて文法を学べば、読本の文章をはっきり理解できると同時に、自然に文法を習得することができる。文法を学ぶ時には、分析と運用を同時に学ぶべきであり、特に文の構造における中国語との異同に注意しなければならない。また、読本を選択する時に、実用的なもので文法の難易度に合わせた材料を選ぶべきである。最後に、各種の句型、各種の特別な Phrase や Ideam (ママ) を随時取り入れなければならない。学生はこれらの句型や Phrase 及び Ideam (ママ) について、各種の単語と同じように、暗唱しなければならない。²⁵⁸ (下線は筆者)

この新しい学習法は一言で言えば、「文法＋読本」であり、読本を通じて文法規則を学ぶ方法である。この学習法の特徴は、難易度によって配列された文法項目を読本の文章に融合させることにある。学ぶ

²⁵⁸ 張我軍「怎麼樣學習日文」『日文與日語』第1卷第2号、人人書店、1934年、2-3頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我以爲我國學生學習日文，應由文法入手。(中略)我以爲應該將文法上的各種規則融化於讀本之中，由讀本學文法。至於文法之學習。須分析與運用並行，學者尤須注意其與國語的組織上之異同。其次，讀本中的文句，須選擇切於實用的材料，且能與文法之繁簡相策應者。最後，須隨時加入各種句法，各種特別的 Phrase, Ideam (ママ) 之類，學生對這些句法，Phrase 與 Ideam (ママ) 須與各種單詞一樣誦記之。」

際に文章の中に文法項目の使用例がすぐ見られるため、単純に文法知識を暗記するより面白味があり、学んだ文法項目の運用能力も向上できることから、効率的な文法習得の方法だと考えられる。また、読本の文章に随時各種の文型や慣用句を取り入れ、学生に暗唱させることが要求されたことから、「死記公式」という既存の日本語学習法の読解力養成におけるメリットを吸収した面も窺える。さらに、中国語の利用という点から見ると、単に中国語によって意味を理解させるだけでなく、文の構造における中国語と日本語の対照も要求されている。これは、日本語の文法に対する理解においても、日本語の読解力や翻訳力の養成においても、良い効果が得られるであろう。

当時、日本語の書籍を通して西洋の学術文化を学ぶという清末以来の社会背景の下、日本語の書籍を読むための文法学習が日本語学習の中心であった。また、清末以来の日本語教材は文法類の教材が最も多く、李小蘭（2006）によれば、清末の31種類の中国人編日本語教材には、語彙集が6種類、読本が2種類、文法書が16種類、総合類が7種類である²⁵⁹。張我軍が提案したこの学習法は、従来の文法中心という枠を超えたものではない。しかし、張我軍が文法と読本の統一を求めるのは、文法と読本の分立という清末期以来の日本語教授状況を意識したものだと言える。馬可英（2010）は清末の読本類日本語教材には文法の説明がないと指摘している²⁶⁰。また、山口喜一郎（1940）は戦前の中国大陸における日本語教育について、「元来支那に於ける日本語の教授は極端な三分科主義で、語法・読方・会話を分立させて教師を別にし、その方法は総べて読書的な対訳法」のように、文法と読方が分立している教授状況に言及している²⁶¹。民国時期に至って、こうした問題を意識して読本と文法の統一を求めた日本語教育者は張我軍だけでない。例えば、前章で述べたように、中華民国の成立か

²⁵⁹ 李小蘭「清季中国人編日語教科書探析」『杭州師範学院学報』（社会科学版）、2006年、97-102頁。

²⁶⁰ 馬可英『民国時期中国人編日語教材之研究—以“日語基礎叢書”為例』浙江工商大学修士論文、2010年、19頁。

²⁶¹ 山口喜一郎「海外に於ける日本語教育」国語教育学会叢書『標準語と国語教育』岩波書店、1940年、399頁。

ら国民党政権が確立するまでの時期における、優れた日本語学習書だと見られる葛祖蘭編『日語漢訳読本』は、「読本と文法を一つに融合させた」と標榜したものである²⁶²。また、1930年代に国立北京大学で使用された『日文津梁』も、「作成においては文法と読本の統一を求めようとする」と唱えた日本語教材である²⁶³。しかし、これらの教材は、読本と文法の統一を求めるものだと主張したが、張我軍の提唱する「文法＋読本」とは違ったものであった。それについては後で詳述するが、ここでは「文法と読本」の学習法は、文法と読本の分立という清末以来の日本語教授の現状を意識したものだ確認できる。

要するに、張我軍が唱えた新たな日本語学習法「文法＋読本」は、日本語の読解力の養成をめぐり、既存の日本語教授法・学習法の特徴と欠点を踏まえ、文法と読本の分立という清末以来の教授状況を意識したものである。以下では、『日文與日語』の日本語講座を取り上げ、張我軍が如何にこの新たな日本語学習法を実践し、自身の日本語教授観を日本語教材に導入したのかを考察する。

3. 『日文與日語』の読本に表れた張我軍の日本語教授観

『日文與日語』の日本語講座は、張我軍の日本語教育経験の集大成であり、初級から中上級まで全面的に張我軍の日本語教授観を反映させた資料だと考えられる。また、張我軍が作成した主教材である『日語基礎読本』の内容は、ほぼ『日文與日語』の初級講座の読本に含まれている。そのため、本節では『日文與日語』の日本語講座にある読本を考察対象にし、その内容的特徴に注目して、張我軍の日本語教授観が如何に表れたのかについて考察する。具体的には、初級読本、中級読本、上級読本の3つの部分に分け、考察する。

²⁶² 葛祖蘭『日語漢訳読本』（巻1）商務印書館、1928年、8頁。

²⁶³ 傅仲濤『日文津梁』梯梧山館、1936年、序文頁。著者の傅仲濤は当時、北京大学と燕京大学の日本語教師であった。

3.1 初級読本からみた張我軍の日本語教授観

初級読本の日本語文章は張我軍によって執筆され、写真 3-1 で示したように、各課の文章はほとんど 3 段落に分かれている。そして、文同士の内容に関連性が薄く、文法・文型項目の例文の組み合わせという色彩が強く、文法・文型項目の紹介を中心としたものだと思われる。また、各課の主な文法項目が課のタイトルとして直接掲載されている。しかし、各課に含まれた主

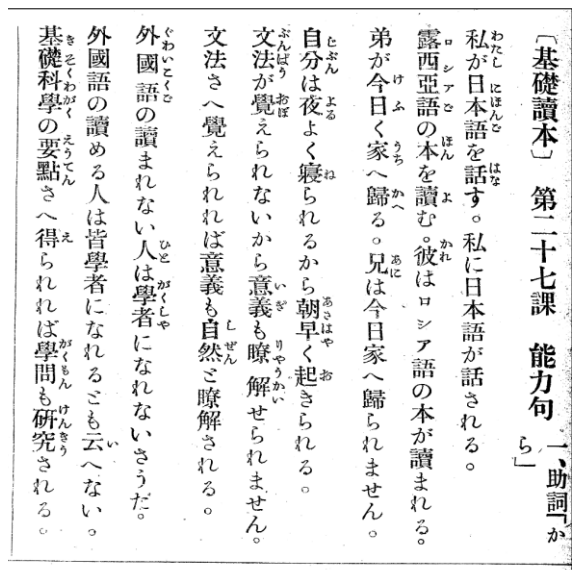


写真 3-1 『日本文と日本語』(1-7・初級読本・p9)

な文法・文型項目を表 3-1 にまとめたが、それを見ると、各課の文章は無秩序に並べられた文例ではないことが分かる。

表 3-1 で示したように、初級段階の各文法・文型項目は無秩序に各課に並べられたわけではなく、前述の「文法＋読本」の理念に従い、難易度によって各課の文章に配分されたものである。特に、助詞や助動詞などの品詞の導入においては、助詞や助動詞などをまとめて導入することはせず、各課に分散して導入するやり方である。また、複数の意味がある助詞に対しても、まとめて導入することはしない。例えば、格助詞の「ニ」を導入する際に、第 12 課において「友達ト公園ニ行ク」「弟ト家ニ帰ル」のように、「目的地」の意味である「ニ」を導入する。第 13 課において「机ノ上ニ筆ガアル」「椅子ノ下ニ紙ガアル」のように、「存在場所」の意味である「ニ」を導入する。こうした助詞の導入方法は現在の日本語教育では普通であるが、同時期の日本語教材と比べれば、工夫されたものだと分かる。例えば、当時の中華民国教育部の審査に通った、上海などの華中地方で多用された『現代日語』²⁶⁴では、助詞や助動詞などの品詞がまとめて説明してある。

²⁶⁴ 当時の東方夜校日文主任教授の蔣君輝によって作成され、全 2 冊で初版は上巻が 1930 年に、下巻が 1931 年に発行された。

また、前述の文法と読本の統一を求めた『日文津梁』でも、名詞、代名詞、数詞…助詞、副詞、接続詞…のように品詞順に、初級文法を導入している。ほかに、葛祖蘭編『日語漢訳読本』は「読本と文法を一つに融合させた」と標榜したものであるが、原文が他から採用した日本語文章であるため、各課の文法・文型項目が張我軍の初級読本のよりに完全に難易度によって配列されたものではない。つまり、張我軍が提唱する「文法と読本の統一」は、他の日本語教育者が考えるのと違い、単純に日本語文章を通じて文法項目を学習し練習するのではなく、各課間の内容のつながりが強い読本を通じて易から難へ自然に日本語の文法知識を習得するものである。

表 3-1 初級読本の文法・文型項目

巻・号	課	主な文法・文型項目	
1-1	1	1. 五十音図 (片仮名、ローマ字) 2. いろは (平仮名、片仮名) 3. 撥音、濁音、半濁音 4. 促音、拗音	
	4		
1-2	5		5. 長音、踊り字、合略仮名 6. 転呼音 7. 名詞+の+名詞、名詞+と+名詞 8. 数字+の+名詞
	8		
1-3	9	形容詞による連体修飾	
	10	連体修飾を含む動詞文 (四段活用動詞：辞書形)、が (格助詞)、を (格助詞)	
	11	連体修飾を含む動詞文 (上一段活用動詞：辞書形、ない形)	
	12	連体修飾を含む動詞文 (下一段活用・サ変・カ変動詞：辞書形、ない形)、に (格助詞：目的地)	
1-4	13	連体修飾を含む存在文・所在文 (辞書形、ます形：肯定)、は (副助詞)、に (格助詞：存在場所)	
	14	連体修飾を含む存在文・所在文 (ない形、ます形：否定)、も (副助詞)、副詞+に	
	15	名詞文 (～である、～ではありません)	
	16	名詞文 (～でない、～じゃない、～ではありません、～でありませぬ)	
	17	～ている、～ておる、～てある、動詞連用形+つつある、～から～まで	
	18	形容詞文 (辞書形、ない形、ます形、イ形容詞連用形+ございます)、より (格助詞：比較)	
1-5	19	動詞文 (た形)、動詞の音便	
	20	用言+う・よう (意志)、へ (格助詞)、に (格助詞：時間、目的) と (助詞：引用)	
	21	用言+う・よう (推量)、が (接続助詞)、の (形式名詞)	
	22	～らしい、～ようだ、だけ (副助詞)	
1-6	23	～そうだ、～てしまう、で (格助詞：動作の場所、手段、原因)	
	24	～を以て、～のために、～まい	
	25	受身文 (～に・から～れる・られる)、こそ (副助詞)	
1-7	26	受身文 (～のために～れる・られる、～によって～れる・られる)、さえ (副助詞)	
	27	可能文 (～れる・られる)、から (接続助詞：原因)	
	28	可能文 (できる)、～ても、ばかり (副助詞)	
	29	可能文 (～ことを得る、用言連用形+得る)	
	30	使役文 (～せる・させる)	
	31	使役文 (～をして～動詞未然形+しめる)	
1-8	32	～たい、か (副助詞)、～について	
	33	疑問文 (～ましたか、～ですか、～ますか)、形容詞の補助活用	
	34	命令文 (動詞の命令形、動詞連用形+たまへ、動詞連用形+なさい)	
	35	依頼文 (～てくれ、～てください、～ないでくれ、～ないでくださいませ)	

1-9	36	禁止表現 (～な、～てはいけない、～てはならない)、ね (助詞)、や (助詞)、ぞ (助詞)、 のに (接続助詞)
	37	～なくてはならない、～ねばならない、～なければならぬ、
1-10	38	敬語 (お+名詞・数詞・形容詞、～でございます)、～しか～ない
	39	敬語 (おっしゃる、いらっしゃる、なさる、参る、上がる、申す、致す)
	40	敬語 (れる・られる、お+動詞連用形+なさる、お+動詞連用形+になる)
1-11	41	敬語 (お+動詞連用形+する、お+動詞連用形+致す、お+動詞連用形+申す)
	42	～ば、～たら、～なら、～ならば、～と、～も～ば～も
	43	～には、～ためには、～といえ、～といふに、～にせよ、～にしる、～ざるをえない、～わけに はいかない、～とは限らない
	44	～けれども、～といえども、～とはいえ、～にもかかわらず、～ことになる、～ことにする、～ず にはいられない、～はずだ、～はずはない
	45	～とも、～にしても、～としても、～にすぎない、～に定っていない、～からだ
1-12	46	～以上 (は)、～限り (は)、～度に、～毎に、～度毎に、～と共に
	47	～に他ならない、～より外はない、～かもしれない、～いうまでもない
	48	～と同時に、～か～ない中に、～や否や、～か否か
	49	～には及ばない、～からといって、～どころでなく・どころか、～ほど、～ば～ほど
	50	～代わりに、～として
	51	授受補助動詞 (～てあげる、～てやる、～てくださる、～てくれる、～てもらう、～ていただく)

(『日本文典』第1巻より筆者作成)

3.2 中級読本からみた張我軍の日本語教授観

中級読本は初級読本と違い、張我軍が執筆したものではなく、他から採録した57篇の日本語文章である²⁶⁵。これらの文章を文章名とその分野、文体、出典などを表3-2にまとめた。

表3-2で示したように、この57篇の文章には、漢字平仮名交じり文がほとんどで、漢字片仮名交じり文は9篇である。また、口語文の文章だけでなく、12篇の文語文の文章も採録されている。当時、日本語の書物の多くは口語文で書かれたものであったが、法律書、医学書、古文書などの書物はまだ文語文で書かれていた。日本語の読解力の養成を教授目標とした張我軍は、文章を選択する際に文体にも配慮していたと考えられる。

中級読本にある文章の出典や分野から見れば、第1巻の21篇の文章は、主に日本文学者の随筆、倫理学や社会思想関係の論説文から採録したものであるが、第2巻以降の36篇はすべて日本の国語読本か

²⁶⁵ この57篇の文章は「中級文範」というコーナーに収録された51篇の文章と、「日語基礎文選講義」というコーナーに収録された6篇である。「日語基礎文選講義」は張我軍が比較的低いレベルの読者のために、第3巻第3号から設けたコーナーであるが、一定の基礎知識を持っている読者向けのものであるため、本章ではその中の文章を中級読本の文章として取り扱っている。

ら採録したものである。第1巻の文章の多くは複雑で長い文が多く、比較的難しいものであるが、第2巻以降の文章は、日本の小中学生向けの説明文と物語文を中心としたもので、理解するには比較的容易である。初級段階の基礎文法の学習が終わってから文学の名著や論説文を学ぶより、平易な説明文や物語文によって中級段階に移行したほうが、スムーズに学ぶことができ、基礎文法の知識を固めるのにも役立つと考えられる。そのため、張我軍は第1巻の内容が難しく中級レベルに合わないことに気付き、文章の難易度を低くするために、第2巻より比較的平易な国語読本の文章を選んだ可能性がある。

また、日本の国語読本から採録した36篇の日本語文章には、『尋常小学国語読本』²⁶⁶からの選択が27篇、『小学国語読本』²⁶⁷からの選択が6篇、『高等小学読本』からの選択が2篇、『中等国語読本』²⁶⁸から選択したものが1篇である。そのうち、『小学国語読本』²⁶⁹から選択した6篇(*)は比較的低いレベルの読者のために設けられた「日語基礎文選講義」というコーナーに取り入れたものである。この6篇を除き、第2巻の日本語文章は『尋常小学国語読本』の巻7～巻10から採録したものである。第3巻に至っては難易度が上げられ、主に『尋常小学国語読本』の巻11～巻12から採録するようになった。また、それに続き、第3巻の最後から『高等小学読本』と『中等国語読本』などから文章を採録している。要するに、中級読本の日本語文章は他から採録したものであるが、無秩序に並べられたものではなく、項目の選択や並び方において工夫され、漸次難易度が上げられたものである。

²⁶⁶ 『尋常小学国語読本』は第3期国定国語教科書であり、全12巻で1918年から1932年まで日本の尋常小学校で使用された。

²⁶⁷ 『小学国語読本』は第4期国定国語教科書であり、全12巻で1933年から1940年まで日本の尋常小学校で使用された。1935年7月時点で全12巻までは発行されず、巻6まで発行されていた。

²⁶⁸ 戦前の中学校用の国語読本である。本稿では、巻1(新修2版、1930年発行)を参考にした。

²⁶⁹ 『小学国語読本』は第4期国定国語教科書であり、全12巻で1933年から1940年まで日本の尋常小学校で使用された。1935年7月時点で全12巻までは発行されず、巻6まで発行されていた。

表 3-2 中級読本に採録された文章

巻・号	文章名	分野	文体、出典など
1-1	春	随筆	丁寧体、漢字平仮名文、出典不明
	一口ばなし	物語文	丁寧体、漢字平仮名文、出典不明
	窓	随筆	普通体、漢字平仮名文、出典不明
1-2	負け嫌ひな蛙	物語文	丁寧体、漢字平仮名文、出典不明
	地球の話	説明文	丁寧体、漢字平仮名文、出典不明
	「點心」自序	随筆	普通体、漢字平仮名文、芥川龍之介著『點心』
1-3	正直であれ	随筆	普通体、漢字平仮名文、吉田紘二郎の作品
1-4	ヨオロッパ文明の行詰り	論説文	普通体、漢字平仮名文、高須芳次郎の作品
1-5~6	論理学の性質	論説文	普通体、漢字平仮名文、速水滉著『倫理学』
1-6	晩秋の日	随筆	普通体、漢字平仮名文、小川未明の作品
1-7	思想	論説文	普通体、漢字平仮名文、金子馬治著『欧州思想大観』
	風	随筆	文語文、漢字平仮名文、徳富蘆花著『自然と人生』
1-8	社会思想の部類	論説文	普通体、漢字平仮名文、高島素之『社会思想講座』
	要談と閑話	随筆	文語文、漢字平仮名文、徳富蘇峰の作品
1-9	母と蘆	随筆	普通体、漢字平仮名文、西條八十の作品
	浪漫的結婚と論理的結婚	論説文	普通体、漢字平仮名文、米田庄太郎『恋愛と人間愛』
	うれしさ	随筆	文語文、漢字平仮名文、幸田露伴作の作品
1-10	科学の特質	論説文	普通体、漢字平仮名文、石原純の作品
1-11	社会思想史序説	論説文	普通体、漢字平仮名文、波多野鼎の作品
	芥川龍之介君よ	随筆	文語文、漢字平仮名文、菊池寛の作品
1-12	不潔を厭はぬ人々	随筆	丁寧体、漢字平仮名文、田上三郎著『世界の奇習と奇観』
2-1	動物の色	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻9
	ナイヤガラの瀧	説明文	丁寧体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻9
	横浜	説明文	文語文、漢字片仮名文、『尋常小学国語読本』巻7
	大阪	説明文	文語文、漢字片仮名文、『尋常小学国語読本』巻7
2-2	燈台守の娘	物語文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
	獅子と武士	物語文	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻7
2-3	水の力	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	分業	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	鷺	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	手の働	説明文	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	今日	和歌	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻9
2-4	山の秋	随筆	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	朝鮮人參	説明文	丁寧体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	捕鯨船	随筆	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
	物ノ価	説明文	文語文、漢字片仮名文、『尋常小学国語読本』巻9
2-5	パナマ運河	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
	犬ころ	随筆	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻8
	文天祥	伝記	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
2-6	伝書鳩	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
	孔子	伝記	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻11
3-1	裁判	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻11
	瀬戸内海	説明文	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻11
3-2	太陽	説明文	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻11
	新聞	説明文	文語文、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻12
3-3	山ノ上(*)	随筆	普通体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻2
	オ月サマ(*)	随筆	丁寧体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻2
	ヨーロッパの旅	紀行文	丁寧体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻12
	霧	歌	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻10
3-4	兔ト亀(*)	物語文	丁寧体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻1
	獅子ト鼠(*)	物語文	丁寧体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻1
	リンカーンの苦学	伝記	普通体、漢字平仮名文、『尋常小学国語読本』巻11

3-5	春が来タ (*)	童話	普通体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻3
	考へ物 (*)	会話文	丁寧体、漢字片仮名文、『小学国語読本』巻3
	人生の曙	随筆	普通体、漢字平仮名文、『中等国語読本』巻1
3-5~6	スパルタ武士	随筆	文語文、漢字平仮名文、『高等小学読本』巻1
3-6	植物と氣象	随筆	普通体、漢字平仮名文、『高等小学読本』巻2

(『日文與日語より筆者作成』)

3.3 上級読本からみた張我軍の日本語教授観

上級読本の日本語文章は中級読本と同じように、他から採録したものである。これらの文章を文章名とその分野、文体、出典などを表3-3にまとめた。

表3-3で示したように、上級読本の日本語文章は20篇あり、すべて漢字平仮名交じり文で、口語文の文章である。その中には、小説が9篇、論説文が6篇、随筆が4篇、日記が1篇掲載されている。このように日本の文学作品と論説文を中心とした構成は、第1巻の中級の「読本」と同じであるが、中級の「読本」に随筆が多いのに対し、上級では小説が比較的多く採録され、また、論説文も中級のものより長くなり、何回にもわたり連載されたものもある。また、全体的から見れば、上級読本は、日本の国語読本を中心とした中級読本より全体的に難易度が上げられている。つまり、上級読本は言語知識の習得というより日本語の読解力の応用に重点が置かれている。

このように、張我軍は日本語教材を作成する際に、初級、中級、上級の学習段階を意識し、各段階のレベルにふさわしい材料を選択している。また、同じ段階においても日本語文章の難易度に基づいた並べ方をしている。これは「読本を選択する時に、実用的なもので文法の難易度に合わせた材料を選ぶべきである」という前述の張我軍が提唱した日本語学習法の内容と合致している。

表 3-3 上級読本に採録された文章

巻・号	文章名	分野	文体、出典など
1-1~8	現代政治思想の主流とその破綻	論説文	普通体、漢字平仮名文、大山郁夫著『政治の社会的基礎：国家権力を中心とする社会闘争の政治学的考察』
1-2	セメント樽の中の手紙	小説	丁寧体、漢字平仮名文、葉山嘉樹の作品
1-3	侏儒の言葉	随筆	普通体、漢字平仮名文、芥川龍之介著『侏儒の言葉』
1-4	静夜日記	日記	普通体、漢字平仮名文、生田春月の作品
1-5	雷雨の夜	小説	普通体、漢字平仮名文、ゴーリキー著・二葉亭四迷訳『乞食』
1-6	低能児	小説	普通体、漢字平仮名文、加藤武雄著『感謝』
1-7	武器	随筆	普通体、漢字平仮名文、芥川龍之介著『侏儒の言葉』
1-9~10	批評と門志	論説文	普通体、漢字平仮名文、片上伸著『文学評論』
	転生	小説	普通体、漢字平仮名文、志賀直哉の作品
1-11~12	少年の悲哀	小説	普通体、漢字平仮名文、國木田独歩の作品
2-1	雨の趣味	随筆	普通体、漢字平仮名文、黒田鵬心著『人生と趣味』
2-1~6	空想的社會主義	論説文	普通体、漢字平仮名文、エンゲルス著・堺利彦訳『社会主義の発展：空想的社会主義から科学的社会主義へ』
2-2	菖蒲の節供	随筆	普通体、漢字平仮名文、島崎藤村の作品
2-3	吾輩は猫である	小説	普通体、漢字平仮名文、夏目漱石の作品
2-4	アメリカの発明界展望	論説文	普通体、漢字平仮名文、矢部利茂の作品
2-4~6	勝負事	小説	丁寧体、漢字平仮名文、菊池寛の作品
3-1~2	空襲と民心の統制	論説文	普通体、漢字平仮名文、保科貞次著『防空の科学』
3-1~3	繪のない繪本	小説	丁寧体、漢字平仮名文、林房雄『繪のない繪本』
3-3~6	現代世界外交思潮及びその動向	論説文	普通体、漢字平仮名文、芦田均の作品
3-4~6	悪魔	小説	普通体、漢字平仮名文、谷崎潤一郎の作品

(『日文與日語より筆者作成』)

4. 読本の「講解」「註解」からみた張我軍の教授面での特徴

上記では「文法＋読本」などの張我軍の日本語教授理念が彼の日本語教材に導入されていることが検証できたが、張我軍による実際の日本語教授は如何なるものかを検証する必要がある。当時の教育現場での様子を直接窺える資料がないが、『日文與日語』の日本語講座では「講解」「註解」などの読本に対する解説部分が付いている。これらの解説部分は簡単に文法・文型項目を提示するのではなく、教室での講解と同じように、文章に含まれた文法・文型項目に対する詳細な解説である。これらの解説部分の内容は「発音に対する解説」と「文法に対する解説」の2種類に分けることができる。以下では、この2種類に分け、それに表れた張我軍の教授面での特徴を考察する。

4.1 発音に対する解説からみた教授面での特徴

張我軍は日本語の読解力の養成を主な教授目標としたが、入門段階での発音に対する解説を軽視することはなかった。『日文與日語』に

は、1巻4号から1巻12号まで、游培林の「日文発音的研究」（日本語発音の研究）という文章を連載したことから、編集長としての張我軍が発音の研究を重視する姿勢が見られる。

具体的には、張我軍は『日文與日語』において日本語の発音を解説する際に、「K+a=カ、枯阿切=カ、K+i=キ、枯衣切=キ」²⁷⁰のように、「反切」という漢字の発音方法を利用した。しかし、漢字の発音は完全に日本語の発音と対応しているわけではない。例えば、濁音などのような漢字の発音で日本語の発音を正確に表すことができない場合もある。そのため、張我軍は1935年に発行された『日語基礎読本自修教授参考書』においては、前述の欠陥を補うために、英語の発音と中国語の注音符號を加え、以下のように教授するようになった。

「カ行」の子音は「k」であり、「k」の発音は英語の book の「k」のようである。漢字の「客」と注音符號の「ㄎ」の発音と似ている。以下では注音符號を用いて「カ行」の発音を示す：ㄎㄚ、ㄎㄨㄛ、ㄎㄨㄝ、ㄎㄨㄛ。 ²⁷¹

その後、1936年に発行された『標準日文自修講座』（前期第1冊）においては、張我軍は有声音、無声音、破裂音、摩擦音などの音声学の知識を加え、発声器官図や「ア、イ、ウ、エ、オ」の正面と側面の口形を示す写真を取り入れた（p 106、写真 2-14 参照）。また、漢字の発音、英語の発音、中国語の注音符號以外に、「本行の5つの音の子音は「k」であり、後舌と軟口蓋が閉鎖して破裂させた軟口蓋音であり、漢字の「克」のようである」²⁷²のように、発声器官を利用した発声方法も提示してある。つまり、張我軍の日本語教授は教学経験の蓄積に伴い、改善されてきたものである。

²⁷⁰ 『日文與日語』創刊号、人人書店、1934年、12頁。

²⁷¹ 張我軍『日語基礎読本自修教授参考書』人人書店、1935年、2-3頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「[ガ行]的父音是「k」,「k」發音如英語 book 的「k」。漢字似「客」音,國音字母「ㄎ」,試以國音字母示此五音之音如下:ㄎㄚ ㄎㄨㄛ ㄎㄨㄝ ㄎㄨㄛ。」

²⁷² 張我軍『標準日文自修講座』（前期第1冊）、人人書店、1936年、23頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「本行五音所共通的父音是『k』,即后舌与軟口蓋合之然後使其破裂的喉音,如漢字『克』。」

しかし、張我軍による発音の教授には不足点も見られる。『日文與日語』の初級読本の第3課の「講解」において、「日本語は抑揚(accent)がないと言えるため、読むと平らな感じである」²⁷³のように説明されている。その後、『標準日文自修講座』(前期第1冊、1936年)では、「日本語は抑揚があるが、抑揚の程度が極低く、抑揚の方法も日本全国で一致していないため、本講座では取り扱っていない。また、完全に自修する場合は、本を読む能力だけを習得すればよく、会話を同時に習得するのには、余裕がない」のように述べていたが²⁷⁴、そこにはアクセントの教授における限界性も見られる。

4.2 文法に対する解説からみた教授面での特徴

文法に対する解説は張我軍の日本語教授の中心的な内容だと言える。『日文與日語』の日本語読本に付いた「講解」や「註解」により、張我軍による文法の教授は主に2つの特徴がある。

一つは、「文法+読本」という理念を徹底的に実行し、読本に含まれた文法・文型項目を提出順によって説明していることである。つまり、助詞「ニ」「デ」のような、複数の意味や用法を持つ文法項目に対しては、その課に出てくる意味や用法のみを取り扱い、説明している。その後、同じ文法項目の新しい意味や用法が出てきた場合、「本課の『ニ』は既習の2種類の用法と違っている」²⁷⁵のように提示してから、新しい意味や用法について説明する。この点は、同じく「読本と文法を一つに融合させた」と標榜した葛祖蘭の『日語漢訳読本』と異なっている。『日語漢訳読本』は各課が「原文」「漢訳」「註解」「備考」の4つの部分からなっている。「註解」は張我軍の初級読本の「講解」と同じように、原文に含まれた文法・文型項目に対する詳しい説明であるが、完全に文法・文型項目の提出順によって説明したものではない。例えば、第2課の「原文」には助詞「ニ」(存在場所)、「ワ」、

²⁷³ 『日文與日語』創刊号、人人書店、1934年、13頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「且日本語可以說沒有抑揚(accent)，所以讀來極平順。」

²⁷⁴ 張我軍『標準日文自修講座』(前期第1冊)、人人書店、1936年、7頁。

²⁷⁵ 『日文與日語』第1巻第5号、人人書店、1934年、12頁。

「ノ」だけ出てくるが、「註解」には「ワ」「ガ」「ノ」「ニ」「へ」「ヲ」「デ」「カラ」などのような、ほぼすべての助詞をそろえ説明している²⁷⁶。

文法に対する張我軍の解説に見られるもう一つの特徴は、文の構造分析を重視していることである。前述のように、張我軍は「文法＋読本」という新たな日本語学習法を提案する際に、「文の構造における中国語との異同に注意しなければならない」ことを強調していた。張我軍は文法に対する解説を行なう際に、以下のようにこの点を実践している。

第三句の「犬が…とする」(「とする」は翻訳する必要がない)は、「度に」を補充する文で、「度に」と一緒に「突き落としました」を修飾する。第四句の「それを考へる」は連語として「毎に」を補充し、「毎に」と一緒に「心持になる」を修飾する。²⁷⁷

「吾輩が…住む込んだ」(ママ)は連体修飾句であり、「當時」を修飾する。「當時は」は「…不人望であつた」を修飾し、この文の主格は「吾輩」であるため、省略された。²⁷⁸

これらの解説文には中国語との異同が明示されていないが、文と文の間の修飾関係が細かく分析され、主語などの文の成分の省略も提示されていることから、構造における中国との異同は自然に分かるであろう。

また、以下のように中国語訳を利用して文の構造における中国語との異同を示している。

²⁷⁶ 葛祖蘭『日語漢訳読本』(巻1) 商務印書館、1928年、17-19頁。

²⁷⁷ 『日文與日語』第1巻第11号、人人書店、1934年、13頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「第三句、『犬が…とする』(『とする』不必譯) 附句補充『度に』, 合飾『突き落としました』。第四句『それを考へる』連語補充『毎に』合飾『心持になる』。」

²⁷⁸ 『日文與日語』第2巻第3号、人人書店、1935年、50頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「『吾輩が…住む込んだ』(ママ) 連體句修飾『當時』。『當時は』修飾『…不人望であつた』, 本句主格是『吾輩』而省略之。」「住む込んだ」は印刷ミスによるものだという可能性がある。

この文（「よく解るやうに言ってください」）は元々「請你能够明白那樣地說罷」に翻訳すべきであるが、中国語の習慣により、「請你說得叫人能够明白罷」に翻訳してもよい。²⁷⁹

「躍起となつて」は連語で、元々の意味が「成為躍起」であるが、「奮而…」に翻訳するほうが中国語に合う。²⁸⁰

つまり、直訳による中国語訳と、中国語の習慣や文脈上の意味による中国語訳の両方を提示して解説している。こうした解説方法は、学習者に文の構造における中国語との異同を把握させる一方、学習者の翻訳能力の養成にも役立つと言える。

そのほか、張我軍は複雑で長い文に対し解説する際に、写真3-2のような図解を多用した。こうした図解は学習者に効率的に文の構造を理解させると同時に、機械的に分析することを避け、学習者の興味をもたせることもできると考えられる。

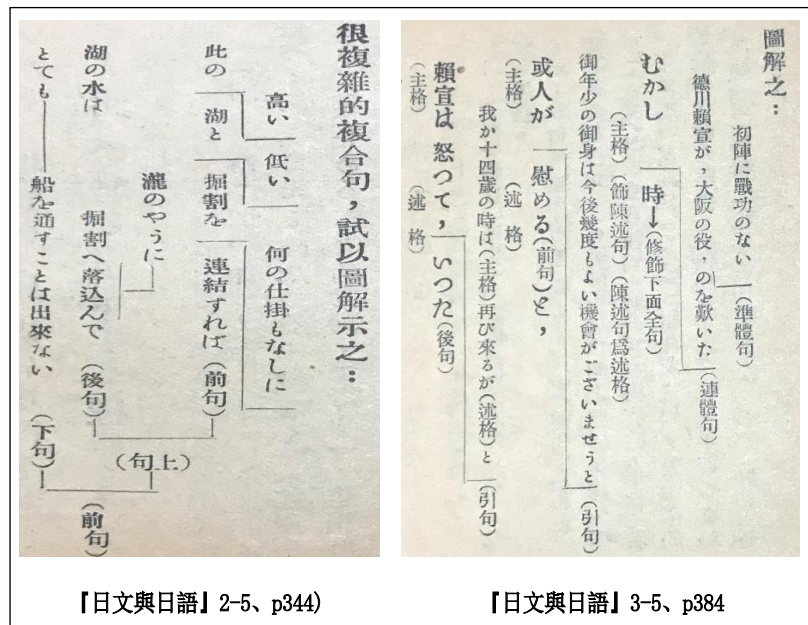


写真 3-2 文の構造分析に関する図解(『日文與日語』)

以上見てきたように、張我軍は「文法+読本」という新たな日本語教授法理論を日本語教材に導入しただけでなく、実際の授業においてもその教授法を徹底的に実行したと考えられる。また、こうした日本語教授法による効果については、以下の、張我軍の日本語授業に対す

²⁷⁹ 『日文與日語』第1巻第8号、人人書店、1934年、13頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「此句原須譯『請你能够明白那樣地說罷』，但為就國語的習慣，可以譯為『請你說得叫人能够明白罷』。」

²⁸⁰ 『日文與日語』第1巻第9号、人人書店、1934年、7頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「『躍起となつて』連語，原意是『成為躍起』，但譯『奮而…』才像國語。」

る当時の学生による評価によっても窺える。

台湾からきた張我軍先生の授業も聴きにいきました。彼は中国大学の専任講師ではなかったのですが、その授業は、文章表現や文学表現にまで及ぶたいへん興味深いものでした。私たちの学校にも前から日本語の授業もありました。教務長の奥さん²⁸¹が日本人だったので教えてくれたのです。とてもいい人でしたが、教え方は上手ではありませんでした。²⁸²（下線は筆者）

日本語をもっと勉強しようと思って、中国大学でも第二外国語に選びました。先生は張我軍とって、台湾出身の人でした。著書や翻訳書などをたくさん出していて、日本の領事館の人とも親しくしていました。張先生は自分でテキストを作成し、週に何回か教えてくださいました。（中略）張先生はとてもまじめで、先生のクラスには学生がたくさんいました。説明ははっきりとしていました。²⁸³（下線は筆者）

つまり、当時の学習者にとって、張我軍による日本語教授は興味深く、説明もはっきりとしている。また、当時の新聞には、「文型丸暗記」学習法を推奨した張仲直の日本語教授法を張我軍のと比較する記事が掲載されている。その内容は以下のようなものである。

「二張」（筆者：張我軍と張仲直を指す）の下で勉強した学生は、この2人に対し、適切な評価を与えることができるであろう。張仲直の教え方は文法の活用が詳しく説明されたが、文型が覚えにくいため、書籍や新聞を読むことにあまり役立たなかった。張我

²⁸¹ 方政英のことを指す。原名は古賀マサ子で、佐賀県出身である。朝陽大学、中国大学、北平大学などの大学で日本語教師を担当し、『日本会話』や『日本語法』などの日本語教材を作成した。

²⁸² 鍾少華著『あのころの日本ー若き日の留学を語る』日本僑報社、2003年、121頁。回想者の林林（1910～2011）は当時中国大学の学生で、新中国成立後は中国対外友好協会副会長、中日友好協会副会長をつとめた。

²⁸³ 鍾少華著『あのころの日本ー若き日の留学を語る』日本僑報社、2003年、167頁。回想者の陳辛仁（1915～2005）は当時中国大学の学生で、新中国成立後は中国文化部副部長などをつとめた。

軍は日本語の書籍や新聞の閲読を教えてくれた。それにより文の主語が分かりやすく、さらに辞書を引いたら間違いが少ない。しかし、翻訳に関してはうまく指導できない。²⁸⁴（下線は筆者）

この内容を見ると、張我軍の翻訳の指導に対し不満を持つ学生がいるが、日本語の読解力の養成においては、張我軍による日本語教授法は「文型丸暗記」の教授法より役立つことが分かる。したがって、張我軍の日本語教授法は、日本語の書籍を読むという当時の日本語学習者の主なニーズに合致していたと言える。

また、張我軍の友人の陳逢源は、1939年に台湾から北京へ旅した際に、「張君は現在北京大学の日本語教授として令名高く、彼の著した本が日本語教授の台本に使われている」²⁸⁵と述べている。つまり、張我軍の日本語教授観が貫かれた日本語教材は、戦時中にも一定の注目を集めたと考えられる。以下では、華北淪陷区初期に広く使われた科学図書館編日本語教科書の作成過程に対する再検討により、戦時中に張我軍の日本語教授観が如何に影響力があつたかを考察する。

5. 戦時中の日本語教育における張我軍の影響

一北京近代科学図書館編日本語教科書作成を中心に

第1章で述べたように、戦時中、張我軍は科学図書館の日本語講座に深く関わり、日本人教師を含めた多くの講師陣の中でも唯一日本語教授法を教えた人物である。張我軍の日本語教授観は科学図書館の日本語教育活動に大きな影響を与えたと考えられる。以下では、科学図書館編日本語教科書の作成をめぐる、張我軍は具体的に如何なる影響を与えたのかを考察する。

²⁸⁴ 「兩個日文教授之評價」『大学新聞（北平）』1934年8月25日。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「在二張處領教過的學生，大都能對他倆作適當底評價：『張仲直解釋文法之活用很詳細，但公式不易記，看書報不大成功。張我軍吧！教人閱讀書報，找得著主語；查字典，很少發生錯誤，不過真的講到翻譯，他又很難指示迷津了！』」

²⁸⁵ 陳逢源『新支那素描』台湾新民報社、1939年、100頁。

5.1 北京近代科学図書館編日本語教科書について

科学図書館の日本語教育活動に関しては、第1章ですでに概説している。科学図書館は1936年12月5日に開館され、北京淪陥後、日本語講座を開設し、華北淪陥区初期の唯一の日本政府が関与した日本語教育機関であり、比較的大きな規模を持っていた。また、科学図書館は「将来は中等学校に日本語が正科として課せられるべきもの」²⁸⁶とし、中等学校用の日本語教科書を編纂し始めた。表3-4で示したように、『初級日文模範教科書』（以下、『初級日文』）（巻1）は、1937年10月に発行され、最初に北京市地方維持会文化組の審査を通った教科書である。その後、『初級日文』（巻2、巻3）、『高級日文模範教科書』（以下、『高級日文』）（全3巻）及び、副教材としての『日文補充読本』（全6巻）が次々と発行された。また、初歩学習者向けの『日本語入門篇』は、『初級日文』（巻1、巻2）の補充という意味も含め、1939年9月に発行された。

表 3-4 北京近代科学図書館編日本語教科書

教科書名	初版発行年
『初級日文模範教科書』（全3巻）	巻1:1937.10、巻2:1937.11 巻3:1938.1
『高級日文模範教科書』（全3巻）	巻1:1938.3、巻2:1938.5 巻3:1938.10
『日文補充読本』（全6巻）	巻1:1937.12、巻2:1938.3 巻3:1938.12、巻4:1939.2 巻5:1939.4、巻6:1939.12
『日本語入門篇』	1939.9

これらの日本語教科書は、華北淪陥区の多くの中学や大学だけでなく、軍宣撫部北京班や北京警察局特務科などの多くの公的機関でも使われていた。科学図書館の1942年7月末時点の調査によれば、主教材としての『初級日文』と『高級日文』は、使用先が北京、天津、保定などの華北各地に広がり、発行部数が合わせて73079冊に達してい

²⁸⁶ 「本館記事」『北京近代科学図書館館刊』第2号、1937年、193頁。

る²⁸⁷。華北淪陥区初期の日本語教育に大きな影響を与えたと考えられる。

5.2 日本語教科書の作成方針と張我軍との関連性

科学図書館の日本語教育活動に関しては、小黒浩司（1987a）小黒浩司（1987b）川上尚恵（2006）川上尚恵（2010）田中寛（2015）などの先駆的な研究がすでにある。これらの研究により、日本語教育事業の実態、及び日本語教科書の構成と特徴などが分かる。そのうち、川上尚恵（2010）は、『初級日文』と『日本語入門篇』の特徴及びそれに表れた日本語教授観を分析した上で、教科書の編纂に関わった人物について考察した。川上は、「中国人に対する日本語教育に関する知識と教授観を持った人物が編纂に関わっていたことは確かであろう」²⁸⁸と指摘しているが、張我軍のことには言及していない。しかし、張我軍が科学図書館の「師範科」で唯一「日本語教授法」という科目を教えた人物であったことから、張我軍の日本語教授観は科学図書館の教科書編纂に影響を与えた可能性は否定できない。

この点については科学図書館の日本語教科書の作成方針によっても窺えるであろう。科学図書館の日本語教科書の作成は北京淪陥後に始められたが、その作成方針は北京淪陥前にすでに打ち出していた。当時、三増英夫という人物が外務省の依頼を受け、1930年代の中国大陸で起きた「日本語ブーム」を調査し、分析した上で、北京と上海の科学図書館の事業方針に自身の意見を提出した。その調査結果と三増の意見をまとめたものが、1937年2月に外務省文化事業部に出された『中華民國ニ於ケル日本語研究ノ現況』（JACAR、Ref. B10070618200）である。三増英夫は当時の中国大陸の日本語教育の特徴と欠点などを分析した上で、科学図書館の事業方針に対し、具体的に10項目の意見を提言した。その後の科学図書館の活動は、ほぼこの提言に沿って

²⁸⁷ 北京近代科学図書館月報『書滲』第42号、1942年、2頁。

²⁸⁸ 川上尚恵「北京近代科学図書館編纂日本語教科書分析からみた占領初期の中国華北地方における日本語教育の一側面」『日本語教育』146号、2010年、155頁。

行われたと言える。そのうち、日本語教科書関係の項目は以下の第7項目と第8項目である。

七 各大学又ハ民間日語学校ニ於ケル日語担当教員乃至日本事情研究者ニ対シテハ積極的ニ接触シ、適當ナル教材ノ紹介、参考書ノ貸與、日語書籍注文ノ媒介ヲ行フ等諸種ノ便宜ヲ供スルコト、又日語教授ニ関スル講習会ヲ開催シ教授法ノ改善ニ協力スルコト

八 中国側日語担当教員、留日学生出身者中適當ナルモノヲ選ヒ之ニ日本側語学者等ヲ加ヘテ日語教科書ノ編纂委員会ヲ組織シ、標準的日語教科書ノ編纂及出版ヲ行ハシムルコト²⁸⁹(下線は筆者)

このように、科学図書館は北京淪陥前から、中国側日本語担当教員に積極的に接触し、彼らを入れて日本側の日本語学者と一緒に日本語教科書を作成することを計画している。第1章で述べたように、張我軍は戦前から外務省文化事業部が積極的に接触する対象者の一人で、科学図書館の館長と個人的な関係を持っている。また、この三増英夫の報告書は当時の日本語教育の特徴と欠陥を分析する際に、『日文與日語』に掲載された張我軍の論述を引用している。さらに、その報告書には『日文與日語』が好評を博したことや、張我軍の日本語教育業績などが詳細に記述されている。このことから、科学図書館は日本語教科書を作成する際に、張我軍の日本語教材及び日本語教授観を参考にした可能性が非常に高いと考えられる。以下では、川上尚恵(2010)の研究を踏まえた上で、科学図書館の主教材である『初級日文』『高級日文』を取り上げ、張我軍の日本語教材との比較により、張我軍が科学図書館の教科書編纂に与えた影響を具体的に考察する。

²⁸⁹ JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B10070618200 (第21画像目)、三増英夫調 中華民國ニ於ケル日本語研究ノ現況 (附. 日本近代科学図書館論/1937年) (文化_37) (外務省外交史料館)

5.3 『初級日文』『高級日文』作成における張我軍の影響

5.3.1 教科書の構成からみた張我軍の影響

『初級日文』は全3巻で、巻1が56課、巻2が41課、巻3が29課である。各巻の構成は同じで、主に本文、中国語訳文、「教授参考」という3つの部分で成り立っている。中国語訳文と「教授参考」は教科書の最後に付いている。「教授参考」は中国語で書かれ、各課の教授すべき文法・文型項目及び教授時の注意点などが提示されている。

「教授参考」は別冊ではなく、原文と一緒に同じ本冊に編纂されていることから、中国人日本語教師の使用だけでなく、学習者の使用も想定していたと考えられる。このような編纂理念は、張我軍の『日語基礎読本自修教授参考書』の作成を参考にしたのではないかと考えられる。つまり、教師だけでなく、学習者が「教授参考」により本文に出ている文法・文型項目の要点を確認することができる。また、『初級日文』（巻1）には文章の文同士の内容に関連性が薄く、文法・文型項目の紹介を中心とした課が少なくない²⁹⁰。これは前述の「文法と読本の統一」を求めた張我軍の初級読本の特徴と一致していると言えるであろう。

また、『初級日文』は構成上では第3期までの国定国語教科書の基本であった「範語法」を踏襲し、名詞・名詞修飾から始まる構成だと指摘されている²⁹¹。しかし、日本の国定国語教科書は、1933年に発行された第4期の『小学国語読本』より、文からの導入である「範文法」を採用してきた。『初級日文』（巻1）の発行時点（1937年）では、「範語法」の代わりに、「範文法」の使用が一般的である。これについては、川上（2010）は「時間的経過を考えると国定国語教科書を直接踏まえたというよりも、むしろそれに範をとっていた他の植民地教科書を踏まえたのかもしれない」²⁹²と分析している。この可能性は否定で

²⁹⁰ 川上尚恵「北京近代科学図書館編纂日本語教科書分析からみた占領初期の中国華北地方における日本語教育の一側面」『日本語教育』146号、2010年、146-147頁。

²⁹¹ 川上尚恵「北京近代科学図書館編纂日本語教科書分析からみた占領初期の中国華北地方における日本語教育の一側面」『日本語教育』146号、2010年、146頁。

²⁹² 川上尚恵「北京近代科学図書館編纂日本語教科書分析からみた占領初期の中国華北地方における日本語教育の一側面」『日本語教育』146号、2010年、155頁。

きないが、前述の科学図書館の作成方針と合わせて考えてみると、その範をとっていた張我軍の日本語教科書²⁹³を参考にした可能性も高いと言える。

科学図書館編纂の主教材には、「中級」を名乗ったものがないが、『初級読本』の巻2と巻3は、巻1より国定国語教科書から採用したものが多く²⁹⁴、張我軍の中級読本のレベルに相当するものである。つまり、基礎文法・文型の学習に続き、平易な日本語文章の学習に入る点では、『初級日文』と張我軍の日本語教材と同じようである。

『高級日文』は全3巻で、巻1が27課、巻2が24課、巻3が24課である。構成は『初級日文』と違い、原文と中国語訳の2つの部分だけで、「教授参考」がなくなっている。巻1は『尋常小学国語読本』と重なっている課が17課で62.9%を占め、『初級日文』の巻2、巻3に続いたものだと考えられる。巻2、巻3は文章の難易度を上げ、日本の古典文学作品や当時の近現代文学作品が主な内容である。

以上見てきたように、『初級日文』と『高級日文』の構成は、全体的に見れば、張我軍の作成した読本とほぼ同じだと言える。すなわち、初級段階では基礎文法・文型が含まれた文章を取り入れ、中級段階では平易な日本語文章に移行し、上級段階では比較的難しい文学作品などを取り入れていることである。科学図書館は日本語教科書を編纂する際に、「文法+読本」の理念で作成された張我軍の日本語教材を参考にしたのではないかと考えられる。

5.3.2 教科書の内容面からみた張我軍の影響

張我軍の教授理念が科学図書館の教材編纂に影響を与えたものは、『初級日文』『高級日文』の構成上だけでなく、その内容面にも見られる。まず、『初級日文』の「教授参考」に表れた特徴を見ておく。「教授参考」に表れた一大特徴は中国語訳を重視し、単に中国語によ

²⁹³ 表3-2で示したように、張我軍が作成した『日文與日語』の初級読本も「範語法」を採用し、名詞・名詞修飾から始まる構成である。

²⁹⁴ 『初級日文』における国定国語教科書の課数の割合は、巻1が7.1%、巻2が56.1%、巻3が79.3%である。(川上尚恵(2010:148)を参照。)

って意味を理解させるだけではなく、直訳が難しい場合の翻訳方法も留意されていることである²⁹⁵。また、「教授参考」は、助詞のように複数の意味・用法を持つ文法項目の指導方法に関しては、その課に出てくる用法のみを取り上げ学習者に理解させ、その後違った用法が出てきた場合は、既習の用法と対比させると指示されている²⁹⁶。これらの特徴はまさに、前述の「講解」「註解」からみた張我軍の教授面での特徴と一致している。また、全体からみれば「教授参考」は、張我軍の読本に付けられた「講解」「註解」ほど詳しくないが、文法説明には両者の相似性が見られる。受身文に対する説明を例にとると、以下のようである。

動作主の後に付く助詞は「ニ」、或いは「カラ」である。この動作主「××ニ」があるかどうかは、「レル」「ラレル」は「被」の意味か、それとも「會」の意味かを区別する唯一の根拠である。しかし、注意すべきは動作主が省略された場合であり、例えば、第三句の「咬マレマス」の前には「犬ニ」が省略されている。²⁹⁷
(下線は筆者) (『初級日文模範教科書』巻2)

「レル」「ラレル」は4種の意味がある。「被」の意味であると判断できるのは、完全に「××ニ」「××カラ」によるものである。しかし、動作主が文脈によって分かる場合、常に省略される。この点は注意すべきである。²⁹⁸

(下線は筆者) (『日文與日語』1-6)

²⁹⁵ 川上尚恵「北京近代科学図書館編纂日本語教科書分析からみた占領初期の中国華北地方における日本語教育の一側面」『日本語教育』146号、2010年、149頁。

²⁹⁶ 川上尚恵「北京近代科学図書館編纂日本語教科書分析からみた占領初期の中国華北地方における日本語教育の一側面」『日本語教育』146号、2010年、149頁。

²⁹⁷ 北京近代科学図書館編纂『初級日文模範教科書』巻2、1937年、69頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「那主動者下面所用的助詞是『ニ』，又有用『カラ』的。有沒有這個主動者『××ニ』，便是在文法上區別『レル』『ラレル』是作為『被』或作為『會』的唯一根據。不過省略語也要注意，如第三句『咬マレマス』省『犬ニ』。」

²⁹⁸ 『日文與日語』第1巻第6号、人人書店、1934年、15頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「原來「レル」「ラレル」都有四種意思，我們所以知其為表示「被」之意者，完全是在於這個補語「××ニ」「××カラ」。不過有時因為主動者由於上下文可以知道的時候，常常省而不提示，這時要注意的。」

つまり、両者は同じように、助詞「ニ」「カラ」の重要性及び「動作主の省略」への注意を向けさせている。『初級日文』の「教授参考」は、張我軍の日本語読本に付けられた「講解」「註解」を参考にした可能性が高いと考えられる。

一方、『初級日文』『高級日文』は、張我軍の日本語教材の内容と重なっている課がある。表 3-5 で示したように、『初級日文』巻 1 が 2 課 (3.5%)、『初級日文』巻 2 が 9 課 (21.9%)、『初級日文』巻 3 が 7 課 (24.1%)、『高級日文』巻 1 が 12 課 (44.4%) である。教材の内容が重なる課数がそれほど多くないが、重なる課はすべて日本の国定国語教科書から取ったものである。

表 3-5 科学図書館編教材と張我軍教材の内容が重なる課²⁹⁹

科学図書館編教材の課名	張我軍編教材の課名
課名なし (『初級』1-54)	獅子ト鼠 (『日文』3-4)
課名なし (『初級』1-55)	
山の上 (『初級』2-6)	山ノ上 (『日文』3-3)
考え物一 (『初級』2-7)	考え物 (『日文』3-5)
考え物二 (『初級』2-8)	
オ月サマ (『初級』2-10)	オ月サマ (『日文』3-3)
蛙一 (『初級』2-23)	
蛙二 (『初級』2-24)	蛙 (『標準』前 4)
蛙三 (『初級』2-25)	
鼠の知恵 (『初級』2-32)	鼠の知恵 (『標準』前 4)
山雀の思出 (『初級』2-39)	山雀の思出 (『標準』前 4)
雨 (『初級』3-9)	雨 (『標準』前 4)
コロンブスの卵 (『初級』3-22)	コロンブスの卵 (『標準』前 4)
犬ころ (『初級』3-23)	犬ころ (『日文』2-5)
分業 (『初級』3-24)	分業 (『日文』2-3)
朝鮮人参 (『初級』3-26)	朝鮮人参 (『日文』2-4)
動物の色と形 (『初級』3-28)	動物の色 (『日文』2-1)
鷺 (『初級』3-27)	鷺 (『日文』2-3)
灯台守の娘 (『高級』1-3)	灯台守の娘 (『日文』2-2)
横浜 (『高級』1-4)	横浜 (『日文』2-1)
伝書鳩 (『高級』1-5)	伝書鳩 (『日文』2-6)
太陽 (『高級』1-7)	太陽 (『日文』3-2)
大阪 (『高級』1-8)	大阪 (『日文』2-1)

²⁹⁹ 文章が所在している教材名は略称にする。『標準日文自修講座』前期 4 冊を例とすれば、「『標準』前 4」にする。『日文與日語』第 2 巻第 1 号を例とすれば、「『日文』2-1」にする。『初級日文模範教科書』巻 1 第 54 課を例とすれば、「『初級』1-54」にする。『高級日文模範教科書』巻 1 第 3 課を例とすれば、「『高級』1-3」にする。

裁判	(『高級』 1-9)	裁判	(『日文』 3-1)
無言の行	(『高級』 1-14)	無言の行	(『標準』 前 4)
手の働	(『高級』 1-17)	手の働	(『日文』 2-3)
故郷	(『高級』 1-20)	故郷	(『標準』 後 1)
ヨーロッパの旅	(『高級』 1-22)	ヨーロッパの旅	(『日文』 3-3)
商業	(『高級』 1-25)	商業	(『標準』 前 4)
物ノ価	(『高級』 1-26)	物ノ価	(『日文』 2-4)

これらの重なる課は、編纂者が直接国定国語教科書から取ったものだというより、張我軍の日本語教材から選んだものだと考えられる。それが分かるのが、重なる課に付けられた「教授参考」の内容である。『初級日文』巻2の第6課「山の上」を例にすると、その「教授参考」の内容と張我軍の「講解」の比較は以下である。

句の方面においては、第1句は複句の一種であり、複合句と言
い、上の句を前句と言い、下の句を後句と言う。(中略) 主語
の省略は日本語によく見られる。本文には例文があり、それを
利用して簡単に説明する。³⁰⁰ (下線は筆者)

(『初級日文』2-6、「山の上」の「教授参考」)

本句は2つの句から構成されている。2つ以上の句から構成され
た句は複文と言う。複句は4種類あり、本句は複合句と言
い、上の句を前句と言い、下の句を後句と言う。(中略) 日本語の中
では、主格の省略が最も多く、中国語にも省略はあるが、日本語ほ
ど多くない。³⁰¹ (下線は筆者)

(『日文與日語』3-3、「山ノ上」の「講解」)

つまり、文章が重なる課に対する説明においても、科学図書館編日
本語教科書は張我軍の日本語教材とほぼ同じで、文の構造分析に集中

³⁰⁰ 北京近代科学図書館編『初級日文模範教科書』巻2、4版、1939年、60-61頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「句的方面，第一句是複句的一種，名為複合句，稱上面的動詞為前句，稱下面的動詞為後句，(中略)主語的省略在日語中很常見，本文有例，可藉此附帶說一說。」

³⁰¹ 「山ノ上」『日文與日語』第3巻第3号、人人書店、2-4頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「本句是兩句合成一句的，凡兩句以上合成一句的都叫做複句。複句有四種，這一種稱為複合句；而稱上面那一句為前句，稱下面那一句為後句。(中略)日語中，主格的省略最多，國語雖亦可以省略，但不若日語之甚。」

している。また、両者の重なる課に付いた中国語訳文にも、同じような特徴が見られる。『高級日文』巻1の第17課「手の働」を例にすれば、張我軍の教材との比較は以下のようなものである。

取、撿、握、拿等等，都是手的功用。如其沒有手，我們正不知將如何的不自由哩。也許將不能拿筷子，也不能結腰帶，也不能抓癢處，也不能撫摸痛處罷。木匠之建造房屋，瓦匠之塗抹牆壁，舟人之行舟，農夫之耕種田地，都是手的功用。又如以畫筆一管，描畫美麗的畫，以鑿一把雕出漂亮雕刻，使人感動，也是手的功用。³⁰²（下線は筆者）（『高級日文』1-17、「手の働」の中国語訳）

取、撿、握、拿等，都是手的作用。倘若沒有手，我們不知道將怎樣不自由哩。恐怕也不能拿筷子，也不能結腰帶，也不能抓癢處，也不能摩擦痛處罷。木匠之建造房屋，瓦匠之塗抹牆壁，舟人之行舟，農夫之耕種田地，都是手的作用。又如以畫筆一支，描畫美麗的畫，以鑿一把雕出漂亮的雕刻，使人感動，也是手的作用。³⁰³

（下線は筆者）（『日文與日語』2-3、「手の働」の中国語訳）

下線で示したこの2つの訳文をみると、両者の中国語訳の言葉遣いは違っているが、全体では酷似していることが分かる。つまり、『高級日文』にある重なる課の中国語訳は、張我軍の教材に付いた訳文をもとに少し修正したものであろう。

以上見てきたように、『初級日文』と『高級日文』は、形式面においても、内容面においても、張我軍の日本語教材と日本語教授観を参考にした可能性が高い。その理由としては、科学図書館は日本語教科書を編纂する際に、それほど時間の余裕がなかったため³⁰⁴、教授参考

³⁰² 北京近代科学図書館編纂『高級日文模範教科書』巻1、1938年、105頁。

³⁰³ 『日文與日語』第2巻第3号、人人書店、1935年、50-51頁。

³⁰⁴ 北京近代科学図書館月報『書滲』（第42号、1942年、1頁）には、盧溝橋事件後の教科書編纂について、「当時は北京天津間すら汽車で二十時間近く要する時であり、日本乃至は満州国から教科書を運ぶことは到底できなかつたので、とりあへず応急的のものに着手した次第であつた」と記載している。1937年7月の盧溝橋事件から『初級日文』巻1発行の1937年10月までは、たった2か月の短い編纂時間であった。

書や中国語訳文などが付いていて好評を博した張我軍の日本語教材を参考にすることにしたのではないかと考えられる。

しかし、科学図書館の日本語教育活動の性格を指摘しておく必要がある。前述の、科学図書館の事業方針を掲載した外務省文化事業部の報告書には、科学図書館の任務について以下のように述べられている。

日本図書館ノ一般的任務ハ中国知識層、特ニ日語乃至日本事情ノ研究に向ヒツツアル分子ヲ直接対象トシ、其ノ性質ノ如何ニ拘ラス対日関心ノ精神的表象ト認ムヘキ一切ヲ把ヘ、迷蒙ヲ開キ、正当ナル軌道ニ導キ、之ヲ我ガ思想的影響下ニ獲得スルコト、要ハ学術的成果ノ単ナル媒介体タルニ止マラス、所謂思想戦ニ於ケル一拠点タルニアリ。³⁰⁵（下線は筆者）

つまり、科学図書館は日本の国策の下に置かれた、思想戦の一拠点である。戦時中の日本語教育活動は異民族統治のための日本語普及活動である。そのため、『初級日文』と『高級日文』は、張我軍の日本語教授理念や教材の作成方法などを参考にしたと考えられるが、張我軍の教材から文章を選択する際に、日本の国定国語教科書と重なる文章に限定されている。その理由については、張我軍の日本語教材のほかの内容は思想戦の一拠点という科学図書館の性格に合わないからではないだろうか。また、日本の国語教科書と重なる文章に対しても、すべてではなく、取捨選択を行なったと言える。例えば、『日文與日語』（2-5）にある「文天祥」という課は、『尋常小学国語読本』から取ったものであるが、科学図書館はそれを日本語教科書に取り入れなかった。文天祥は、南宋時代に蒙古軍の侵略に抵抗した、漢民族の英雄と呼ばれた人物である。このような人物に関する文章を日本語教科書に取り入れるのは、当時対華侵略を行っていた日本にとっては、都合のよいことではないからであろう。

³⁰⁵ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B10070618200（第20画像目）、三増英夫調 中華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況（附・日本近代科学図書館論/1937年）（文化_37）（外務省外交史料館）

6. 小括

1930年代の中国大陸の日本語教育界では、張我軍が「著名人士」として評価されたことは偶然ではなく、彼の日本語教授観と切り離せない関係にあったと考えられる。当時、日本語の書籍を通して欧米の学術文化を摂取するという清末以来の社会背景の下、日本語の読解力の養成は日本語学習の主な目標とされていた。張我軍はこの目標の実現をめぐり、『日文與日語』に一連の論述を發表し、学校の教育制度から教師の資格、さらに学習者の取るべき態度、練習方法まで、当時の大学の日本語教育に対し全面的に提言した。これらの提言には、日本語教授方針を制定し、日本語の言語知識や日本語教授法に対する研究を行い、学生の学習効果に対し評価するなどの張我軍の日本語教授理念が窺える。これらの日本語教授理念は一定の教授方針や教師選考基準がない当時では、将来を見据えたものだと言える。特に、日本語教授法への重視は、現在の日本語教育現場でも求められているものだと考えられる。また、このような教授理念に基づき、張我軍は「文法＋読本」という新たな学習法・教授法を提案した。この学習法・教授法は、既存の日本語学習法・教授法を踏まえたもので、効率性や知的興味に配慮し、文法と読本が分立している当時の現状を改善し、読本を通じて文法を学ぶことができ、読解力の向上に有用なものだと言える。

また、張我軍は自身の日本語教授観を表明するところにとどまらず、それを日本語教材の作成によって実践に移行させた。日本語教材を作成する際に、張我軍は「文法＋読本」を徹底的に実行し、各段階のレベルにふさわしい材料を選択するために、いろいろ工夫していた。初級段階においては、張我軍は自分で初級読本の文章を執筆し、難易度によって文法・句型項目を読本に融合させた。中級段階においては、主に日本の国語読本から平易な説明文や物語文を採録し、難易度に基づいた並べ方を採った。上級段階においては、日本語の読解力の応用に対応するために、日本の文学作品や論説文から文章を採録した。

さらに、日本語教材に対する張我軍の解説に表れた教授面での特徴により、張我軍による実際の日本語教授は工夫されたものだと分かる。

張我軍は日本語の読解力の養成を主な教授目標としたが、発音の教授を軽視せず、教学経験の蓄積に伴い、その教授方法を改善していった。文法の教授においては、「文法＋読本」を徹底的に実行し、読本に含まれた文法・文型項目を提出順によって説明している。また、学習者の読解力や翻訳力の養成のために、文の構造分析を重視し、中国語訳や図解を活用した。

一方、張我軍の日本語教授観は、科学図書館の日本語教育活動、特に華北淪陷区の初期で広く使われた科学図書館編『初級日文』と『高級日文』の作成に大きな影響を与えたと考えられる。具体的には、『初級日文』と『高級日文』の構成は、全体的に見れば、張我軍の作成した読本とほぼ同じだと考えられる。そして、中国語訳の利用方法や文法項目の説明方法においては、張我軍の日本語教材を踏襲している。特に、両者の内容が重なる課はすべて日本の国語教科書から取ったものであるが、その課に付いた中国語訳と「教授参考」からみれば、『初級日文』『高級日文』は直接張我軍の教材から取った可能性が高いと言える。つまり、『初級日文』『高級日文』は「文法＋読本」の理念を貫いた張我軍の日本語教材を参考にして作成された教科書なのではないかと考えられる。

しかし、『初級日文』と『高級日文』は、張我軍の教材から文章を選択する際に、日本の国定国語教科書と重なる一部の文章に限定されている。その理由については、張我軍の日本語教材のほかの内容は、思想戦の一拠点という科学図書館の性格に合わないからであろう。次の第4章と第5章では、張我軍の日本語教育の目的と内容、及び教材の文章選択のポイントについて述べる。

第 4 章

張我軍の日本語教育と反植民地統治活動との関連

第4章 張我軍の日本語教育と反植民地統治活動との関連

1. はじめに

張我軍は北師大卒業後、日本語教育に携わり、数多くの日本語教育関係の著述を残し、新たな日本語教授理論を提案し実践した。また、張による日本語教授法は当時の学習ニーズに合致していたことから、当時の学習者に好評を博した。これらのことはすでに第2章、第3章で触れたが、日本の植民地出身者としての張我軍の日本語教育の目的は何かということも注目に値する。第1章での考察において、言論統制や「日本語ブーム」などの外的要因により、張我軍は日本語教育を台湾の日本統治離脱のための新たな手段として取り入れたことを論述したが、その内的要因を究明する必要がある。つまり、なぜ張我軍は反植民地統治活動を行なう際に、日本の植民地で習得した日本語の使用を拒否しなかったのかという疑問が残されている。この問題の解明には、日本語そのものに関する張我軍の考え方、すなわち張我軍の日本語観を問わなければならない。

したがって、本章では張我軍の日本語教育関係の論述や日本語教材に基づき、日本語教育に携わった動機と日本語教育の内容という2方面から、張我軍の日本語教育と従来の反植民地統治活動との具体的な関連性を考察する上で、そこに表れた張我軍の日本語観を探究する。

2. 張我軍の日本語教育に携わった動機－反植民地統治活動との接点

第2章で述べたように、清末以来、多くの中国人日本語教育者の共通認識として、日本語学習は日本語の書籍を通して欧米の学術文化を摂取するためであった。それにより、日本語の読解力の習得が当時の日本語学習の主な目標となった。『日文與日語』の創刊号に掲載した、張我軍執筆の「本誌的使命」（「本誌の使命」）において、以下のよう

一、日本の国民性を中心に、日本人の思想、風俗、人情、學術文化を紹介する。そして、能力の及ぶ範囲で、日本の現在の政治、經濟、社会における各種の問題に対し評論したい。

二、国民の日文の書籍や新聞を読む能力を養成する。これは、国民が日本を正視し、研究し、認識するには最も積極的で適切な方法である。前述のように、現在、我が国には日本の国情を紹介する書籍や新聞が数えるほどしかない。国民は日本を研究し、正視し、認識しようとしても、手の施しようがない。国内では日本のことを紹介する人がいても、遠水は近火を救わずであり、一番よい方法はやはり日本語の書籍や新聞を直接読む能力を国民に身につけさせることである。そのため、我々は眼前の仕事として、この方面を重点にやりたい。³⁰⁶（下線は筆者）

この内容には、日本語の読解力の養成が日本語教育の目標として打ち出されている。これは一見当時の日本語学習背景と合致しているが、日本語書籍を通して欧米の學術文化を学ぶことには言及されていない。その代わりに、日本語の書籍を読むのは「日本を研究し、正視し、認識」するためだと述べている。また、日本の国民性を中心とした日本の国情や日本文化の全面的な学習が強調されている。つまり、張我軍の日本語教育は欧米の學術文化の摂取だけにとどまっていない。したがって、張我軍の日本語教育に携わった動機をさらに追究しなければならない。

前述の「本誌的使命」（「本誌の使命」）において、張我軍は『日文與日語』の創刊趣旨について、まず「数千年以来の尊大な心理及び、研究精神の欠如」のため、中国人による日本研究は極めて不足してい

³⁰⁶ 張我軍「本誌的使命」『日文與日語』創刊号、人人書店、1934年、2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「一、以日本國民性為中心，介紹日本人的思想、風俗、人情、學術文化，倘能力所及，尚希望對日本目前的政治經濟社會各種問題加以評釋。二、養成國人閱讀書報的能力。這是促進國人正視，研究，認識日本的最積極最切實的方法。我國目前介紹日本國情的書報既如前述，聊聊無幾，國人雖有志研究日本而正視之，認識之，亦無從下手。即使目前有人在介紹，也是遠水救不了近火，故最善的方法，還是使國人能直接閱讀日文報。因此，我們目前的工作，是要偏重於這方面。」

ると指摘した上で³⁰⁷、こうした研究不足による実害を以下のように述べた。

我が国にとって日本は非常に重要な国であるが、国内に日本を研究、正視、認識する人がいると聞いたことがない。清末以来、日本との交渉において一度ならず失敗したのは、ほかの複雑な原因があるが、重要な原因は恐らくそこにあるだろう。（中略）袁世凱は勝手に日本政府と「対華二十一カ条要求」を締結して以来、日本と我が国はずっと仲たがいしている。その間、必ず3年に1度激しい反日抗日運動が起こっている。（中略）しかし、その結果、反日抗日運動の情熱は極めて短い時間しか持続できなかった。その原因はもちろん非常に複雑であるが、国民が日本の本性を認識できないのが重要な失敗原因でもある。³⁰⁸（下線は筆者）

この中で、従来の対日交渉や抗日運動の失敗は「日本の本性を認識できない」という中国人の日本認識不足に根差したものだとして強調されている。「日本の本性」は具体的に何かについては明言されていないが、日本の対華侵略が深まってきた1930年代の背景を考えると、日本の対華侵略の野望を指していると考えられる。こうした内容に続き、張我軍は以下のように「日本を正視し、研究し、認識する」ことを主張した。

従来の中日関係を詳しく考察すると、學術や文化においても、政治や外交においても我が国は終始消極的で受動的な立場にある。これがおそらく何回も失敗した最大の原因であろう。現在、我が国は再び失敗することに堪えられない。この失敗の状況を改めよ

³⁰⁷ 張我軍「本誌の使命」『日文與日語』創刊号、人人書店、1934年、1頁。

³⁰⁸ 張我軍「本誌の使命」『日文與日語』創刊号、人人書店、1934、1-2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「日本の存在，一樣地於我國也有切膚的關係，然而國人未聞有研究、正視、認識日本者。清末以來對日交涉，所以一再重演失敗者，固有其他複雜原因，但其重要的原因，恐怕還是在這裡。（中略）自從袁世凱與日本政府私訂“二十一條”以來，日本與我國始終處於反目的地位：這其間，每三年總要發生一次激烈的反日抗日運動。（中略）反與抗的結果，只落得一個“五分鐘熱度”的徽號。每次所以得不到好結果的原因固然及其複雜，但國民沒有認識日本的真面目，以致不能持久而終於失敗，也是一個重要原因。」

うとしたら、従来の消極的で受動的な立場を、積極的で主動的な立場に変え、一貫した方針を立てて進めなければならない。しかし、その大前提としては、日本を正視し、研究し、認識することである。親日であれ反日であれ、この大前提を無視しなければ、失敗の悲劇を繰り返すことはない。本誌はこのような立場に立ち、わずかでも国民の職分を果たしたい。³⁰⁹（下線は筆者）

つまり、張我軍は日本語学習の必要性を考える際に、着眼点を当時の中日関係に置いた。張我軍が日本語教育を通して中国人に「日本を正視し、研究し、認識」させる動機は、中日関係における中国の消極的で受動的な立場を変えることである。こうした動機には、かつての反植民地統治活動との接点が見られる。第1章で述べたように、1920年代に張我軍は中国大陸に留学し、雑誌創刊などを通じて反植民地統治活動を行っていた。その際に、彼がもつ論理は、祖国の強盛による対日関係の変化によって、最終的に台湾の祖国復帰を実現させることであった。祖国である中国の対日関係の変化を求めるという点においては、張我軍の日本語教育と彼の反植民地統治活動と一致している。対日関係の変化により台湾の祖国復帰の可能性が高まるという論理からみれば、張我軍の日本語教育に携わった動機は、従来の反植民地統治活動と同じように、最終的に台湾における日本の植民地離脱を求めることだと言える。こうした動機の下で行なわれた日本語教育の内容には、反植民地統治との関連が見られることは想像に難くないが、以下では、張我軍の日本語教材に基づき、反植民地統治の思想や理念などを如何に日本語教育の中に導入したのかを考察する。

³⁰⁹ 張我軍「本誌の使命」『日文與日語』創刊号、1934年、2頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我們詳按有史以來的中日關係，我國始終處於消極的，被動的地位，學術文化方面如此，外交政治方面更如此，這恐怕是我國歷次失敗的最大原因。現在，我國已不堪再失敗了，而若希望失敗止於此，便須改歷來的消極被動的地位為積極的主動的立場，確立一貫的大方針邁進。然而這裡須有一個大前提，就是正視日本，研究日本，認識日本。無論結論是要親日或要反日，都不得忽視這個大前提，方不至重演失敗的悲劇。本誌便是站在這樣的立場，要盡一點國民的職分的。」

3. 張我軍の日本語教育の内容—反植民地統治活動との関連

張我軍の日本語教育の内容を探る手がかりとなるのは、彼が作成した日本語教材である。本節では、張我軍の日本語教材に基づき、彼の日本語教育の内容を初級段階と中上級段階の2つに分け考察する。初級段階では、主教材である『日語基礎読本』の「基礎語法」部分を考察対象にする。中上級段階では、日本学習雑誌『日文與日語』の中上級読本及び、『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』『高級日文星期講座』の2種類の中上級用教材³¹⁰を考察対象にする。

3.1 初級段階の日本語教育の内容

第2章で述べたように、『日語基礎読本』の「基礎語法」の各課は、ほとんど3段落の日本語文章から構成されている。これらの段落は内容の持つ意味により、次の2種類に分けることができる。一つは、「僕ハ明日早く起キヨウ。ソシテ公園へ行カウ」³¹¹のような、単純に文法・文型項目の学習に関する段落である。もう一つは、「我々の理想社會は一切の人が自由に行動することを得る社會だ」³¹²のような、文法・文型項目の学習以外に、張我軍の思想を表出した段落である。「基礎語法」の147の段落には、後者がおよそ全体の三分の一ほどを占めていることから、張我軍が日本語教育を通じて自分の思想や理念などを伝えようとする意図が見られる。

また、張我軍の思想を表出した段落をさらに分類して表4-1にまとめてみると、まず、「帝国主義者ノ領土的野心」や「軍閥間の内戦」への糾弾、革命精神の宣揚、言論統制などの社会状況への訴えなどに関する内容が多いことが分かる。次に、「労働者はもう資本家に不利益を貪らせません。政府も資本家に不當搾取を止めさせませう。これは現社会に階級闘争を発生させない唯一の手段だ」³¹³のような、労

³¹⁰ 『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』の第3冊目、『高級日文星期講座』の第3冊目は未見であるため、考察対象外とする。

³¹¹ 張我軍『日語基礎読本』(4版)、人人書店、1936年、40頁。

³¹² 張我軍『日語基礎読本』(4版)、人人書店、1936年、55頁。

³¹³ 張我軍『日語基礎読本』(4版)、人人書店、1936年、56頁。

働者階級に同情し、社会主義思想が含まれた内容も少なくないことが特徴的である。また、旧道徳批判や自由恋愛などの内容も含まれている。つまり、初級段階の日本語教育では、張我軍は日本語教材の内容を執筆して、帝国主義の侵略や軍閥内戦や言論統制などの当時の中国が直面した問題を訴える一方、社会主義思想や自由恋愛などの社会改造に必要な新思想も伝えた。

こうした内容には、反植民地統治のための張我軍の従来文学活動との関連が窺える。第1章で述べたように、国民革命が頓挫した後、祖国の強盛を国民革命の勝利に託すことは難しくなったことから、張我軍は北師大の同窓と文学団体「新野社」を創立し、また1930年に『新野』を創刊した。彼は文学を通じて自ら中国の社会改造を支援し、祖国の強盛を推進しようとしていた。その際に、張我軍はプロレタリア文学を、弱小民族の悲哀、民衆の苦痛、帝国主義や軍閥及び官僚を打倒することを表現する手段として推奨し、また、それに含まれた社会主義思想を伝えようとしていた。こうした内容は、張我軍が初級段階の日本語教育で取り扱った内容とほぼ同じである。つまり、張我軍は初級段階の日本語教育では、従来文学活動で訴えた内容を日本語教育の中に移行させた。日本語教育は文学活動の代わりに、反植民地統治の手段となった。

表 4-1 張我軍の思想を表出した段落（『日語基礎読本』）

反帝国主義・ 反軍閥・ 反戦争・ 革命精神	革命家ノ勇シイ奮闘ト彼等ノ堅イ意志ト、激シイ帝國主義ノ進攻ト我ガ國ノ軍閥ノ内戦。(p19)
	憎イ軍閥ガ戦争ヲスル。(p22)
	戦争ヲ好ム國民ハ確カニ文明人デハナイ。(p33)
	コノ問題ハ外交手段ヲ以テ解決シテシマハウ。当分ノ内ハ武力ヲ以テ進攻シテ来ナイデセウ。我々ハ常ニ勇氣ト覺悟トヲ以テ敵ニ向フノダ。(p46)
	國民ノ多数ハ戦争ノ爲ニ極度ノ貧困ニ陥ツテラル。政府モ財政困難ノ爲メニ救済策ハアルマイ。革命家達ハモウ自由ト平等トノタメニ死ヌマイ。(p46)
	人間ハ生キル爲ニ殺シ合フ。利害關係ガ衝突シタ爲メ戦争ヲスルノダ。其ノタメニ澤山ノ人ガ死ンデシマフ。誰モコレガ爲ニ疑問ヲ起マイ。(p46)
	彼ハ平和ヲ愛スレバコソ人類カラ尊敬サレル。人間ハ他人ニ生計を奪ハレテコソ反抗スルノダ。(p48)
	正当ナ愛國運動ガ帝國主義国家ノ爲ニ妨ゲラレル。神聖ナ生存權サヘ他人ノ暴力ノ爲メニ犯サレル。言論ノ自由マデ暴力政治ノ爲ニ奪ハレテシマツタ。(p49)
	國家ノ存在マデモ帝國主義者ノ領土ノ野心ニヨツテ極度ノ危機ニ置カレテキル。平和ノ要求サヘモ武力萬能者ニヨツテ蹴サレテシマヒマシタ。(p49)
	犠牲精神サヘアレバ、我民族モ他民族ノ爲ニ亡サレナイダラウ。政府モ奮勵努力サヘスレバ、人民ノ輿論ニヨツテ見捨テラレマイ。(p49)
社会状況に 関する主張	平和な日を送り得る。幸福な生活を享受し得ます。人類がまた戦争を捨て得ないから我々はこんな夢を見る事が出来ない。だが将来には期待し得よう。(p55)
	彼は帰朝すると同時に官憲に逮捕されてしまった。人生は生れるか生れない中にもう生の苦を味ふのだ。(p84)
	斯くの如き重大なる事件を彼に任せていいかどうかを吾人は當局に聞きたい。(p84)
	今頃の帝國主義列強は軍事的政治的に壓迫を加へる代りに、經濟的搾取の方法を以つてしてゐる。(p86)
社会主義思想・ 資本家批判	我々の理想社会は一切の人が自由に行動することを得る社会だ。働き得る人が皆生存し得る社会だ。我儘を棄て得ない人は自由を主張することも得ない。(p55)
	吾人は飽くまでも言論の自由を主張いたします。(p74)
	これはどうしても外部から、或は上方から助を與へるより外はない。夫れ故に外交の民主化若くは民衆化は必ずしも新しいとは云へないかも知れない。(p81)
	罪せられぬと定まつた以上は、如何に事柄自身は不正であつても、之に對して良心は少しも干渉しない。(p82)
	歐洲に發生した制度が、果して我國の國情に適するや否やは頗る考慮を要するのである。(p84)
この永劫の正義はブルジョア的王国として實現された。純外交問題としての民衆化にも二つの方面がある。(p86)	
社会主義思想・ 資本家批判	去年ト今年トハ皆豊年デス。然シ農民ラハ依然トシテ貧乏デス。コレハ實ニ不思議ナ事ダ。ソシテ大袈裟ナ騒動ト激烈ナ革命トヲ惹起ス原因ダ。(p32)
	利子デ生活ヲスル。何モカモオ金デ買ヒマス。資本家トイフ者ノ生活ハ仲々愉快ダサウデス。之ニ反シ、労働者ハ血ト汗トデ食物ヲ換ヘテ来ル。(p45)
	金持ガ貧乏人ヲ憐レム。貧乏人ガ金持ニ憐レマレル。(p48)
	働くことが出来る。苦痛を忘れることも出来ます。しかしながら悪勢力と妥協することは出来ない。吾人は努力主義の效果を見逃すことは出来ません。(p53)
	金満家は威張ることは出来ても、尊敬されることはできない。本當に尊敬されることのできる人間は自分の力で生きることの出来る人間ばかりだ。(p53)
	社会主義の學説を教へることを得る。然し實行するを得ない。宣傳もすることをえませんさうだ。(p55)
労働者が失業する。生産過剰が労働者を失業させる。(p56)	
労働者はもう資本家に不當利益を食らせません。政府も資本家に不當搾取を止めさせませう。これは現社会に階級闘争を發生させない唯一の手段だ。(p56)	

・労働者階級の反抗を支持	同志よ、一齊に反抗せよ。(p62)
	無産大衆でも生きて行かなければならぬのに、特殊階級の人達はそれを抑壓しようとする。それですから彼等も躍起となって反抗しなければならぬ。(p68)
	資本家は賃金労働なしには存立することが出来ない。國家を盛んにする爲には産業を開発せざるを得ぬ。革命家となる爲には死ぬ覺悟がない譯には行かぬ。(p77)
	無智な人間と雖も反抗せずには居られぬ。知識がないと雖も生の意志だけはあつた筈です。如何に世間知らずとは云へ、善悪さへ解らぬ筈はない。(p78)
	是れは民主主義に對する社会主義思想の影響にほかならない。いづれにしても、かういふ暴力行為は人類の獸性の一面を暴露してゐるに外ならぬ。(p81)
	使用財のみが富を構成してゐた限りは、人々は自分の生活に必要なもの以上を要求するものではない。(p82)
	貧富の對立は、社会の一般的繁榮の中に解け去るところでなく、却つて一層激化した。(p85) 暴力的壓伏が去つて不義惡徳がそれに代り、社會勢力の第一たる劍が隠れて、黄金がそれに代つた。(p86)
自由恋愛・旧道德批判	道德ハ決シテ千古不變ノ物デアリマセン。(p33)
	自然が凡ゆる生物に命じてその後代を産ませます。そして特に人類に授意して戀愛の情操を起させる。この情操が両性にいひつけて相手を選択させる。(p58)
	戀愛に依る結婚は人類をして向上せしめるものだ。かかる結婚でなければ夫婦生活をして圓滑ならしめない。しかも人類に優秀なる子孫を作らしめない。(p58)
	圓滑を缺く家庭生活は人をして厭世思想を抱かしめる。浪漫的戀愛にばかり依つて義務的要素を缺く結婚も現代人を樂觀せしめ得ないだらうと思ふ。(p58)
	封建時代の道德は現代社會の秩序を維持するどころか、寧ろそれを紊亂させてゐるのだ。(p85)
その他	人生ハ苦痛デアラウ。死ヌノモ恐ク苦シイデセウ。コレモ一理ハアラウ。然シ無理ナ處モアルデセウ。兎ニ角ソレハハリ一種ノ人生觀デセウト思フ。(p42)
	新聞や雑誌やで濫りに意見を發表してはならぬぞ。(p65)
	彼等は、あらゆる外来の權威を、それが如何なる種類の者であらうとも認識しなかつた。如何に學問があらうとも品格がなければ許すわけには行かぬ。(p80)
	文学の背後には必ずこの時代精神が横はつてゐる事は今更云ふ迄もない。この影響が直接に最も著しく現はれたのは、云ふまでもなく、先づ第一に自然科学の發達であつた。(p81)
	私はそれを考へる毎に一種悲痛な心持になる。この失望を明言する人物は世紀の回轉と共に現はれた。總ての歴史的段階がその向上期を有すると共に、その向下期を有する。(p82)

(『日語基礎読本』(4版)より筆者作成)

3.2 中上級段階の日本語教育の内容

張我軍の中上級段階の日本語教材は初級段階と違い、彼が執筆したものであるのではなく、他から採録した日本語文章³¹⁴である。これらの日本語文章は、「論説文」「文学作品」「新聞記事」の3種類に大別することができる。以下では、この3種類の日本語文章の特徴を考察する。

³¹⁴ 『日文與日語』の中級日本語講座にある日本の国語読本の文章(36篇)は、第3章で述べたように、主に文法学習のために取り入れたものであるため、本章では分析対象に選ばない。しかし、張我軍がこの36篇に対して取捨選択を行なう際のポイントは、張我軍の主体性を窺知するものとなるため、第5章で考察する。また、その他にも中級日本語講座にある5篇の出典不明の文章も分析対象外とする。

3.2.1 中上級日本語教材における論説文

中上級日本語教材に収録された論説文は 24 篇ある。これらの論説文を取り上げ、原作者や題名などを表 4-2 にまとめた。

表 4-2 張我軍の中上級日本語教材における論説文³¹⁵

	原作者	題名	掲載雑誌・教材 (巻・号)
著名文化人・学者他	高須芳次郎	ヨオロッパ文明の行詰り	『日文與日語』1-4
	速水滉	論理学の性質	『日文與日語』1-5~6
	金子馬治	思想	『日文與日語』1-7
	米田庄太郎	浪漫的結婚と論理的結婚	『日文與日語』1-9
	石原純	科学の特質	『日文與日語』1-10
	矢部利茂	アメリカの発明界展望	『日文與日語』2-4
	保科貞次	空襲と民心の統制	『日文與日語』3-1~2
	芦田均	現代世界外交思潮及びその動向	『日文與日語』3-3~6
		一九三五年の極東情勢	『高級日文星期講座』第1冊
	杉山栄	社会科学とは何か?	『日漢対訳詳解日文自修叢書』第1種
	長谷川如是閑	社会の本質	『日漢対訳詳解日文自修叢書』第1種
	綿貫哲雄	個人意識と社会意識	『日漢対訳詳解日文自修叢書』第1種
	丘浅次郎	事実と科学	『高級日文星期講座』第1冊
	村川堅固	戦後国際経済概観	『高級日文星期講座』第1冊
中央公論社説	大国の悲哀	『高級日文星期講座』第1冊	
横田喜三郎	軍縮の基礎条件	『高級日文星期講座』第2冊	
左派政治家・思想家	高島素之	社会思想の部類	『日文與日語』1-8
	波多野鼎	社会思想史序説	『日文與日語』1-11
	大山郁夫	現代政治思想の主潮とその破綻	『日文與日語』1-1~8
	片上伸	批評と鬥志	『日文與日語』1-9~10
		文学の読者の問題	『日漢対訳詳解日文自修叢書』第2種
	堺利彦	空想的社會主義	『日文與日語』2-1~6
	平林初之輔	文学の本質について	『日漢対訳詳解日文自修叢書』第2種
青野季吉	政治と文芸	『日漢対訳詳解日文自修叢書』第2種	

全体からみれば、社会思想、政治思想、文学理論、倫理学、心理学、国際情勢など多岐にわたっている。そのうち、大山郁夫、高島素之、堺利彦などの左派政治家・思想家によるプロレタリア文学理論や社会主義思想関係の論説文は 8 篇で、全体の三分の一を占めている。張我軍は中上級段階の日本語教育でも社会主義思想を伝えようとしていたと言える。特に、青野季吉の「政治と文芸」及び平林初之輔の「文学の本質について」の 2 篇のプロレタリア文学理論に関する文章に

³¹⁵ 原作者の分類はその履歴や執筆した文章の内容などに基づいたものである。

は、かつての文学活動との関連が見られる。張我軍は前述の雑誌『新野』に、「从革命文学論到無産階級文学」（「革命文学論からプロレタリア文学へ」）という文章を發表し、プロレタリア文学が如何なるものかを論述する際に、青野季吉や平林初之輔のプロレタリア文学理論を引用したことがある。つまり、かつての反植民地統治のための文学活動の内容が日本語教育の中に移行された。また、プロレタリア文学や社会主義思想に関する文章以外に、米田庄太郎の「浪漫的結婚と論理的結婚」のような、自由恋愛の思想を伝えるものが見られる。それにより、張我軍は中上級段階の日本語教育でも社会改造に必要な新思想を伝えようとしたことが分かる。

そのほか、芦田均の「現代世界外交思潮及びその動向」と「一九三五年の極東情勢」、村川堅固の「戦後国際経済概観」、横田喜三郎の「軍縮の基礎条件」などのような、当時の国際政治経済情勢に関する文章を取り入れているのが特徴的である。この特徴は同時期の張我軍の翻訳活動にも見られる。張我軍は1933年に『法西斯主義運動論』³¹⁶（ファシズム主義運動論）と『資本主義社会的解剖』³¹⁷（資本主義社会の解剖）という2冊の国際政治経済情勢に関する著書を翻訳した。張我軍がこのように当時の国際政治経済情勢に関する文章を取り扱った理由は、この2冊の訳書に掲載された張我軍が執筆した序言の内容によって窺える。

ファシズム運動が既に世界的な現象となったことは言うまでもない。この世界で生存しようとするれば、このような深刻な現象をしっかり認識しなければならない。しかし、国内ではこの方面の訳書はまだ少なく、あっても断章的なものが多いため、読者にその全貌を認識させることができない。私がこの本を翻訳する目的は、読者がこの深刻な現象の全貌を認識してから、どのように取

³¹⁶ 原作者は今中次麿である。訳本は1933年に北平人文書店によって出版された。

³¹⁷ 原作者は山川均である。訳本は1933年に北平青年書店によって出版された。

捨選択を行なうのかを知るようにさせることにある。³¹⁸（下線は筆者）

『帝国主義を打倒する』というスローガンは、我が国では小学生や車引きでも知っていることだが、打倒する帝国主義は何なのかと聞いたら、大学生や知識層でも答えられない者が多くいるだろう。³¹⁹（下線は筆者）

つまり、ファシズムが急激に台頭してきたという国際情勢、及び帝国主義の実質を大学生や知識層を含めた多くの中国民衆に伝えるのが、張我軍がこれらの国際政治経済情勢に関する文章を翻訳した動機である。これは、張我軍が当時の日本の対華侵略を念頭に置いた結果だと言える。前述のように、張我軍は、従来の日交渉や抗日運動が失敗した原因を、「日本の本性」すなわち日本の対華侵略の野望が認識できないことにあったと指摘した。国際政治経済情勢に関する文章は、張我軍にとって日本の対華侵略の野望を伝える際に利用できる好材料であったろう。

3.2.2 中上級日本語教材における文学作品

上述の論説文以外に、27篇の当時の日本現代文学作品も張我軍の中上級日本語教材に収録されている。これらの文学作品を取り上げ、原作者や題名などを表4-3にまとめた。

³¹⁸ 張我軍「訳者序」『法西斯主義運動論』北平人文書店、1933年、1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「法西斯主義運動，已成為全世界的現象，這是無可諱言的。我們如其想在世界上求生存，對於這種嚴重的現象便不能不具相當的認識了。然而國內介紹這方面的譯著尚不多見，即使有之，也大多是斷章零篇，不能使讀者認清其全面目。我譯這部書的目的，就是要使讀者認識這種嚴重之現象的全面目，而知所取捨。」

³¹⁹ 張我軍「訳者序」『資本主義社会的解剖』北平青年書店、1933年、1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「『打倒帝國主義』這個口號，在我國已經普遍至於小學生和洋車夫都會背了。然而再問一問：那麼你所要打倒的帝國主義是什麼？於是連大學生和知識階級，都很多要啞口無言了。」

表 4-3 張我軍の中上級日本語教材における文学作品

原作者	題名	掲載雑誌・教材（巻・号）
志賀直哉	転生	『日文與日語』1-9～10
島崎藤村	菖蒲の節供	『日文與日語』2-2
国木田独歩	少年の悲哀	『日文與日語』1-11～12
芥川龍之介	『點心』自序	『日文與日語』1-2
	侏儒の言葉	『日文與日語』1-3
	武器	『日文與日語』1-7
菊池寛	芥川龍之介君よ	『日文與日語』1-11
	勝負事	『日文與日語』2-4～6
葉山嘉樹	セメント樽の中の手紙	『日文與日語』1-2
林房雄	絵のない絵本	『日文與日語』3-1～3
吉田絃二郎	正直であれ	『日文與日語』1-3
ゴースキー著 二葉亭四迷訳	雷雨の夜	『日文與日語』1-5
小川未明	晩秋の日	『日文與日語』1-6
徳富蘆花	風	『日文與日語』1-7
徳富蘇峰	要談と閑話	『日文與日語』1-8
西條八十	母と蘆	『日文與日語』1-9
幸田露伴	うれしさ	『日文與日語』1-9
田上三郎	不潔を厭はぬ人々	『日文與日語』1-12
生田春月	静夜日記	『日文與日語』1-4
加藤武雄	低能児	『日文與日語』1-6
黒田鵬心	雨の趣味	『日文與日語』2-1
夏目漱石	吾輩は猫である	『日文與日語』2-3
谷崎潤一郎	悪魔	『日文與日語』3-4～6
薄田泣菫	島	『高級日文星期講座』第1冊
菊池幽芳	最後の授業	『高級日文星期講座』第2冊
大江専一	羨ましい人生へ	『高級日文星期講座』第2冊
鶴見祐輔	道程を愛する心	『高級日文星期講座』第1冊

張我軍が取り扱った当時の日本の現代文学作品の流派から見れば、表 4-3 で示したように、葉山嘉樹や林房雄などのプロレタリア文学作品もあれば、島崎藤村や国木田独歩などの自然主義の文学作品もある。また、白樺派の志賀直哉及び、新現実主義の芥川龍之介と菊池寛の作品なども見られる。つまり、雑誌『新野』ではプロレタリア文学作品を推奨したのに対し、張我軍は日本語教育で特に何かの流派の作品に偏ることはなかった。その理由を考察するには、まず日本文学に関する張我軍の考えを見ておく必要がある。1939年に、張我軍は「評“菊池寛”近著『日本文学案内』」において、日本文学作品を学ぶ必要性について以下のように述べた。

日本文学は中国文学と西洋文学から移植したものであることは、疑問の余地がない事実である。しかし、日本民族特有の生活、感情、性格を知るためには、日本の文学作品の中から求めなければならない。これは我々が知らなくてはいけないことである。文学理論においても、日本文学は独自のシステムを持っている。そして、我が国と西洋の多くの文学理論さえも、日本文学から細緻にわたり見られる。この点については、我が国の十年来の出版物によって十分に分かる。³²⁰（下線は筆者）

つまり、日本文学は独自性を持ち、日本の国民性を中心とした日本文化を認識する唯一の手がかりだというのが張我軍の考えであった。日本語教育で当時の日本の現代文学作品を取り扱ったのは、学習者に日本の国民性を中心とした日本文化を認識させるためだと言える。この点は前述の、張我軍が提言した日本語教育の目標と一致している。それにより、張我軍は日本語教育で、自分の推奨したプロレタリア文学作品に限らず、当時の日本の現代文学作品を全般的に取り扱ったと考えられる。

3.2.3 中上級日本語教材における新聞記事

張我軍による中上級段階の日本語教育では、上述の論説文や文学作品のほかに、『日文與日語』の「時文選訳」コーナーに収録された日本の新聞記事も注目に値する。これらの新聞記事の題名や内容の要点を表 4-4 にまとめた。

³²⁰ 張我軍「評“菊池寛”近著『日本文学案内』『中国文芸』第1巻3期、1939年、41頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「日本之移植中國文學與西洋文學是無疑的事實，然而日本民族所特有的生活、感情、性格，卻非從日本的文學作品中去求不可，這是我們不可不知道的。即使是理論的文學，不但日本文學中有其獨自的系統，甚至我國的文學理論或西洋的文學理論，也可以從日本文學中大量而精密地發現，這由於輓近十年來我國的出版物，充分可以發現。」

表 4-4 「時文選訳」掲載記事の題名と内容の要点

巻・号	題名	内容の要点
1-6	英植民地の割当制	英国の商務相は声明を出し、日本商品と競争するため、英国植民地及び保護領に輸入される外国の一部の商品に対し割当制を実施する。
同上	経済外交に備へて	世界各国が日本商品に対する圧迫的措置を執るために、帝国外交の重点は経済外交の方面に移行すべき。
同上	軍縮実現難と佛露の接近	軍縮協定の実現が難航し、ロシアとフランスの接近を懸念する。
同上	蔵本事件は解消	行方不明となった南京総領事館の蔵本書記生事件は日支関係に暗影を投ずる。蔵本書記生の精神状態が平常に復してから、外務省が本事件に対する態度を決定する。
同上	迷巡洋艦建造中止	米国海軍省は1万トン級巡洋艦の建造計画を中止。
同上	獨伊両首相が会見	イタリア首相とドイツ首相が初会見。
同上	海軍予備交渉	軍縮会議では、日本は満州国問題や支那問題などを含んだ政治問題を除外すると強硬に主張すべき。
1-8	奥国首相の射殺事件	オーストリアの首相がナチス武装団に殺害された。
同上	大空軍建設を米陸軍に勧告	米国などの列国の軍事作戦が空軍に重点を置く傾向が顕著となった。
同上	歴史的「黄色の間」に悲惨なる臨終	オーストリアの首相がナチス武装団に殺害された経過。オーストリア政府とナチス武装団との交渉。
1-9	政局将来の展望	政局は国家社会本位の新たな政党時代へ推移。
同上	ロンパート街とウォール街から	米国の金融市場が不安定している。英国とドイツの貿易協定は根本的問題を解決できない。
1-10	世界展望	ロシアが国際連盟に参加した後、日本はその睨みを受けなければならない。日本はワシントン条約を廃棄することを決定する。
同上	日英米三国間平和原則確立へ	米英両国政府が従来の軍縮方針を変更しない限り、海軍の交渉は極めて難しいという観測が有力である。廣田外相が日英米三国間の平和原則を目論む。
同上	露国の連盟加入案	ロシアの連盟加入案が全会一致で可決されたが、日本とドイツが出席しなかった。
同上	市電つひに総罷業	東京市電気局にストライキが勃発した。
同上	関西大風害の惨状	台風で関西が大きな被害が出た。
1-11	国策審議会と岡田内閣	岡田内閣が設けた、責任を他に転嫁する機関である国策審議会に反対する。
同上	勇気を要する時代	政府の暴挙に対抗する勇気を呼びかける。
同上	不侵略案提唱説に 英米共に気乗り薄	英米は日本の提唱する不侵略協定に対して早くも警戒している。
1-12	日英同盟説再燃	日英同盟説が伝えられ、アメリカ側の猜疑心を醸しつつあるが、イギリス側が弁明する。
同上	共和党を粉碎し 得意のル大統領	米国民党は議会の三分の二以上の席を獲得した。ル大統領は国民的支持を確実に得た。
2-1	軍縮会商行き悩む	英米が日本の軍縮案に反対するため、軍縮会議は行き詰まりの状態に陥っている。
同上	共通最大限具体案	日本側は新協定成立のため、あくまで予備交渉の継続を希望する。
同上	和協試案の全貌	日英が折衝で出来上がった和協試案の要旨。
同上	予備交渉の成否 日英協和案に駆る	米国は日本の軍縮方針に根本的に反対する態度を持っているので、この機会に日英間和協の結論をつける。

2-2	1935年（日本は足許を踏固めて肚で押せ）	一昨年国際連盟の檻を破った日本は、今年は海軍条約の檻を破り、国際水平戦の第2戦を突破すべき歳である。
2-3	英佛協定と欧州の平和機構	英佛両国に出された欧州の安全に関する協定は、実質的には佛国の対独政策を機軸として案出されたものである。
同上	王寵恵氏けふ外相訪問我が政府の肚を打診	中華民國の国際司法裁判所判事王寵恵氏は、駐日支那公使より最近における日本内部の対支動静に関する報告を聴取する。
同上	ドイツ美人繞り 躍るスパイ	最近ポーランドの将校とドイツ美人をめぐるスパイ事件が発覚し重大問題化している
2-4	日支関係動く	支那の経済の破産状況はアメリカの銀政策によるものである。支那有識者の内に、日本と提携する必要があることは次第に明らかとなってきた。
同上	ポンドの急落と世界経済	ポンドが急落したため、国際的為替変動の不安が濃厚となってきた。また、世界経済を大きく動揺させている。
2-5	全欧州平和再建へ 爆弾宣言の五大対策	全ヨーロッパの新平和組織再建を目的とするストレーザ会議は、五大項目の協定を発表した。
同上	六十三歳で尋常一年	六十三歳の村農会長が小学校の一年生となった。
3-1	短刀と血書を懐中 首相官邸に乗込む	短刀と血書を懐中している男が時局問題を慷慨、農村並びに中小商工業者救済方針の確立を期するために首相官邸に乗込む。
同上	同僚の醜聞を種に 小学教員が恐喝	同僚の醜聞を種に恐喝を働いた小学校教員が警視庁不良係に検挙された
同上	暴力団に怯えて ダンサーと情死行	暴力団に怯えて、横浜市在住の男がダンサーと一緒に鬼怒川温泉で自殺した。
同上	恋の三角、三人心中	若い男と二人の女が示し合わせて家出し自殺した。
3-2	伊の脱退も已むなし 連盟規約十五條援用	イギリス政府が伊エ開戦を防止するために緊急措置を執り、イタリが国際連盟を脱退すると決意する。
同上	廣田と林	岡田内閣には、廣田外相、小栗総監、林陸相などのような、ヒットを放つものがある。
同上	五十七日眠る 漸く目が覚めた男	昏倒している男が眠り出してから五十七日をぶっ通しで眠ったということになる。
3-3	国交破滅の危機！米 国、ソ連に警告 ハル長官声明を発表	国際共産党の対米赤化工作に関して、米国政府がソビエト連邦政府に抗議した。
同上	『局地的』事件を主張 制裁規定適用に対抗 伊国緊急閣議の決定	イタリー政府は東アフリカの植民地問題は局地的もので、欧州情勢と関連しないものになると確信している。
同上	戦慄一眠り病の正体 人から人へ傳染しない	病理学界の権威慶応大学教授川上漸博士が不明の魔の病の正体を発見している。
3-4	伊は侵略国 六人委員会報告書作成 九人総会制裁発動へ	国際連盟はイタリーを侵略国と認定し、制裁を加えることを決定する。

（『日文與日語』より筆者作成）

内容からみれば、日本と米英との間の軍縮交渉に関するものが比較的多いことが特徴的である。その背景としては、第1次世界大戦後、戦勝国となった英米日仏伊5カ国の海軍力を制限するための「ワシントン海軍軍縮条約」（1922年）が締結された。この条約により、英米日の艦艇の保有比率が5:5:3の割り当てとなった。しかし、その後、

日本はこの制限を打ち破るために、英米両国と交渉を行なっていたが、英米が日本の主張を警戒して受け入れなかった。ほかに、日本と英国との貿易摩擦や、独伊と英仏との対立などの世界的な政治・経済背景を伝える記事も少なくない。これらの内容はいったい如何なる立場で書かれたのかについては、2巻2号に掲載された「1935年（「日本は足許を踏固めて肚で押せ」）」という記事の内容によってその一端が窺える。この記事では、「一昨年国際連盟の檻を破った日本は、今年海軍条約の檻を破って、国際水平戦の第2戦を突破すべき歳である」と主張した。また、対外侵略の理由について以下のように述べた。

蓋し日本は満州事変を転機として、画期的躍進を対外的に遂げたが、此の躍進は単なる外形的、偶然的、一時的の跳躍には非ずして、不自然なる国際機構の下に、久しく圧迫せられて居た日本民族の本能、実力、及び正義の信念が、この事変を機端として外部に爆発したるものに外ならない。³²¹

つまり、この記事は日本の軍事力の拡張と対華侵略を正当化するためのものである。こうした日本の世論状況を日本語教育に取り入れた理由については、以下のような、「時文選訳」コーナーでの張我軍の紹介によって分かる。

本期から日本の新聞の社説や時事記事を取り上げ、対訳を行なう。仮に、選んだ資料の中に国民が怒りを感じるものがあつたら、我々が日本人のためにお先棒を担いたと誤解しないようにしてほしい。私たちはただ日本人や日本の新聞がどのように考えているのかを国民に知らせたいだけである。そして、文章の中の「我

³²¹ 『日文與日語』第2巻第2号、人人書店、1934年、41頁。

仕方がないことである。³²²（下線は筆者）

つまり、張我軍が日本語教育で日本の新聞記事を取り扱ったのは、中国民衆に日本人や日本の言論機関の考え方を認識させたかったからである。これらの記事の内容と合わせて考えると、軍事力の拡張や対華侵略を求めている日本の野望を中国民衆に伝え、日本の対華侵略を警戒させようとするのが張我軍の意図であることが分かる。

以上をまとめると、張我軍の日本語教育の内容は、主に2種類に分けることができる。一つは、従来の文学活動に続き、帝国主義や軍閥内戦や国内の政治状況を糾弾し、社会主義思想などの社会改造に必要な新思想を伝える内容である。もう一つは、日本の対華侵略の野望を暴露し、日本の国民性を中心とした日本文化を認識するなどの、中国人の日本認識に資する内容である。これらの内容はいずれにせよ、「反植民地統治、抗日」の意識を持って取り入れたものだと考えられる。

4. 張我軍の日本語教育に表れた日本語観—植民地経験との関連

以上見てきたように、日本語教育に携わった動機においても、日本語教育の内容においても、張我軍は日本語教育を「反植民地統治、抗日」の手段としていたことが分かる。一方、上記の日本語教育の内容には、張我軍の日本語観が自身の日本語教育を支えている部分が見られる。つまり、日本語は張我軍にとって抗日の武器であると同時に、社会改造に必要な新思想を伝える手段でもある。こうした日本語観は、張我軍の日本語教育関係の論述によっても窺える。彼は『日文與日語』の創刊号に掲載した「爲什麼要研究日文」（なぜ日本語を研究するのか）において、「日本語学習は亡国の民になるために準備することである」という意見に対し、以下のように反駁した。

³²² 『日文與日語』第1巻第7号、人人書店、1934年、43頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「本期起要選載日本報紙社論或時事記載，加以對譯，若所選材料，間有叫國人看起來要憤怒的話，千萬不要誤解我們是有意為日人張目的，只是要使國人知道日人怎樣說話，日文報紙怎樣看的。其次文中所有「我國」都是指日本，這是為留其本來面目，不得已的。」

日本では中学 1 年から漢文という科目があり、毎週少なくとも 2 時間勉強し、高等教育段階にも漢文科が設置され、このように熱心に漢文を学習している日本人は、中国の統治下の亡国の民になるために準備しているのか。(中略) 日本は我が国の近隣で、我が国との文化交流において 2000 年以上の歴史を持ち、また日本とその文化の発展経験には参考になるものが多い。そのため、日本が親善の意を示してくれれば、彼らの言語文字を研究する必要があることは言うまでもない。もし我が国を侵略すれば、より一層研究する必要がある、その言語文字を通してその国情を研究し、抵抗の準備をする。³²³ (下線は筆者)

つまり、日本語学習は「亡国の民」と結びつかず、場合によっては日本の学術文化を参考にする手段になれると同時に、一種の抗日の武器にもなれる。こうした日本語観は、張我軍が日本の植民地で習得した日本語の使用を拒否せず、それを生かした日本語教育の道に進んだ内的要因だと言える。実際には、こうした日本語観は張我軍の日本語教育に表れただけでなく、戦後の中国語教育活動にも見られる。第 1 章で述べたように、戦後、張我軍は中国に復帰した台湾に戻り、台湾での日本による同化教育の影響を取り除くために、中国語教育に関心を寄せ、一連の論述を発表し、『国文自修講座』という中国語教科書を作成した。しかし、その際にも、同化教育の手段でもあった日本語の使用を拒否しなかった。その理由について、張我軍は以下のように述べた。

日文を台湾省に残したら、台湾同胞はおそらく精神上には日本のくびきから脱却しにくいであろうと考えている者がいるが、私の

³²³ 張我軍「爲什麼要研究日文」『日文與日語』創刊号、人人書店、1934、3 頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「在日本，自中學一年級起就有漢文一科，每週至少兩小時，一直到高等學校尚有漢文科，他們這樣地熱心學習漢文，難道他們也是預備做中國的亡國奴嗎？(中略) 日本是我國的緊鄰，其文化與我國有二千年的歷史關係，且其文化與國勢的進步，在在有可以使我們借鑒的地方。所以他們對我們表示真摯的親善，我們固須研究他們的語言文字；他們對我們表現兇猛的侵略，我們尤不得不研究其語言文字，藉以研究其國情，以為抵抗的準備。」

意見はそれと違っている。これについて二点に分けて述べる。第一点、日本が台湾で50年間の同化教育を行なったが、台湾同胞は最終的に同化されなかった。そのため、科学的な教科書において4、5年日文を使っても、台湾同胞への精神上的の影響は絶対にないと断言できる。第二点、台湾同胞がこれほど時間をかけて習得した日本語を感情的な理由で消滅させるべきではなく、学問を研究する手段として保存させるべきだ。³²⁴（下線は筆者）

つまり、張我軍の考えでは、日本語は必ずしも同化主義と関連せず、場合によっては学問を研究する手段となれるということである。こうした日本語観は前述の張我軍の日本語教育に表れたものと一致しており、張我軍の生涯を貫いたものだと考えられる。

こうした日本語観の形成を追究すると、張我軍の植民地経験が浮上してくる。以下では、「反植民地統治の武器とした日本語」と「新思想・新知識の伝達手段としての日本語」の2つの部分に分け、張我軍の日本語観が植民地経験と如何なる関連があるのかを見ておく。

4.1 反植民地統治の武器としての日本語

第1章で述べたように、張我軍は日本統治下の台湾で生まれ、公学校で「国語」としての日本語教育を6年間受け、日本語能力を身につけた。その後、台湾文化協会などの啓蒙活動の影響を受け民族意識が覚醒し、日本の植民地統治に反抗する道を辿った。しかし、彼の反植民地統治活動を振り返ってみると、台湾の公学校で習得した日本語は、これらの反植民地統治活動を支えていたことが分かる。

具体的に見れば、張我軍の初めての反植民地統治の文章「南支那に

³²⁴ 張我軍「関与台湾省中小学教科書一新台湾教育問題之一」張光正編『張我軍全集（下集）』、台海出版社、2012年、203頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「或者有人以为使日文留在台省，恐怕台胞在精神上不易脱离日本的羁绊。这一层，我的意思大不相同，可以分两点来说：第一点，台湾受了五十年的日本的同化教育，结果台胞的心终不为日本所同化，现在再在科学的教科书上用四五年的日文，于吾台胞的精神绝不会有影响是可以断言的。第二点，台胞以往费了那么多的时间学得的日文，似乎不该由于感情作用使其消灭无宁应该使其保存为研究学问的工具。」

於ける排日対策」は、日本語で書かれたものである。その後、『台湾民報』の編集者を担当した期間にも、自分の日本語能力を生かし日本の台湾での植民地統治に反抗する文章を翻訳した。それが分かるのが、『台湾民報』編集者時期の張我軍の翻訳作品（表 4-5）である。

4-5 『台湾民報』編集者時期の張我軍の翻訳作品

訳文題名	原作者	掲載誌	掲載年
陳情書	林糊など	『台湾民報』第3巻第2号	1925年
農民問題二件	大阪 『朝日新聞』	『台湾民報』第3巻第9号	1925年
就日本的東洋政策而言	戴季陶	『台湾民報』第3巻第11号	1925年
宗教的革命家甘地	宮島 新三郎 相田 隆太郎	『台湾民報』第3巻18号 第59号、第62～66号、第68～73号	1925年
貞操，是「全靈的」之愛	安部磯雄	『台湾民報』第60号	1925年
大婚二十五年御下賜金和 植民地的教化事業	安部磯雄	『台湾民報』第62号	1925年
中国的国権恢復問題	米田実	『台湾民報』第66号、 第68～71号	1925年
論台湾民報的使命	柴田廉	『台湾民報』第67号	1925年
愛欲（劇本）	武者小路実篤	『台湾民報』第94～95号	1926年
弱少民族的悲哀	山川均	『台湾民報』第105号～110号、第 112～115号	1926年

（『台湾民報』より筆者作成）

表 4-5 で示したように、この 9 篇の翻訳作品には、「貞操是“全靈的”之愛」と「愛欲」以外は、すべて民族運動や反植民地統治に関する文章である。例えば、その中の「大婚二十五年御下賜金和植民地的教化事業」の原文は「大婚二十五年御下賜金と植民地の教化事業」であり、日本の社会主義者の安部磯雄によって執筆され、1925年に雑誌『植民』に発表されたものである。この文章は日台人間における進学の機会の不平等とその改善案をめぐって論述したものである。また、第1章ですでに述べたように、「弱少民族的悲哀」の原文は「弱少民族の悲哀：『一視同仁』『内地延長主義』『醇化融合政策』の下に於ける台湾」であり、日本の社会主義者の山川均によって執筆され、1926年に雑誌『改造』に発表されたものである。この文章は詳細なデータを利用し、日本の台湾に対する経済的搾取や日台人間の進学や雇用の機会の不平等などを暴露した。つまり、張我軍は日本人が執筆した日

本の植民地政策批判の文章を翻訳することにより、日本の台湾での植民地統治に反抗した。当時、張我軍がこうした反植民地統治の方式を選択した理由については、以下のような『弱少民族的悲哀』の「訳者附記」の内容によって分かる。

翻訳中に、何度も悲哀、慙愧の念、痛快な気分を覚えることもある。我が全島の民衆の死活と深い関係のある、多くの自分が知らないことや知っていても詳しくないことは、山川氏によって日本随一の雑誌『改造』に詳しく公開されている。また、一部が官吏によって削除されたが、山川氏は私たちの代わりに日本で最も権威のある雑誌『改造』に、多くの自分が勇気を持って話すことができないことや、話しても思う存分話せないことを打ち明けた。³²⁵

（下線は筆者）

つまり、日本の植民地で生活した被植民者として、日本の植民地政策について詳しく知ることができず、自国の植民政策に批判的な日本人知識人による研究成果を利用するほうが、詳しく日本の植民政策を伝えることができる。実際に1920年代の後半は、多くの日本人知識人が台湾事情に対し社会科学的分析を行ない、研究成果を発表した時期であった。当時、張我軍だけでなく、多くの「祖国派」台湾青年も日本人の研究成果を利用して反植民地統治活動を行なった。若林正文（2010）によれば、北京の「東方問題研究会」編集の『新東方』が彼らの拠点であり、山川均の『植民政策下の台湾』や矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』などが翻訳され紹介されている³²⁶。一方、「多くの自分が勇気を持って話すことができない」と張我軍が述べたように、日本支配下の台湾では日本の植民政策を直接批判することができな

³²⁵ 張我軍「訳者附記」『台湾民報』第115号、1926年7月25日。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我在翻譯之間，一陣陣的悲哀、慙愧和痛快之感，輪流著奔到心頭！有許多自己所不知的，或知而不詳的事一旦與咱們全島民的死活有大關係的事—山川先生卻詳詳細細地在日本第一大的雜誌改造宣佈出來。又有許多自己所不敢說的，或說不得的，或說而不說到痛快的話，山川先生卻替咱們痛快地吐露於日本第一有權威的雜誌改造上面。—雖有一部分被用意周至的官吏削去。」

³²⁶ 若林正文『台湾抗日運動史研究（增補版）』研文出版、2010年、288-289頁。

い状況があったと考えられる。そのことに鑑みると、日本人知識人の文章を翻訳して植民地統治に反抗するほうがより実行しやすいと言える。

要するに、台湾が日本の支配下に置かれた当時の状況下において、植民地統治に反抗する道具として日本語の使用を避けることができないということである。日本語が反植民地統治の武器だという張我軍の日本語観は、台湾での植民地経験から生まれたものだと言える。そのため、張我軍と同じような植民地経験を持つ台湾人もこうした日本語観を持っていることは想像に難くない。第1章で述べた張我軍の親友である張深切もその中の1人である。張深切は「祖国派」として「広東台湾革命青年団」に参加し、反植民地統治活動に終始取り組んでいた。しかし、彼は張我軍と同じように反植民地統治活動を行なう際に、日本語の使用を拒否しなかった。張深切は広東での台湾人による反植民地統治活動を記述した著書『在広東発動的台湾革命運動史略』を戦前に作成した。この著書は日本の植民統治に反抗するためのものであるが、日本語で書かれたものである。また、戦後この著書が発行される際にも、中国語に翻訳されなかった。1947年に、張我軍は張深切の依頼を受け、この著書のために序文を書いた。その序文の中で、中国語に翻訳しない理由を以下のように述べている。

この本は全篇日文で書かれており、発行する際にも国文（筆者：中国語）に翻訳されなかった。その理由は著者の述べたとおりで、本来の様相を保つためである。我々は日本帝国主義を憎むために
日文を異端と見なす必要はない。「汝の矛をもって、汝の盾を攻めよ」と言われたように、内容がどのようなものなのかが一番大事である。本篇の内容には、反日抗日の気持ちが溢れている。文章自体からみれば、あまり流暢でないところがあるが、才能が光

り輝いているところもある。³²⁷（下線は筆者）

つまり、日本語そのものは抗日と矛盾せず、そこに書かれた内容によって抗日にも使えるからである。張我軍はこのように、もう一度「日本語は抗日の武器になれる」という日本語観を表した。

4.2 新思想・新知識の伝達手段としての日本語

張我軍は日本語教育に携わる前に、上述のように日本語を反植民地統治の武器としただけでなく、新思想や新知識を伝える手段とした経験もあった。彼が台湾新文学運動に関与した際に、「研究新文学必読什麼書」³²⁸（新文学を研究するために読むべき本）を発表し、新文学研究で最低限読まなければならない参考書を示し、中国大陸の新文学理論だけでなく、表4-6で示したような日本の文学・芸術の成果を参考にすることを勧めている。

表4-6 日本の新文学理論参考書（張我軍の推奨）

書名	著者	出版社	出版年
『近代文学十講』	厨川白村	大日本図書	1912年
『文芸思潮論』	同上	同上	1914年
『近代文芸十二講』	生田長江など	新潮社	1921年
『文学概論』	横山有策	久野書店	1921年
『現代芸術講話』	川路柳虹	新詩壇社	1924年
『近代芸術十六講』	一氏義良	弘文社	1924年
『苦悶の象徴』	厨川白村	改造社	1924年

（「台湾民報」3巻7号より筆者作成）

また、「糟糕的台湾文学界」³²⁹（めちゃくちゃな台湾文学界）において、以下のように他の台湾人に対し日本語能力の活用による新思想・新知識の獲得を勧めている。

³²⁷ 張我軍『「在広東発動的台湾革命運動史略」序』張光正編『張我軍全集（下集）』、台海出版社、2012年、395頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。
「全篇用日文写成，现在付印竟未印译成国文，原因正如著者自云是为保持本来面目。我们大可不必为了痛恨日本帝国主义而视日文为异端；语云“以子之矛攻子之盾”，要在内容如何而已。本篇内容充满着反日抗日的情绪，自文章本身说，虽然也有不大流畅的地方，却又有才气焕发地方；」

³²⁸ 『台湾民報』（第3巻第7号、1925年）に掲載。

³²⁹ 『台湾民報』（第2巻第24号、1924年）に掲載。

我が台湾人には中日両国の言語が分かる人が多くおり、それに中国大陸と日本は最も近い手本なので、ちょうどそれを借りて陳腐で消沈している文学界を一新することができる。³³⁰(下線は筆者)

ほかに、張我軍がこの時期に執筆した、自由恋愛の新思想を伝える文章「至上最高道德—恋愛」³³¹は厨川白村の『近代の恋愛観』に基づいたものである。つまり、張我軍は新思想や新知識を伝える際に、日本語の使用を拒否せず、それを生かし日本の学術成果を吸収することにした。

こうした日本語観は張我軍だけでなく、同時代の台湾出身者にも見られる。例えば、張我軍の親友であった洪炎秋は、日本による同化に反抗し中国の伝統的な文化を伝承しようとした父親の反対で、公学校に就学することができなかった。家で父親から四書五経などを中心とした漢文教育を受けたが、彼は「この世紀に生まれた青年は、五経や二十四史などの反故の山に埋もれて生きるべきではなく、何とかして新知識を吸収して意義あることをやらなければならない。しかし、私がいた環境では、新知識を吸収したいなら、日本語を学ぶのが唯一の方法であった」³³²と考え、隠れてひっそりと日本語を学んでいた。つまり、日本支配下の台湾では新思想や新知識の吸収には、日本語能力が不可欠だと言える。この点から見れば、公学校に通って日本語能力を身につけた張我軍は、伝統的な漢文教育を中心とした書房に送られ、或いは家で漢文教育だけを受けた台湾人より恵まれていたと言えるであろう。要するに、日本語は新思想や新知識の伝達手段であるという張我軍の日本語観も植民地経験に根ざしたものだと考えられる。

³³⁰ 張我軍「糟糕的台湾文学界」『台湾民報』2卷24号、1924年。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我們臺灣的人，識兩國文字（日本和中國）的那麼多，況且此兩國都是最近的師表，正可借此來把陳腐頹喪的文學界洗刷一新。」

³³¹ 『台湾民報』（第75号、1925年）に掲載。

³³² 洪炎秋「我父與我」張深切編『中国文芸』2卷1期、中国文芸社、1940年、7頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「覺得這個世紀的青年，是不應該只在五經廿四史這些故紙堆中討生活的，而須想法子去吸收新的知識，有一番作為才是。然而在我的環境中，要想吸收新的知識，只有學習日語，是唯一的門徑。」

5. 小括

日本語の書籍を通して欧米の学術文化を学ぶという清末以来の中国人の日本語学習の背景下、張我軍は日本語の読解力の養成を日本語教授の目標とした。しかし、張我軍の動機を追究すると、彼の日本語教育は欧米の学術文化の摂取だけにとどまっておらず、従来の反植民地統治活動と同じように、中日関係における中国の消極的で受動的な立場を変えるためのものだと分かる。むしろ、張我軍の日本語教育は従来の反植民地統治活動に続き、台湾の日本統治離脱を最終的な目標としたものである。これは張我軍の日本語教育の内容に裏付けられている。初級段階では、張我軍は自分の執筆した日本語文章を利用し、従来の文学活動で訴えた内容を日本語教育の中に移行させ、帝国主義の対華侵略や軍閥内戦及び腐敗した政治状況を直接糾弾すると同時に、社会改造に必要な社会主義思想などの新思想を伝えた。中上級段階では、張我軍は他から採録した論説文や新聞記事を利用し、社会主義思想などの社会改造に必要な新思想を伝える一方、日本の対華侵略の野望を暴露した。また、中日関係における中国の消極的で受動的な立場を変えるために、中国人の日本認識に資する当時の日本の現代文学作品を日本語教育の中に取り入れた。

一方、張我軍の日本語教育の内容には、日本語は反植民地統治の武器であると同時に、新思想や新知識の伝達手段でもあるという日本語観が見られる。こうした日本語観は張我軍が日本の植民地で習得した日本語の使用を拒否せず、それを生かした日本語教育の道に進んだ内的要因だと言える。また、こうした日本語観の形成要因を追究すると、かつての植民地経験が浮上してくる。日本支配下の台湾では、日本の植民地統治を直接批判するのが難しいことから、張我軍は自分の日本語能力を生かし、日本人が執筆した日本の植民地政策批判の文章を翻訳することにした。また、日本支配下の台湾では、新思想や新知識の吸収には日本語能力が不可欠であることから、張我軍は新文学理論や新思想を伝える際に、日本語の活用を推奨し、日本の学術成果を利用した。張我軍の日本語教育はこうした植民地経験を生かしたものだと言える。

第 5 章

日本語教育からみた張我軍の主体性

第 5 章 日本語教育からみた張我軍の主体性

1. はじめに

前章では、張我軍は植民地経験から生まれた日本語観などの内的要因により、戦前、日本語教育を反植民地統治の手段としたことを明らかにした。しかし、張我軍の日本語観や日本語教育を支えた日本語能力は、同化政策下の台湾の公学校で習得したものである。また、張我軍の日本語教材には日本の国語読本から選択した文章が多いことから、公学校での「国語」としての日本語学習経験が生かされたのではないだろうか。そのため、張我軍は日本語教育の実践において、自身の日本語学習経験に存在する同化と関連する内容を如何に取り扱ったのかは注目に値する。この問題の解明は、日本の植民地出身者である張我軍の日本語教育における主体性を判断する鍵でもあると言える。

一方、第 1 章で述べたように、戦時中、張我軍は日本支配下の華北淪陷区での日本語教育に関与したが、従来の反植民地統治の立場を崩していない。また、傀儡政権の官吏に就くことを拒絶し、日本語を媒介とする文化・教育活動を中心とする立場を堅持していた。そのため、張我軍は何らかの立場や視点を以て支配者の政治に規定された文化・教育活動の中で主体性を保っていたのではないかと考えられる。

したがって、これらの問題をめぐり、本章ではまず台湾の公学校での張我軍の日本語学習経験を振り返り、公学校用の日本語教科書に基づき張我軍が公学校で如何なる内容を学んだのかを見ておく。次に、張我軍の日本語教材に取り入れた日本の国語読本からの文章を取り上げ、その文章選択の際のポイントを分析する。それにより、張我軍が自身の公学校での日本語学習経験を生かす際に、そこに潜む同化と関連する内容を避けられたかどうかを考察する。最後に、戦時中の張我軍の論述や日本語教育の内容により、日本支配下の日本語教育で張我軍が如何に主体性を保とうとしていたのかを考察する。

2. 張我軍の公学校での日本語学習経験

張我軍は1909年4月から1915年3月まで台湾の枋橋公学校に6年間在籍した。張我軍が就学した期間（1909～1915）の科目と授業時間を表5-1にまとめてみると、「国語」（日本語）以外に、修身、漢文、算術、体操などがあるが、その中でも「国語」科目が最も重視され、授業時間においても他の科目よりはるかに多いことが分かる。また、「他ノ教科目（筆者：日本語以外の科目）ヲ授ケル際ニ於テモ常ニ国語ノ練習ニ注意シ又文字ヲ書カシムルトキハ其ノ字形及字行ヲ正シクセシムコトヲ要ス」³³³と定められているように、日本語以外の科目を教授する際にも、日本語の練習が要求されている。「国語」としての日本語教育は公学校の重点だと言える。

表5-1 台湾公学校の科目と授業時間/週（1909～1915）³³⁴

科目 学年	国 語	修 身	算 術	漢 文	体 操	唱 歌	理 科	商業/ 農業	手工及 図画	計
第1学年	9	2	4	5	2	1	0	0	0	23
第2学年	12	2	4	5	2	1	0	0	0	26
第3学年	13	2	5	5	2	1	0	0	0	28
第4学年	13	2	5	5	2	1	0	0	0	28
第5学年	10	1	5	4	3		2	3	4	32
第6学年	10	1	5	4	3		2	3	4	32

しかし、第1章で述べたように、公学校での日本語教育は最初から「同化」を目指したものである。日本国民としての性格と精神の養成は公学校の本旨だと言える。「公学校規則」には「何レノ教科目ニ於テモ常ニ徳性ノ涵養ト国語ノ習熟トニ留意シテ国民ニ必要ナル性格

³³³ 1913年2月に公布された「公学校規則」の「教則」にある内容の一部である。（大蔵省印刷局『官報』第108号、1912年12月9日、227頁。）

³³⁴ 第1学年～第4学年までは1907年2月に公表された「公学校規則中改正」（府令第5号）より作成したものである。（内閣官報局『官報』第7105号、1907年3月9日、303頁。）第5学年～第6学年は1913年2月に施行された「公学校規則」より作成したものである。（大蔵省印刷局『官報』第108号、1912年12月9日、232頁。）女子生徒と男子生徒に対する授業科目と授業時間数が違うが、表5-1は男子向けのものである。

ヲ陶冶セムコトヲ務ムヘシ」、「国語ハ普通ノ言語文章ヲ教ヘテ其ノ応用ヲ正確自在ナラシメ兼テ智徳ヲ啓発シ特ニ国民精神ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス」³³⁵のように明確に規定されている。また、国民性及び国民精神の養成と日本語教育の関連については、「国語は我國民的精神の宿る所なれば、修身と相俟て國民的性格の養成上特殊の地位を占むべく」³³⁶という内訓があった。以下では、張我軍が公学校に就学していた期間に使われた日本語教材に基づき、同化政策下の日本語教育で、張我軍がいったい如何なる内容を勉強したのかを見ておく。

張我軍が公学校に就学した期間に使われた日本語教科書は、主に『台湾教科用書国民読本』と『公学校用国民読本』の2種類がある。この2種類の教科書はいずれにせよ、6学年の使用を想定し、12巻からなっている。前者は各巻が1901年から1903年まで相次いで発行され、1913年まで使用されていた。後者は各巻が1912年から1913年にかけて発行され、1923年まで使用された。つまり、張我軍が就学した期間（1909～1915）に、1年生から4年生までは『台湾教科用書国民読本』（巻1～巻8）を使用し、5年生から6年生までは『公学校用国民読本』（巻9～巻12）を使用したことになる。参考として張我軍が使用したと思われる各巻の目次を表5-2、表5-3に掲げておく。そのうちの巻1と巻2については、仮名の導入部分であることから省略することにする。

³³⁵ 1913年2月に公布された「公学校規則」の「教則」にある内容の一部である。
（大蔵省印刷局『官報』第108号、1912年12月9日、226頁。）

³³⁶ 台湾教育会編『台湾教育沿革誌』、1939年、319頁。

表 5-2 『台湾教科用書国民読本』（巻 3～巻 8）目次

課	巻 3	巻 4	巻 5
1	ヨアケ	アサ	はるのけしき
2	アサガオ	カワノケシキ	スイギユウ
3	アサノシゴト	ミズガメオワル 一	ももたろお 一
4	ヒヨコ	ミズガメオワル 二	ももたろお 二
5	キレイニナサイ	ミズ	ももたろお 三
6	アサメシ	ゲジョトイヌ	ツバメ
7	ベンキョオスルセイト	マキワリ	犬
8	タロウ	ニンギョオノキヤク	犬ト肉
9	ハシラオニ	メシタキ	ミツバチ
10	テナライ	ブタ	おろかな男
11	ギョオギノヨイコ	ナ	ヒャクショウ
12	シャボンダマ	ウマイメシ 一	にわとり
13	メカクシ	ウマイメシ 二	めんどりとひよこ
14	ウオ	ザボントバシヨオノミ	おののとおふう
15	ウオツリ	ニンギョオノキモノ	稲
16	ヒグレ	センタク	太郎と次郎
17	ヨル	ムラノケシキ	夏ノ夕方
課	巻 6	巻 7	巻 8
1	秋	紀元節	日本ノ地図
2	家	宮城	富士山
3	食事のしたく 一	春	多助のしんぼお
4	食事のしたく 二	苗代	商人
5	柿	犬の話	豚
6	猿と蟹 一	田植	馬と豚の話
7	猿と蟹 二	水牛と馬	時計
8	天長節	蠅と水牛の話	手紙
9	遠足 一	茶 一	台湾神社
10	遠足 二	茶 二	稲刈
11	モノサシ 枡 ハカリ	阿金のしんせつ	米
12	砂糖	蒸気	二人の農夫
13	蟻ときりぎりす	蒸気車	雨
14	あわれみのふかい娘	まけぎらい	海
15	一月一日	ペエ リオン ツヌ	飲水
16	郵便	夕立	阿片
17	清吉の正直	医者	学問
18	冬ノケシキ	衛生	保己一

表 5-3 『公学校用国民読本』（巻 9～巻 12）目次

課	巻 9	巻 10	巻 11	巻 12
1	皇大神宮	東京	昭憲皇太后御歌	克忠克孝
2	花のさまざま	楠公父子（一）	日本一の物	台湾総督府
3	新聞紙	楠公父子（二）	日本武尊	租税
4	基隆から神戸（一）	日本の国	格言	台湾一周
5	基隆から神戸（二）	台湾縦貫鉄道	旅行先の父より	看板ト広告
6	大阪ト京都	台南	私の家庭	貿易
7	貨幣	鄭成功	農業	写真を贈る手紙
8	会社・銀行	森林	日本海海戦	時ヲ惜メ
9	塩原多助	雨ト風	内地観光（一）	太陽
10	動物ノ保護色	祝の手紙	内地観光（二）	電気ノ応用
11	空気	人体	花火	我ガ国ノ歴史（一）
12	温泉	医院	分業	我ガ国ノ歴史（二）
13	井上でん	赤十字社	伝染病	我ガ国ノ歴史（三）
14	水害見舞の手紙	水兵の母	眼鏡	保甲制度
15	盲啞学校	鉦山	樺太だより	平和な村
16	塩	貯金	測候所	台湾の風景
17	曹公圳	織物	孔子	学校落成式
18	虎と赤んぼ	蚕	虫のさまざま	製糖
19	富士山	陶器ト漆器	農商工	主婦ノ務
20	家畜	断りの手紙	人民保護	助け船（一）
21	口上書類	我ガ国ノ漁業	物の価	助け船（二）
22	生蕃	昔の旅	樟脳	人ノ本分
23	児玉大将	乃木大将	世界	国民ノ至情
24			呉鳳	卒業を知らせる手紙

日本語教科書の内容をみると、第 1 学年から第 4 学年まで使用された巻 3～巻 8 には、「猿と蟹」（巻 6・6 課、7 課）や「蠅と水牛の話」（巻 7・8）のような文学的文章や、「砂糖」（巻 6・12 課）、「蒸気」（巻 7・12 課）などのような実学的文章が比較的多い。同化との関連があると思われるのは、「天長節」（巻 6・8 課）、「紀元節」（巻 7・1 課）、「宮城」（巻 7・2 課）、「台湾神社」（巻 8・9 課）、「日本武尊」（巻 11・3 課）などの皇室関係の 4 課である。

しかし、第 5、6 学年に使用された巻 9～巻 12 には、依然として実学的内容が多いが、同化と関連する内容が増えている。そのうち、「皇大神宮」（巻 9・1 課）、「昭憲皇太后御歌」（巻 11・1 課）、「克忠克孝」

(巻 12・1 課)、「国民ノ至情」(巻 12・23 課) の 4 課が皇室関係の内容である。「児玉大将」(巻 9・23 課)、「楠公父子」(巻 10・2 課、3 課)、「水兵の母」(巻 10・14 課)、「乃木大将」(巻 10・23 課)、「日本海海戦」(巻 11・8 課) などの 6 課は、日本の英雄や戦争に関する内容である。これらの文章は疑いなく忠君愛国及び軍国主義思想を伝えるために設けられたものである。例えば、「児玉大将」、「乃木大将」、「楠公父子」、「乃木大将」などの課では、日本の武将や軍人の忠君愛国の姿が書かれている。「克忠克孝」では、天皇に忠義を尽くすこと及び親に孝行することが表裏一体となっていることが強調されている。また、「克忠克孝」という題名も、忠君愛国を国民道徳とした「教育勅語」の内容と一致している。「教育勅語」には「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ」という一文がある。ほかに、「水兵の母」では、ある母親が日清戦争に赴いた水兵の息子に手紙を書いたことが記述されている。その手紙の内容は以下のようである。

聞けば度々戦があつたのに、お前はまだこれといふてがらも立てないさうな。何の為に前は戦に出ましたか。母は残念でたまりません。それに村の方々が朝晩に尋ねて下さって、「さぞご不自由でせう。何でもご遠慮なくおっしゃい。」と言つてくださるので、尚更胸も張りさけるやうです。母が毎日神様へお参りするの、無事に帰国するのを祈るのではありません。お前が一命をすてて、天皇陛下のお役に立つやうにと、そればかりを祈つてゐるのです。³³⁷ (下線は筆者)

このように、水兵の母を借りて、命より天皇に忠義を尽くすほうが大切であるという忠君思想を露骨に宣揚している。また、清代の台湾官吏である曹謹の功績を記述した「曹公圳」(9 巻・17 課)には、以下のような内容がある。

³³⁷ 台湾総督府編『公学校用国民読本』巻 10、1914 年、34-35 頁。

アタリノ人民ハ其ノ恩ヲアリガタク思ッテ、鳳山ニ祠ヲ建テ、曹公ヲ祀リマシタ。教育ニ関スル勅語ニ「公益ヲ広メ、世物ヲ開キ」トイフコトガ仰セラレテゴザイマスガ、曹公ノヤウナ人ハ、ヨク此ノ勅語ノ御趣意ニカナッタ人トイッテヨイデセウ。³³⁸（下線は筆者）

この課は台湾の歴史的人物を取り扱ったが、このように「教育勅語」にある忠君愛国思想を宣揚するために取り入れたものだと言える。つまり、張我軍の公学校での日本語学習内容には、忠君愛国及び軍国主義思想などの同化と関連するものが潜んでいる。

一方、張我軍の日本語教材の文章選択には、公学校での日本語学習経験との関連が見られる。第3章で述べたように、張我軍は日本語教材を作成する際に、意識的に日本の国語読本から多くの文章を選択した。『日文與日語』にある中級読本には、日本の国語読本から36篇の文章を採録した。そのほか、『標準日文自修講座』には前述の36篇と重なっているものがあるが、日本の国語読本から34篇の文章を採録している。張我軍は日本の国語読本から文章を選択した理由について、以下のように述べている。

今回の文章選択は完全に「標準」「基礎」「実用」の3つの方針に基づいたものである。一、標準文でなければならない。めちゃくちゃで文法に合わないものは選択しない。二、各種の文章の基礎となるものでなければならない。物理、化学、法律、経済などの専門的な文章は選択しない。三、実用的な文章でなければならない。つまり、読者が読んでも応用できない文章は選択しない。こうした方針に基づき、すべての文章を日本の国定国語教科書から選択することにした。³³⁹

³³⁸ 台湾総督府編『公学校用国民読本』巻9、1914年、45-46頁。

³³⁹ 張我軍『標準日文自修講座』前期第3冊、人人書店、1936年、261頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我此次選文章の方針完全置於「標準」「基礎」「實用」三個原則。第一要是標準文，亂七八糟不合文法的文章不選。第二要是可以成為各種文章之基礎的，偏於一方面如物理化學以致法律經濟的專門的文字不選。第三是要切乎實用的文章，換言之，使讀者讀之而無法應用的文章不選。依據這個方針，決定全部從日本國定教科書裡面選取。」

つまり、張我軍は日本の国語読本の文章が「標準」「基礎」「実用」の面で、日本語の学習にふさわしいと考えた。こうした考えは、張我軍が自分の「国語」としての日本語学習経験を振り返った結果だと言える。前述の張我軍が公学校で使用した日本語教科書には、日本の国語読本から選択したものが少なくない。また、張我軍が自身の教材作成の過程で日本の国語読本から選択した文章と重なっている課もある。例えば、「猿と蟹」（巻6・6課、7課）、「動物ノ保護色」（巻9・10課）、「分業」（巻11・12課）、「孔子」（巻11・17課）、「太陽」（巻12・9課）などの課は張我軍の日本語教材にもある³⁴⁰。張我軍が日本語教材を作成する際に、公学校での日本語学習経験を生かしたと考えられる。

しかし、前述のように、公学校での日本語学習内容には忠君愛国や軍国主義思想などの同化と関連するものが潜んでいる。また、日本の国語読本は日本の児童の国民性や国民精神の養成のために作成されたもので、その内容には日本の国家観念と日本精神などを植えつけるものが少なくない。したがって、張我軍が公学校での日本語学習経験を生かし、日本の国語読本から文章を選択する際に、そこに潜んだ同化と関連する内容に対し自主的な判断能力を持っているかどうかは注目に値する。これは、同化政策下の日本語学習者であった張我軍が日本語教育において主体性を持っていたかどうかを判断する鍵だと言える。以下では、張我軍の日本語教材に基づき、張我軍が日本の国語読本から如何なるものを選択したのかを究明する上で、その選択した際のポイントを分析する。

³⁴⁰ 「猿と蟹」は張我軍の『標準日文自修講座』の前期第3冊に収録。「動物ノ保護色」は『標準日文自修講座』の前期第4冊に収録され、題名が「動物の色と形」となった。「分業」は『日文與日語』の第2巻第3号に収録。「太陽」は『標準日文自修講座』の前期第4冊に収録。

3. 日本語教材の文章選択からみた張我軍の主体性

張我軍が日本の国語読本から選択した文章は、主に『日文與日語』の日本語講座と『標準日文自修講座』に収録されている。重なっているものを除けば、57篇である。そのうち、『尋常小学国語読本』からの選択が最も多く、34篇に達している。ほかに、『小学国語読本』からの選択が10篇、『高等小学読本』からの選択が12篇、『中等国語読本』からの選択が1篇である。参考としてこれらの文章の課名や出典などを表5-4にまとめた。

表5-4 日本の国語読本から選択した文章³⁴¹

課名	所在	出典
獅子ト鼠 兔ト亀	『標準』前3 『標準』前3	『小学国語読本』巻1
猿と蟹 雪 山ノ上 オ月サマ	『標準』前3 『標準』前3 『日文』3-3 『日文』3-3	『小学国語読本』巻2
かんがへもの 鼠の知恵 春ガ来タ 蛙	『標準』前4 『標準』前4 『日文』3-5 『標準』前4	『小学国語読本』巻3
山雀の思出 雨	『標準』前4 『標準』前4	『尋常小学国語読本』巻4 『尋常小学国語読本』巻5
世界 横浜 大阪 獅子と武士	『標準』後1 『標準』後1 『標準』後1 『標準』後1	『尋常小学国語読本』巻7
コロンブスの卵 揚子江 手ノ働 水の力 分業 鷺 山の秋 朝鮮人参 犬ころ	『標準』前4 『標準』後1 『標準』後1 『日文』2-3 『日文』2-3 『日文』2-3 『日文』2-4 『日文』2-4 『日文』2-5	『尋常小学国語読本』巻8
ナイヤガラ <small>の瀧</small> 動物の色と形 物ノ価 今日	『日文』2-1 『標準』前4 『標準』後1 『標準』後1	『尋常小学国語読本』巻9

³⁴¹ 文章が所在する教材名は略称にする。『標準日文自修講座』前期3冊を例にとると、「『標準』前3」に、『日文與日語』第2巻第1号は「『日文』2-1」と表示する。『日文與日語』と『標準日文自修講座』と重なっている課は、『標準日文自修講座』にある所在だけを示している。

燈台守の娘 捕鯨船 パナマ運河 文天祥 伝書鳩 霧	『日文』2-2 『日文』2-4 『日文』2-5 『日文』2-5 『日文』2-6 『標準』後1	『尋常小学国語読本』巻10
孔子 裁判 瀬戸内海 リンカーンの苦学 太陽 無言の行	『日文』2-6 『日文』3-1 『日文』3-1 『日文』3-4 『標準』前4 『標準』前4	『尋常小学国語読本』巻11
ヨーロッパの旅 商業 新聞	『日文』3-3 『標準』前4 『標準』後1	『尋常小学国語読本』巻12
真の知己 故郷 スパルタ武士	『標準』前4 『標準』後1 『日文』3-5~6	『高等小学読本』巻1
都会と田舎 月の光 農業 植物と気象	『標準』後1 『標準』前4 『標準』前4 『日文』3-6	『高等小学読本』巻2
望遠鏡と顕微鏡 春晴千里	『標準』前4 『標準』後1	『高等小学読本』巻3
田園の自然 手紙の認め方 法律と道徳	『標準』前4 『標準』前4 『標準』前4	『高等小学読本』巻4
人生の曙	『日文』3-5	『中等国語読本』巻1

内容からみれば、『小学国語読本』からの10篇はすべて文学的教材である。『高等小学読本』からの13篇には、大半を占める文学的教材以外に、「農業」、「植物と気象」、「望遠鏡と顕微鏡」などの実学的教材も入っている。『中等国語読本』の1篇は文学的教材である。『尋常小学国語読本』からの34篇は、『尋常小学国語読本』の編纂趣意書の分類により、「修身的教材」、「歴史的教材」「地理的教材」「理科的教材」「実業的教材」「国民科的教材」「文学的教材」という7種類に分けることができる³⁴²。それを表5-5にまとめた。

³⁴² 文部省編『尋常小学国語読本編纂趣意書・尋常小学国語書き方手本編纂趣意書』日本書籍、1931年。そのうち、第1巻の文章は分類されていない。

表 5-5 『尋常小学国語読本』から選択した文章³⁴³

文章の類別	文章名（掲載巻数）
修身的教材	「燈台守の娘」（10）
歴史的教材	「文天祥」（10）「孔子」（11）「リンカーンの苦学」（11）
地理的教材	「世界」（7）「横浜」（7）「大阪」（7）「揚子江」（8）「ナイヤガラ の瀧」（9）「パナマ運河」（10）「瀬戸内海」（11） 「ヨーロッパの旅」（12）
理科的教材	「雨」（5）「水の力」（8）「鷲」（8）「動物の色と形」（9） 「伝書鳩」（10）「太陽」（11）
実業的教材	「捕鯨船」（10）「商業」（12）
国民科的教材	「分業」（8）「物ノ価」（9）「裁判」（11）「新聞」（12）
文学的教材	「山雀の思出」（4）「獅子と武士」（7）「コロンブスの卵」 （8）「手ノ働」（8）「朝鮮人參」（8）「山の秋」（8）「犬こ ろ」（8）「今日」（9）「霧」（10）無言の行（11）

表 5-5 に示したように、この 34 篇には地理的教材と文学的教材が大半を占め、18 篇である。ほかに、理科的教材は 6 篇、国民科的教材は 4 篇、歴史的教材は 3 篇、実業的教材は 2 篇、修身的教材は 1 篇である。これらの文章には前述の公学校で使用した日本語教科書にある皇室関係の文章や、忠君愛国及び軍国主義を宣揚した文章は見られない。『尋常小学国語読本』にはこうした文章がないわけではないが、張我軍は意図的に選択しなかったと考えられる。文学的教材を例とすれば、張我軍が選択しなかった文章には、日露戦争を背景とした「水師營の会見」（巻 9）や、軍隊生活を描いた「軍艦生活の朝」（9）などがある。国民科的教材を例とすれば、張我軍が選択した 4 篇は「分業」、「物ノ価」、「裁判」、「新聞」で、いずれも日常生活に必要な知識に関するものである。しかし、国民科的教材から選択されなかった文章には、明治天皇の誕生日を祝う明治節に関する「十月三十一日」（巻 4）や、軍隊の知識を紹介する「入營した兄から」（巻 6）などがある。

また、地理的教材においても日本の国語読本に対する張我軍の取捨選択が窺える。『尋常小学国語読本』巻 7 を例にとると、地理的教材は「世界」、「大阪」、「横浜」、「大連だより」の 4 篇あるが、「大連だより」1 篇だけは張我軍は選択しなかった。その理由は以下のような

³⁴³ 『尋常小学国語読本編纂趣意書・尋常小学国語書き方手本編纂趣意書』より筆者作成。

本文の内容の一部によって分かるであろう。

町に大山通・乃木町・奥町・児玉町などと、日露戦争の時の大將方の名を取ってつけてあるのは面白いでせう。（中略）旅順へは汽車で一時間で行けます。十日ばかり前に、私ども中學の二年生が修學旅行に行つて、白玉山上の表忠塔をあふぎ、又我が忠勇の士が血を流して取った二百三高地にも上つて帰りました。³⁴⁴（下線は筆者）

つまり、「大連だより」は地理的教材に分類されているが、内容上では日露戦争における日本軍人の功績を宣揚するものである。張我軍は意識的にこうした内容を排除したと考えられる。

そのほか、修身的教材については、張我軍は「燈台守の娘」1篇のみ選択したが、「燈台守の娘」と同じ巻10には、「明治神宮参拝」という修身的教材がある。巻12の修身的教材には、「明治天皇御製」がある。特に、巻9の修身的教材には、「水兵の母」という前述の公学校で使用した『公学校用国民読本』にも出ている忠君愛国と軍国主義思想を宣揚した文章が存在する。巻8の修身的教材にある「呉鳳」も前述の公学校での教科書にある文章である。「呉鳳」という文章には、清代の台湾官吏呉鳳は、台湾原住民がお祭に人の首を取って供える習俗をなくすために、自分の命を犠牲にしたことが記述されている。この話を修身的教材として国語読本と公学校の教科書に入れるのは、国のために犠牲となる精神を宣揚するためだと考えられる。張我軍がこのような自分が学んだ文章でも選択しなかったことから、彼は自分の公学校での日本語学習経験を振り返り、同化政策下の日本語教育の実態を見据えていたと考えられる。

特に、歴史的教材を例にすると、張我軍が選択したのは「文天祥」、「孔子」、「リンカーンの苦学」の3篇のみであるが、選択されなかった文章を以下のように取り出してみると、日本の国語読本に対する張

³⁴⁴ 文部省『尋常小学国語読本』巻7、1934年、35-40頁。

我軍の取捨選択の意図がさらに明らかとなる³⁴⁵。

「白ウサギ」(4)、「扇のまと」(4)、「曾我兄弟」(4)、「大蛇たいぢ」(5)、「金鵄勲章」(5)、「熊襲征伐」(5)、「養老」(5)、「八幡太郎」(5)、「くりから谷」(6)、「弓流し」(6)、「萬じゆの姫」(6)、「神風」(6)、「千早城」(6)、「鎌倉攻」(7)、「川中島の戦」(7)、「木下藤吉郎」(7)、「加藤清正」(7)「武将の幼時」(8)、「大岡さばき」(8)、「塙保己一」(8)、「広瀬中佐」(8)、「乃木大将の幼年時代」(8)、「弟橘媛」(9)、「両将軍の握手」(9)、「アレクサンドル大王と医師フィリップ」(10)、「鉢の木」(10)、「児島高德」(10)、「賤嶽の七本槍」(11)、「松坂の一家」(11)「孔明」(11)、「チャールス、ダーウィン」(12)、「間宮林蔵」(12)、「釈迦」(12)、「勝安芳と西郷隆盛」(12)

これらの歴史的教材の題名を見る限り、「曾我兄弟」、「木下藤吉郎」、「加藤清正」、「武将の幼時」、「広瀬中佐」、「乃木大将の幼年時代」、「児島高德」などのような、日本の武士階層や軍人に関する文章が多いことが分かる。また、「熊襲征伐」、「弓流し」、「鎌倉攻」、「川中島の戦」、「賤嶽の七本槍」のような、戦争場面を描いた文章も少なくない。そのうち、「熊襲征伐」は、前述の『公学校用国民読本』にある「日本武尊」(巻11・3課)と同じように、第12代景行天皇皇子の日本武尊が王権に抵抗した熊襲を征討したことを記述する文章である。ほかに、「金鵄勲章」は日本唯一の武人勲章とされた金鵄勲章を紹介した文章である。これらの教材はまさしく武力征伐を宣揚する軍国主義的教材だと言える。張我軍がこうした歴史的教材から日本人や戦争と関係ない3篇だけを選択したことから、日本の国語読本に内包された軍国主義思想への警戒が見られる。また、張我軍が選択した3篇のうちの「文天祥」は注目に値する。その中には、南宋時代に蒙古軍の

³⁴⁵ 括弧の中の数字は、『尋常小学国語読本』の巻数である。張我軍が『尋常小学国語読本』の巻4から文章を選択したことから、ここに掲げてある選択しなかった文章も巻4からのものである。

侵略に抵抗した漢民族の英雄と呼ばれた文天祥の事跡が記述されている。その内容の一部は以下のようである。

宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。其の友之を止めていはく、「羊の虎に向ふが如し。危し。」と。天祥きかずしていはく、「我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。」と。出でて元軍に當る。³⁴⁶

日本の国語読本にこうした教材を取り入れたのは、国に忠を尽くすという思想を宣揚するためだと考えられるが、文天祥は日本の植民地統治に反抗する台湾人にとって、特別な存在だと言える。当時、台湾民族運動の言論機関『台湾民報』の前身である雑誌『台湾』には、漢詩作品を掲載した「詞林」というコーナーがあった。その編集者は每期テーマを出し漢詩を募集し、募集したものに対し評定して順位を定めてから掲載する。「詞林」に掲載された漢詩は、当時の台湾民族運動と関連するものが多い。例えば、張我軍は1923年に「詞林」第4期に「寄懷台湾議會請願諸公」³⁴⁷と題とした漢詩を投稿し、植民地統治政策の改革を求める台湾議會設置請願運動を支持したことがある。その前の第3期のテーマは「文天祥」である。つまり、当時の民族意識が覚醒した台湾青年らは、異民族の侵略に抵抗した「文天祥」を詠えることにより、日本の植民地統治に反抗する意を表した。張我軍が「文天祥」という課を選択し日本語教材に取り入れたことも、日本の植民地統治に対する反抗の表出だと言える。

しかし、張我軍の日本語教材には、軍国主義と関連するものが完全に存在していないわけではない。「猿と蟹」と「桃太郎」の2つの童話はその例である³⁴⁸。この2つの童話は前述の張我軍が学んだ公学校で使用した日本語教科書にも取り入れられていた。「猿と蟹」は蟹が

³⁴⁶ 文部省『尋常小学国語読本』巻10、日本書籍、1929年、97頁。

³⁴⁷ 雑誌『台湾』（第4年第4号、1923年4月）に掲載。

³⁴⁸ 「猿と蟹」は張我軍の『標準日文自修講座』（前期第3冊）と『対訳詳注日本童話集』に取り入れられた。そのうち、『標準日文自修講座』（前期第3冊）の「猿と蟹」は『小学国語読本』から選択したものである。「桃太郎」は張我軍の『対訳詳注日本童話集』に取り入れられた。

猿に騙されて殺害され、殺された蟹の子供達が親の敵を討つという話である。「桃太郎」は桃の実から生まれた桃太郎が犬、猿、雉を連れて鬼ヶ島に行き、鬼退治を行なった話である。この2つの童話は日本では熟知されている童話であるが、戦前と戦時中の軍国主義などの宣伝に利用されたことがある。例えば、1929年2月1日の『東京日日新聞』（朝刊）において、「桃太郎」は軍国主義を宣伝するもので、「猿と蟹」は児童に復讐を教えるものだという批判があった³⁴⁹。特に、桃太郎の鬼退治は国の敵への退治に例えることが多い。例えば、1935年に『教育勅語 桃太郎訓話』³⁵⁰という本が出版された。その中には、桃太郎の鬼退治を満州事変などに例え、桃太郎を指揮官、犬、猿、雉を兵士に例えた。また、1943年に公開された国策アニメ「桃太郎の海鷲」という作品がある。このアニメは真珠湾攻撃をモデルにし、桃太郎を隊長とする部隊が鬼退治（空襲）を行なった内容である。張我軍がこの2つの童話を排除することができなかったことから、張我軍は日本の国語読本に潜む軍国主義と関連する内容をすべて見分けたわけではない面が窺える。

要するに、張我軍は日本の国語読本から文章を選択する際に、一部の見分けられない文章があったが、忠君愛国や軍国主義などの当時の日本の国家観念と日本精神を宣揚する内容を排除する意図が明白である。張我軍がこのように日本の国語読本の文章に対し、取捨選択を行なった理由については、日本の敗戦直後に張我軍が発表した以下の論述によって窺える。

日本は台湾を占拠してちょうど50年間になり、後半期の政策は完全に同化政策である。つまり、すべての政策の目的は台湾人を日本人に変えることである。（中略）次に、学校教育と社会教育を通じて同化政策を実施し、学校内で台湾語の使用を禁止し、「修

³⁴⁹ 「読本から削られる猿蟹合戦と桃太郎」『東京日日新聞』（朝刊）（1929年2月1日、第7頁。）。

³⁵⁰ 『教育勅語 桃太郎訓話』の著者は大石末吉で、1935年に創文社によって発行された。

身」という授業で、日本の国家観念と日本精神を植えつけた。台湾人の家庭に対しても、奨励を手段として、宗教儀式から日常談話まで衣食住のすべての方面において日本式のものを真似させた。³⁵¹（下線は筆者）

同化政策の中心は台湾人に漢民族意識と中国精神を失わせ、日本精神を植えつけたことである。その手段としては、漢文と台湾語の使用を禁止し、日本語の使用を唱えた。³⁵²（下線は筆者）

つまり、張我軍は、日本語教育が日本の国家観念と日本精神を宣揚することにより、同化教育を推進させる側面を持つことを認識していた。これは張我軍が公学校での自身の日本語学習経験を振り返り、研究した結果だと考えられる。

しかし、盧溝橋事件以降、張我軍が滞在した北京も台湾と同じように日本の支配下に置かれていた。北京での日本語教育も日本側主導のものになった。こうした環境の下で張我軍は、戦前と同じように日本語教育において主体性を保つことができるかどうかを考察する必要がある。以下では、戦時中の張我軍の日本語教育の内容や、日本文化関係の論述を取り上げ、戦時中の日本語教育における張我軍の主体性を考察する。

4. 戦時中の日本語教育における張我軍の主体性

第2章で述べたように、戦前張我軍が作成した日本語教材は8種類があったが、戦時中、実際に新たに作成した日本語教材は、『日語

³⁵¹ 張我軍「台湾人的国家観念—台湾光復後の問題之一」張光正編『張我軍全集（上集）』、台海出版社、2012年、187 - 188頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「日本占据台湾恰满五十年，后半期的治台策纯系采取同化政策；换句话说，一切措施，大都集中于化台人为日人。（中略）第二步藉学校教育和社會教育，強力施行同化政策。在学校内禁止用台湾话是不用说的，修身的时间则极力灌输日本的国家观念，注入日本精神，进而对台湾人的家庭，也用奖励的方法，上自宗教仪式，下至日常谈话，举凡衣食住无一不叫他们模仿日本式。」

³⁵² 張我軍「新台湾的教育問題—台湾光復後の問題之三」張光正編『張我軍全集（上集）』、台海出版社、2012年、192頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「同化政策的中心，不消说是在扑灭台湾人脑海中的汉民族意识和中国精神，而改灌之以日本精神。至于所取的手段，是一面取消汉文，禁止台湾话，一面全用日文，鼓吹日本话。」

模範読本』、『対訳詳注日本童話集』の2種類しかない。また、その中の『日語模範読本』は戦前の『日語基礎読本』の改訂版として作成されたが、その内容には帝国主義への糾弾や、社会主義などの新思想への宣伝などの内容は存在していない。これは、日本支配下ではこのような内容が認められなかったからではないかと考えられる。しかし、以下のような戦時中の張我軍に関する資料により、戦時中の張我軍の日本語教育は、戦前と関連するものであることが分かる。

第1章で述べたように、張我軍が偽北京大学で担当した科目は、主に当時の日本現代文学に関するものである。また、張我軍は1942年に第1回「大東亜文学者大会」に参加した際に、「しかも百名にもあまる日本の文学者と席を同じくして親しく語り合ふことが出来たのは、現代日本文学の講座を北京大学で担当してゐる私にとっては誠に得難い機会であった」³⁵³のように発言した。さらに、当時、偽北京大学で張我軍の授業を受けた宿白³⁵⁴の回想によると、張我軍の授業内容では島崎藤村と武者小路実篤などの作品を取り扱ったとある³⁵⁵。つまり、戦時中の張我軍の日本語教育は、戦前の日本語教育の一部を受け継いだもので、当時の日本現代文学を主な内容とするものであった。

また、日本語教育だけでなく、戦時中の張我軍のほかの文化活動も、当時の日本現代文学を主な内容とした。例えば、張我軍は1941年6月に北京近代科学図書館で開催された「日本文学夏期特別講座」において、「日本現代文学講義」という講座を担当し、「島崎藤村作『夜明け前選講』」と題し、16時間の講座を行なった³⁵⁶。また、1943年8月に華北作家協会で開催された「暑期学術講演大会」においても、「日本文学紹介と翻訳」と題し講演した³⁵⁷。

張我軍が文化・教育の活動において当時の日本現代文学作品を主な

³⁵³ 「大東亜文学者大会を終りて」『朝日新聞』1942年11月6日。

³⁵⁴ 宿白（1922～2018.2）は中国の考古学者で、1940から1944まで偽北京大学の史学部にて在籍していた。

³⁵⁵ 宿白「北京淪陥期間有関張我軍先生的二三事」張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002年、44頁。

³⁵⁶ 北京近代科学図書館月報『書滲』（第30号、1941年、2頁）

³⁵⁷ 『中国文学』創刊号、華北作家協会、1944年、18-19頁。

内容とした目的については、第4章で述べたように、日本の国民性をはじめとする日本文化を中国人に認識させるためだと考えられる。この点については、張我軍は戦時中の文学・教育活動に参加した際に、何度も発言している。例えば、1942年に第1回「大東亜文学者大会」に参加した際に、張我軍は中日両国の文学研究教授及び学生の交換を提案し、その理由について「私は文学研究教授及び学生の交換を提案したいと思ひます。一国の民族精神、国民気質、または人情、風俗、習慣等を知るためにはその国の言語や文学から入らなければなりません」³⁵⁸のように発言した。そして、1943年8月に華北作家協会が主催した「暑期学術講演大会」において、「日本文学作品を読んだら、日本の国民性や日本の風俗人情を知ることができる。それを真実に深く知るのには文学作品を通じてしかない」³⁵⁹のように述べた。また、戦時中に作成した『対訳詳注日本童話集』の序言において、「童話によってその国の国民性を知ることができ、その国民の性格からその国の風俗習慣が読み取れる」³⁶⁰のように自分の作成動機を述べている。

このような、日本語や日本文化への推奨は表面的には支配側である日本側と一致している。しかし、日本文化認識そのものは二面性を持つもので、日本文化を優位文化として認めるのか、すべての文化が対等なものであるという文化相対主義的な視点で日本文化を認識するのかにより、その性格が違ふ。そのため、戦時中の日本語教育において張我軍が日本側に同調していたのか、それとも主体性を保っていたのかについては、両者の日本文化認識の視点を追究しなければならない。以下では公文書や張我軍の発言記録などにより、日本文化認識における日本側と張我軍の異同を見ておく。

戦時中、文部省は日本語教科書の編纂のために、朝鮮総督府、台湾

³⁵⁸ 「大東亜文学者大会」『日本学芸新聞』第143号（1942年11月15日）。

³⁵⁹ 『中国文学』創刊号、華北作家協会、1944年、18頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「讀了日本文學作品，便可以知道日本的國民性和日本的風俗人情，這唯有在文學作品上認識的最多而真實。」

³⁶⁰ 張我軍「訳注例言」『対訳詳注日本童話集』（上巻）、新民印書館、1942年、「訳注例言」の第1頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「因為一國民的童話，最能看出那個國民的性格，而由國民的性格可以瞭解那個國民的人情風俗習慣。」

総督府、「満州国」及び、中国大陸における興亜院の各連絡部などから関連者を招き、「第一回国語対策協議会」³⁶¹を開催した。その後、その協議会の内容を記録した『㊦国語対策協議会議事録』が作成された。その中には、日本語と日本文化について、以下のように述べられている。

八紘一字ノ大理想ニ基ヅキ、東亜新秩序ノ建設ヲ為スニハ、日本語ノ普及ヲ以テ根基トナス。日本精神日本文化ノ発揚モ、我が国策ノ遂行モ日本語ノ普及ニ俟ツトコロ大ナルモノアリト信ジル。³⁶²
(下線は筆者)

つまり、戦時中の日本側にとって、日本語と日本文化は、いわゆる大東亜共栄圏の建設という「国策ノ遂行」のための手段である。また、第1章で述べた、侵略戦争のための日本精神の宣揚という基調で行なわれた華北日本語教育研究所第1回総会では、当時の華北日本語教育研究所の北京支部が以下のような意見を発表した。

今こそ、中国は混濁した中国民族の血夜（ママ）の中に、この清浄な日本語を注入し、あじや本来の血液にまで浄化すべきであります。（中略）現在痛感されますことの一つは、華北に於いて使用されつつあります我々日本人の国語の乱れであります。世上、所謂、協和語なるものの如きは、我々が教壇に立ちます前に、完全に駆逐し、所有る方面より日本語の醇化を計るべきであると、思ふのであります。この日本語の醇化こそ、日本精神を宿す日本文化の高揚であり、中国人の人々に信頼さるべき教養ある、清く、正しく、おほらかな日本人になることを意味するものであります。³⁶³
(下線は筆者)

³⁶¹ 「第一回国語対策協議会」は1939年6月20日から3日間にわたっていた。

³⁶² 文部省図書局『㊦国語対策協議会議事録』1939年、146頁。

³⁶³ 華北日本語教育研究所『華北日本語』第3巻第7号、新民印書館、1944年、4頁。（吉岡英幸監修・解説、復刻版、冬至書房、2009年、159頁）

このように、華北淪陷区の日本語教育の中心的指導機関による総会では、日本語と日本文化の優位性が露骨に宣揚された。同じくこの総会に出席し講演を行なった張我軍は、上記の日本側の意見と対照的だと言える。華北日本語教育研究所の機関誌『華北日本語』の記録によると、張我軍は「中国の立場より見たる日本語教育の諸問題」と題し、中国における日本語教育の意義、日本文化の吸収と日本語、日本語教材論、教授法論の各問題について、日本人の独善的な欠点に陥り易いところを指摘した³⁶⁴。これは日本側への同調を避けようとしたのではないかと考えられる。また、張我軍が言っている「中国の立場」は具体的に何かについては、日本文化認識に関する戦時中の張我軍の論述により推察できる。張我軍は華北日本語教育研究所第1回総会が開催される直前の1944年2月に、「日本文化的再認識」（日本文化に対する再認識）という論述を発表した。彼は其中でまず日本文化を研究する必要性について以下のように述べた。

かつて日本人が中国の文化を受け入れたからこそ、さらに日本文化を研究する必要やメリットがあると考える。この活動から、日本文化だけでなく、本国の文化を認識することができる。例えば、顕著な証としては、日本人の漢字の発音を通じて我が国の古音を知ることができる。（中略）我々が近代乃至現代の日本文化を研究するのは、一挙三得であると考える。一、現代の日本文化が認識できる。二、以前、日本人がどのように欧米の文化を消化したのかが分かる。三、一般的な現代文化、特に物質文明の知識を得ることができる。³⁶⁵（下線は筆者）

³⁶⁴ 華北日本語教育研究所『華北日本語』第3巻第7号、新民印書館、1944年、4頁。（吉岡英幸監修・解説、復刻版、冬至書房、2009年、158頁）

³⁶⁵ 張我軍「日本文化的再認識」『日本研究』第2巻第2期、1944年、39-42頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「我以為唯其日本人曾經接受了中國的文化，我們更有研究的必要與利益。因為我們由於這種工作，不但可以瞭解日本文化，並且可以幫助我們瞭解本國的文化，例如由於日本人談漢字的發音，可以幫助我們瞭解我國的古音，便是一個最明顯的證據。（中略）我以為假如我們能夠認真研究近代以至現代的日本文化的話，我們便一舉可以三得：一可以認識現代的日本文化，二可以明白日本人當初怎樣消化了歐美的文化，三可以得到一般現代文化尤其是物質文明的知識。」

この内容をまとめると、張我軍が考えた日本文化研究の必要性は主に次の 3 つである。一つは、日本文化を研究して日本文化だけでなく、中国の文化も認識できることである。次は、日本文化の発展経験が中国の参考にできることである。もう一つは、物質文明に関する知識を得ることができることである。こうした考えは、日本文化を優位文化とした日本側に同調しなかったものだと考えられる。特に、日本文化を通じて物質文明に関する知識を得ることができるという考えは、戦前の中国での一般的な見解を援用したものだと言える。

さらに、上述の論述に続き、張我軍は「日本文化的再認識」において、日本文化認識と同化主義との関連、及び日本文化が優位文化であるかどうかについて、以下のように述べた。

本国の文化を守り、輝かせるのは勿論極めて重要なことであるが、外国の文化を研究したからといって、同化され他人に支配されるわけではない。その証として、日本は中国や欧米に同化され、中国や欧米に支配されたことがあるのか。(中略) 日本文化が我々の文化より優れていると認める必要がなく、我々の文化より劣っていると認める必要もない。なぜなら、それを決める絶対的基準が存在していないからである。面積が広くなく、物が豊かではない日本は、はからずも競争の激しい世界で覇を唱えることができる。その文化には我々の参考になるものが必ずある。³⁶⁶(下線は筆者)

つまり、張我軍は日本文化認識において日本と対等な立場を求め、文化の優劣を決める基準が存在しないと考え、日本文化は優位文化でもなく、中国の文化と対等なものだと主張した。また、日本文化に対する研究や学習は、日本に同化され支配されるわけではないと述べている。こうした考えは、前述の華北日本語教育研究所北京支部が宣揚

³⁶⁶ 張我軍「日本文化的再認識」『日本研究』第2巻第2期、1944年、39-42頁。原文中国語、筆者日本語訳。原文は以下である。「保守而光大本國的文化，當然是極重要的，然而研究外國的文化，不見得就被同化而隸屬於人，不信為什麼日本不為中國和歐美同化而隸屬於中國和歐美呢？（中略）我們不必承認日本文化比我們高，也不必認定它比我們低，因為這並沒有絕對的標準。然而地也不大物也不豐的日本，居然能在競爭激烈的世界上爭霸稱雄，它的文化一定有足以供我們參考的什麼。」

した、「日本語の醇化こそ、日本精神を宿す日本文化の高揚である」という内容と対照的で、日本文化の優位性を主張した日本側への反駁だと言える。

このように日本と対等な立場を求めるのは、戦時中の張我軍のほかの発言によっても窺える。1938年に、映画『東洋平和の道』の製作で東京を訪問した張我軍は、「支那映画俳優女優を囲んで」という座談会に出席し、以下のように発言した。

親善するためにはお互に尊敬し合はなければならぬ、相手を見下げたり馬鹿にしては親善は出来ない。（中略）例へば中国に全然知識をもつてゐない民衆に中国の悪い事ばかり教へると中国を頭から馬鹿にする、悪い所もあれば同時に善い所もある、個人的交際で云つても人間には誰だつて欠点があるが相手の美点も何かして発見しよう云ふ努力が非常に必要である。³⁶⁷（下線は筆者）

第1章で述べたように、『東洋平和の道』は所謂「日華親善」を掲げ、中国人に盧溝橋事件や対華侵略を正当化させるために、「戦乱で故郷から逃げ出した中国人夫婦が抗日ゲリラや中国敗残兵に襲われ、日本軍に助けられた」という物語を描いた。張我軍はこのプロパガンダ映画の製作に関与したが、上記のように中日間の相互尊重を求め、日本側に対し中国の悪い事ばかり伝えないよう呼びかけた。

要するに、戦時中、張我軍は日本支配下の日本語教育に関与した際に、表面的には日本側と同じように日本語や日本文化を推奨していたが、日本文化を認識する際にとった視点においては、日本側と根本的に異なっている。日本文化を優位文化として異民族に押し付ける日本側に対し、張我軍は日本と対等な立場に立ち、日本文化を中国文化と対等な異文化の一つとして認識しようとした。つまり、張我軍は日本文化認識の二面性を見抜き、文化相対主義的な視点を以て戦時中の日

³⁶⁷ 「支那映画俳優女優を囲んで」『日本映画』1938年4月号、112頁。

本語教育において主体性を保っていた。

5. 小括

張我軍が台湾の公学校で受けた日本語教育は、台湾人を日本人に変えるための同化政策の下で、「国語」教育として行われたものである。教育内容には、忠君愛国や軍国主義などの日本の国家観念と日本精神を宣揚したものがあつた。戦前、張我軍は日本語教育を実践する際に、「国語」としての公学校での日本語学習経験を生かし、日本の国語読本から多くの文章を選択した。しかし、張我軍は文章を選択する際に、自分が公学校で学んだ文章でも、忠君愛国や軍国主義などと関連するものは、意図的に選択しなかつた。このことは自身の同化政策下での日本語学習経験を振り返り、日本語教育が同化教育を推進させる側面を持つことを強く警戒していた結果だと言える。

一方、戦時中、張我軍は表面的には日本側と同じように日本語や日本文化を推奨していたが、日本文化認識の視点を追究すると、張我軍と日本側の主張が区別できる。支配者である日本側は日本文化を優位文化として宣揚するのに対し、張我軍は日本文化を中国文化と対等な異文化の一つとして捉えていた。つまり、張我軍は日本側主導下の日本語教育に携わってはいたが、実質的には日本側の視点と対極の文化相対主義的な視点を以て主体性を保ち、日本の文化侵略政策に抵抗していたのであつた。

終章 結論と今後の課題

終章 結論と今後の課題

本研究では、日本統治時代の台湾出身である張我軍を研究対象とし、中国の日本語教育史における張我軍の業績を解明した上で、張我軍の日本語・日本語教育観に関して考察してきた。以下では、各章の考察内容を踏まえた上で、①中国の日本語教育史における張我軍の業績と位置づけ、②張我軍が日本語教育の道を辿っていった要因、③日本語教育における張我軍の主体性、という本研究の3つの課題をめぐってまとめる。また、本研究の不足点を分析した上で、今後の課題を提示する。

1. 各章の内容の総括

第1章では、張我軍の生涯を「北京定住前」「戦前の北京定住」「戦時中の北京定住」「台湾帰郷」の4つの時期に分け、各時期の活動における関連性を中心に考察した。また、反植民地統治が張我軍の一生を貫いた思想であることを明らかにした上で、張我軍の人生の選択に影響を与えた要因が日本の植民地出身者としての日本語観であることを提示した。具体的な時期区分及び各時期の活動に関する考察は以下のとおりである。

「北京定住前」(1902.10～1926.6)は、張我軍が反植民地統治の道を辿り始めた時期である。張我軍は生まれた時点で「日本国籍」が付与され、同化政策下の台湾の公学校で、「国語」としての日本語教育を6年間受けた。しかし、1920年代に入り、日本の植民地統治政策への批判、反植民地統治団体などに参加し活動した。また、台湾新文学運動への関与も、反植民地統治を念頭に置いて行なわれたものである。張我軍がこの時期に反植民地統治活動を行ない始めた理由については、1920年代初頭に「民族自決主義」という当時の世界的な潮流の下、台湾青年会や台湾文化協会による啓蒙運動の影響を受け、民族意識が覚醒したからだと考えられる。

「戦前の北京定住」(1926.6～1937.7)は、張我軍が文学活動の代

わりに、日本語教育を反植民地統治の手段として行ない始めた時期である。1926年6月に、中国の国民革命の昂揚に伴い、張我軍は台湾の日本統治離脱の願いを祖国である中国に託し、中国大陸に渡り定住した。最初は、中国大陸との一体化を図り、中国大陸の人々の台湾への関心を喚起するために、魯迅訪問、『少年台湾』創刊などを行なった。その後、国民革命の頓挫に伴い、張我軍はプロレタリア文学に視線を向け、それに内包された社会主義思想を以て中国の社会改造を推進し、祖国の強盛を実現させようとした。「新野社」創立や『新野』創刊などの文学活動はその表れである。しかし、国民党による言論統制の下、これらの文学活動はスムーズに実行されなかった。これをきっかけに、張我軍は当時の「日本語ブーム」に乗じ、日本語教育を反植民地統治の新たな手段として実践した。また、日本語教育関係の著述において多くの業績を残し、当時の日本語教育界の「著名人士」となった。そのほか、張我軍は日本軍の華北侵攻を阻止するために、北京市社会局秘書及び冀察政務委員会秘書に就任し、北京淪陥直前まで日本側との交渉に取り組んでいた。このことには、日本の統治下での生活をどうしても避けたいという張我軍の意志が見られる。

「戦時中の北京定住」(1937.7~1945.8)は、張我軍が日本支配下の文化・教育活動に関与した時期である。盧溝橋事件後、張我軍は日本支配下の北京に残り、北京近代科学図書館、偽北京大学、傀儡政権の教科書編集審査機関、華北日本語教育研究所などで日本語教育活動に関与した。また、日本の国策映画『東洋平和の道』の製作、日本の侵略戦争に加担する「大東亜文学者大会」などの日本支配下の文化活動に関わった。そのことから、戦後、「文化漢奸」というレッテルを貼られたことがある。しかし、張我軍の友人や同時期の人たちの証言により、張我軍は台湾出身の中国人としての立場を堅持する面も窺える。また、張我軍自身は傀儡政権の「督弁」としての周作人と一線を画し、傀儡政権の官吏に就くことを拒絶し、自身の活動を文化・教育活動の範囲内に限定していた。このことは、戦時中、張我軍が何らかの立場や視点を持ち、支配者の政治に規定された文化・教育活動の中

で主体性を保っていた証ではないかと考えられる。

「台湾帰郷」(1945.8~1955.11)は、張我軍が故郷の台湾に戻り、台湾での中国語教育に関心を寄せた時期である。日本が敗戦した後、張我軍は中国大陸に残らず、故郷の台湾に戻り、復帰後の台湾での中国語教育に多大な関心を寄せ、『国文自修講座』という中国語教科書及び『日華辞典』の作成に取り組んでいた。それにより、張我軍は台湾での日本の同化教育の影響を取り除き、台湾同胞の中国人としての共通認識を取り戻そうとしていたことが窺える。

第2章では、1930年代までの中国の日本語教育史を振り返った上で、日本語教育関係の著述において張我軍の業績を考察した。また、張我軍の著述の構成的特徴を分析した上で、その著述が当時の日本語教育界で好評を博していた要因を探った。1930年代に入り、中国大陸では日本語教育関係の著述が多く発行され、量においても質においても前の時期を超えている。その中でも、張我軍は合わせて11種類23冊の日本語教材を作成し、全24号の日本語学習雑誌『日文與日語』を編集した。これらの著述が持つ最大の特徴は、多様な学習者と日本語教師のニーズに対応できることである。これは張我軍の著述が当時の日本語教育界で好評を博した要因の一つだと言える。

具体的には、『日文與日語』は、初級、中級、上級の3つの段階の日本語講座を設け、各号の日本語講座の内容が前号から続くことから、自修学習者を含めた各レベルの日本語学習者のニーズに対応できたと言える。また、口語文法だけでなく、文語文法も取り扱ったことから、当時まだ文語文で書かれた法律書や医学書及び、日本の古文書を研究する学習者のニーズに対応できた。ほかに、「答問欄」の設置及び、日本語学習における疑問や難点に関する論述の掲載は、自修学習者からの疑問に回答する場となり、彼らのニーズに応えたと考えられる。

一方、張我軍の日本語教材は、学習方法において通学者と自修者の違いに配慮して作成され、「自修教授両用」と「完全自修用」の2種類に大別できる。そのうち、自修教授両用の『日語基礎読本』は張我

軍の日本語教材では最も人気のあった教材である。この教材は第4版より文法説明の部分が削除され、副教材として発行されるように改訂された。こうした改訂により、教師は文法説明や翻訳を行なう際に、もともと教材に付けられた文法説明や中国語訳文による制約を受けず、実際の教学の進捗状況により柔軟に対応できるようになった。また、その副教材には『日本文法十二講』や『現代日本語法大全』（分析篇・運用篇）などの文法書以外に、『日語基礎読本自修教授参考書』という参考書がある。『日語基礎読本自修教授参考書』は、主教材の各課の教授要点だけでなく、学習時間や学習目的及び副教材の使用法まで提示されており、完成度の高い教師用指導書で、多様な教師のニーズに対応できると考えられる。また、この参考書は中国語訳や詳細な文法解説及び、完全自修する場合の学習時間も提示されており、自修者用指導書の性格を持っている。そのため、『日語基礎読本自修教授参考書』の発行により、『日語基礎読本』は自修教授両用の教材となった。また、張我軍の日本語教材は教学経験の蓄積に伴い、改善されてきたものである。進捗が速すぎるという『日語基礎読本』の欠点を補うために作成された『日語模範読本』はその例である。

完全自修用教材には、基礎文法の解説を中心とした『標準日文自修講座』（全5冊）と、中上級読本の『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』（全3種）、『高級日文星期講座』（全3冊）、『対訳詳注日本童話集』（全2冊）が含まれている。そのうち、『標準日文自修講座』は完全自修者の学習時間と学習進度まで設計して作成された教材である。張我軍は学習者に1か月に1冊、1日に1課という学習の進捗を勧め、毎月の休日にも配慮し、各冊を25課に設定しているように、完全自修者のニーズに十分配慮した。

第3章では、張我軍の日本語教授観とその影響を中心に考察した。具体的には、まず『日文與日語』に掲載された張我軍の論述を切り口として、張我軍の日本語教授観を明らかにした上で、『日文與日語』に掲載された日本語読本を取り上げ、張我軍が自分の教授観を日本語教材の中に導入したことを解明した。また、「註解」「講解」などの読

本に対する張我軍の解説への考察により、張我軍の実際の日本語教授における特徴を確認した。さらに、科学図書館の日本語教育活動を取り上げ、特に日本語教科書作成において、張我軍の日本語教授観が大きな影響を与えていることを究明した。考察結果は以下のとおりである。

当時、日本語の書籍を通して欧米の学術文化を摂取するという清末以来の社会背景の下、日本語の読解力の養成は日本語学習の主な目標とされていた。張我軍はこの目標をめぐり、学校側、教師側、学生側にあった問題点を分析した上で、学校の教育制度から教師の資格、さらに学習者の取るべき態度、練習方法まで、当時の大学の日本語教育に対し全面的に提言した。これらの提言には、日本語教授方針の制定、日本語の言語知識や日本語教授法への研究、学生の学習効果への評価を重視すべきという張我軍の日本語教授理念が窺える。これらの日本語教授理念は一定の教授方針や教師選考基準がない当時では、将来を見据えたものだと言える。特に、日本語教授法への重視は、現在の日本語教育現場でも求められているものだと考えられる。さらに、このような教授観に基づき、張我軍は「文法＋読本」という新たな学習法・教授法を提案した。この学習法・教授法の主な特徴としては、難易度によって配列された文法項目を読本の文章に融合させ、読本によって文法を学ぶことである。また、文の構造における中国語と日本語の対照を重視していることである。この学習法・教授法は、既存の日本語学習法・教授法を踏まえたもので、効率性や知的興味に配慮し、文法と読本が分立している当時の現状を改善し、読本を通じて文法を学ぶことができ、読解力の向上に有用なものだと言える。

また、張我軍は自身の日本語教授観を表明するだけにとどまらず、それを日本語教材の作成において実践に移行させた。具体的には、日本語教材を作成する際に、張我軍は「文法＋読本」を徹底的に実行し、学習者に読本によって文法を学ばせるために、各段階のレベルにふさわしい材料を選択した。初級段階においては、張我軍は自分で文章を執筆し、難易度によって文法・文型項目を読本に融合させた。中級段

階においては、主に日本の国語読本から平易な説明文や物語文を採録し、難易度に基づいた並べ方を採った。上級段階においては、日本語の読解力の応用に対応するために、日本の文学作品や論説文から文章を採録した。

さらに、日本語教材に対する張我軍の解説における教授面での特徴により、張我軍による実際の日本語教授は工夫されたものだと分かる。張我軍は日本語の読解力の養成を主な教授目標としたが、発音の教授を軽視せず、教学経験の蓄積に伴い、その教授方法を改善していった。文法の教授においては、「文法＋読本」を徹底的に実行し、読本に含まれた文法・文型項目を提出順により説明している。また、学習者の読解力や翻訳力の養成のために、文の構造分析を重視し、中国語訳や図解を活用した。

このように日本語教授理念や日本語教授法において工夫された張我軍の日本語教育は、当時の学習者に人気を集めただけでなく、その後の華北淪陷区初期の日本語教育に大きな影響を与えたと考えられる。特に、科学図書館の日本語講座や日本語教科書の作成によって、そのことが窺える。科学図書館の日本語講座では、張我軍は日本人教師を含めた多くの講師陣の中でも唯一日本語教授法を教えた人物である。また、科学図書館編『初級日文』と『高級日文』は、全体的な構成においても、中国語訳の利用方法や文法項目の説明方法においても、「文法＋読本」という理念を貫いた張我軍の日本語教材を参考にしたと考えられる。さらに、両者の内容が重なる課はすべて日本の国語教科書から取ったものであるが、その課に設けられた中国語訳と「教授参考」からみれば、『初級日文』『高級日文』は、直接張我軍の教材から取った可能性が高いと言える。しかし、科学図書館は日本の国策遂行のための思想戦の一拠点という性格を持っている。そのため、張我軍の教材から文章を選択する際に、日本の国策に影響を与える文章は排除していることを指摘した。

第4章では、日本語教育に携わった動機と日本語教育の内容という2方面から、張我軍の日本語教育と従来 of 反植民地統治活動との具体

的な関連を考察する上で、張我軍が日本語教育の道を辿っていった内的要因は、植民地経験から生まれた日本語観であることを明らかにした。具体的な考察結果は以下のとおりである。

張我軍は日本語の書籍を通して欧米の学術文化を学ぶという清末以来の中国人の日本語学習の背景下、日本語の読解力の養成を日本語教授の目標とした。しかし、張我軍の動機を追究すると、彼の日本語教育は欧米の学術文化の摂取だけにとどまらず、従来の反植民地統治活動と同じように、中日関係における中国の消極的で受動的な立場を変え、台湾の日本統治離脱を最終的な目標としたものと分かる。

このことは張我軍の日本語教育の内容によっても窺える。初級段階では、張我軍は自分の執筆した日本語文章を利用し、従来の文学活動で訴えた内容を日本語教育の中に移行させ、帝国主義の対華侵略や軍閥内戦及び腐敗した政治状況を直接糾弾すると同時に、社会改造に必要な社会主義思想などの新思想を伝えた。中上級段階では、張我軍は他から採録した論説文や新聞記事を利用し、社会主義思想などの社会改造に必要な新思想を伝える一方、日本の対華侵略の野望を暴露した。また、中日関係における中国の消極的で受動的な立場を変えるために、中国人の日本認識に資する当時の日本の現代文学作品を日本語教育の中に取り入れた。

こうした日本語教育の内容には、日本語は反植民地統治の武器であると同時に、新思想や新知識の伝達手段でもあるという張我軍の日本語観が見られる。こうした日本語観は張我軍が日本の植民地で習得した日本語の使用を拒否せず、それを生かした日本語教育の道に進んだ内的要因だと言える。また、こうした日本語観の形成要因を追究すると、かつての植民地経験が浮上してくる。日本支配下の台湾では、日本の植民地統治を直接批判するのが難しいことから、張我軍は自分の日本語能力を生かし、日本人が執筆した日本の植民地政策批判の文章を翻訳することにした。また、新思想や新知識の吸収には支配者の言語である日本語を介する必要があることから、張我軍は新文学理論や新思想を伝える際に、日本語の活用を推奨し、日本の学術成果を利用

した。張我軍の日本語教育はこうした植民地経験を生かしたものだと考えられる。

第5章では、張我軍は「同化政策」下の日本語教育を受けて獲得した日本語能力を生かして日本語教育を実践する際に、主体性を保っていたかどうかをめぐって考察した。具体的には、まず台湾の公学校での張我軍の日本学習経験を振り返り、公学校用の日本語教科書に基づき張我軍が公学校で学んだ内容を確認した。次に、張我軍の日本語教材に取り入れた日本の国語読本からの文章を取り上げ、張我軍が自身の公学校での日本語学習経験を生かす際に、そこに潜む同化と関連する内容を避けられたかどうかを分析した。最後に、戦時中の張我軍の論述や日本語教育の内容により、日本支配下の日本語教育で張我軍が如何に主体性を保っていたのかを解明した。考察結果は以下のようである。

台湾の公学校での日本語教育は、最初から台湾人を日本人に変えるための「同化」を目指したものである。また、張我軍が公学校就学期間に使用した日本語教材には、忠君愛国や軍国主義などの日本の国家観念と日本精神を宣揚した内容が入っている。戦前、張我軍は日本語教材を作成する際に、「国語」としての公学校での日本語学習経験を生かし、日本の国語読本から多くの文章を選択した。だが、張我軍は文章を選択する際に、自分が公学校で学んだ文章でも、忠君愛国や軍国主義などと関連するものは、意図的に選択しなかった。これは張我軍が自身の同化政策下での日本語学習経験を振り返り、日本語教育が同化教育を推進させる側面を持つことを強く警戒していた結果だと言える。

戦時中、張我軍は日本支配下の多くの文化事業に関与していたが、日本語教育においては、主体性を保っていた面が見られる。張我軍は当時の日本語現代文学を日本語教育の主な内容とし、表面的には日本側と同じように日本語や日本文化を推奨していたが、日本文化認識の視点を追究すると、張我軍と日本側の主張が区別できる。支配者である日本側は日本文化を優位文化として宣揚するのに対し、張我軍は日

本文化を中国文化と対等な異文化の一つとして捉えていた。つまり、張我軍は日本側主導下の日本語教育に携わっていたが、実質的には日本側の視点と対極の文化相対主義的な視点を以て主体性を保ち、日本の文化侵略政策に抵抗した。

2. 中国の日本語教育史における張我軍の業績と位置づけ

中国の日本語教育史を振り返ってみると、1930年代は「日本語ブーム」が起き、中国人による自主的な日本語研究が促進された時期だと分かる。しかし、政治状況、中日関係、対日感情などが複雑に絡み合っている時代背景の中で、教育機関が多岐にわたっており、教育方針や教科書が統一されていないことから、当時の日本語教育の一般的な特徴を把握するのが非常に困難だと言える。こうした状況下、その実態を解明する糸口は、実際に教壇に立った一人ひとりの日本語教育者にあると考える。

当時の日本語教育者の中で、張我軍は看過できない存在である。従来、張我軍の日本語教育実践に関しては、張が作成した日本語教材の量が多いことは言及されているが、日本語教材の詳細までは触れられていない。また、中国の日本語教育に対する張我軍の具体的な貢献及び、当時の日本語教育界における張我軍の位置づけなども、未解明の状況にあった。本研究では、このような張我軍研究上の欠落や空白を埋め、学習者の証言や公文書などの一次資料に基づき、戦前張我軍は多方面にわたる日本語教育実践を行ない、当時の日本語教育界では「著名人士」として評価されたことを明らかにした。

また、張我軍の日本語教育関係の著述を蒐集し、その構成的特徴と作成理念を解明した上で、張我軍の日本語教育関係の著述の豊富さだけでなく、当時の多様な学習者と教師のニーズに対応できたことを明らかにした。特に、張我軍は自修者と教室での学習者及び教師のニーズに対応するために、主教材と組み合わせた文法書や教師用・自修者用の参考書などを体系的に作成し、いろいろ工夫していたことが分かる。これは張我軍の日本語教材が当時では好評を博していた原因の一

つだと言える。

さらに、本研究では、張我軍の日本語教育関係の著述面だけでなく、日本語教授理論においても当時の日本語教育に貢献したことを究明した。特に、日本語教授能力の有無を問わず、日本留学出身者なら誰でも日本語授業を担当できるという風潮の下で、張我軍は教授方針や日本語教授法を重視すべきという見識を示した。そして、当時の学習者のニーズに対応するために「文法＋読本」という新たな学習法・教授法を提案し、それを日本語教材に導入して実践躬行した。現在、戦前・戦時中の日本語教育者だった山口喜一郎や長沼直兄などの教科書がその時代の定番の教科書になり得た要因の一つは、新しい教授法を導入し実践したことだとされている³⁶⁸。同じように新しい教授法を導入し、独自性を打ち出している張我軍の日本語教材も歴史に残るものだったと考える。

一方、戦時中の張我軍に関しては、戦前より日本語教材を作成せず、再び文学を専業としていたという見方がある³⁶⁹。しかし、本研究では、当時の新聞や雑誌などの一次資料への検証により、張我軍は戦時中に至っても引き続き日本語教育界の中心的人物とされ、華北淪陷区における日本語教育の中心的な指導機関に関与していたことを明らかにした。

また、従来、華北淪陷区での日本語教授法に関しては、直接法か対訳法かという日本人教師間の主張のずれを中心に検討されてきた。しかし、華北淪陷区の日本語教育は日本側主導のものであるが、中国人教師の日本語教授観による影響はまったくないわけではない。本研究では、科学図書館での日本語教育活動への考察により、張我軍は華北淪陷区の日本語教授法に影響を与えた一人であることを明らかにした。

このように、戦前の中国の日本語教育に貢献しただけでなく、戦時

³⁶⁸ 新内康子「歴史に残る教科書、残らない教科書」関正昭・平高史也編『日本語教育史』、アルク、1997年、108-109頁。

³⁶⁹ 張泉『抗戦時期的華北文学』貴州教育出版社、2005年、267頁。

中の華北淪陥区の日本語教育に影響を与えた張我軍は、1930、1940年代の中国の日本語教育界において名実相伴う「著名人士」だと言える。

3. 張我軍が日本語教育の道を辿っていった要因

張我軍は上記のように当時の日本語教育に貢献したが、日本語教育に携わるまで、主に文学活動を中心にやっていた。張我軍が文学者から日本語教育者へと転換した理由に関しては、従来あまり関心が払われず、「生計のため」と判断した研究者もいる³⁷⁰。しかし、本研究では、日本語学習者の証言や日本語教材の内容への検討により、張我軍の日本語教育は「生計のため」というより、従来の文学活動と続き、「反植民地統治、抗日」のためであることが分かる。張我軍は、従来の文学活動で訴えた反帝国主義・反封建や社会主義思想などを日本語教材に取り入れ、また、日本の新聞記事や当時の世界政治経済情勢に関する文章を日本語学習の材料として利用し、日本の対華侵略の野望を中国民衆に伝えようとした。日本語教育は張我軍にとって「反植民地統治、抗日」の手段だったと言える。

一方、張我軍がこのように日本語教育を「反植民地統治、抗日」のための手段として行なった要因に関しては、外的要因と内的要因の両方にあったことを解明した。外的要因としては、当時の言論統制と「日本語ブーム」である。1930年頃の国民党政権下の中国大陸では、文学活動を通して反帝国主義・反封建や社会主義思想を宣伝することが難しくなったが、「日本語ブーム」の当時では日本語教育を通してそれを教えることが可能になった。内的要因としては、植民地経験から生まれた張我軍の日本語観である。日本支配下の台湾では、日本語は支配側の日本側にとって植民地統治の道具であるが、被支配側の台湾人にとっては、新思想・新知識乃至反植民地統治の思想を獲得する主な手段である。この点は張我軍の反植民地統治活動に反映された。張我軍は日本の植民地政策を批判する際に、日本語の使用を拒否せず、日

³⁷⁰ 張泉『抗戰時期的華北文学』貴州教育出版社、2005年、266頁。

本の知識人の著作を翻訳して利用した。また、新文学理論や新思想を伝える際に、日本語の活用を推奨していた。このように植民地経験から生まれた、「日本語が反植民地統治の武器や新思想・新知識の獲得手段になり得る」という日本語観は、張我軍が日本語教育の道を辿っていた原動力だと言える。

従来、一般的見解としては、戦前の中国大陸の日本語教育は、日本語を通して欧米の学術文化を学ぶという動機の下で行なわれたものである。しかし、上記のように、張我軍の日本語教育の実態への解明により、日本語教育が「反植民地統治、抗日」の武器としても存在していたことを示唆できる。

4. 日本語教育における張我軍の主体性

張我軍は日本語教育を「反植民地統治、抗日」の武器として利用したが、戦時中日本の侵略戦争に加担する文化・教育活動に関わっていたことは紛れもない事実である。また、張我軍が発表した2、3篇の文章の中に日本の国策に同調、礼賛だと受け取れるものもある。しかし、これは自身と家族を守るためのカムフラージュだった可能性は否定できない。また、張の友人や同時期の人たちの証言から、張我軍が台湾出身の中国人としての立場を堅持しようとした面が窺える。

従来、戦時中の張我軍の主体性に関しては、序章で述べたように、「中日文化交流」の視点から考察した者が多い。また、「政治上では日本を敵視しつつ、文化上では日本を認める」という見方もあった。ほかに、「最終的に対日協力の体制に組み込まれた」という見解もあった。本研究では、張我軍の専業である日本語教育に注目し、戦時中張我軍は日本語や日本文学によって日本文化を学ぶと主張し、表面的には日本側と同じように日本語や日本文化を推奨したが、文化相対主義的な視点を以て日本の文化侵略に抵抗したことを明らかにした。また、戦時中だけでなく、戦前の日本語教育においても、張我軍は日本の国語読本に対する取捨選択により、同化教育に抵抗した面が窺える。さらに、張がこのように戦前・戦時中の日本語教育において主体性を

保つことができたのは、同化政策下における自身の日本語学習経験を振り返った結果だと言える。すなわち、張我軍は日本語教育が同化教育を推進させる側面を持つことを強く警戒していたことである。

このように、日本語教育を文化侵略の手段として行なった日本側に対し、同じ日本語教育を武器として反撃した張我軍の事例により、戦前・戦時中の日本語教育は様々な様相と意味を持っていることが分かる。現在、日本語教育は「多文化共生のため」、「異文化理解のため」であることは、多くの日本語教育者が持つ共通認識である。しかし、日本語教育の内容や日本文化認識の視点などにより、日本語教育は同化教育を推進させる側面があることを忘れてはならない。特に、日本文化の『顔』³⁷¹とされた海外における日本語教育において、如何なる視点で日本文化を取り扱うのかは、一人ひとりの日本語教師が考えなければならないことだと言える。その際に、「日本文化が我々の文化より優れていると認める必要はなく、我々の文化より劣っていると認める必要もない。なぜなら、それを決める絶対的基準が存在していないからである」という70年前の張我軍の言葉は重みを持つ。

5. 本研究の不足点と今後の課題

上記のように、本研究では従来の研究であまり触れられることのない張我軍の日本語教育に注目し、その日本語教育の実態を明らかにした。しかし、1930、1940年代における本研究に関連する一次資料が入手困難な面もあり、本稿の不足点や残された課題もある。今後の課題は以下のようである。

① 本研究では、日本語教育史における張我軍の業績と位置づけを明らかにしたが、同時期の日本語教育者との比較は十分であるとは言えない。張我軍の教授観を検討する際に、比較対象としたのは葛祖蘭、

³⁷¹ 1999年に、日本語学習の需要が高まってきた状況を踏まえ、日本の文化庁は『今後の日本語教育施策の推進について—日本語教育の新たな展開を目指して—』という報告書の中で、「我が国文化の『顔』となるのが海外における日本語教育である」と指摘している。<
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_suishin/nihongokyoiku_tenkai/> (最終閲覧日:2019年5月20日)

蔣君輝、傅仲濤、汪大捷、張仲直、王玉泉の6人だけである。そのため、今後の課題の一つとして、さらに多くの日本語教育関係の一次資料を蒐集し、1930年代の日本語教育者の全般的な特徴を解明する必要がある。

②戦時中、張我軍が華北淪陷区における日本語教育の中心的な指導機関に関わっていたことを解明したが、華北淪陷区の日本語教育に対する具体的な影響においては、科学図書館への影響を取り上げたのみである。さらに多くの資料を蒐集し、科学図書館以外の戦時中の日本語教育における張我軍の具体的な影響を究明することも今後の喫緊の課題の一つである。

③本研究では、張我軍の事例を通じて、日本の植民地台湾出身者にとっての日本語教育の意義の一端を示したが、同時期の台湾出身者の日本語教育観とその時代における主体性は、張我軍と同じであるかどうか、本研究では言及できなかった。そのため、今後の課題の一つとして、同時期の台湾出身者の資料を蒐集し、彼らの日本語教育観とその時代における主体性を究明し、張我軍と比較考察しなければならない。

④本研究では、張我軍の日本語教育観の形成は、植民地経験と関連していることを結論づけたが、植民地経験を持っていない同時期の中国人の日本語教育観には言及できなかった。今後、この不足点を補うために、周作人や錢稻孫などの同時期の中国大陸出身の文化人との比較考察も必要となると考える。

参 考 文 献

参考文献

日本語参考文献

- 秋吉収(2016)「台湾における芥川龍之介受容の諸相」『言語文化論究』
(37) pp. 79-101
- 『朝日新聞』(北支版、1938年6月24日)朝日新聞社
- 『朝日新聞』(1942年11月6日)朝日新聞社
- 阿部洋(1980)『山室三良インタビュー記録』教育社
- 晏妮(2010)『戦時日中映画交渉史』岩波書店
- 飯島正(1938)『東洋の旗』河出書房
- 伊沢修二(1958)「台湾の教育」『伊沢修二選集』、信濃教育会、pp. 582-
588
- 今井武夫(2009)『日中平和工作:回想と証言 1937-1947』みすず書房
- 巖谷大四(1958)『非常時日本文壇史』中央公論社
- 大石末吉(1935)『教育勅語 桃太郎訓話』創文社
- 汪向荣著・竹内実監訳(1991)『清国お雇い日本人』朝日新聞社
- 甲斐ますみ(2013)『台湾における国語としての日本語習得:台湾人の
言語習得と言語保持、そしてその他の植民地との比較から』ひつ
じ書房
- 外務省外交史料館所蔵資料「海外旅券下付(附与)返納表進達一件(附
与明細表)」(3門8類5項)
- 賈鵬飛(2018)「張我軍の日本語教育実践—1930、1940年代の中国語
大陸における「日本国籍」台湾人による日本語教育の一側面」、『文
教大学大学院言語文化研究科紀要』第4号、文教大学大学院言語
文化研究科、pp. 1-30
- 賈鵬飛(2018)「張我軍の日本語教育観と植民地経験との関連—抗日、
社会改造のための日本語教育—」『新世紀人文学論究』特集号—日
本語教育史から見た日中戦争、pp. 175-190

- 賈鵬飛（2019）「『日文與日語』からみた張我軍の日本語教授観—1930年代の中国大陸における日本語教育の一側面—」『文教大学大学院言語文化研究科紀要』第5号、pp.1-31
- 『華文毎日』（1943年10月1日）毎日新聞社
- 加原奈穂子（2010）「昔話の主人公から国家の象徴へ—「桃太郎パラダイム」の形成—」『東京藝術大学音楽学部紀要』36、pp.51-72
- 川上尚恵（2006）「占領下の中国華北地方における日本語学校—北京近代科学図書館附属日本語学校と新民教育館附属日本語学校」『植民地教育史研究年報』（9）、pp.103-122
- 川上尚恵（2010）「北京近代科学図書館編纂日本語教科書分析からみた占領初期の中国華北地方における日本語教育の一側面」『日本語教育』146号、pp.144-158
- 河路由佳（2011）『日本語教育と戦争：「国際文化事業」の理想と変容』新曜社
- 河路由佳（2016）『日本語学習・教育の歴史：越境することばと人びと』東京大学出版会
- 河原功（1997）『台湾新文学運動の展開：日本文学との接点』研文出版
- 『官報』（第4552号、1898年8月31日）内閣官報局
- 『官報』（第7105号、1907年3月9日）内閣官報局
- 『官報』（第108号、1912年12月9日）大蔵省印刷局
- 国府種武（1931）『台湾における国語教育の展開』、第一教育社
- 小黒浩司（1987a）「北京近代科学図書館史の研究Ⅰ」『図書館学会年報』33（3）、pp.97-110
- 小黒浩司（1987b）「北京近代科学図書館史の研究Ⅱ」『図書館学会年報』33（4）、pp.157-172
- 巖安生（1991）『日本留学精神史：近代中国知識人の軌跡』岩波書店
- 興亜院華北連絡部（1941）『北支における文教の現状』
- 黄英哲（2008）「楊基振について—その人とその時代」『立命館文學』（608）、pp.289-305

- 呉宏明（2016）『日本統治下台湾の教育認識：書房・公学校を中心に』
春風社
- 『国際映画新聞』（第218号、1938年）国際映画通信社
- 駒込武（1996）『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店
- 酒井順一郎（2010）『清国人日本留学生の言語文化接触』ひつじ書房
- 実藤恵秀（1942）「中国人の日本語研究」国語文化講座第6巻『国語
進出篇』、朝日新聞社、pp.268-285
- さねとうけいしゅう（1981）『中国人日本留学史』（増補版第2刷）、
くろしお出版
- 鍾少華（2003）竹内実監修、泉敬史・謝志宇訳『あのころの日本－若
き日の留学を語る』日本僑報社
- 徐敏民（1996）『戦前中国における日本語教育：台湾・満州・大陸での展
開と変容に関する比較考察』エムティ出版
- 新内康子（1997）「歴史に残る教科書、残らない教科書」関正昭・平
高史也編『日本語教育史』、株式会社アルク、pp.108-109頁。
- 鄒双双（2013）「日本占領下の北京における張我軍の翻訳活動－島崎
藤村、武者小路実篤と関連して」増田周子編著『戦争の記録と表
象：日本・アジア・ヨーロッパ』関西大学東西学術研究所、pp.173
－182
- 鄒双双（2014）『「文化漢奸」と呼ばれた男：万葉集を訳した銭稻孫の
生涯』東方書店
- 杉野要吉編（2000）『交争する中国文学と日本文学：淪陥下北京1937-
45』三元社
- 鈴木重吉（1938）『『東洋平和の道』の手帖より』『映画と技術』1938
年3月号、日本映画技術協会、pp.160-164
- 石剛（2003）『植民地支配と日本語：台湾、満洲国、大陸占領地におけ
る言語政策（増補版）』三元社
- 石剛（2005）『日本の植民地言語政策研究』明石書店
- 関正昭・平高史也編（1997）『日本語教育史』、アルク
- 関正昭（2006）『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク

- 孫安石（2003）「戦前中国における日本・日本語研究に関する資料の調査報告」『神奈川大学言語研究』25、pp. 299－315
- 戴季陶著・市川宏訳（1972）『日本論』社会思想社
- 台湾教育会（1939）『台湾教育沿革誌』台湾教育会
- 台湾総督府警務局（1939）『台湾総督府警察沿革誌』第二編中巻
- 竹内好（1981）『竹内好全集：日記（上）』筑摩書房
- 田中寛（2015）『戦時期における日本語・日本語教育論の諸相』ひつじ書房
- 田中寛（2019）『戦争・言語文化・記憶－植民地教育史研究の視点から』（私家版）
- 『中華日語月刊』（全3期、1937年）中華日語月刊社
- 張我軍編（1934）『日文與日語』（巻1）人人書店
- 張我軍編（1935）『日文與日語』（巻2）人人書店
- 張我軍編（1935）『日文與日語』（巻3）人人書店
- 張我軍（1943）「日本の少女よ手をつながう」『少女の友』36（10）、実業之日本社、pp. 80-81
- 張我軍（1943）「英米撃滅の文学」『緑旗』緑旗連盟、p340
- 張欣（2000）「張我軍と『大東亜文学者大会』」『アジア遊学』（13）、勉誠出版、pp. 101－115
- 陳培豊（2001）『「同化」の同床異夢：日本統治下台湾の国語教育史再考』三元社
- 陳培豊（2012）『日本統治と植民地漢文：台湾における漢文の境界と想像』三元社
- 陳蚊彪（2019）『日本統治下の教科書と台湾の子どもたち』風響社
- 陳逢源（1939）『新支那素描』台湾新民報社
- 陳芳明著・下村作次郎等訳（2015）『台湾新文学史（上巻）』東方書店
- 『東京日日新聞』（朝刊）（1929年2月1日）
- 豊田周子（2007）「1920年代の台湾における張我軍作品の意義－新詩『乱都之恋』から中国語白話小説『白太太的哀史』まで」『現代中国』、日本現代中国学会、pp147－159

- 中島利郎（1989）「張我軍について—その略歴と著作」啞之会編『啞』24. 25 合併号、pp. 20-47
- 中島利郎（1992）の「日本植民地下の台湾新文学と魯迅（上）：その受容の概観」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』24、岐阜聖徳学園大学、pp. 219-235
- 中島利郎（1997）『台湾新文学と魯迅』、東方書店
- 中島利郎・河原功・下村作次郎（2014）『台湾近現代文学史』研文出版
- 『日語月刊』（全6期、1935年）東方日文補習学校
- 『日文研究』（第2、3号、1935年）東京日文研究社
- 『日本映画』（1938年4月）大日本映画協会
- 『日本学芸新聞』（第143号、1942年11月15日）日本学芸新聞社
- 丹羽文雄（1938）「『東洋平和の道』を覗く記」『新女苑』2-4、実業之日本社、pp. 344-345
- フェイ・阮・クリーマン著・林ゆう子訳（2007）『大日本帝国のクレオール：植民地時期台湾の日本語文学』慶応義塾大学出版会
- 文部省（1931）『尋常小学国語読本編纂趣意書・尋常小学国語書キ方手本編纂趣意書』日本書籍
- 文部省図書局（1939）『秘国語対策協議会議事録』
- 北平近代科学図書館（1937）『北平近代科学図書館館刊』（創刊号）
- 北京近代科学図書館（1937）『北京近代科学図書館一週年報告』
- 北京近代科学図書館（1937）『北京近代科学図書館館刊』（第2号）
- 北京近代科学図書館（1938）『北京近代科学図書館館刊』（第3号）
- 北京近代科学図書館（1938）『北京近代科学図書館館刊』（第4号）
- 北京近代科学図書館（1938）『北京近代科学図書館館刊』（第5号）
- 北京近代科学図書館（1939）『北京近代科学図書館館刊』（第6号）
- 北京近代科学図書館（1941）『書滲』第30号
- 北京近代科学図書館（1942）『書滲』第42号
- 山口喜一郎（1933）『外国語としての我が国語教授法』満州日報社

- 山口喜一郎（1940）「海外に於ける日本語教育」国語教育学会叢書『標準語と国語教育』岩波書店、pp.383-402
- 山口守（2017）「北京時期的張我軍：被文化與政治夾擊的主体性」『台湾文学研究集刊』第20期、pp.57-105
- 山口守（2017）「張我軍と映画『東洋平和の道』及び大東亜文学者大会について」『大妻女子大学 草稿・テキスト研究所年報』第10号、pp.5-24
- 山本武利など（2006）『「帝国」日本の学知：岩波講座』岩波書店
- 葉石濤（2000）中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』研文出版
- 吉岡英幸監修・解説（2009）『華北日本語』（復刻版、第3巻）冬至書房
- 頼衍宏（2014）「張我軍と正岡子規」『台湾日本語文学報』36、台湾日本語文学会、pp.427-452
- 劉海燕（2011）「看過された張我軍の『八丁大人的手記』」『多元文化』、pp.41-54
- 劉建雲（2005）『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂—』学術出版会
- 若林正文（2010）『台湾抗日運動史研究（増補版）』研文出版
- JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B10070618200、三増英夫調中華民国ニ於ケル日本語研究ノ現況（附．日本近代科学図書館論/1937年）（文化_37）（外務省外交史料館）
- JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B10070616400、（薄冊）支那ニ於ケル日本語教育状況／1938年（文化_28）（外務省外交史料館）
- JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02130928600、（薄冊）支那人ノ日本語及日本事情研究状況（情_87）（外務省外交史料館）
- JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015792200、満支人本邦視察旅行関係雑件/便宜供与関係第九卷（外務省外交史料館）
- JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C11111700400、雜綴昭和20年12月（防衛省防衛研究所）

JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B05016010200、北平近代科学
図書館関係雑件第四卷 (H-6-2-0-24_004) (外務省外交史料館)

中国語参考文献

包恒新(1986)「台湾新文学の開拓者—張我軍」『福建論壇(文史哲版)』
pp. 77-81

北京大学档案馆蔵資料『北京大学文学院教務股日志』(所蔵番号：
WBD0000014)

北京大学档案馆所蔵資料『国立北京大学文学院三十年度各学系一二
三年級課程一覽』(所蔵番号：WBD0000022)

『北京大学日刊』(1924年9月19日) 北京大学

北京市档案馆「京師警察庁中一区分区表送宋飛沫持有少年台湾印刷物
未經呈報擅自發一案卷」档案号：J181-019-56677

北京市档案馆「北平市警察局查禁『少共產國際綱領』『中国大革命史』
等刊行物的密令」档案号：J181-017-01176

北京市档案馆「冀察政務委員会各機關人事調查表及北平市政府各機關
人事登記表」档案号：J002-001-00179

北京市档案馆「有关取締北平台湾革新同志会教育改進会开会活動的文
件」、档案号：J181-014-00543

蔡茂豊 (2003)『台湾日本語教育の史的研究』大新書局

蔡培火等著 (1971)『台湾民族運動史』自立晚報社

蔡培火 (1974)「灌園先生與我」『林猷堂先生記念集(年譜、遺著、追
思録)』(近代中国史料叢刊続編第十輯、文海出版有限公司)、pp. 467
- 482

蔡佩臻 (2008)『張我軍文学與翻譯研究』私立東海大学中国文学系修
士論文

蔡元培著 (1995)『蔡元培文集』卷 13、日記(上)、錦繡出版事業股份
有限公司

陳芳明 (2011)『台湾新文学史(上、下)』聯經出版公司

- 陳吉生「為學貴自辟—憶桂海學術泰斗黃現璠」桂林市政協文史資料委員會編『桂林文史資料第五十二輯：肝胆相照』、pp. 232—271
- 陳明柔（1996）「新與旧的變革：“祖國意象”內在意涵的轉化—試以張我軍文學理論為中心的探索」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、pp. 413—444
- 陳少廷（1977）『台灣新文學運動簡史』聯經出版事業公司
- 『大學新聞（北平）』（1934年8月25日）
- 鄧慧恩（2006）『日據時期外來思潮的認識研究：以賴和、楊逵、張我軍為中心』國立清華大學碩士論文（台灣）
- 鄧慧恩（2009）『日治時期外來思潮的認識研究：以賴和、楊逵、張我軍為中心』台南市立圖書館
- 丁文江·趙豐田編（1983）『梁啟超年譜長編』上海人民出版社
- 伏泉（2013）『新中國日語高等教育歷史研究』上海外國語大學博士論文
- 古繼堂（1989）『台灣新詩發展史』人民文學出版社
- 『國立北平師範大學一覽』（1934年度）國立北平師範大學
- 『國民雜誌』（8月号、1943年）國民雜誌社
- 何標（1996）「對厘清台灣新文學運動一些問題的思考」『文藝理論與批評』（03）、pp. 116—119
- 何標（1994）「張我軍與“新野社”」『台聲』1994年第02期、台聲雜誌社、pp. 46—47
- 胡俊媛（1993）「台灣新文學的急先鋒—張我軍」『台北縣立文化中心季刊』、pp. 35—40
- 黃乃江（2008）「張我軍的處女作及其在廈門之文學活動新考」『福州大學學報（哲學社會科學版）』（3）、pp. 10—15
- 洪炎秋（1940）「我父與我」張深切編『中國文藝』2卷1期、中國文藝社、pp. 6—7
- 洪炎秋（1976）「懷才不遇的張我軍兄」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、pp. 13—22
- 『華北作家月報』（第6期、1943年）華北作家協會

- 李偉·潘海鷗（2017）「從文學語言革命轉向个体人的革命—台灣新文學史中張我軍的民族主義思想脈絡鉤沉」『鹽城師範學院學報（人文社會科學版）』、pp. 69—73
- 李偉（2017）「透視台灣文學史中的張我軍與文學生涯中的張我軍」『文教資料』、pp. 8—9
- 李小蘭（2006）「清季中國人編日語教科書探析」『杭州師範學院學報』（社會科學版）、pp. 97—102
- 梁啓超（1901）「論學日本文之益」『清議報全編』第4卷、新民社、pp. 73—74
- 林瑞明（1976）「撐起台灣新文學運動的大旗—張我軍和他的文集」『大學雜誌』、pp. 64—65
- 林瑞明（1996）「張我軍的文學理論與小說創作」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、pp. 451—473
- 林昶（2001）『中國的日本研究雜誌史』世界知識出版社
- 劉俊（2012）「台灣新文學誕生之初文學現代性的三種形態—以連橫、張我軍、賴和為中心」『中國現代文學研究叢刊』04、pp. 162—175
- 魯迅著（2005）『魯迅全集』第3卷、人民文學出版社
- 魯迅著（2005）『魯迅全集』第15卷、人民文學出版社
- 呂興昌（1996）「張我軍新詩創作的再檢討」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、pp. 332—351
- 馬可英（2010）『民國時期中國人編日語教材之研究—以“日語基礎叢書”為例』浙江工商大學修士論文
- 馬可英（2012）「1937年前中國人編日語教材考略」『浙江外國語學院學報』02、pp. 86—90
- 馬可英（2017）「1912—1937年中國人編寫日語教材之探析」『內蒙古師範大學學報（教育科學版）』09、pp. 103—107
- 莫渝（1999）「張我軍的詩與愛」『台北縣立文化中心季刊』、pp. 81—85
- 彭小妍（1996）「文學典律、種族階級與鄉土書寫—張我軍與台灣新文學的起源」『中國文哲研究集刊』中央研究院中國文哲研究所、pp. 147—173

- 彭小妍 (2000)『歷史很多漏洞:從張我軍到李昂』中央研究院中國文哲研究所
- 秦賢次 (1989)「台灣新文學運動的奠基者—張我軍」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、pp. 332—351
- 秦賢次 (1993)『張我軍評論集』台北縣文化中心
- 秦賢次 (1995)「張我軍及其同時代的北京台灣留學生」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、pp. 352—378
- 秦賢次 (2002)「張我軍年表」『台灣文化菁英年表集』台北縣政府文化局 pp. 154—210
- 邱玲婉 (2012)「論張我軍轉載兒童文學—〈魚的悲哀〉和〈狹的籠〉中的啓蒙思想」『台灣文學評論』、pp. 41—45
- 日語讀書會 (1935)『怎樣研究日語』第2版、開華書局
- 『少年台灣』(創刊號、1927年)少年台灣社
- 潘芳序 (2014)『張我軍對胡適文學思想的傳播與接受:以『台灣民報』為分析場域(1923—1932)』國立成功大學台灣文學研究所博士論文
- 史揮戈 (2006)「論張我軍對台灣新文學的貢獻」『山東師範大學學報(人文社會科學版)』、pp. 74—77
- 宿白 (2001)「北京淪陷期間有關張我軍先生的二三事」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、pp. 44—46。
- 蘇世昌 (1998)『追尋與回歸—張我軍及其作品研究』國立中興大學中國文學系碩士論文
- 蘇子蘅 (2002)「懷念老友張我軍先生」張光正編『近觀張我軍』、台海出版社、pp. 31—32
- 『台灣』(第4年第4號、1923年)台灣雜誌社
- 『台灣』(第4年第6號、1923年)台灣雜誌社
- 『台灣』(第4年第7號、1923年)台灣雜誌社
- 台灣國家圖書館 (2003)『台灣歷史人物小傳:明清及日據時期』台灣國家圖書館
- 台灣國史館所藏資料「總統府人事調查表」(1952年9月)(所藏番號:129000053198A)

- 『台湾民報』(1923年－1926年) 台湾民報社
- 田建民(2006)『張我軍評伝』、作家出版社
- 王国安(2017)「『罵』出新典律--論張我軍與林燿德文學革新運動的話語操作及運作策略」『人文社会科学研究』、pp.54-72
- 王晋民·吳海燕(1990)「評葉石濤的『台湾文学史綱』」『台湾研究集刊』(1)、pp.81-86
- 王申(2010)「淪陷時期旅平台籍文化人的文化活動与身分表述—以張深切、張我軍、洪炎秋、鍾理和為考察中心」北京大学博士論文
- 王昇遠(2009)「从本体趣味到習得訓誡：周作人之日語觀試論」『魯迅研究月刊』2009(7)、
- 王昇遠·周慶玲(2009)「中国日語教育史視閾中的張我軍論」『台湾研究集刊』2009年第3期、厦門大学台湾研究院、pp.99-106
- 王士花(2008)『日偽統治時期的華北農村』社会科学文献出版社
- 王向遠(2015)「“翻譯度”與缺陷翻譯及訳文老化—以張我軍訳夏目漱石《文学論》為例」『日語學習與研究』2015年06期、对外經濟貿易大学、pp.102-113
- 吳文星など(2003)『日治時期台湾公学校與国民学校国民読本 解説・総目録・索引』台北南天書局
- 『新華日報』(1945年8月23日) 新華日報社
- 『新野』(創刊号、1930年) 新野社
- 徐紀阳(2011)「張我軍的翻譯活動與“五四”思潮-兼論與魯迅、周作人之關係」『瀋陽師範大学学報』、pp.67-70
- 許俊雅(2012)『台湾現当代作家研究資料彙編：張我軍』国立台湾文学館
- 徐一平(1997)「中国的日語研究與日語教育」『日語學習與研究』、pp35-41
- 楊紅英(2011)『張我軍譯文集(上、下)』海峡學術出版社
- 楊紅英(2013)「論張我軍的台湾光復主張」『福建師範大学学報』(哲学社会科学版、2013年02期)、福建師範大学、pp.8-12
- 楊菁(2003)「張我軍在中国」『台北文献』、pp.139-169

- 葉蒼芩 (2002) 「悼摯友張我軍」張光正編『近觀張我軍』、台海出版社、
pp. 33—37
- 葉寄民 (1988) 「張我軍及其詩集『乱都之恋』一日治時代文學道上的
清道夫」張光正編『近觀張我軍』、台海出版社、pp. 301—315
- 葉石濤 (1987) 『台灣文學史綱』文學界雜誌社
- 葉石濤 (1990) 「張我軍與台灣新文學運動」張光正編『近觀張我軍』
台海出版社、2002年、pp. 279—282
- 『芸文雜誌』(第1卷第3期、1943年) 芸文社
- 張光正 (1993) 「父親張我軍二三事」『新文學史料』1993年01期、人
民文學出版社、pp. 161—163
- 張光正 (1995) 「略論父親的鄉土性格和開放性格」張光正編『近觀張
我軍』台海出版社、pp. 214—225
- 張光正 (1985) 『張我軍選集』時事出版社
- 張光正 (1996) 「張我軍與中日文化交流」『台灣研究集刊』1992年02
期、廈門大學台灣研究院、pp. 73—81
- 張光正 (2000) 『張我軍全集』台海出版社
- 張光正 (2002) 「悲、歡、離、聚話我家——一個台灣人家庭的故事」張
光正編『近觀張我軍』、台海出版社、pp. 56—76
- 張光正編 (2002) 『近觀張我軍』台海出版社
- 張光正 (2012) 『張我軍全集 (上集)』台海出版社
- 張光正 (2012) 『張我軍全集 (下集)』台海出版社
- 張光正 (2016) 『張我軍全集 (補遺)』台海出版社
- 張光直 (1975) 『張我軍文集』純文學出版社
- 張光直 (1989) 『張我軍詩文集』純文學出版社
- 張恒豪 (1991) 『楊雲萍、張我軍、蔡秋桐合集』前衛出版社
- 張金龍·李友敏 (2016) 「民國時期日語教材的發展及特點」『日本學研
究』、pp. 149—156
- 張泉 (2000) 「張我軍與淪陷時期的中日文學關聯」『中國現代文學研究
叢刊』2000年01期、pp. 223—236
- 張泉 (2005) 『抗戰時期的華北文學』貴州教育出版社

- 張泉（2012）「21世紀研究民國時期北京文化人的意義-以北京台灣人作家群中的張我軍為中心」『2012·學術前沿論叢-科學發展：深化改革與改善民生（上）』、pp. 278-287
- 張深切（1955）「悼張我軍」張光正編『近觀張我軍』、2002年、台海出版社、pp. 4-6
- 張深切著（1998）『張深切全集』卷2、文經出版社
- 張我軍（1939）「評“菊池寬”近著『日本文學案内』」『中國文芸』第1卷3期、p41
- 張我軍譯（1933）『法西斯主義運動論』北平人文書店
- 張我軍譯（1933）『資本主義社會的解剖』北平青年書店
- 張我軍譯（1930）『淫売婦』北新書局
- 張我軍（1944）「日本文化的再認識」『日本研究』第2卷第2期、pp. 37-42
- 張我軍（1987）『亂都之戀』、遼寧大學出版社
- 張之洞（1898）『勸學篇』（下）、田中文求堂
- 趙天儀（1984）「台灣新詩的出發—試論張我軍與王白淵的詩及其風格」張光正編『近觀張我軍』、2002年、pp. 319-331
- 甄華（1984）「甄華復何標函」張光正編『近觀張我軍』台海出版社、2002年、pp. 40-43
- 中國法規刊行社編審委員會編（1948）『六法全書』、春明書店
- 中國國家圖書館所藏資料『國立北京大學文學院三十二年度各學系一覽』1943年版
- 中國國家圖書館所藏資料『教育總署直轄編審會職員錄』1941年版
- 『中國文學』（創刊號、1944年）華北作家協會
- 中華民國大學院編纂資料『全國教育會議報告』（復刻版、張研·孫燕京『民國史料叢刊』1043分冊、2009年、大象出版社）
- 朱桂榮（2016）「關於20世紀30年代中國人編寫的日語教科書的研究—以《日本語法例解》為例」『日本學研究』、pp. 297-310

参照 URL

林献堂『灌園先生日記』台湾日記知識庫
<<http://taco.ith.sinica.edu.tw/tdk>>

(最終閲覧日:2019年5月20日)

楊基振『楊基振日記』台湾日記知識庫
<<http://taco.ith.sinica.edu.tw/tdk>>

(最終閲覧日:2019年5月20日)

『今後の日本語教育施策の推進について—日本語教育の新たな展開
を目指して—』<

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_suishin/nihongokyoiku_tenkai/>

(最終閲覧日:2019年5月20日)

参考教材

北京近代科学図書館編纂部 (1939)『初級日文模範教科書』(巻1)

北京近代科学図書館編纂部 (1939)『初級日文模範教科書』(巻2)

北京近代科学図書館編纂部 (1938)『初級日文模範教科書』(巻3)

北京近代科学図書館編纂部 (1939)『高級日文模範教科書』(巻1)

北京近代科学図書館編纂部 (1939)『高級日文模範教科書』(巻2)

北京近代科学図書館編纂部 (1939)『高級日文模範教科書』(巻3)

傅仲濤 (1936)『日文津梁』梯梧山館

葛祖蘭 (1928)『日語漢訳読本』(巻1) 商務印書館

工藤文雄・王白淵・蘇光耀・梁耀南編 (1936)『総合日語学教程』南
華書店

蔣君輝 (1930)『現代日語』(上巻) 中華書局

蔣君輝 (1931)『現代日語』(下巻) 中華書局

教育部編審会 (1939)『小学日本語読本』(巻1) 初版

教育総署編審会 (1941)『小学日本語読本』(巻2) 修正発行版

教育部編審会 (1939)『小学日本語読本』(巻3) 初版

教育総署編審会 (1940)『小学日本語読本』(巻4) 修正発行版

教育總署編審會（1940）『初中日本語讀本』（第1冊）初版
教育總署編審會（1941）『初中日本語讀本』（第2冊）初版
教育總署編審會（1942）『初中日本語讀本』（第3冊）初版
落合直文編（1930）『中等國語讀本』卷1（新修2版）明治書院
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷1）
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷2）
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷3）
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷4）
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷5）
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷6）
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷7）
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷8）
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷9）
台灣總督府編（1913）『台灣教科用書國民讀本』（卷10）
台灣總督府編（1912）『台灣教科用書國民讀本』（卷11）
台灣總督府編（1913）『台灣教科用書國民讀本』（卷12）
台灣總督府編（1915）『公學校用國民讀本』（卷1）
台灣總督府編（1914）『公學校用國民讀本』（卷2）
台灣總督府編（1915）『公學校用國民讀本』（卷3）
台灣總督府編（1914）『公學校用國民讀本』（卷4）
台灣總督府編（1915）『公學校用國民讀本』（卷5）
台灣總督府編（1914）『公學校用國民讀本』（卷6）
台灣總督府編（1915）『公學校用國民讀本』（卷7）
台灣總督府編（1914）『公學校用國民讀本』（卷8）
台灣總督府編（1915）『公學校用國民讀本』（卷9）
台灣總督府編（1914）『公學校用國民讀本』（卷10）
台灣總督府編（1915）『公學校用國民讀本』（卷11）
台灣總督府編（1914）『公學校用國民讀本』（卷12）
汪大捷（1935）『表解現代日文語法講義』北平午未日文研究社

汪大捷 (1936) 『日華対照日文翻訳着眼点』(三版) 北平午未日文研究社出版

王玉泉 (1935) 『日語華訳公式』 岡崎屋書店

文部省 (1926) 『高等小学読本』(卷 1) 東京書籍

文部省 (1935) 『高等小学読本』(卷 2) 東京書籍

文部省 (1933) 『高等小学読本』(卷 3) 東京書籍

文部省 (1935) 『高等小学読本』(卷 4) 東京書籍

文部省 『尋常小学国語読本』(卷 1～卷 12)、(復刻版、ノーベル書房、1977 年)

文部省 『小学国語読本』(卷 1～卷 12)、(復刻版、秋元書房、1970 年)

張我軍 (1932) 『日本語法十二講』 人文書店

張我軍 (1934) 『日語基礎読本』(4 版) 人人書店

張我軍 (1934) 『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』(第 1 種) 人人書店

張我軍 (1934) 『日漢対訳詳解高級日文自修叢書』(第 2 種) 人人書店

張我軍 (1934) 『現代日本語語法大全：分析篇』 人人書店

張我軍 (1935) 『現代日本語語法大全：運用篇』 人人書店

張我軍 (1935) 『日語基礎読本自修教授参考書』 人人書店

張我軍 (1936) 『日語基礎読本』(7 版) 人人書店

張我軍 (1936) 『標準日文自修講座』(前期第 1 冊) 人人書店

張我軍 (1936) 『標準日文自修講座』(前期第 2 冊) 人人書店

張我軍 (1936) 『標準日文自修講座』(前期第 3 冊) 人人書店

張我軍 (1936) 『標準日文自修講座』(前期第 4 冊) 人人書店

張我軍 (1937) 『標準日文自修講座』(後期第 1 冊) 人人書店

張我軍 (1937) 『日語基礎読本』(9 版) 人人書店

張我軍 (1938) 『最新日語基礎読本』 天津世界図書公司

張我軍 (1939) 『日語模範読本』(卷 1) 日文與日語社

張我軍 (1942) 『対訳日本童話集』(上卷) 新民印書館

張我軍 (1943) 『対訳日本童話集』(下卷) 新民印書館

張我軍 (1947) 『国文自修講座』(卷 1) 連合出版社

張我軍 (1947) 『国文自修講座』(卷 2) 連合出版社

張我軍（1947）『国文自修講座』（卷3）六合書店

張我軍（1947）『国文自修講座』（卷4）六合書店

付 録

付録 1 張我軍の著作

文章名・著書名	掲載誌・出版社	掲載年
壬戌七月既望鷺江泛月賦	不明	1922 年
寄懷台湾議會請願諸公	『台湾』4 年 4 号	1923 年
咏時事（旧詩）	『台湾』4 年 6 号	1923 年
排日政策在華南	『台湾』4 年 7 号	1923 年
游中山公園雜詩	『台湾民報』2 卷 6 号	1924 年
致台湾青年的一封信	『台湾民報』2 卷 7 号	1924 年
沉寂（詩）	『台湾民報』2 卷 8 号	1924 年
对月狂歌（詩）	『台湾民報』2 卷 8 号	1924 年
无情的雨（詩）	『台湾民報』2 卷 13 号	1924 年
糟糕的台湾文学界	『台湾民報』2 卷 24 号	1924 年
駁稻江建醮与政府和三新聞的態度	『台湾民報』2 卷 25 号	1924 年
為台湾的文学界一哭	『台湾民報』2 卷 26 号	1924 年
歡送辜博士	『台湾民報』2 卷 26 号	1924 年
請合力拆下這座敗草叢中的破旧殿堂	『台湾民報』3 卷 1 号	1925 年
絶无僅有的擊鉢吟的意義	『台湾民報』3 卷 2 号	1925 年
秋風又起了（詩）	『乱都之恋』詩集	1925 年
前途（詩）	『乱都之恋』詩集	1925 年
田川先生与台湾議會	『台湾民報』3 卷 3 号	1925 年
揭破悶葫芦	『台湾民報』3 卷 3 号	1925 年
時事短評（二篇）	『台湾民報』3 卷 3、4 号	1925 年
聘金廢止的根本解決法	『台湾民報』3 卷 4 号	1925 年
伊沢新總督的訓示	『台湾民報』3 卷 5 号	1925 年
復鄭軍我書	『台湾民報』3 卷 6 号	1925 年
煩悶（詩）	『台湾民報』3 卷 7 号	1925 年
文学革命運動以来	『台湾民報』3 卷 6～9 号	1925 年
随感録（12 篇）	『台湾民報』3 卷 6～18 号	1925 年
研究新文学应讀什么書	『台湾民報』3 卷 7 号	1925 年
詩体的解放	『台湾民報』3 卷 7、8、9 号	1925 年
孫中山先生吊詞	『傳記文学』6 卷 3 期	1925 年
生命在，什么事都不成？	『台湾民報』3 卷 10 号	1925 年
『親愛的姐妹们呀，奮起！努力！』後記	『台湾民報』3 卷 18 号	1925 年
『一个貞烈的女孩子』識語	『台湾民報』3 卷 18 号	1925 年
新詩『仰望』等識語	『台湾民報』3 卷 18 号	1925 年
『黄梨洲論学生運動』注解	『台湾民報』61 号	1925 年

春意（詩）	『台湾民報』61号	1925年
弱者的悲鳴（詩）	『台湾民報』61号	1925年
『我的学校生活的一断面』識語	『台湾民報』62号	1925年
新文学運動的意義	『台湾民報』67号	1925年
通信二則	『台湾民報』69号	1925年
『牆角的創痕』、『我的祖国』附記	『台湾民報』74号	1925年
至上的道德-戀愛	『台湾民報』75号	1925年
中国国語文（白話文）做法導言	『台湾民報』76号	1925年
『牧羊哀話』附記	『台湾民報』78号	1925年
文芸上的諸主義	『台湾民報』77~89号	1925年
看了警察展覽会之后	『台湾民報』83号	1925年
『乱都之恋』序（詩）	『台湾民報』85号	1925年
我愿（詩）	『乱都之恋』詩集	1925年
危難的前途（詩）	『乱都之恋』詩集	1925年
哥德又来勾引我苦惱（詩）	『乱都之恋』詩集	1925年
乱都之恋（詩）	『人人』第2期	1925年
台湾未曾有的大阿片事件控訴公判	『台湾民報』106号	1925年
中国国語文作法	台北	1926年
乱都之恋	台北	1926年
危哉台湾的前途	『台湾民報』86号	1926年
南游印象記	『台湾民報』91~96号	1926年
『李松的罪』后記	『台湾民報』117号	1926年
買彩票（小説）	『台湾民報』123~125号	1926年
中原的戰局	『台湾民報』3卷134-137号	1926年
『少年台湾』發刊詞及び編後	『少年台湾』創刊号	1927年
『少年台湾』的使命	『少年台湾』創刊号	1927年
台湾閑話	『少年台湾』創刊号	1927年
少年春秋	『少年台湾』創刊号	1927年
白太太的哀史（小説）	『台湾民報』150~155号	1927年
八丁大人的手記	『台湾民報』167号	1927年
誘惑（小説）	『台湾民報』255~258号	1929年
『淫売婦』作者小傳	叶山嘉樹『淫売婦』	1929年
从革命文学論到无階級文学	『新野』月刊	1930年
『新野』卷頭語及び編後	『新野』月刊	1930年
『日語基礎讀本』	人人書店	1931年
『日本語法十二講』	人文書店	1932年

『日文與日語』	人人書店	1934－1935
『日漢對訳詳解高級日文自修叢書』 (全3種)	人人書店	1934年
『現代日本語法大全:分析篇』	人人書店	1934年
『日語基礎讀本自修教授參考書』	人人書店	1935年
『現代日本語法大全:運用篇』	人人書店	1935年
『高級日文星期講座』(全3冊)	人人書店	1935年
『標準日文自修講座』(全5冊)	人人書店	1936－1937
『最新日語基礎讀本』	世界圖書公司	1938年
『日語模範讀本』(全3卷)	日文與日語社	1939年
『對訳詳注日本童話集』(全2卷)	新民印書館	1942－1943
日文中訳漫談-关于翻譯	『中国留日同学会』季刊創刊号	1942年
北原白秋の片鱗	『中国留日同学会』季刊3期	1942年
武者小路実篤印象記	『芸文雜誌』1卷2期	1943年
『黎明之前』尚在黎明之前	『芸文雜誌』1卷3期	1943年
日語中的「附辭」	『中国留日同学会』季刊第7号	1944年
日本文化的再認識	『日本研究』2卷2期	1944年
关于德田秋声	『芸文』2卷2期	1944年
武者小路先生的『曉』	『風雨談』月刊	1944年
元旦的一場小風波	『芸文』3卷1期	1944年
台湾人の国家觀念	『華北新報』	1945年
台湾の宣撫工作	『華北新報』	1945年
新台湾の教育問題	『華北新報』	1945年
台湾省国語国文普及管見	『華北新報』	1945年
关于台湾中小学教科書	『華北新報』	1945年
為台湾人提出一个抗議	『新台湾』創刊号	1946年
『在広東発動の台湾革命運動史略』序	台湾中央書局	1947年
当舖頌	『台湾文化』3卷2期	1948年
采茶風景偶写	『台湾茶業』1期	1948年
喝茶在北方	『台湾茶業』1期	1948年
山歌十首	『台湾茶業』2期	1948年
在台島西北角看采茶比賽后記	『台湾茶業』2期	1948年
埔里之行	『台湾茶業』3期	1949年
春雷	『張我軍文集』	1951年
城市信用合作社巡礼雜筆	『合作界』季刊3号	1952年

(張光正(2012)より筆者作成)

付録 2 張我軍の翻訳作品

訳文・訳書題名	原作者	掲載誌・出版社	掲載年
新月	北原白秋	不明	1920年
陳情書	林糊など	『台湾民報』第3巻第2号	1925年
農民問題二件	大阪 『朝日新聞』	『台湾民報』第3巻第9号	1925年
就日本の東洋政策而言	戴季陶	『台湾民報』第3巻第11号	1925年
宗教的革命家甘地	宮島 新三郎 相田 隆太郎	『台湾民報』第3巻18号 第59号、第62～66号、第68～73号	1925年
貞操，是「全靈的」之愛	安部磯雄	『台湾民報』第60号	1925年
大婚二十五年御下賜金和植民地の教化事業	安部磯雄	『台湾民報』第62号	1925年
中国的国権恢復問題	米田実	『台湾民報』第66号、 第68～71号	1925年
論台湾民報的使命	柴田廉	『台湾民報』第67号	1925年
愛欲（劇本）	武者小路実篤	『台湾民報』第94～95号	1926年
弱少民族の悲哀	山川均	『台湾民報』第105号～110号、 第112～115号	1926年
創作家の態度	豊島与志雄	『北新』雑誌3巻10期	1929年
現代米国社会学	大思想家叢書	『北新』雑誌3巻16期	1929年
桜花時節	葉山嘉樹	『北新』雑誌3巻16期	1929年
創作家の資格	武者小路実篤	『華北日報』特別欄	1929年
洋灰桶里的一封信	葉山嘉樹	『語絲』雑誌5巻28期	1929年
生活與文学	有島武郎	上海北新書局	1929年
社会学概論	和田桓謙三	上海北新書局	1929年
煩悶與自由	丘浅次郎	上海北新書局	1929年
小小的王国	谷崎潤一郎	『東方雑誌』27巻4期	1930年
龍樹の教学	佐々木月樵	『哲学評論』3巻3期	1930年
文学研究法—最近德国文芸学的の諸傾向	高橋禎二	『小説月報』21巻6期	1930年
高尔基之為人	黒田乙吉	『新野月刊』創刊号	1930年
売淫婦	葉山嘉樹	上海北新書局	1930年
現代世界文学大綱	千葉亀雄ほか	上海神州国光社	1930年
現代日本文学評論	宮島新三郎	上海開明書店	1930年
俄国批評文学之研究	不明	『文芸戦線』1—15期	1931年
東亜文明之黎明—自考古学上觀察	濱田耕作	『輔仁学志』3巻2期	1931年
人類学汎論	西村真次	上海神州国光社	1931年

文学論	夏目漱石	上海神州国光社	1931年
人性医学（附恋愛学）	正木不如丘	北平人文書店	1932年
俄国近代文学	不明	北平人文書店	1932年
中国土地制度的研究	長野郎	上海神州国光社	1932年
法国现实自然派小説	不明	『読書』3卷2期	1933年
黑暗	前田河広一郎	『文芸月報』1卷2期	1933年
法西斯主義運動論	今中次磨	北平人文書店	1933年
資本主義社会的解剖	山川均	北平青年書店	1933年
政治與文芸	青野季吉	『文史』創刊号	1934年
中国人口問題研究	飯田茂三郎	北平人文書店	1934年
侏儒的話	芥川龍之介	『現代青年』第2卷	1936年
日本の風土與文学	久松潜一	『北京近代科学図書館館刊』第2号	1937年
中宮寺的觀音	和辻哲郎	『北京近代科学図書館館刊』第4号	1937年
中世的文学	岡崎義恵	『北京近代科学図書館館刊』第4号	1938年
日本語和日本精神	谷川徹三	『北京近代科学図書館館刊』第5号	1938年
詩經的星	野尻抱影	『北京近代科学図書館館刊』第5号	1938年
从西湖三塔說到雷峰塔	青木正児	『北京近代科学図書館館刊』第5号	1938年
母親的死和新的母親	志賀直哉	『北京近代科学図書館館刊』第5号	1938年
黄河之風土的性格	佐藤弘	『北京近代科学図書館館刊』第5号	1938年
鼻	芥川龍之介	『北京近代科学図書館館刊』第6号	1939年
日本思想史上否定之理論的發達	家永三郎	『北京近代科学図書館館刊』第6号	1939年
希望	土井晚翠	『中国文芸』1卷3期	1939年
談隨筆	久野豊彦	『中国文芸』1卷3期	1939年
日本文学指南	菊池寛	『華文大阪毎日』7卷1期—8卷9期	1941—1942年
超乎恩仇	菊池寛	『現代日本短篇名作集』	1942年
黎明之前	島崎藤村	『華北編訳館館刊』1卷1期—2卷10期	1942—1943年
常青樹	島崎藤村	『中国留日同学会季刊』第4号	1943年
問	北原白秋	『芸文雜誌』創刊号	1943年

雨中小景	北原白秋	不明	1943年
秋風之歌	島崎藤村	『中国留日同学会季刊』 第5号	1943年
凄風	島崎藤村	『日本研究』1卷2、3、4期	1943年
岐途	樋口一葉	『芸文雑誌』2卷1期	1944年
勳章	徳田秋声	『芸文雑誌』2卷3期	1944年
洗澡桶	徳田秋声	『日本研究』2卷3期	1944年
分配	島崎藤村	『日本研究』2卷4、5期	1944年
燈光	島崎藤村	『芸文雑誌』2卷7、8期	1944年
懸案	徳田秋声	『日本研究』3卷4、5期	1944年
黎明	武者小路実篤	上海太平洋書局	1944年
忘不了的人們	国木田独歩	『日本研究』3卷2期	1945年
徒勞	正宗白鳥	『日本研究』4卷3、4期	1945年
二老人	国木田独歩	『芸文雑誌』3卷3期	1945年
一件撞車案	田山花袋	『芸文雑誌』3卷4、5期	1945年

(張光正(2012)より筆者作成)

付録3 張我軍年表

年月日	事項
1902年10月7日	日本統治時代の台湾台北庁擺街堡枋橋街（現在の台湾新北市板橋区）で生まれた。
1909年4月	枋橋公学校入学。
1915年3月	枋橋公学校の第11期の卒業生となった。
1916年	見習いとして台北大稻埕靴屋に入った。
1916年	新高銀行に入り、余暇を利用して「劍樓書塾」で清朝の秀才の趙一山について漢文を学んだ。
1921年12月	新高銀行の厦門支店に派遣され、余暇を利用して同文書院や私塾などで漢文を学んだ。
1924年1月12日	「上海台湾青年会」主催の「台湾人大会」に出席し、該会で発言して台湾総督府の暴政を批判した。
1924年9月	北京大学の「普通聴講生」を受験したが、不合格に終わった。
1924年10月	台湾に戻り、『台湾民報』の編集者を担当。
1926年8月	魯迅宅を訪ね、『台湾民報』を4部贈呈。
1926年9月	中国大学の国学学部に進学し、1年後北京師範大学の国文学部の3年次に編入。
1927年3月	『少年台湾』を創刊し、編集長を担当。
1929年	北京師範大学の同窓と一緒に「新野社」を創設し、1930年9月に編集長として機関誌『新野月刊』を創刊。
1929年6月	北京師範大学を卒業。
1929年9月	北京師範大学の日本語教師を担当。
1931年前後	日本語学習塾を開設。
1932年9月	北平大学法学院の日本語教師を兼任。その後、中国大学と華北学院の日本語教師も兼任。
1934年1月	日本語学習雑誌『日文與日語』創刊。
1935年11月	北京市社会局秘書に就任。

1936年12月	北京市長の秦徳純と北京市社会局局长の雷嗣尚を代表して北京近代科学図書館の開館式典に参加。
1937年4月	冀察政務委員会の中堅幹部として日本視察に行った。
1937年7月26日	「広安門事件」の時に、日本軍は張我軍と連絡を取り合った。
1937年11月	村上知行の紹介で、構成、脚色、補導の役として日本国策映画『東洋平和の道』の製作に関与。
1938年2月	映画『東洋平和の道』の俳優たちと一緒に東京に行った。東京に滞在期間、林猷堂宅を訪ねた。
1938年6月	北京近代科学図書館の日本語講座の日本語教師を担当。
1939年	偽北京大学の日本語教師となり、その後、偽北京大学の工学院と文学院の教授に昇任。
1941年前後	華北政務委員会教育総署直轄編審会の特約編集審査者となった。
1942年11月	第1回「大東亜文学者大会」に参加。
1943年8月	第2回「大東亜文学者大会」に参加。
1943年9月	華北日本語教育研究所の常任委員となった。
1945年9月	「旅平同郷会」の執行委員に選ばれ、服務隊の隊長を担当。「旅平同郷会」の会刊『新台湾』の創刊準備を行なった。
1946年	「台湾省教育会」の編纂組の主任に就任。
1947年	中国語教材『国文自修講座』（全5巻）を作成。
1948年	「台湾茶葉商業同業公会」の秘書に就任し、雑誌『台湾茶葉』を編集。
1949年	「台湾省合作金庫」に転職し、その後、この金庫の研究室主任に昇任し、『合作界』を編集。
1955年	他界した。

謝辞

本研究は、私が文教大学大学院言語文化研究科博士後期課程在学中に、加納陸人教授の指導のもとで行なったものです。

本研究を遂行し学位論文を作成するにあたり、加納先生から多くのご支援とご指導を賜り、深く感謝しております。加納先生には日々研究や論文執筆の指導だけでなく、学会発表などの研究活動の支援もしていただきました。特に、2019年3月に先生が定年退職してからも、毎週時間を割いて研究指導をしていただき、心より感謝申し上げます。また、研究のことだけでなく、個人の悩みまで聞いていただき、貴重な意見をくださいました。先生との出会いがなかったら、今の私がないと思います。

学内での中間発表の際には、本論文の主査を引き受けてくださった白井啓介教授、副指導の川口良教授、同じく副指導の蔣垂東教授から、多大なご教示をいただき、心より感謝申し上げます。

また、戦時日本語教育史研究会会長の田中寛教授にも、貴重な意見や資料をいただき、誠にありがとうございます。また、学会発表の際には、貴重な助言をしていただいた日本語教育史研究会の先生方にも、感謝の意を表します。

本研究のインタビュー調査でご協力いただき、貴重な証言や写真を提供してくださった張我軍のご長男である張光正さんにも御礼申し上げます。

3年間、日々一緒に研究生活を過ごした加納ゼミや同じ研究室の仲間たちがいつも励ましてくれたこと、本当にありがとうございます。

そして、2年間サポートしていただいた米山奨学財団及び春日部西ロータリークラブ、特にカウンセラーの三輪俊行さんにも心より感謝申し上げます。みなさまのおかげで、金銭面での心配がなくなり、研究に専念できるようになりました。

最後に、これまで自身のことを温かく見守り、そして辛抱強く支援してくれた家族全員に対しても深く感謝して謝辞と致します。